

(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第165集

交野市

上 私 部 遺 跡 II

一般国道1号バイパス (大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター



1 上私部遺跡遠景（交野山頂より西を望む 写真中央の林後方が上私部遺跡）



2 1区東半部古墳時代遺構面全景（西から）



1 2区東半部・3区古墳時代遺構面全景（北から）



2 新羅土器

序 文

上私部遺跡は、大阪府交野市青山に所在する集落遺跡です。遺跡は生駒山系の山裾に広がる段丘上に位置しており、交野山頂の観音岩を間近に望むことができます。私部という地名は、『日本書紀』敏達天皇6年(577)に設置された皇后の生活をまかなうための「私部」に由来すると考えられており、周辺には現在でも多くの古墳群が残されていることから、深い歴史のある地域であることがわかります。

本遺跡は、一般国道1号バイパスおよび第二京阪道路建設に伴う発掘調査によって新たに確認されました。平成15年度から発掘調査を行ない、古墳時代中期～後期の竪穴住居や掘立柱建物と、それらを区画する溝などを多く検出しています。今回の調査では、前回発見した集落遺構の南西部において、規則的に配置された掘立柱建物群を新たに多数検出しました。また、区画溝からは新羅土器も出土し、渡来人と関係の深い遺跡であることを再確認できました。

人々が上私部遺跡に住みはじめたのは5世紀ころで、当初は数棟の竪穴住居で生活していました。ところが、6世紀になると集落内を溝で区画するようになり、大規模な掘立柱建物で構成される特殊な集落に発展したことが、今回の調査で明らかになったのです。古墳時代の交野地域を考えるうえで、大きな成果をあげることができたといえるでしょう。今後も発掘調査を蓄積することによって上私部遺跡の全貌が解明されていくものと期待されます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、多大なご協力を賜りました国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、西日本高速道路株式会社関西支社、大阪府教育委員会文化財保護課、交野市をはじめとする地元関係各位に深く謝意を表しますとともに、今後とも文化財の保護に一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2007年9月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例 言

1. 本書は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路の建設に伴って実施した上私部遺跡05-1の発掘調査報告書である。なお、上私部遺跡は交野市青山に所在する。
2. 調査は、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所・西日本高速道路株式会社関西支社（平成17年10月1日付けで日本道路公団関西支社より社名変更）から財団法人大阪府文化財センターが平成17年7月1日～平成20年3月31日の間委託を受け、平成17年7月8日～平成18年2月28日まで調査を行い、平成18年3月1日から平成19年9月28日まで遺物整理作業を行い、本書の刊行を以って業務を完了した。
3. 調査および整理は以下の体制で実施した。
 - 〔平成17年度〕調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘
京阪調査事務所長 山本 彰
主幹兼調査第四係長 寺川史郎、主査 小林義孝・上野貞子〔写真〕、
技師 網 伸也・田中利津子、専門調査員 湯川善一・丸吉繁一
 - 〔平成18年度〕調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘
京阪調査事務所長 山本 彰、調査第五係長 秋山浩三、主査 上野貞子〔写真〕、
技師 網 伸也・小松武彦、専門調査員 大竹正裕
 - 〔平成19年度〕調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘
京阪調査事務所長 山本 彰
調査第三係長 秋山浩三、主査 上野貞子〔写真〕、
技師 網 伸也
4. 今回の調査において、以下の分析・鑑定業務を委託して行った。
 - 〔平成17年度〕花粉・珪藻・植物珪酸体分析 …… バリノ・サーヴェイ株式会社
粒度分析 …… バリノ・サーヴェイ株式会社
放射性炭素年代測定（AMS）分析 …… 株式会社パレオ・ラボ
 - 〔平成18年度〕土壌軟X線写真撮影 …… バリノ・サーヴェイ株式会社
出土木製品樹種同定分析 …… バリノ・サーヴェイ株式会社
5. 本書に用いた写真は、遺構については調査担当者が撮影した。遺物については京阪調査事務所主査上野貞子が撮影した。
6. 本書の編集は網 伸也が主に行った。執筆分担は、第5章第2節を湯川善一、第3章第2節第1項の堅穴住居および第5章第5節を丸吉繁一、第4章第3節を船築紀子、第5章第6節および付章第1節をバリノ・サーヴェイ株式会社、付章第2節を株式会社パレオ・ラボが担当し、その他の項目は網が執筆した。また、遺物観察表については日野祥子・船築紀子が作成し、網が校正を加えた。

7. 発掘調査および整理作業においては、財団法人大阪府文化財センター職員をはじめ、以下の諸氏・団体からご協力、ご教示を得た。記して感謝の意を表する次第である。(敬称略)
青柳泰介・芦田淳一・石野博信・岩瀬 透・大竹弘之・小川暢子・木下 亘・高 正龍・清水昭博
鈴木久男・竹原伸仁・辰巳和弘・田中清美・田中元浩・玉井 功・寺井 誠・中村 浩・西田敏秀
野島 稔・河 承哲・橋本高明・濱田幸司・菱田哲郎・藤原 学・松井忠春・真鍋成史・三宅正浩
村上 始・山下龍次・大阪府教育委員会・交野市教育委員会
8. 本調査に関わる、遺物・写真・実測図等の資料は財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。

凡 例

1. 本書に掲載した遺構実測図・地形図などに付された方位はすべて座標北を示している。
2. 本書で使用した測量基準線・地区割方法は、世界測地系による国土座標軸第Ⅵ座標系を基準に、当センターが定めた『遺跡調査マニュアル(暫定版)』(2003)に準拠している。また、座標値はすべてmで表記している。
3. 本書で使用した標高値は東京湾平均海水位(T.P.)を使用している。本文中並びに実測図の表記はすべて「+」の記載を省略している。
4. 実測図の縮尺については、竪穴住居・掘立柱建物は80分の1に統一した。他の遺構については、それぞれ縮尺を明記し、各図にスケールを付した。なお、断面図・見通し図の位置は、平面図中に「L」字形で示し方向を矢印で示した。
5. 遺構番号は、全調査区にわたって発掘調査の段階で付加した通し番号をそのまま使用している(例: 435住居、43溝など)。ただ、掘立柱建物および柵の遺構番号は、整理作業の成果から順次新たに付したものである(例: 建物1、柵1など)。
6. 遺物実測図の縮尺は、基本的には4分の1に統一したが、一部は他の縮尺を採用したものもあり、別途スケールを付して示した。遺物番号は通し番号としており、実測図・写真・遺物観察表と一致する。土器以外の遺物は数字の頭にアルファベットを付し区別した(例: S1 石器、K1 瓦)。
7. 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄著『新版 標準土色帖』2000年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修 を基準としている。

目 次

第1章 調査の経緯と調査方法	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査方法	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 遺構	10
第1節 遺跡の基本層序	10
第2節 古墳時代の遺構	16
第3節 古代から中世の遺構	77
第4章 遺物	84
第1節 古墳時代の遺物	84
第2節 古代から中世の遺物	110
第3節 その他の遺物	115
第5章 遺構と遺物の検討	116
第1節 古墳時代の遺構の立地と掘立柱建物群の抽出	116
第2節 上私部遺跡における古墳時代の遺構変遷	122
第3節 上私部遺跡出土の須恵器の系譜と展開	129
第4節 新羅土器について	133
第5節 古代から中世以降の土地利用	135
第6節 自然科学分析からみた上私部遺跡の土壌環境	139
第6章 総括	143
付章 自然科学分析	174
第1節 上私部遺跡の古環境解析	174
第2節 放射性炭素年代測定	205

目 次

図1 調査位置図……………1	図33 建物28実測図……………43
図2 地区割模式図・調査区配置図……………2	図34 建物29実測図……………44
図3 調査地周辺地形図……………5	図35 建物30実測図……………45
図4 調査地周辺遺跡分布図……………7	図36 建物31・36実測図……………46
図5 寺古墳群第3号墳近景 および石室実測図……………8	図37 建物32実測図……………47
図6 2区北壁断面実測図……………11	図38 建物33・34実測図……………48
図7 2区北壁 A-A' ライン断面実測図 ……………12	図39 建物37実測図……………49
図8 2区北壁 B-B' ライン断面実測図 ……………13	図40 建物38・39実測図……………50
図9 6・7区平面・断面実測図……………15	図41 欄1～4実測図……………52
図10 古墳時代遺構配置図……………17	図42 欄5～8実測図……………53
図11 435住居実測図……………18	図43 欄9～11実測図……………54
図12 983住居実測図……………19	図44 1・2区西半部 溝・土坑配置図 および断面実測図……………57
図13 1394・1395住居実測図……………20	図45 1・2区中央部 溝・土坑配置図 および断面実測図……………58
図14 982方形堅穴状遺構実測図……………21	図46 1・2区中央部 溝断面実測図……………59
図15 建物1・2実測図……………23	図47 842溝 杭出土状況実測図……………60
図16 建物3実測図……………24	図48 841～844溝 土器出土状況実測図……………61
図17 建物4実測図……………25	図49 395・397・399・400土坑実測図……………62
図18 建物5・6実測図……………26	図50 233溝、235～238土坑実測図……………63
図19 建物7・8実測図……………27	図51 136・138溝東端部および溝内ピット群 平面実測図……………65
図20 建物9・10実測図……………28	図52 1・2区東部 溝・土坑配置図 および断面実測図……………66
図21 建物11実測図……………29	図53 1・2区東部 溝・土坑断面実測図……………67
図22 建物12実測図……………30	図54 1087・1088・1095土坑平面実測図……………68
図23 建物13・14実測図……………31	図55 1396土坑実測図……………69
図24 建物15実測図……………32	図56 4・5区東部 溝・土坑配置図……………70
図25 建物16・17実測図……………34	図57 671・791土坑実測図……………70
図26 建物18・19実測図……………35	図58 4・5区東部 溝・土坑断面実測図 ……………71
図27 建物20実測図……………36	図59 535溝土器群2～4 出土状況実測図 ……………72
図28 建物21実測図……………37	図60 537土坑、750溝平面実測図……………73
図29 建物22実測図……………38	図61 589・594土坑実測図……………74
図30 建物23・24実測図……………39	
図31 建物25・26実測図……………41	
図32 建物27・35実測図……………42	

図62	625・627土坑実測図	74	図86	古墳時代包含層・遺構検出中出土土器 実測図(1)	103
図63	681溝、678・679・753・754土坑実測図	75	図87	古墳時代包含層・遺構検出中出土土器 実測図(2)	104
図64	古代～中世遺構配置図	78	図88	移動式竈実測図	105
図65	中世遺構面平面実測図	80	図89	土鍾実測図	105
図66	畦畔2・4実測図	81	図90	火付け棒実測図	106
図67	畦畔8実測図	82	図91	杭および建物・欄柱材実測図	107
図68	2区南壁 畦畔8断面実測図	83	図92	砥石実測図	108
図69	竪穴住居・方形竪穴状遺構・建物柱穴 出土土器実測図	85	図93	鉄滓および輪羽口実測図	109
図70	842溝出土土器実測図	87	図94	田而出土土器実測図	111
図71	844溝出土土器実測図(1)	88	図95	中世木製品実測図	112
図72	844溝出土土器実測図(2)	89	図96	中世砥石実測図	112
図73	136・138溝出土土器実測図	90	図97	宋銭拓影	112
図74	1090・1092～1094・1100溝出土土器 実測図	91	図98	中世瓦拓影および実測図	114
図75	1087・1088・1095土坑出土土器実測図	93	図99	石器実測図	115
図76	113溝、437土坑出土土器実測図	94	図100	古墳時代遺構面等高線図	117
図77	55・81・387溝出土土器実測図	95	図101	05-1調査区 古墳時代遺構変遷図(1)	118
図78	535溝出土土器実測図(1)	96	図102	05-1調査区 古墳時代遺構変遷図(2)	119
図79	535溝出土土器実測図(2)	97	図103	掘立柱建物主軸方向分布図	121
図80	534・538・750溝、537土坑出土土器 実測図	99	図104	上私部遺跡調査地全体図	123
図81	677～679・753・754土坑出土土器 実測図(1)	100	図105	上私部遺跡変遷図(1)	124
図82	677～679・753・754土坑出土土器 実測図(2)	101	図106	上私部遺跡変遷図(2)	125
図83	235～237・721・723土坑、233・724溝 出土土器実測図	101	図107	蓋杯にみられる当て具痕(左)と 刻み目状調整(右)	130
図84	43・491溝、28・492土坑出土土器実測図	102	図108	倉治古墳群第1号墳出土須恵器	132
図85	844・138・535溝、236土坑出土 須恵器甕腹拓影および実測図	102	図109	新羅土器長頸壺	134
			図110	調査区と周辺の地形	136
			図111	調査地周辺の水田と畦畔	138

表 目 次

表1 上私部遺跡小期対応表	126	表5 古代から中世の土器観察表	170
表2 上私部遺跡変遷表	128	表6 移動式竈観察表	173
表3 建物・構土層一覧表	145	表7 中世瓦観察表	173
表4 古墳時代土器観察表	153	表8 石器観察表	173

付 章 図 目 次

図1 分析試料採取地点位置図	175	図11 5地点主要珪藻化石群集の層位分布	187
図2 調査区における堆積層の累重状況と分析 試料の採取層準	176	図12 3地点主要花粉化石群集の層位分布	189
図3 2地点の粒度分析結果	178	図13 4地点主要花粉化石群集の層位分布	189
図4 4地点の粒度分析結果	179	図14 5地点主要花粉化石群集の層位分布	189
図5 粒度分析結果三角ダイアグラム	180	図15 3地点植物珪酸体含量の層位的変化	190
図6 上私部遺跡の位置	181	図16 4地点植物珪酸体含量の層位的変化	190
図7 上私部遺跡周辺の地形	181	図17 5地点植物珪酸体含量の層位的変化	190
図8 4地点の軟X線写真と堆積・土壌構造	184	図18 上私部遺跡周辺の地形分類	196
図9 3地点主要珪藻化石群集の層位分布	187	図19 調査区周辺の地形	197
図10 4地点主要珪藻化石群集の層位分布	187	図20 上私部遺跡周辺の地形断面	198
		図21 暦年較正結果	206

付 章 表 目 次

表1 樹種同定結果	194	表3 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	205
表2 測定試料及び処理	205		

写真図版目次

巻頭図版1

- 1 上私部遺跡遠景（交野山頂より西を望む 写真中央の林後方が上私部遺跡）
- 2 1区東半部古墳時代遺構面全景（西から）

巻頭図版2

- 1 2区東半部・3区古墳時代遺構面全景（北から）
- 2 新羅土器

図版1 遺構

- 1 1区古墳時代遺構面全景（西から）
- 2 1区古墳時代遺構面全景（北東から）

図版2 遺構

- 1 1区西端部古墳時代遺構面全景（北から）
- 2 2区西半部古墳時代遺構面全景（北東から）

図版3 遺構

- 1 2区東半部・3区古墳時代遺構面全景（西から 正面建物は建物1）
- 2 2区南西突出部古墳時代遺構面全景（北東から）
- 3 2区南東突出部古墳時代遺構面全景（北から）

図版4 遺構

- 1 2区東半部・3区古墳時代遺構面全景（北東から）
- 2 4区・5区古墳時代遺構面全景（西から）

図版5 遺構

- 1 4区・5区古墳時代遺構面全景（北東から）
- 2 6区全景（南から）
- 3 7区全景（北から）

図版6 遺構

- 1 435竪穴住居（北から）
- 2 435竪穴住居電検出状況（南から）

図版7 遺構

- 1 983竪穴住居（南から）

- 2 983竪穴住居電検出状況（南から）

図版8 遺構

- 1 983竪穴住居、982方形竪穴状遺構（北から）
- 2 1094竪穴住居、950・999溝（北から）
- 3 1094竪穴住居（北東から）
- 4 982方形竪穴状遺構（南東から）

図版9 遺構

- 1 建物4～6（東から）
- 2 建物5（189柱穴）断ち割り（東から）
- 3 建物4（213柱穴）・建物5（180柱穴）断ち割り（北東から）
- 4 建物11（北から）

図版10 遺構

- 1 建物3～6（北から）
- 2 建物10（北から）

図版11 遺構

- 1 建物7（東から）
- 2 建物1（北から 手前は建物12南柱列）
- 3 建物7（155柱穴）断ち割り（西から）
- 4 建物12（353柱穴）断ち割り（南から）

図版12 遺構

- 1 建物13・14、溝群全景（北から）
- 2 建物15（西から）
- 3 建物15（756柱穴）断ち割り（北から）
- 4 建物15（656柱穴）断ち割り（東から）

図版13 遺構

- 1 建物17（西から 後方は建物16）
- 2 建物17（703柱穴）断ち割り（北から）
- 3 建物17（706・713柱穴）断ち割り（南西から）
- 4 建物16（北から）

図版14 遺構

- 1 建物20・39（東から）
- 2 建物18（北から）
- 3 建物20（896柱穴）断ち割り（南から）
- 4 建物18（818柱穴）根石（北から）

- 図版15 遺構
- 1 建物20 (北から)
 - 2 建物21 (南東から)
 - 3 建物22 (南東から)
- 図版16 遺構
- 1 136・138溝南建物群 (西から 手前は建物31・36)
 - 2 建物28・37 (南から)
- 図版17 遺構
- 1 建物29 (南から)
 - 2 建物29 (1334柱穴) 断ち割り (南東から)
 - 3 建物28・37 (1288・1290柱穴) 断ち割り (南西から)
 - 4 建物32 (西から)
- 図版18 遺構
- 1 136・138溝北建物群 (東から 中央大型建物は建物25 手前は建物27)
 - 2 建物24 (北から)
- 図版19 遺構
- 1 136・138溝および南北建物群と1090・1092～1094溝、1087・1088土坑 (北から)
 - 2 建物23・24・33 (西から)
 - 3 建物25 (1175柱穴) 断ち割り (北から)
 - 4 建物25 (1191柱穴) 断ち割り (西から)
- 図版20 遺構
- 1 43溝 (東から)
 - 2 55・81溝 (西から)
 - 3 55溝、櫛6 (東から)
- 図版21 遺構
- 1 841～844溝 (北西から)
 - 2 841～844溝、櫛2～4 (北から)
 - 3 841～844溝土器出土状況 (南東から)
- 図版22 遺構
- 1 136・138溝 (西から)
 - 2 136・138溝および137溝 (北西から)
- 図版23 遺構
- 1 534～536・538・539溝 (南西から)
 - 2 535溝土器出土状況 (西から)
- 3 750溝 (北西から)
- 図版24 遺構
- 1 235～237土坑 (北東から)
 - 2 677～679・753・754土坑、681溝 (東から)
- 図版25 遺構
- 1 679土坑土器出土状況 (北西から)
 - 2 671・791土坑 (北東から)
 - 3 1396土坑 (南から)
- 図版26 遺構
- 1 1区中世遺構面全景 (西から)
 - 2 畦畔2用水溝 (西から)
 - 3 畦畔4排水口 (北西から)
- 図版27 遺構
- 1 2区中世遺構面 畦畔8 (北西から)
 - 2 畦畔8堆積状況 (北西から)
 - 3 畦畔1 (北西から)
- 図版28 遺構
- 1 4区・5区中世遺構面全景 (西から)
 - 2 畦畔7 (北西から)
 - 3 1区西端部中世遺構面 畦畔9・10 (東から)
- 図版29 遺物
- 435・983竪穴住居、982方形竪穴状遺構、建物3・25・29・30・33柱穴出土土器
- 図版30 遺物
- 842溝出土土器
- 図版31 遺物
- 844溝出土土器
- 図版32 遺物
- 136溝出土土器
- 図版33 遺物
- 138溝出土土器
- 図版34 遺物
- 1090・1094溝、1087・1088・1095土坑出土土器
- 図版35 遺物
- 55・81・387溝出土土器
- 図版36 遺物
- 535溝出土土器 (1)

図版37 遺物

535溝出土土器（2）

図版38 遺物

534・538・750溝出土土器

図版39 遺物

677～679・753土坑出土土器

図版40 遺物

678・753・754土坑出土土器

図版41 遺物

28・236・237・492・721・723土坑、43溝出土土器

図版42 遺物

古墳時代包含層・遺構検出中出土土器

図版43 遺物

- 1 須恵器杯蓋朱記号
- 2 土鏃
- 3 火付付棒
- 4 移動式竈

図版44 遺物

杭・柱材

図版45 遺物

- 1 砥石（提砥）
- 2 砥石（置砥）
- 3 鑄造関係遺物

図版46 遺物

- 1 中世田面出土土師器
- 2 中世田面出土瓦器・陶器

図版47 遺物

- 1 中世田面出土輸入磁器
- 2 中世木製品
- 3 古代平瓦
- 4 宋銭

図版48 遺物

中世瓦（1）

図版49 遺物

中世瓦（2）

図版50 遺物

- 1 石鏃・剥片
- 2 水晶
- 3 石斧

第1章 調査の経緯と調査方法

第1節 調査に至る経緯と経過

上私部遺跡の発掘調査は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴い財団法人大阪府文化財センターが継続して行なっているもので、今年度の調査（その2）は平成15年度から実施した上私部遺跡（その1）03-1調査区^{（表1）}の南西隣接地にあたる。発掘調査に先立って、平成16年度に03-1調査区から西への遺構の広がり確かめるために確認調査を行なった。確認調査は長さ50mを越える東西方向の試掘トレンチを2本南北に平行に設置して行ない、トレンチ東半を中心に古墳時代の掘立柱建物柱穴や堅穴住居の一部を検出している。遺構面は西に向かって下がり、遺構密度も低くなっていた。また、上層の耕作土層から平安時代後期から室町時代の遺物が少量出土していることから、条里遺構の遺存も想定できた。発掘調査はこの確認調査成果を受けて実施したもので、古墳時代遺構の分布状況および交野部条里の実態の解明を目的として調査を行なった。

調査地内には緑地帯などの遺跡保存地区が予定されており、調査対象地は工事施工部に規制されて複雑なかたちとなっている。このため、調査地は工程を考慮して1区から7区まで分けて設定した。このうち6区と7区に関しては、南側を流れる私部北川の旧流路内に相当すると想定できたため、本格的な



図1 調査位置図（1：20,000）

調査に先立ち平成17年8月に遺構の確認調査を行なった。その結果、私部北川の氾濫による堆積層と近世以降の耕作土層を確認するのみであった。さらに下層の調査については、調査区が狭く危険を伴うと判断したため、大阪府教育委員会の指導のもとに一部断面観察を行なうのみで調査を終えた。発掘調査は6・7区の調査に引き続いて1区から5区までの広い範囲にわたって調査を行い、平成18年2月28日にすべての作業を終了した。調査対象面積は、合計で4285㎡である。

なお、1区から5区の調査において、大型掘立柱建物に伴う古墳時代後期の集落遺構を検出したため、事業者と協議のうえ平成18年1月21日に現地公開を実施した。現地公開は、総合体育施設「いきいきランド交野」で同時開催された第二京阪道路関連の展示と合わせて行い、700人以上の参加者を得ることができた。

第2節 調査方法

当調査の名称は上私部遺跡05-1調査とし、1区から7区の小調査区は正式にはそれぞれ05-1-1から05-1-7区となる。ただし、混乱を避けるために、本報告書では1区～7区と記述することとし、以下では遺構面調査が可能であった1区から5区の調査を概略する。

発掘調査は、まず調査地全体の層序関係を明らかにするため、2区の調査を西から順次行い、調査区北壁の堆積状況を観察しながら東の3区も併行して調査を行なった。そして、2・3区の調査が終わり次第、1区西端部および4・5区の調査を反転して行ない、最後に1区の中央部および東端部の調査を行なった。

掘削は近代以降の盛土および近世耕作土は機械掘削によって除去し、中世耕作土上面からは人力で掘削して条里畦畔の遺構検出を行なった。また、古墳時代遺構面までの耕作土は人力掘削によって除去したが、掘削にあたっては耕作土層の層位に注意し、各層から出土する遺物の帰属を明らかにするように努めた。なお、中世遺構面および古墳時代遺構面では記録写真および記録図面を作成し、掘り下げの途中においても遺物の出土状況など必要に応じて記録写真と記録図面を作成している。

測量記録については、財団法人大阪府文化財センターが定めた「遺跡調査基本マニュアル」に基づき、世界測地系によって測量した国土地理院第VI座標系を基準として記録図面の作成を行なった。上層で検出した中世の条里遺構は、4級基準点から複数の基準点を調査区内に設定し、平板測量によって100分の1の平面図を作成するとともに、必要に応じて20分の1の図面を作成した。また、古墳時代遺構面の平面測量は、クレーン車による写真撮影を計7回に分けて実施し、図化は50分の1（および100分の1）の縮尺で行なった。断面図および個別の遺構実測図については目的に応じて10分の1・20分の1の図面を作成した。また、遺物の取り上げについては前述した測量基準に基づき、10mの方形区画単位ごとに地区割・層位・遺構・日付を明示して取り上げ、登録番号を付した。

なお、検出した古墳時代の建物遺構については、大阪府教育委員会の指導のもと、柱位置を明示するため柱穴に土嚢をつめて埋め戻しており、調査終了後の現地保存も考慮にいたった対応を行なっている。

註

註1) 財団法人大阪府文化財センター 2007 『上私部遺跡Ⅰ』 (財)大阪府文化財センター調査報告書第151集

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

上私部遺跡は大阪府交野市青山に所在する。当地域は桂川・宇治川・木津川の三川が合流し、天王山と男山に挟まれた狭隘部を抜けて淀川として大阪府に入った左岸部、生駒山地の北西に発達した交野台地南部に位置する。

交野地域では穂谷川の北側に標高86mを最高点とする長尾丘陵、天野川の西側では生駒山地から北に派生する標高45m～65mの枚方丘陵が広がっており、交野台地は穂谷川と天野川に挟まれた標高25m～40mの低位～中位段丘面で主に構成される³¹⁾。この地域は免除川をはじめとする天野川の支流群によって河岸段丘が非常に発達し、埋没谷を含む多くの谷地形を伴っている。遺跡はこの中位段丘面の南端部、標高344mの交野山と標高345.1mの旗振山の西麓を水源とする私部北川の右岸段丘上に立地している。

調査地周辺は現在では府道交野久御山線に沿って住宅地などの開発が進められているが、戦後まもなく写された米軍撮影空中写真では、調査地周辺は広く水田として利用され、地形に規制されながらも条里地割が遺存していた様子がみとれる。水田区画内を流れる用水は基本的には東西方向に流れており、全体としては東から西へ緩やかに傾斜する地形であることがわかる。

なお、現状では遺跡の南は私部北川に向かって高くなっているが、これは私部北川の土石流によって形成された崖錐地形である。交野山地の岩石組成は主に花崗岩で構成されているため、花崗岩の風化した砂が河川によって多く流出している。実際に、私部の集落はもともと当遺跡の東、私部墓地が所在する上河原の地にも所在していたが、元禄4年(1691)の大雨でこの集落が流されたという記録があり、集落の存在を示す遺物も確認されている³²⁾。現在、旧流路上に土石流に伴う砂質土が多量に堆積して尾根状の地形となっており、私部墓地の東から山際にかけては高燥な扇状地で果樹園として利用されているが、これらの地形は江戸時代前期の大水で最終的に形成されたものである。現状では崖錐の南は大きく地形が下がっているが、元来は私部北川の流れる南へも緩やかに下がる地形であったと考えられる。

また、私部墓地の北側には、扇状地の湧水を利用して造られた溜め池(大池)が所在するが、ここから西方へは水田区画に規制されない東西方向の里道が走っている。O3-1調査では里道の下層で小さな埋没谷が確認されており、大池から続く埋没谷によって遺跡地の北側が画されていたことが判明した。これらのことから、当遺跡は東西に流れる私部北川と大池から続く埋没谷によって挟まれた高燥地に立地しており、南向きの集落を形成するのに非常に良好な場所であったことが推測できる。

第2節 歴史的環境

上私部遺跡の周辺では、旧石器時代から近世まで多くの遺跡が確認されており、当地域の歴史の古さを知ることができる。また、文献史料にも交野に関連する多くの伝承記事が認められる。ここで、これら各時代の多様な遺跡群について概観しておく³³⁾。

まず、旧石器時代から縄文時代の遺跡としては、上私部遺跡の東に隣接した神宮寺遺跡において、古くからサヌカイト製のナイフ形石器や剥片が採集されている。神宮寺遺跡は交野山西麓の免除川と私部北川に挟まれた段丘上に立地しており、生活環境の良好な場所に遺跡が形成されていたことがわかる。

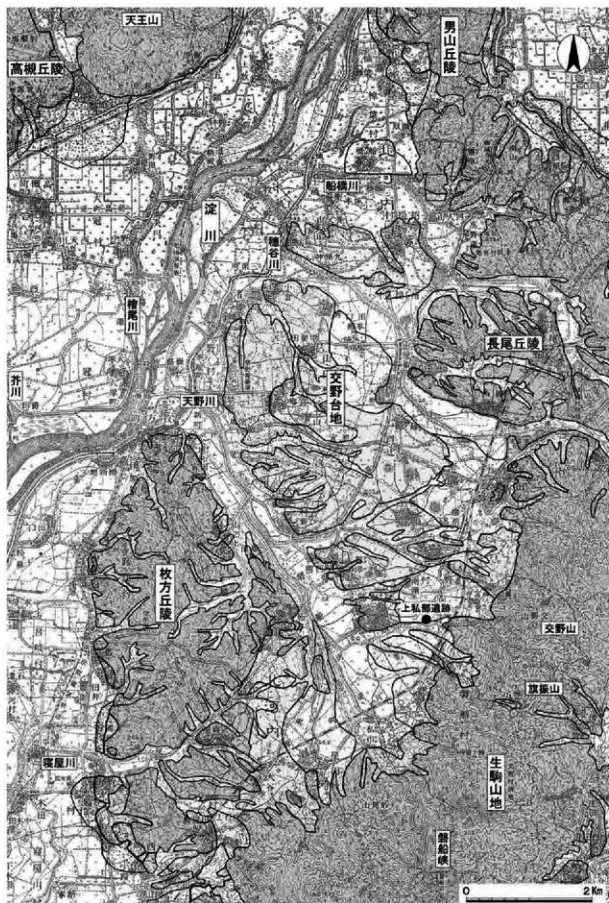


図3 調査地周辺地形図 (1:60,000)

神宮寺遺跡では旧石器時代の遺物だけでなく、押型文を持つ縄文土器群が出土しており、「神宮寺式土器」として縄文時代早期の標識遺跡となっている。

このほか生駒山地の西麓では、神宮寺遺跡の北方約2.5kmの津田三ツ池遺跡や、南西約4kmの地点の布懸遺跡などで旧石器時代の遺物が発見されている。とくに布懸遺跡では、120点を越える旧石器が確認されているがナイフ形石器は4点と少なく、ほとんどが剥片や石核・砕片であることから石器製作に関わる遺跡と考えられている。

弥生時代になると、天野川流域において集落遺跡が成立してくる。弥生時代前期の遺跡としては、第二京阪道路関連の調査で発見した天野川右岸に立地する私部南遺跡において、弥生時代前期の竪穴住居を検出した。また、天野川対岸の上の山遺跡では、中期前半の竪穴住居や土坑群・溝などとともに、独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物が発見されており、集落の中心的役割を果たす特殊な建物として認識されている。このほか、私部城遺跡・郡津決り遺跡・郡津大塚遺跡・ハセド遺跡など、天野川右岸の台地上に弥生時代中期後半から後期の遺跡が展開している。

天野川流域の弥生時代遺跡は前期から中期の遺跡を中心とするに対し、後期から庄内期にかけては生駒山地西麓に遺跡が集中する傾向にある。上私部遺跡の北東約1.2kmに位置する東倉治遺跡では、弥生時代後期後半の竪穴住居が検出されており、古墳時代初頭の炉状遺構も検出されていることから、弥生時代後期から古墳時代初頭の集落遺跡と考えられる。また、上私部遺跡の南方約500mに所在する寺村遺跡では、弥生時代後期の遺物を多量に包含した溝を検出しており、周辺で竪穴住居も確認されている。部分的な調査で不明な点が多いが、環濠集落の可能性も指摘されている。さらに特殊な遺跡として、竜王山中の高所に所在する南山遺跡がある。遺跡は交野地域を一望するような場所に立地し、弥生時代中期後半から後期まで継続した高地性の集落遺跡と考えられている。

弥生時代後期後半から古墳時代前期になると、天野川右岸の中段段丘上に森遺跡が形成される。庄内期の竪穴住居や溝・土坑などとともに、集落の東を限る古墳時代の河川が確認されており、拠点集落として新たに展開していく遺跡と考えられる。そして、森遺跡の東方尾根上には当地域の古墳時代前期の盟主古墳群である森古墳群が所在する。古墳群は前方後円墳を中心に少なくとも6基確認されており、中でも森1号墳は全長約106mの前方後円墳で、前方部と後円部の比高差は10mと突出している。墳丘部からは二重口縁壺などの土器が出土しており、墳形とともに初期古墳の特徴を備えている。また、鍋塚古墳も全長約60mの前方後円墳で、葺き石をもつ墳輪は伴わない。これら交野地域を眺望する古墳群は山麓の集落遺跡である森遺跡と密接に関わっていると考えられ、淀川-天野川水系を掌握した勢力の存在を示唆している。

古墳時代中期には、寺の集落の西方、私部南川の左岸段丘上に交野車塚古墳群が営まれる。前方後円墳1基、前方後方墳1基、円墳3基、方墳1基で構成される古墳群で、森遺跡と上私部遺跡の中間地点に位置する。前方後方墳と想定されている1号墳は全長65m以上の大型墳で、後方部において木棺直葬の埋葬施設を3基検出している。とくに、中央で検出した下層の第1号棺には短甲1領と銜角付冑が納められ、巴形銅器・筒形銅器・銅鏡・太刀・玉類などが副葬されていた。古墳群の成立時期は1号墳が5世紀初頭に築造されたようで、その後6世紀初頭まで円墳が連続して営まれたと考えられている。

また、車塚古墳群運営の最終段階と並行する5世紀後半に、森遺跡で大規模な製鉄が操業され始めるのは興味深い。操業当初の状況は遺構からはまだ明らかにされていないが、溝や土坑内から5世紀後半から6世紀前半の土器群と共に多量の鉄滓や輪の羽口・製埴土器が出土しており、古墳時代におけ

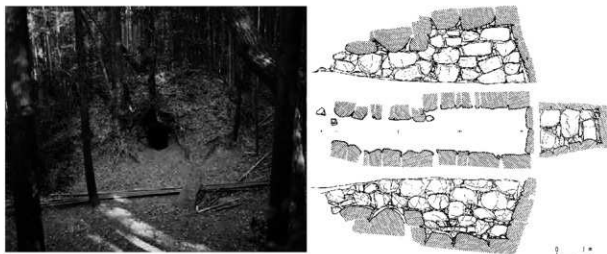


図5 寺古墳群第3号墳近景および石室実測図（註3文献より転載）

る北河内最大の製鉄遺跡として知られている²¹¹⁾。鍛冶炉遺構については6世紀段階のものが多く確認されており、上私部遺跡の盛衰と期的にはほぼ並行している。

さらに、古墳時代後期の古墳として、生駒山地西麓に多くの群集墳が営まれている。車塚古墳群の東方山麓に造営された寺古墳群は、水系として上私部遺跡とも繋がっており、車塚古墳群に続く6世紀後半の古墳群として注目できる。中でも第3号墳（塚穴古墳）は、西に延びる尾根を切り、西に開口する片袖式の横穴式石室を構築して墳丘を形成した方墳で、発掘調査は行なわれていないが石室構造や墳形から6世紀末から7世紀初頭の年代が与えられている。寺古墳群が形成された山裾からは上私部遺跡が一望でき、距離的にも非常に近いことから、上私部遺跡に居住した人々との密接な関係が想定できるであろう。

また、免除川の右岸域には上私部遺跡とは水系を異にするが、8基の古墳で構成された倉治古墳群と清水谷古墳が所在する²¹²⁾。倉治古墳群は6世紀前半に造営され始め、7世紀初頭までには追葬も含めて埋葬儀礼が終了する。とくに、第1号墳は竪穴系横穴式石室をもつが、鉄滓の出土をみた清水谷古墳も同様の石室構造と考えられており、渡来系氏族との関係が指摘されている。

その他、須恵器の生産遺跡として、寺古墳群の北方に大谷窯跡と大谷北窯跡が確認されている。出土した須恵器の型式から前者が6世紀末から7世紀初頭、後者が7世紀前半と8世紀の2時期の操業と考えられる。ただ、上の山道跡では5世紀に遡る窯材や焼け歪んだ須恵器が出土しており、各遺跡から在地的な須恵器が多く出土することから、古墳時代中期から後期にかけて在地で須恵器生産が行なわれていたことが推定できる。時期は下がるが奈良時代の「造仏所作物帳」によれば、鉛釉陶器製作の材料として「肩野」より土を運ばせており、交野地域で良質な粘土が広く採取できたことがわかる。今後、交野市域においても5～6世紀に遡る須恵器窯跡が発見される可能性は充分あると考えられる。

なお、文献史料からみた当地域とヤマト政権との関わりとして、「茨田屯倉」と「私部」の設置が挙げられる。「茨田屯倉」については、「古事記」・「日本書紀」ともに仁徳天皇の治世に設置されたことが記載されている。屯倉の所在地として「茨田堤」との関係から、枚方丘陵西側の低地部とも推定されているが、「和名類聚抄」によれば交野郡に三宅郷があり当地域にも屯倉の施設が所在したと想定できる。また、敏達天皇紀6年2月に皇后のための「私部（きさいちべ）」が設置されるが、当地域はまさに「私部」「私市」の地であり、律令期に「屯田」を継承したと考えられる「官田」の字名も残っていることが

ら、古墳時代後期にはヤマト政権と密接な関わりをもった地域であることが知られる。⁸¹³⁾

その後、7世紀中ごろになると、当地域は茨田郡(評)として立評されるが、大宝令施行に際して枚方丘陵東の台地部は交野郡として新たに割置される。交野郡の割置に伴い、天野川右岸の「郡津」周辺に交野郡衙が造営されたと推定されており、7世紀後半の瓦も出土することから郡衙隣接寺院として麻長宝寺の造営も行なわれたようである。ただ、郡衙の存在を示す遺構や遺物はまだ発見されておらず、寺院の実態も不明である。また、奈良時代創建の古代寺院としては、上私部遺跡の南方約750mの山際に須弥寺が建立される。古代の伽藍は不明だが、石清水八幡宮との深い関係から15世紀まで隆盛し、現在も法灯を保っている⁸¹⁴⁾。その他、交野山麓には伽藍寺院として開元寺が建立されており、平安時代以降には獅子窟寺など山岳寺院が多く建立されるようになる。

さらに、奈良時代以降になると耕地の開発も進められる。天野川流域に沿って方形地割が認められ、私部や倉治地域でも方位の異なる方形地割痕跡がみられることから、古代から中世にかけて条里の施工による土地開発が順次行なわれたと考えられる。条里施工の時期は不明な点が多いが、森遺跡では9世紀後半に廻る遺物を包含する溝や井戸などが発見されており、「石清水八幡宮文書」に見られる三宅山荘園の有力な候補地とされている⁸¹⁵⁾。また、上私部遺跡の北方に隣接する有池遺跡では大規模土地開発が12世紀後半から始まり、13世紀後半には集落が形成されることが判明している⁸¹⁶⁾。現在、上私部・有池周辺で確認できる条里地割は、この時の開発によって形成された可能性が高いであろう。

註

- 註1) 経済産業省産業技術総合研究所地質調査所 2001 「大阪東北部地域の地質」
- 註2) 片山長三 1981 「交野市史」交野町略史復刻編(初出1963年) 交野市
- 註3) 交野市域の遺跡の概況については、引用文献を述べない限り以下の文献を主に参考とした。
水野正好ほか 1992 「交野市史」考古編 交野市
- 註4) 財団法人大阪府文化財センター 2007 「私部南遺跡Ⅰ」(財)大阪府文化財センター調査報告書第154集
- 註5) 財団法人大阪府文化財センター 2007 「上の山遺跡Ⅱ」(財)大阪府文化財センター調査報告書第155集
- 註6) 財団法人大阪府文化財センター 2006 「東倉治遺跡Ⅱ」(財)大阪府文化財センター調査報告書第146集
- 註7) 交野市教育委員会 1989 「1988年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要」
- 註8) 交野市教育委員会 1994 「森遺跡1992-6次調査報告・交野郡衙跡1993-1次調査報告」交野市埋蔵文化財調査報告1993-I
交野市教育委員会 1989 「森遺跡Ⅰ」
交野市教育委員会 1997 「森遺跡Ⅵ」交野市埋蔵文化財調査報告1996-Ⅲ ほか
- 註9) 交野市教育委員会 2003 「鍋塚古墳2000-1次調査・有池遺跡2002-1次調査」交野市埋蔵文化財調査報告2002-II
交野市教育委員会 2007 「交野市の埴輪」交野市の文化財Ⅰ
- 註10) 交野市教育委員会 2000 「交野東車塚古墳(調査編)」交野市埋蔵文化財調査報告1999-I
- 註11) 交野市教育委員会 2000 「古代交野と鉄Ⅱ」交野市埋蔵文化財調査報告1999-II
交野市教育委員会 1991 「森遺跡Ⅲ」交野市埋蔵文化財調査報告1990-I
交野市教育委員会 1997 「森遺跡Ⅴ」交野市埋蔵文化財調査報告1996-II ほか
- 註12) 交野市古文化研究会 1975 「倉治古墳群発掘調査概要」交野市古文化同好会記録Ⅰ
交野市教育委員会・(財)交野市体育文化協会 1987 「清水谷古墳調査概要」
- 註13) 網 伸也 2005 「淀川水系のミヤケ」『月刊考古学ジャーナル』No.533
- 註14) 交野市教育委員会・(財)交野市文化財事業団 2004 「須弥寺遺跡」交野市埋蔵文化財調査報告2003-II
- 註15) 交野市教育委員会 2001 「森遺跡Ⅶ」交野市埋蔵文化財調査報告2000-II
- 註16) 財団法人大阪府文化財センター 2007 「有池遺跡Ⅰ」(財)大阪府文化財センター調査報告書第152集

第3章 遺構

第1節 遺跡の基本層序

調査地は住宅地として開発されていたため、調査開始当初は盛土によって周囲の水田面よりも1mほど高い平地となっていた。しかし、大局的にみれば旧地形に規制されて、府道交野久御山線に向かって緩やかに傾斜している。住宅地開発が行なわれる以前は、西へ段々と下がる田園風景が広がっており、それら田面の時期的変遷が層序観察から明確に確認できる。ここでは具体的な基本層序について、最初に調査を行なった2区の北壁で説明しておく。2区は調査地全体を北東から南西に通して調査区を設定しており、調査地全体の基本層序を観察するうえで最も適しているためである。

前述したように、調査地全体に宅地造成に伴う盛土が1mほどなされており、それらの盛土を排除したところで近・現代の水田耕作土である黒褐色細粒砂層となる。標高は最も高い北東部で34.1m、最も低い南西部で33.5mであり、畦痕跡も明瞭に確認できた。この近・現代水田面の下層には、中世から連続と営まれた水田面層が認められる。また、中世から近・現代までの畦畔の位置をみると、洪水砂埋没による若干の移動はあっても、ほとんど場所を変えておらず、畦畔も同一場所で営まれ続けていることを確認することができる。なお、調査区北東部では地盤(地山)が標高33.2mと高いため土壌堆積が少なく、水田面数は5～6面とあまり多くないが、調査区南西部では地盤標高が31.1mと低いため土砂が厚く堆積しており、15面前後の水田面を確認できた。

発掘調査では調査区西西部で明確に認識できた、中世田面耕作土層であるオリブ黒色細粒砂層を鍵層として、同層の上層に堆積する水田面を第1面と認識し、鍵層面を第2面として調査を進めた。ただ、現実的には中世水田面として全調査区で把握できたのは第1面のみであり、第2面は調査区全体に広がっておらず遺構面としては認識できなかった。なお、出土物については、鍵層であるオリブ黒色細粒砂層より上層から出土した遺物を田面上層遺物、鍵層を掘り下げた段階で出土した遺物を田面下層遺物としている。

また、第3面である古墳時代遺構面は、若干の遺物包含層が残る地点もあるが、ほとんどの遺構を地盤直上で検出した。ただ、古墳時代遺構面においても水田耕作に伴う溝群を検出しており、最下層の田面関係遺構として注目できる。出土遺物が極めて少ないため時期を明確に押さえることができないが、古墳時代の遺構を切って成立していることや古代の遺物が若干出土することから、古代から中世の水田耕作に関わる遺構と判断している。

次に、これらの水田面の堆積状況を南西部から地点別にみておく。最も西の地点①では、近・現代耕作土層の床土(暗灰黄色中粒砂)の下層にはラミナが発達した洪水砂層(ぶい黄褐色粗粒砂)が厚く堆積しており、層内から17世紀後半から18世紀初めと考えられる唐津碗底部や肥前系磁器の網目文碗片が出土している。この洪水砂層は地点②・③だけでなく7区にも広がっており、近世初頭にこの地域で耕作面を覆い尽くす津波があったことを示している。先述した元禄4年の大雨との関連を示唆する興味深い層である。

この洪水層の下層ではやや厚い土壌化層(暗オリブ灰色細粒砂)となり、さらに4層の耕作面の下層で鍵層であるオリブ黒色細粒砂層を確認した。ただ、鍵層上層の第1面田面層はここでは検出でき

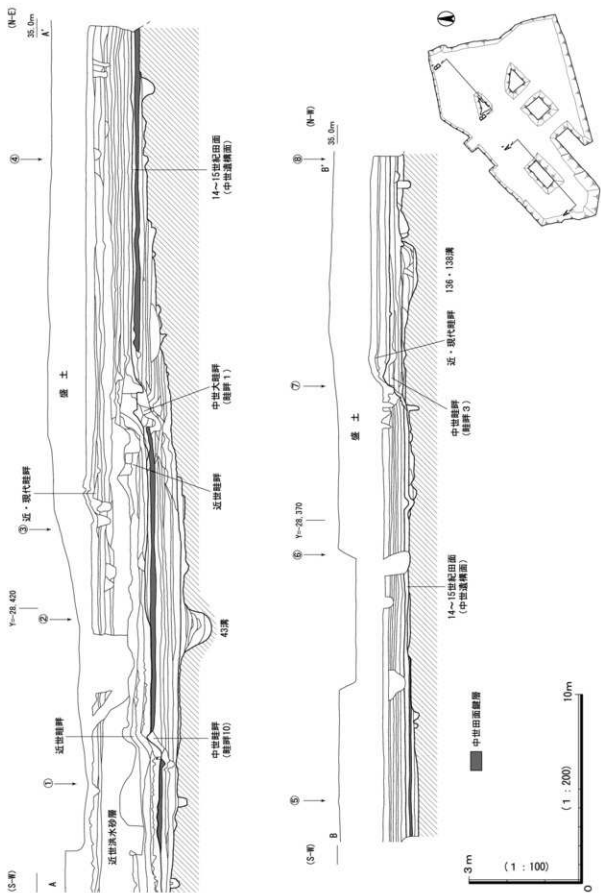
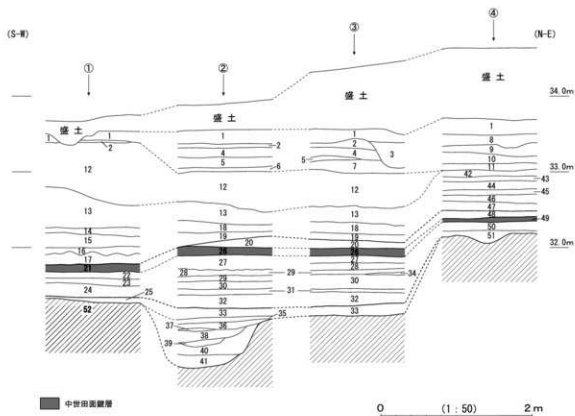
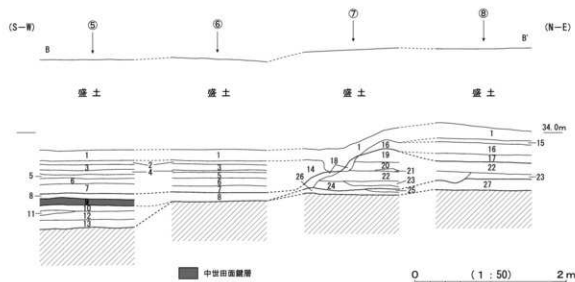


图6 2区北壁断面实测图



1 黒褐 (2.513/1)	小礫を含む細粒砂 (粘土)	27 灰 (1014/1)	細粒砂を含むシルト
2 暗灰質 (2.514/2)	小礫を含む中粒砂 (灰土)	28 暗灰質 (2.515/2)	極粗砂を含む細粒砂
3 オリーブ褐 (2.514/3)	大礫を含む細粒砂 (地下溝)	29 灰 (1014/1)	中粒砂を含む極細砂
4 灰オリーブ (514/2)	大礫を含む細粒砂	30 オリーブ黒 (7.513/2)	小礫を含む極細砂
5 緑灰 (10B5/1)	粗粒砂を含む細粒砂 (ラミナあり)	31 灰 (7.514/1)	中粒砂を含む極細砂
6 オリーブ灰 (1015/2)	粗粒砂を含む細粒砂	32 オリーブ黒 (7.513/2)	小礫を含む細粒砂
7 灰 (515/1)	小礫を含む中粒砂 (粘土をブロック状に少量含む)	33 オリーブ黒 (513/1)	小礫を含む極細砂 (古墳時代包含層)
8 オリーブ灰 (5015/1)	小礫を含む中粒砂	34 黒褐 (2.513/2)	小礫を含む中粒砂・細粒砂
9 緑灰 (10G15/1)	小礫を含む中粒砂 (礫ブロックを含む)	35 黒褐 (101B3/1)	粗粒砂を含む中粒砂 (炭化物を含む)
10 暗緑灰 (504/1)	小礫を含む中粒砂 (礫ブロックを含む)	36 黒 (7.512/1)	粗粒砂を含む細粒砂 (有機物を多量に含む)
11 暗オリーブ灰 (2.5014/1)	小礫を含む中粒砂 (礫ブロックを多量に含む)	37 オリーブ黒 (7.513/1)	粗粒砂 (有機物を少量含む)
12 にがい黄褐 (101B5/4)	中粒砂を含む細粒砂 (ラミナが発達した洪水砂)	38 黒 (1012/1)	極細砂 (有機物を多量に含む)
13 暗オリーブ灰 (5014/1)	細粒砂	39 黒 (2.5013/1)	粗粒砂を含む細粒砂 (有機物を多量に含む)
14 オリーブ灰 (5015/1)	粗粒砂を含む中粒砂 (ラミナあり)	40 オリーブ黒 (513/1)	粗粒砂を含む中粒砂 (有機物を含む)
15 暗オリーブ灰 (5014/1)	粗粒砂を含む中粒砂	41 灰 (1015/1)	小礫を含む粗粒砂
16 オリーブ灰 (2.5015/1)	中粒砂を含む細粒砂	42 灰 (1015/1)	粗粒砂を含む中粒砂
17 オリーブ黒 (1013/1)	粗粒砂を含む細粒砂	43 灰 (1015/1)	粗粒砂
18 灰 (1014/1)	細粒砂	44 灰オリーブ (514/2)	粗粒砂を含む中粒砂・細粒砂
19 暗オリーブ灰 (5014/1)	小礫を含む中粒砂・細粒砂	45 灰 (7.514/1)	粗粒砂を含む中粒砂
20 オリーブ黒 (1013/1)	小礫を含む中粒砂・細粒砂	46 暗オリーブ灰 (2.5014/1)	極粗砂を含む中粒砂
21 オリーブ黒 (1013/1)	中粒砂を含む細粒砂 (中世の田面礫層)	47 灰 (1014/1)	粗粒砂を含む細粒砂 (礫を多く含む)
22 オリーブ黒 (1013/1)	粗粒砂を含む中粒砂	48 オリーブ黒 (7.514/2)	極粗砂を含む細粒砂
23 灰 (1014/1)	中粒砂を含む細粒砂	49 灰オリーブ (1013/2)	粗粒砂を含む細粒砂 (中世の田面礫層)
24 灰 (7.514/1)	粗粒砂を含む細粒砂	50 灰 (1014/1)	粗粒砂を含む中粒砂
25 オリーブ黒 (7.513/1)	粗粒砂を含む細粒砂	51 オリーブ黒 (7.512/2)	小礫を含む中粒砂
26 オリーブ黒 (1013/2)	小礫を含む細粒砂 (中世の田面礫層)	52 オリーブ灰 (2.5015/1)	小礫を含む中粒砂・シルト (堆山)

図7 2区北壁 A-A' ライン断面実測図



1 黒礫 (2.5Y3/2)	小礫を含む細粒砂 (粘土)	15 灰 (10Y4/1)	極細砂を含む細粒砂 (粘土)
2 灰 (7.5Y5/1)	小礫を含む中粒砂 (灰土)	16 灰 (10Y5/1)	中粒砂・細粒砂
3 灰オリブ (7.5Y5/2)	粗粒砂を含む中粒砂	17 黄礫 (2.5Y5/3)	粗粒砂を含む細粒砂
4 灰 (7.5Y4/1)	粗粒砂を含む中粒砂	18 灰オリブ (5Y4/2)	粗粒砂を含む細粒砂
5 オリブ灰 (10Y5/2)	粗粒砂を含む中粒砂・細粒砂	19 暗灰黄 (2.5Y4/2)	粗粒砂を含む中粒砂・細粒砂
6 灰 (10Y4/1)	小礫を含む細粒砂	20 暗灰黄 (2.5Y4/2)	小礫を含む中粒砂
7 灰 (10Y4/1)	粗粒砂を含む極細砂	21 にぶい黄礫 (10Y5/3)	粗粒砂を含む細粒砂
8 灰 (7.5Y4/1)	小礫を含む細粒砂	22 灰 (5Y5/1)	中礫・小礫を含む極細砂 (シルトを混入に含む)
9 オリブ黒 (10Y3/1)	粗粒砂を含む中粒砂 (中世の田面鍵層)	23 灰 (7.5Y5/1)	小礫・粗粒砂を含む極細砂・シルト
10 灰 (7.5Y4/1)	粗粒砂を含む細粒砂	24 灰オリブ (5Y4/2)	粗粒砂を含む極細砂・シルト
11 灰オリブ (7.5Y4/2)	粗粒砂を含む極細砂・シルト	25 灰オリブ (5Y5/2)	粗粒砂を含む極細砂
12 暗灰黄 (2.5Y4/2)	小礫を含むシルト	26 暗灰黄 (2.5Y4/2)	極細砂を含む中粒砂
13 オリブ黒 (2.5Y4/3)	中礫を含むシルト	27 灰オリブ (7.5Y4/2)	粗粒砂を含む極細砂・シルト (古墳時代包含層)
14 灰 (10Y4/1)	小礫を含む極細砂		

図8 2区北壁 B-B' ライン断面実測図

なかった。鍵層面の標高は31.8mである。この鍵層は下層では中粒砂と粒子がやや粗くなっており、さらに灰色細粒砂層と古墳時代包含層であるオリブ黒色細粒砂層を掘削して地盤であるオリブ灰色中粒砂～シルト層となる。地盤の標高は31.3mである。

地点②・③では地点①とは異なり、近・現代耕作土床土の下層にも耕作土層が3面ほどあり、その下層で洪水砂層を確認した。そして、洪水砂層の下層では4層の耕作土層があり、その下層で鍵層であるオリブ黒色細粒砂層を確認した。この鍵層の上層田面を第1面田面としている。第1面田面の標高は32.0mと、地点①に比較してやや高い。鍵層より下層には7～8面の耕作土層が堆積しており、最下層には厚さ10cmほどの古墳時代包含層(オリブ黒色極細砂)があり、それを掘り下げたところ古墳時代遺構面の地盤に至る。地盤の標高は古墳時代の谷頭となる43溝が存在するため、31.1mと最も低くなっている。

地点④から東は条里遺存地割の南北大畦畔をまたぐため、地点①～③と比べて全体に標高が高くなっており、地点①～③で認められた洪水砂層が認められなかった。地点④では近・現代耕作土の下層に厚さ1mにわたって10層の耕作土面があり、その下層で鍵層であるオリブ黒色細粒砂層を確認した。地点②・③と同様に、ここでも鍵層上層を第1面田面としている。第1面田面の標高は32.5mである。この鍵層の下層は1層の耕作土層を検出したのみで、最下層の古墳時代包含層(オリブ黒色中粒砂)を

掘り下げると標高32.2mで古墳時代面である地盤となる。

地点⑤・⑥は地点④の東隣の田面で、近・現代耕作土下層の耕作土面は6面と少なくなり厚さも45cmほどである。また、地点⑤では鍵層と考えられるオリブ黒色中粒砂層を確認できたが、地点⑥では対応する層が消滅しており、層位的に判断して上層の灰色細粒砂層を第1面田面と想定した。第1面田面の標高は33.2mである。古墳時代遺構面までの深さは、地点⑤では深さ50cmで5～6層の耕作土層が認められるが、地点⑥では10cmほどの耕作土層（灰色細粒砂）を掘り下げたところ、すぐに遺構面となる。地点⑤の地盤標高は32.7m、地点⑥の地盤標高が33.1mと、地点④から旧地形がなだらかに北東に向かって上がっている様子がよく観察できる。

地点⑦・⑧は最も東で検出した畦および田面の様相である。地点⑦でみてわかるように、中世畦畔とまったく同じ場所に近・現代畦畔が造られている。中世畦畔は暗灰黄色中～細粒砂を積み上げて造営しており、灰オリブ色細粒砂で成形しているようである。地点⑧の堆積状況を見ると、近・現代耕作土床土の下層は1面の耕作土層と床土のみで、その下層で検出した灰色極細砂層を第1面田面と想定した。標高は33.6mである。第1面田面下層は耕作土は2層のみで、厚さ10cm強の古墳時代包含層（黒色極細砂～シルト）を掘り下げると古墳時代遺構面である安定した地盤となる。地盤の標高は33.2mである。ちなみに、当調査地で最も標高の高い地点は1区北東隅部の標高33.35mであった。

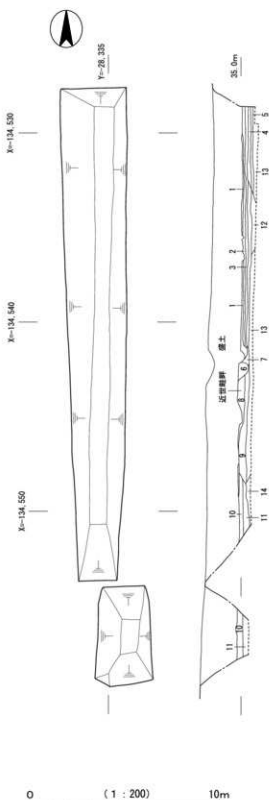
ここで、03-1調査区との関係を確認しておきたい。03-1調査区では全体に地盤標高が高く、耕作土層の堆積があまり認められない。地盤標高は北東部で37.0m、南西部で33.5mとなっており、遺跡全体としても北東から南西に緩やかに下がる地形であったことが判明したといえる。

なお、最後に6区・7区の堆積状況の報告もここで行なっておく。6区・7区は調査区が狭く深いため、前章で述べたように掘削に危険が伴うと判断し平面的調査は行なえなかった。そのため近世までの耕作面の確認にとどまっている。

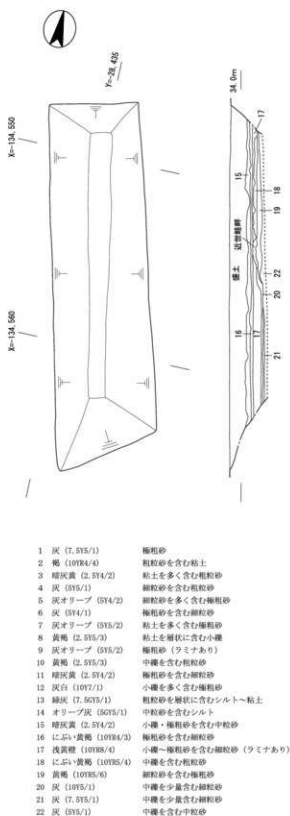
6区は4区の南に設定した南北に細長い調査地である。南北26m、東西3mの調査区を設定し、補足的に南に接して南北6m、東西3mの試掘坑を設けた。断面観察によれば、地表下1.5mまでが盛土であり、標高35.0mでようやく近世の耕作土層となる。X=-134.543ライン付近で東西方向の畦畔を確認しており、少なくとも2面の耕作面が存在したと考えられる。北半の田面は断面観察から4～5面の耕作土層が堆積しており、堆積状況から水田利用が想定できる。畦畔北側の溝下層から18世紀以降の近世陶器が出土しており、確認した耕作土層の時期の一端を示している。南半については耕作土層が厚く、粒径の大きい礫を多く含んでいることから、畑地としての利用であった可能性がある。調査は地表下約2.5mまで行っている。

7区は、2区西端部の南、府道交野久御山線に沿った調査地である。南北18m、東西5mの調査区を設定し、地表下2mまでの調査を行なった。堆積状況は6区とは異なり、2区北壁西端部の様相と類似する。盛土は地表下1mまでで、標高33.7mで近・現代耕作土層となる。この下層にはラミナの発達した洪水砂層（浅黄橙色細粒砂）が近世耕作面を覆っており、X=-134.555ライン付近で近世畦畔が確認できた。近世耕作面は北半では標高33.4mであるが、南半では33.0mで畦畔を境に南へ田面が下がっていたことを示している。この近世耕作土層は下層に連続と続いていることを、一部で断り割り調査を行ない確認したが、中世田面の確認までは至らなかった。当調査区は私部北川に向かって下がっていく場所であり、遺構面はかなり深くなることが予想される。

6区



7区



- | | |
|--------------------|----------------------|
| 1 灰 (7.5Y5/1) | 極粗砂 |
| 2 褐 (10YR4/4) | 粗粒砂を含む粘土 |
| 3 暗灰黄 (2.5Y4/2) | 粘土を多く含む粗粒砂 |
| 4 灰 (5Y5/1) | 細粒砂を含む粗粒砂 |
| 5 灰オリーブ (5Y4/2) | 粗粒砂を多く含む極粗砂 |
| 6 灰 (5Y4/1) | 極粗砂を含む極粗砂 |
| 7 灰オリーブ (5Y5/2) | 粘土を多く含む極粗砂 |
| 8 黄褐 (2.5Y5/3) | 粘土を層状に含む小礫 |
| 9 灰オリーブ (5Y5/2) | 極粗砂 (フミナあり) |
| 10 黄褐 (2.5Y5/3) | 中礫を含む粗粒砂 |
| 11 暗灰黄 (2.5Y4/2) | 極粗砂を含む細粒砂 |
| 12 灰白 (10Y7/1) | 小礫を多く含む極粗砂 |
| 13 緑灰 (7.5G7/1) | 粗粒砂を層状に含むシルト～粘土 |
| 14 オリーブ灰 (5G7/1) | 中粒砂を含むシルト |
| 15 暗灰黄 (2.5Y4/2) | 小礫・極粗砂を含む中粒砂 |
| 16 にぶい黄褐 (10YR4/3) | 極粗砂を含む細粒砂 |
| 17 浅黄橙 (10YR8/4) | 小礫～極粗砂を含む細粒砂 (フミナあり) |
| 18 にぶい黄褐 (10YR5/4) | 中礫を含む粗粒砂 |
| 19 黄褐 (10YR5/6) | 細粒砂を含む極粗砂 |
| 20 灰 (10Y5/1) | 中礫を少量含む細粒砂 |
| 21 灰 (7.5Y5/1) | 中礫を少量含む細粒砂 |
| 22 灰 (5Y5/1) | 中礫を含む中粒砂 |

図9 6・7区平面・断面実測図

第2節 古墳時代の遺構

基本層序で確認したように、古墳時代の遺構は地盤直上で検出している。検出した遺構は、竪穴住居や掘立柱建物、それらを区画する欄と溝そして土坑などである。北東に隣接する03-1調査区では47棟にのぼる竪穴住居を検出したが、当調査地では4棟のみしか確認できず、掘立柱建物の比率が大きくなっている。また、掘立柱建物は調査区の東半に重複して建てられており、居住域の構成が03-1調査区とは大きく異なっていたことを示している。なお、生活水を確保するための井戸については、03-1調査区に引き続き今回の調査でも検出していない。

1 竪穴住居・方形竪穴状遺構

今回の調査で竪穴住居を4棟検出した。前年度調査区に比べると棟数は僅少であるが、このうち2棟は規模が大きいのが特徴的である。他の2棟は重複して建て替えられた小型住居である。また、性格は明らかでないが、方形を呈する竪穴状の落ち込み遺構を検出しており、ここでは方形竪穴状遺構として報告する。

435住居（図11、図版6）

3・4区東側で検出した大型の竪穴住居で、西側の半分近くが調査区外となる。掘立柱建物15に切られている。北側では遺構の残存状況が良好で、竈や貼り床、壁溝を確認できたが、南側は削平が著しく貼り床の一部を確認しただけで、南壁の位置は確定できなかった。

住居掘形は主軸方向N-7°-Wで、東西7.8m、南北は柱穴の位置から考えて8m程度と推測され、平面形はほぼ正方形とみられる。北側での検出面から貼り床面までの深さは約20cmである。調査区内で確認できた柱穴は2基のみだが、本来は4基であろう。柱の心々間距離は4.9mで、抜き取り痕はみられなかった。

竈は新旧2基の切り合いを確認した。古い竈は焚き口幅80cm、新しい竈は70cmで残存長は1.2m程度である。新しい竈は古い竈に伴う炭層の上に据部を構築している。古い竈の据は地山の土を用いて構築され、非常に堅く締まっている。層位の検討から、まず住居掘形を掘削するとき竈部分の地山をやや深く掘り下げ、竈据部の構築後に貼り床を施していることがわかった。

竈床面では旧竈床面→旧竈炭層→新竈床面→新竈炭層の順での堆積を確認できた。新しい竈に伴う炭層の上からは倒立したまま押しつぶされた状態の土師器甕6が出土した。この甕の上には焼土を多く含む層がみられ、新竈の天井部や側壁が崩落したものとみられる。また、竈の東西両脇でピットを検出した。ピットは不整形円形で東側は長径50cm、西側が60cm程度であった。内部およびその周辺には多量の炭化物が堆積しており、特に西側では住居の北側壁面にまで広がっていた。また、西側のピットは古い竈の裾を切っている。これらのピットの用途は不明であるが、竈内の炭を掻き出して入れたものであろう。ピット内に焼土はみられなかった。

壁溝は北辺でのみ確認した。竈両脇のピット付近から東西壁際まで延びている。土層の検討から、まず壁溝設置部の地山を浅く掘り、貼り床を施してからもう一度掘っていることがわかる。掘形幅は約15cm、板痕跡の厚さは10cm程度である。

本住居は5m北側にある大型の掘立柱建物6と方位をそろえていることが注意される。覆土・貼り床から土師器と須恵器の土器片が少数ながら出土しており、新竈据部から出土した須恵器杯蓋2は住居の存続時期を示唆するものである。

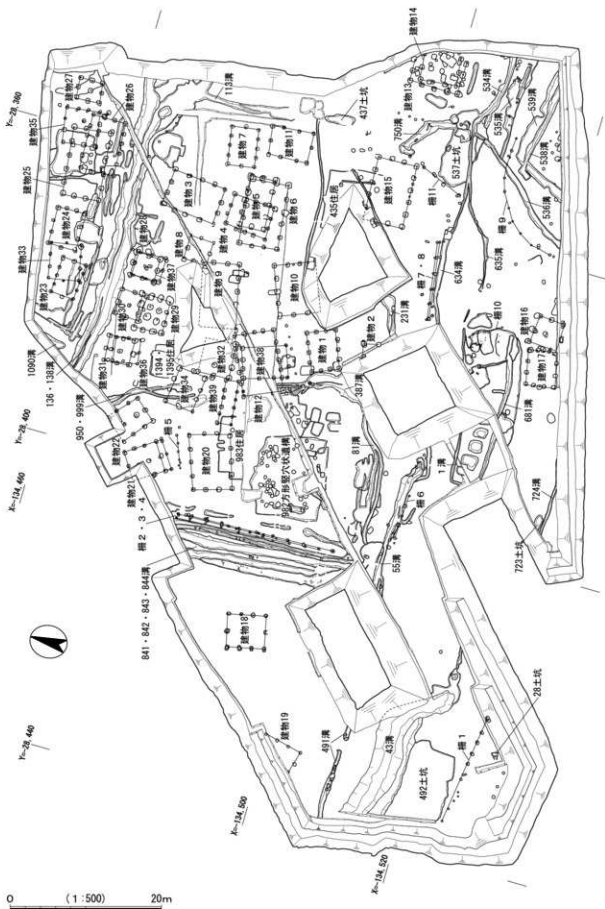
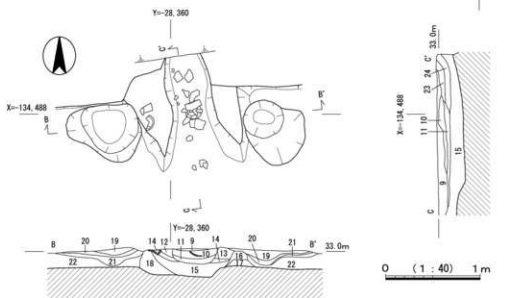
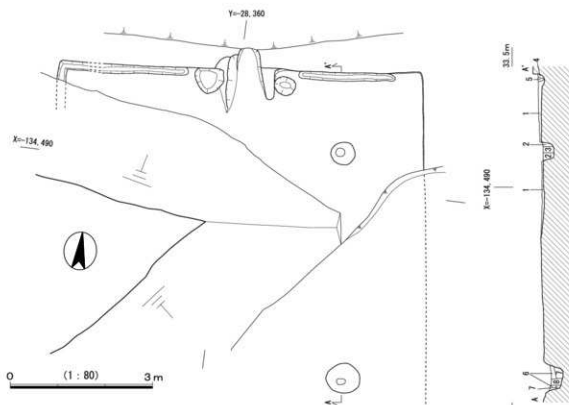
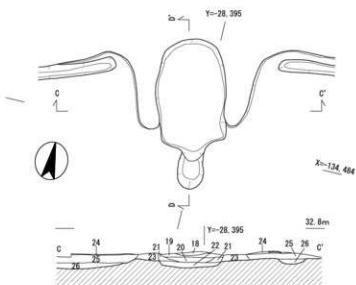
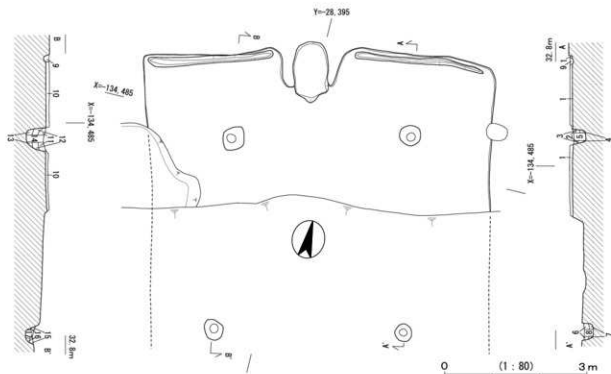


图10 古墳時代遺構配置圖



- | | | | |
|---------------------|-----------------|---------------------|----------------------|
| 1 オリーブ黒 (SY3/1) | 中粒砂を含む細粒砂 (貼り床) | 13 黒 (7. SY2/1) | 粗粒砂を含む極細砂 |
| 2 灰オリーブ (SY4/2) | 粗粒砂を含む中粒砂 | 14 黒 (NL.5/) | 極細砂 (旧段階の礎石部灰層) |
| 3 灰 (SY4/1) | 粗粒砂を含む中粒砂 (柱廻) | 15 灰オリーブ (SY4/2) | 小礫を含む粗粒砂・中粒砂 |
| 4 灰オリーブ (SY4/2) | 粗粒砂を含む細粒砂 (壁板裏) | 16 灰オリーブ (7. SY5/2) | 中粒砂を含む極細砂・シルト |
| 5 灰オリーブ (SY4/2) | 粗粒砂を含む中粒砂 | 17 黒 (7. SY2/1) | 小礫を含む極細砂 |
| 6 オリーブ黒 (10Y3/2) | 粗粒砂を含む細粒砂 | 18 灰オリーブ (7. SY4/2) | 小礫を含む細粒砂～極細砂 |
| 7 灰オリーブ (SY4/2) | 粗粒砂を含む細粒砂 | 19 灰 (10Y4/1) | 小礫を含む中粒砂 |
| 8 オリーブ黒 (SY3/2) | 粗粒砂を多含む細粒砂 (柱廻) | 20 黒 (NL.5/) | 極細砂 (灰層) |
| 9 オリーブ黒 (10Y3/1) | 粗粒砂を含む中粒砂 | 21 灰 (7. SY4/1) | 小礫を含む中粒砂 (灰化土と粘土を含む) |
| 10 黒 (7. SY8/4) | シルト・粘土 (地上層) | 22 灰オリーブ (7. SY4/2) | 中粒砂を含む極細砂 (貼り床) |
| 11 黒 (NL.5/) | 極細砂 (新段階の礎石部灰層) | 23 黒層 (SYX3/1) | 粗粒砂を含む細粒砂 (炭化物を含む) |
| 12 暗オリーブ褐 (2.3Y3/3) | 小礫を含む極細砂・シルト | 24 灰 (7. SY4/1) | 粗粒砂を含む細粒砂 (炭化物を含む) |

図11 435住居実測図



- | | | | |
|------------------|--------------------|---------------------|---------------------|
| 1 黄灰 (2.5Y4/1) | 小礫～粗粒砂を含む細粒砂 (貼り床) | 15 灰 (5Y4/1) | 極細砂を含む中粒砂 |
| 2 灰オリーブ (5Y4/2) | 小礫を含む中粒砂 | 16 黄灰 (2.5Y4/1) | 小礫～粗粒砂を含む極細砂 |
| 3 灰オリーブ (5Y4/2) | 小礫を含む粗粒砂 | 17 黄灰 (10Y8/1) | 粗粒砂を含む細～極細砂 (柱底) |
| 4 灰 (5Y4/1) | 粗粒砂を含む中粒砂 | 18 増オリーブ褐 (2.5Y3/3) | 粗粒砂を含む極細砂 |
| 5 増オリーブ (5Y4/3) | 極細砂を含む中～細粒砂 (柱底) | 19 オリーブ黒 (5Y3/1) | シルト～粘土 (粘土・炭を多く含む) |
| 6 灰 (5Y4/1) | 小礫～粗粒砂を含む細粒砂 | 20 極増黄 (7.5Y2/3) | 粗粒砂を含む細粒砂 (固い粘土層) |
| 7 黄灰 (2.5Y4/1) | 小礫～粗粒砂を含む極細砂 | 21 黒褐 (2.5Y3/2) | 小礫～粗粒砂を含む細粒砂～極細砂 |
| 8 灰 (5Y4/1) | 小礫を含む粗～中粒砂 (柱底) | 22 灰 (5Y4/1) | 極細砂～粗粒砂を含む極細砂 |
| 9 灰 (5Y4/1) | 極細砂～シルト (粘土・炭を含む) | 23 灰 (5Y4/1) | 小礫を含む極細砂 (腐植質土) |
| 10 増黄 (10Y2/3) | 小礫～粗粒砂を含む粗粒砂 (貼り床) | 24 黒褐 (2.5Y3/2) | 粗粒砂を含む細粒砂 |
| 11 灰オリーブ (5Y4/2) | 極細砂を含む細粒砂 | 25 増灰黄 (2.5Y4/2) | 極細砂～粗粒砂を含む細粒砂 (貼り床) |
| 12 灰オリーブ (5Y4/2) | 極細砂を含む中～細粒砂 | 26 増灰黄 (2.5Y4/2) | 小礫を含む極細砂 (腐植土) |
| 13 灰オリーブ (5Y4/2) | 極細砂を含む極細砂 | 27 灰オリーブ (5Y4/1) | 極細砂～粗粒砂を含む極細砂 |
| 14 灰オリーブ (5Y4/2) | 粗粒砂を含む細粒砂 (柱底) | 28 オリーブ黒 (5Y3/2) | 小礫を含む細粒砂～極細砂 (貼り床) |

図12 983住居実測図

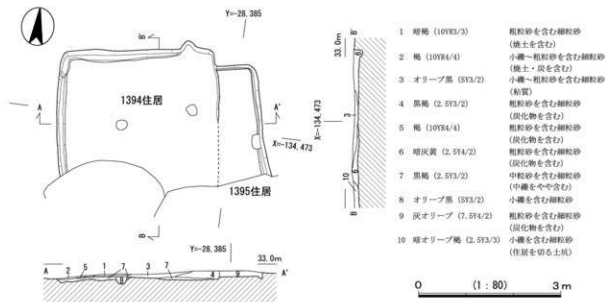


図13 1394・1395住居実測図

983住居 (図12、図版7・8-1)

1区中央のやや西側で検出した。掘立柱建物20に切られている。南半分は完全に削平されており、かろうじて柱穴を確認できる程度であった。北半分も検出面から5cm程度の深さしか残っていないかったが、貼り床、竈、壁溝を確認することができた。

住居掘形の東西長は7.3m、南北長は不明であるが、柱穴の位置から考えて7.5m程度であろう。主軸方向は $N-11^{\circ}30'-W$ である。柱穴は4基である。柱の心々間距離は約4mで、北辺のみ3.7mとやや短く、柱穴の底面は北辺が南辺のものより15cm程度深い。抜き取りの痕跡はみられなかった。

貼り床は部分的に残存していた。地山を掘った後、凹凸を整地してから貼り床を施している。層位からは竈の据座を構築した後に貼り床を施していることがわかる。

竈は現状で南北1m、焚き口部の幅は90cm程度である。削平のため煙道部分は確認できない。竈内には炭化物と焼土の混じった層が堆積し、床面は焚き口から北に40cm程度まで焼けて赤変している。焚き口の南側にはごく浅いくぼみがみられた。据座は地山に似た土で構築されているが、地山よりも堅く締まっている。

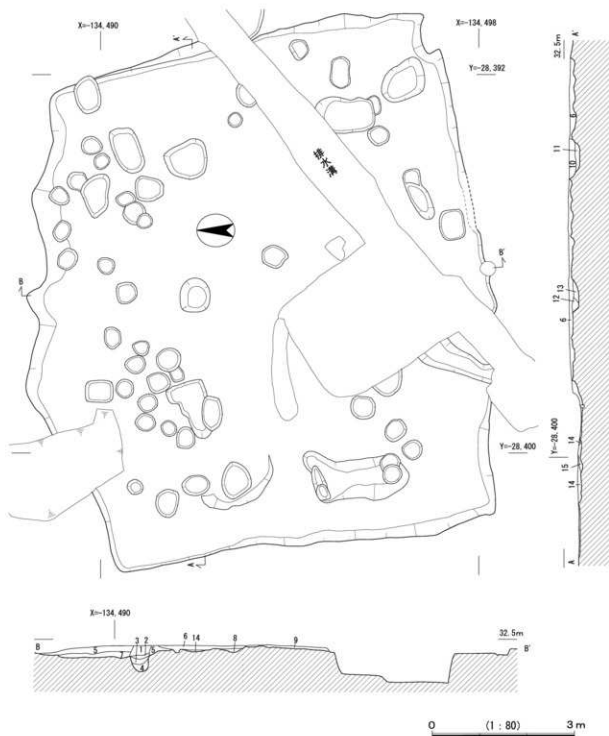
壁溝は貼り床を地山まで掘り下げるもので、北辺でのみ確認できた。溝幅20cm、板痕跡の厚さは6cm程度である。

覆土・貼り床から数点の土器片が出土した。竈周辺からも須恵器杯蓋7・杯身8が出土しているが、住居の埋土内に含まれるもので、廃絶時期を示唆する資料である。

1394・1395住居 (図13、図版8-2・3)

1区中央のやや東側で検出した小型の住居跡である。当初は1395住居が作られたが、後に位置をやや西にずらして1394住居として建て替えたことが、埋没状況の観察からわかる。

1394住居の東西幅は3.4mと小規模で、南北幅は攪乱と調査区外のため不明であるが、正方形に近いプランであったと考えられる。主軸方向は $N-8^{\circ}30'-W$ である。旧段階の1395住居の規模はまったく不明だが、おそらく1394住居と同規模程度で、東壁の傾きから主軸方向は1394住居よりも若干西に振れるであろう。



- | | | | |
|--------------------|------------------------|--------------------|----------------------------|
| 1 暗オリーブ層 (2.5Y3/3) | 小礫・粗粒砂を含む細粒砂 (炭化物を含む) | 9 オリーブ層 (2.5Y4/4) | 粗粒砂を含む細粒砂 |
| 2 黒層 (2.5Y3/2) | 小礫・粗粒砂を含む細粒砂 (炭化物を含む) | 10 黒層 (2.5Y2/1) | 粗粒砂を含む細粒砂 (地山土を含む) |
| 3 オリーブ黒 (5Y3/1) | 粗粒砂を含む細粒砂 | 11 黒層 (2.5Y3/1) | 粗粒砂を含む細粒砂 (炭化物と地山土を含む) |
| 4 灰 (5Y4/1) | 粗粒砂を含む中粒砂 | 12 増灰黄 (2.5Y4/2) | 粗粒砂を含む極細砂 (地山土をブロック状に少量含む) |
| 5 黒層 (2.5Y3/3) | 小礫・粗粒砂を含む細粒砂 (炭化物を含む) | 13 オリーブ層 (2.5Y4/3) | 粗粒砂を含む細粒砂 (地山土を少量含む) |
| 6 黒層 (10Y3/2) | 粗粒砂を含む細粒砂 (炭化物と地山土を含む) | 14 増灰黄 (2.5Y4/2) | 粗粒砂を含む中粒砂 |
| 7 暗オリーブ層 (2.5Y3/3) | 小礫・粗粒砂を含む細粒砂 (炭化物を含む) | 15 黒層 (2.5Y3/2) | 粗粒砂を含む細粒砂 (地山土を多量に含む) |
| 8 オリーブ層 (2.5Y4/3) | 小礫・粗粒砂を含む中粒砂 | | |

図14 982方形竪穴状遺構実測図

両住居ともに床面には柱穴は認められず、貼り床痕跡も確認できない。ただ、壁溝と考えられる幅20cmほどの溝を、1394住居の北壁および西壁と1395住居の北壁および東壁で検出した。覆土からは須恵器杯片や土師器甍片が少数出土したが、時期を明確に示す遺物は出土していない。

982方形竪穴状遺構（図14、図版8-1・4）

1区983住居の南で検出した方形を呈する竪穴状の落ち込み遺構である。東西最大幅は約11m、南北最大幅は約10mで、10~30cmほどの浅い窪み状になっている。主軸方向はN-10°30'-Wである。底部は中央がやや高くなっており、その周辺に不整形を呈する土坑状の落ち込みが多数巡っていた。埋土から須恵器杯蓋9・短頸壺11が、覆土を切り込んだ落ち込みから須恵器高杯10の杯部が口縁を伏せた状態で出土しているが、出土遺物は全体に極めて少なく、遺構の性格も明らかでない。

2 掘立柱建物

今回の調査で掘立柱建物は39棟検出した。大半の建物が調査区東半に集中しており、柱穴の切り合いが数箇所認められる。また、建物の振れの共通性が同時期に共存した建物群の一つの根拠となるため、東西棟・南北棟ともに北に対する建物の東西への振れを主軸方向の振れとして示しておく。なお、建物柱穴断面実測図の土層観察については、後に一括して観察表を掲載している（表3）。

建物1（図15上、図版11-2）

2区中央部東寄り検出した東西4間、南北3間の東西棟建物である。桁行の長さは5.1mで、梁行の長さが西側柱で3.9mなのに対し、東側柱は約4mと若干長くなっている。床面積は20.1㎡である。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形を呈し、検出面での規模は一辺40~60cm、深さは20~40cmである。柱痕の直径は約20cmで、373~375・377・378柱穴には柱材が残存していた。主軸方向の振れはN-22°-Wと大きく西に振っている。

建物2（図15下、図版3-3）

2区南東突出部で検出した建物である。大半は南西調査区外に展開しており、北東隅柱を含む3基の柱穴を検出するとどまる。柱穴の平面形は丸みを帯びた隅丸方形で、検出面での規模は60~70cm、深さは50~60cmである。柱痕の直径は約20cmで、北東隅柱21柱穴では長径90cmほどの古い柱穴痕跡が残っており、建て替えが行なわれた可能性がある。主軸方向の振れはN-16°-Wである。

建物3（図16、図版10-1）

2区東部で検出した南北4間、東西3間の南北棟建物である。桁行の長さが7.2m、梁行の長さが4.8mで、床面積は34.6㎡となる。

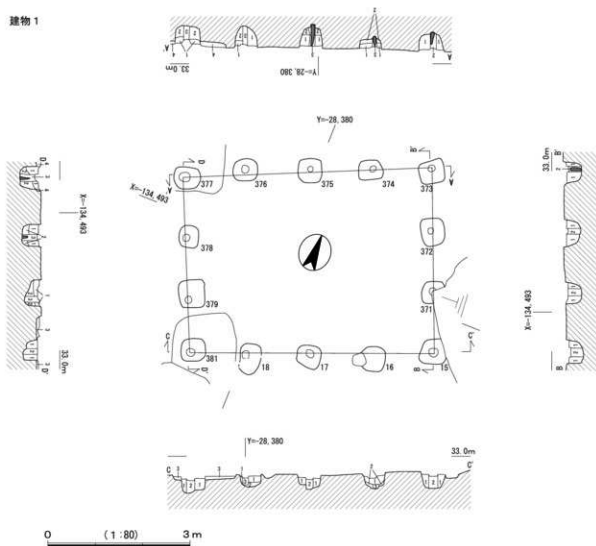
柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形を呈し、規模は一辺50~60cm、深さは30~70cmとばらつきがある。柱痕の直径は約20cmで、270・271・276・277柱穴など、柱掘形の端に柱材を立て掛けて固定した柱穴が認められる。273・1256柱穴には柱材が残存していた。主軸方向の振れはN-6°-Eである。

建物4（図17、図版9-1・3・図版10-1）

2区東部で検出した南北4間、東西3間の南北棟建物である。桁行の長さが西側柱で5.7m、東側柱で5.6m、梁行の長さが北側柱で4.0m、南側柱で4.4mと、平面プランはいびつな長方形になっている。床面積は23.8㎡である。

柱穴の平面形は丸みを帯びた隅丸方形で、検出面での規模は40~70cm、深さは20~50cmとばらつきが強い。柱痕の直径は約20cmで、213・218柱穴では柱掘形の端に柱材を立て掛けて、207・210柱穴では掘形を段掘りして柱材を落とし込んで柱を固定している。213柱穴は後述する建物5の柱穴を切っている。

建物 1



建物 2

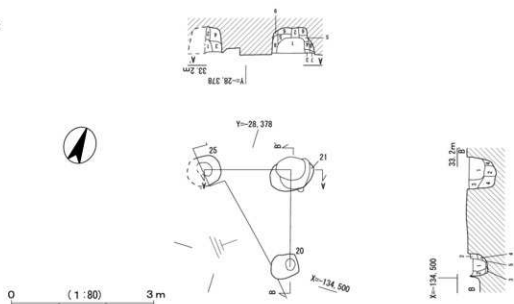


図15 建物 1・2 実測図

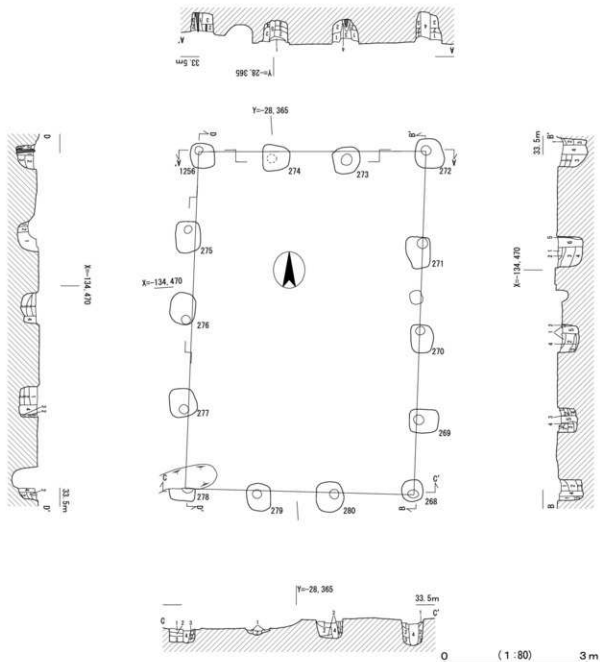


図16 建物3実測図

主軸方向の振れは $N-5^{\circ}-E$ で、建物3と東側柱の柱筋を揃えている。

建物5 (図18上、図版9-1~3・図版10-1)

2区東部で検出した東西4間、南北2間の東西棟建物である。桁行の長さが6.8m、梁行の長さが西側柱で3.6m、東側柱で3.4mとなっている。床面積は23.8 m^2 である。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形を呈し、検出面での規模は一辺50~70cm、深さは30~60cmとばらつきがある。柱痕の直径は約20cmで、178・179・182・183・184・187柱穴では柱掘形の端に柱材を立て掛けて固定している。また、186柱穴などは掘形段掘りで柱材を落とし込む事例であろう。

ほとんどの柱穴に柱材が残存しており、178・179・188・189柱穴は建物6の柱穴を切っている。主軸方向の振れは $N-1^{\circ}30'-W$ である。

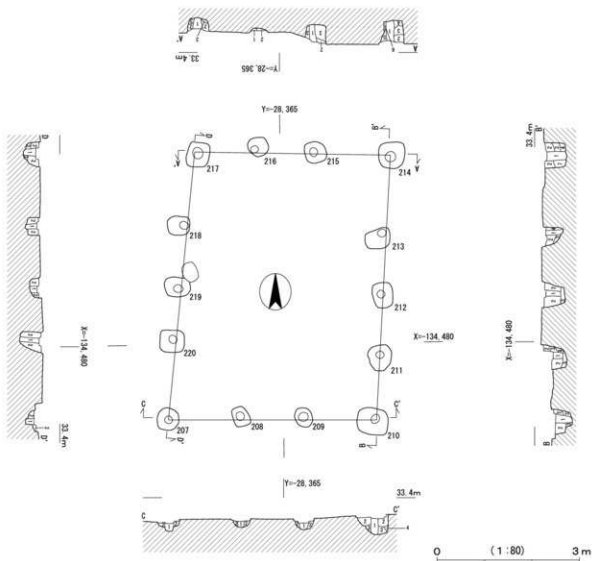


図17 建物4実測図

建物6 (図18下、図版9-1・図版10-1)

2区東部で検出した東西5間、南北3間の東西棟建物である。桁行の長さが北側柱で8.6m、南側柱で8.5m、梁行の長さが西側柱で5.3m、東側柱で5.2mとなっている。床面積は44.9㎡である。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形を呈し、検出面での規模は一辺50~100cm、深さは30~40cmで、柱痕の直径は約20cmである。主軸方向の振れは $N-5^{\circ}30'-W$ である。

建物7 (図19上、図版11-1・3)

2区東端部で検出した東西4間、南北2間の東西棟建物である。桁行の長さが5.1m、梁行の長さが3.6mで、床面積は18.4㎡である。

柱穴の平面形は丸みを帯びた隅丸方形で、検出面での規模は40~50cm、深さは30~40cmである。柱痕の直径は約20cmで、柱が沈んでいるものが多く、155柱穴では須恵器甕腹片を礎板として据えていた。主軸方向の振れは $N-8^{\circ}-W$ である。

建物8 (図19下)

1・2区東部で検出した東西2間、南北2間の総柱建物である。東西の長さは3.3m、南北の長さ3.1mで、床面積は10.2㎡である。

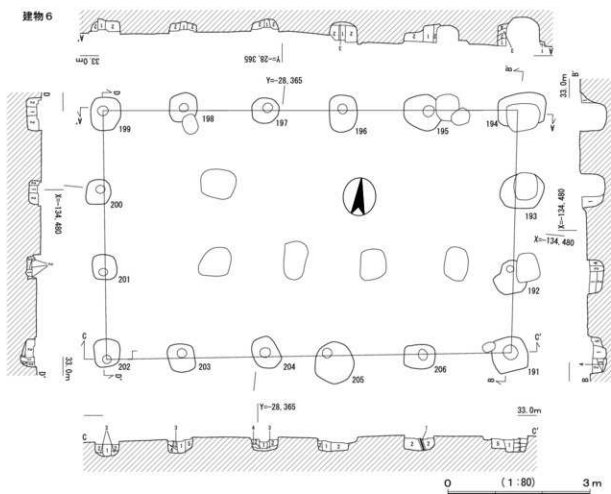
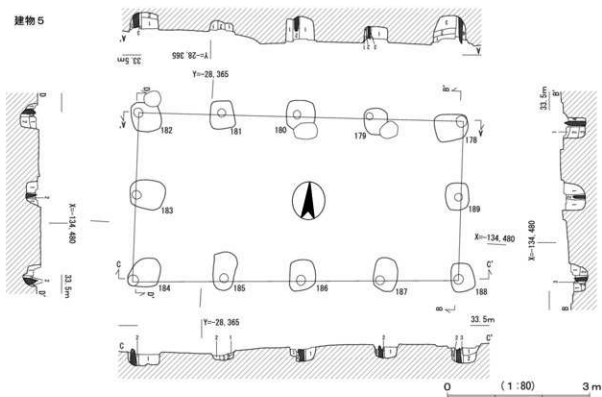
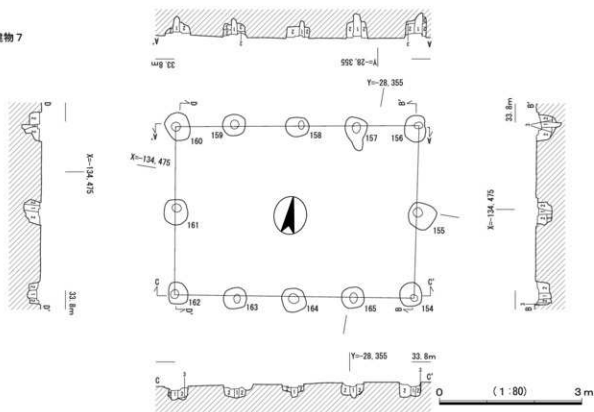


图18 建物 5・6 実測図

建物 7



建物 8

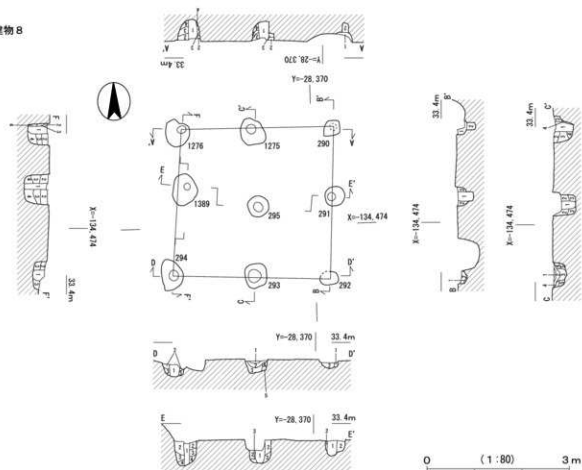
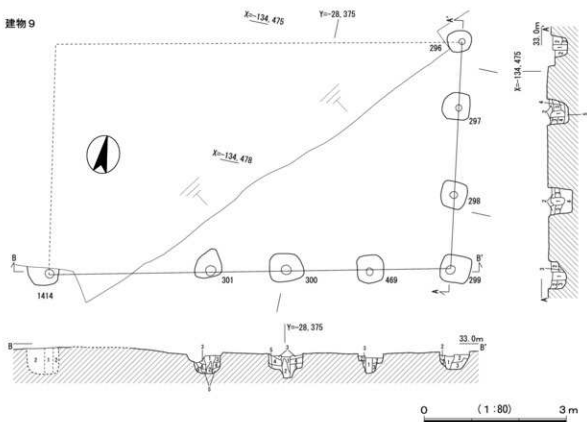


図19 建物 7・8 実測図

建物9



建物10

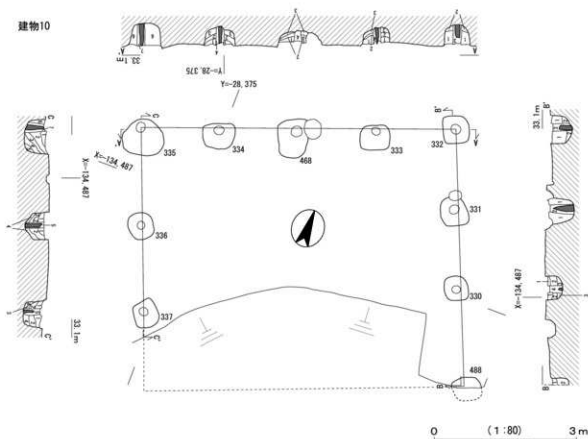


图20 建物9・10実測図

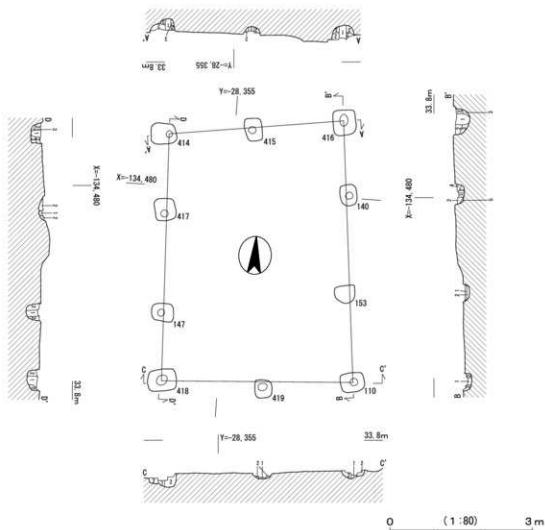


図21 建物11実測図

柱穴の平面形は丸みを帯びた隅丸方形で、検出面での規模は30～60cm、深さは20～50cmとばらついている。柱痕の直径は約20cmで、北西隅柱である1276柱穴は柱掘形の端に柱材を立て掛けて固定し、1275柱穴は掘形段掘りて柱を落とし込む。主軸方向の振れは $N-3^{\circ}30'-E$ である。

建物9 (図20上)

2区中央部東寄りて検出した東西5間、南北3間と推測できる東西棟建物である。南側柱と東側柱のみの検出であり、北側柱と西側柱は調査区外に展開する。桁行の長さが8.4m、梁行の長さが4.8mで、推定床面積は40.3㎡である。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形を呈し、検出面での規模は一辺50～70cm、深さは30～50cmとなっている。柱痕の直径は約20cmで、299・300・469柱穴は掘形段掘りて柱を落とし込んで固定したと考えられる。主軸方向の振れは $N-9^{\circ}30'-W$ である。

なお、南西隅柱1414柱穴は遺跡保存地区に入るため、断ち割り調査は行わず平面プランの確認にとどめている。

建物10 (図20下、図版10-2)

2区中央部東寄りて検出した東西4間、南北3間以上の建物である。南側柱は調査区外となるため南北柱間は確定できないが、北側柱間に比べて東西側柱間は広く梁間となる可能性が高いため、南北3間

の東西棟建物に復元するのが妥当であろう。東西桁行の長さは6.6m、南北梁行が3間とするならば長さ5.5mである。この時、推定床面積は36.3㎡である。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形を呈し、検出面での規模は一辺50~80cm、深さは40~60cmとなっている。柱痕の直径は約20cmで、333・334・335柱穴は柱掘形の端に柱を立て掛けて固定している。なお、330~337柱穴には柱材が残存していた。主軸方向の振れはN-21°-Wと大きく西に振っている。

建物11 (図21、図版9-4)

2区東端部で検出した南北3間、東西2間の南北棟建物である。桁行の長さが西側柱で5.2m、東側柱で5.5m、梁行の長さが北側柱で3.7m、南側柱で4.1mと、平面形は歪んだ長方形になっている。床面積は20.8㎡である。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形を呈し、検出面での規模は40~60cm、深さは20~40cmで、柱痕の直径は15~20cmとなる。主軸方向の振れはN-4°-Wである。

建物12 (図22、図版11-2・4)

1・2区中央部東寄り検出した東西棟建物である。桁行の南側柱は6間なのに対し、北側柱は5間と異なっている。ただ、東西端柱間を広く取る構造は共通する。梁行は西側柱が削平のためほとんど残されていないが、東側柱で4間を確認している。桁行の長さが8.1m、梁行の長さが5.3mで、推定床面積は42.9㎡である。

柱穴の平面形は丸みを帯びた隅丸方形で、検出面での規模は一辺40~60cm、深さは10~50cmとばらつ

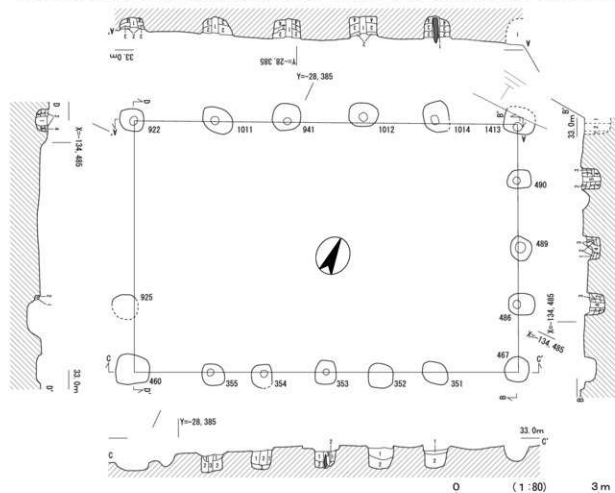


図22 建物12実測図

いている。柱痕の直径は15~20cmで、353・1014柱穴には柱材が残存していた。また、南西隅柱460柱穴は387溝の下層で検出しており、1014柱穴は後述する建物32南東隅柱に切られていることから、最古段階の建物であることがわかる。主軸方向の振れは $N-24^{\circ}-W$ で、西に大きく振っている。

なお、北東隅柱1413柱穴は遺跡保存地区に入るため、断ち割り調査は行わず平面形の確認にとどめている。

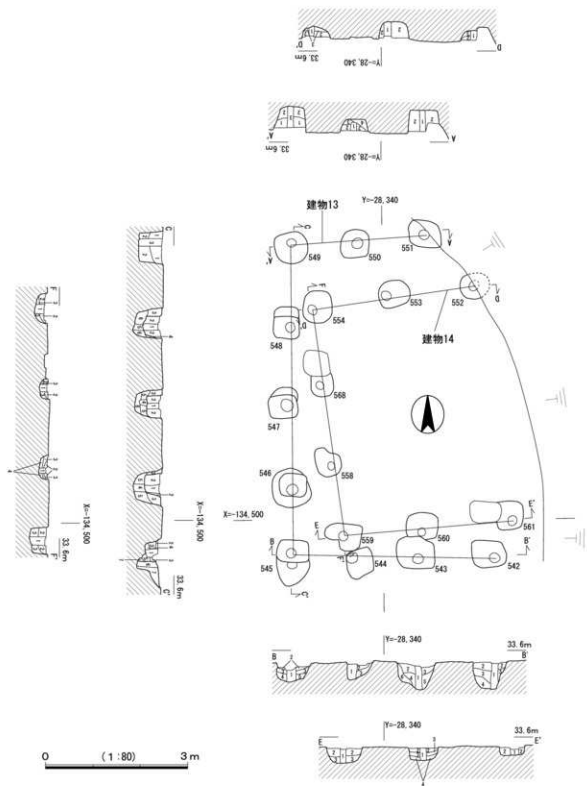


図23 建物13・14実測図

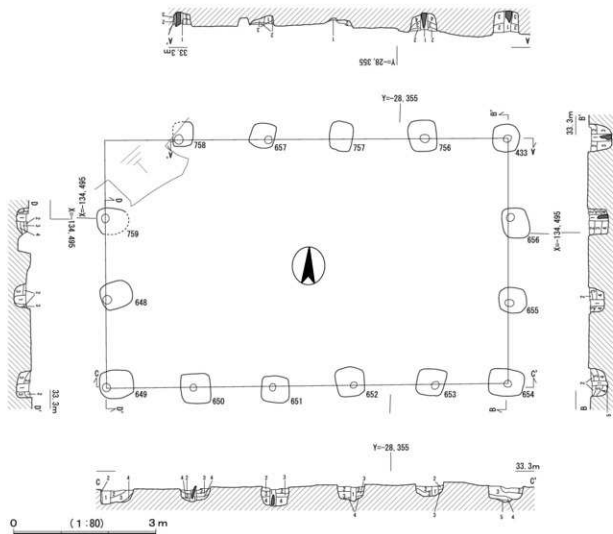


図24 建物15実測図

建物13 (図23、図版12-1)

4区東端部で検出した東西4間以上、南北4間の建物である。東半は調査区外に展開するが、南北柱間が東西柱間よりも広く梁行になる可能性が高いため、東西棟と考えるのが妥当であろう。この推測が正しければ、桁行の長さが南側柱で6m以上、梁行の長さが西側柱で6.6mとなり、東西棟であるならば今回の調査で検出した建物の中で最大級の建物の一つとなる。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形を呈し、検出面での規模は50~80cm、深さは30~70cmで、柱痕の直径は約20cmとなる。西側柱の545~548柱穴で、掘形を掘り直した建て替えの痕跡が認められる。また、542・544・546(新)柱穴は柱掘形の端に柱材を立て掛けて固定し、543・545(旧)柱穴は掘形段掘りで柱を落とし込んで固定する。主軸方向の振れは $N-0^{\circ}30'-E$ と、ほぼ真北である。

建物14 (図23、図版12-1)

4区東端部で建物13と同様に検出した東西3間以上、南北3間の建物である。東半は調査区外に展開するが、建物13と同様に東西棟と考えるのが妥当であろう。この推測が正しければ、桁行の長さが南側柱で4.5m以上、梁行の長さが西側柱で4.9mとなる。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形を呈し、検出面での規模は50~70cm、深さは20~40cmで、柱痕の直径は15~20cmとなる。主軸方向の振れは $N-7^{\circ}-W$ である。

建物15 (図24、図版12-2~4)

4区北端部で検出した東西5間、南北3間の東西棟建物である。北西隅柱のみが調査区外で検出できているが、桁行の長さが8.4m、梁行の長さが5.2mで、床面積は43.7㎡である。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形を呈し、検出面での規模は一辺50~70cm、深さは20~50cmとばらつきがある。柱痕の直径は約20cmで、648・649・657・758柱穴では柱掘形の端に柱材を立て掛けて固定している。また、433・650・651・656・756・758柱穴では柱材が残存していた。なお、柱穴は435住居の貼床土を切って成立している。主軸方向の振れは $N-1^{\circ}30'-W$ である。

建物16 (図25上、図版13-4)

5区中央部南端で検出した東西2間、南北2間の総柱建物である。平面で検出した柱痕の痕跡は断面観察では明瞭に確認できなかったが、東西の長さは北側柱で3.8m、南側柱で3.9m、南北の長さは西側柱で3.7m、東側柱で3.3mとやや歪んでいる。床面積は13.5㎡ほどである。

柱穴の平面形は丸みを帯びた隅丸方形で、検出面での規模は40~70cm、深さは15~40cmとばらつきが強い。柱痕の直径は確認できた北東隅柱687柱穴をみると約15cmで、掘形段掘りで柱を落とし込んで固定する。位置的関係から690・693柱穴を切るピットは、建て替えに伴って掘り直された柱穴の可能性もある。主軸方向の振れは $N-10^{\circ}-E$ である。

建物17 (図25下、図版13-1~3)

5区中央部南端で検出した東西3間、南北4間の東西棟建物である。桁行の長さは北側柱で4.6m、南側柱で4.7m、梁行の長さは4.0mで、床面積は18.6㎡である。梁間中央柱である712・713柱穴は、他の柱穴よりも若干掘形が大きく深いことから、構造的に棟持ち柱と考えられる。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形を呈しており、712・713柱穴は一辺60cmで深さ60cm、他の柱穴は一辺40~60cm、深さは40~50cmとなる。柱痕の直径は15~20cmで、柱掘形の端に柱材を立て掛けて固定している柱穴が多い。とくに、712・713柱穴は共に柱掘形の内側に柱を寄せて固定し、棟持ちの強度を保っているようである。また、703・706・713・827柱穴では柱材が残存していた。主軸方向の振れは $N-10^{\circ}30'-W$ である。

建物18 (図26上、図版14-2・4)

1区西半部、844溝の西側で検出した南北3間、東西2間の南北棟建物である。桁行の長さが5.1m、梁行の長さが4.3mで、床面積は21.9㎡である。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形を呈し、検出面での規模は40~60cm、深さは10~30cmで、柱痕の直径は約15cmである。西側柱の柱穴と820柱穴で、掘形を掘り直した建て替えの痕跡が認められる。また、818柱穴には根石が掘形底部に据えられていた。主軸方向の振れは $N-13^{\circ}-W$ である。

建物19 (図26下)

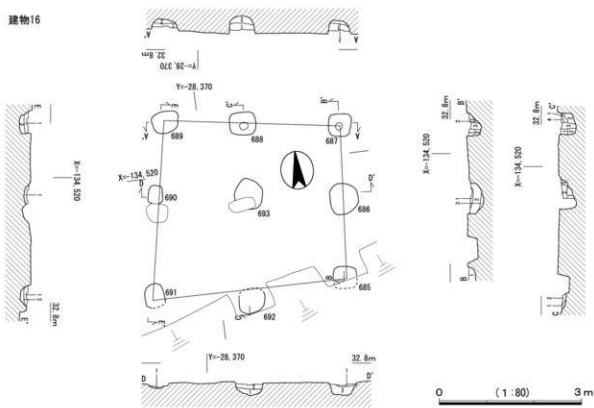
1区南西端部で検出した建物である。大半は北西調査区外に展開しており、南東隅柱を含む南側柱2間分と東側柱3間分を検出したにとどまる。

柱穴の平面形は円形で、検出面での規模は25~40cm、深さは20~30cmである。柱痕の直径は約10cmで、494・495柱穴で柱材が残存していた。主軸方向の振れは $N-12^{\circ}30'-E$ である。

建物20 (図27、図版14-1・3・図版15-1)

4区北端部で検出した東西4間、南北3間の東西棟建物である。桁行の長さは7.2mであるが、梁行の長さは西側柱で5.2m、東側柱で5.5mでやや歪んでいる。床面積は38.5㎡である。

建物16



建物17

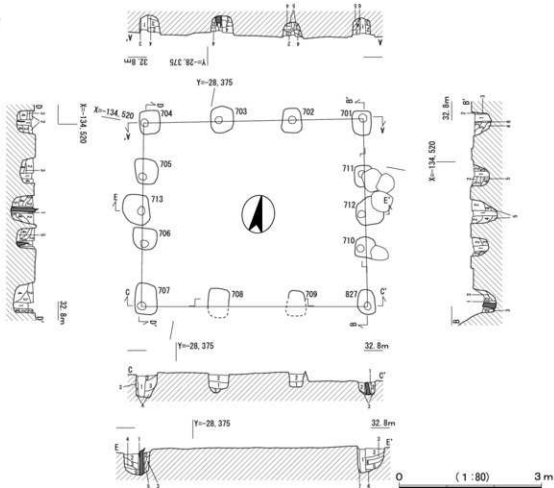
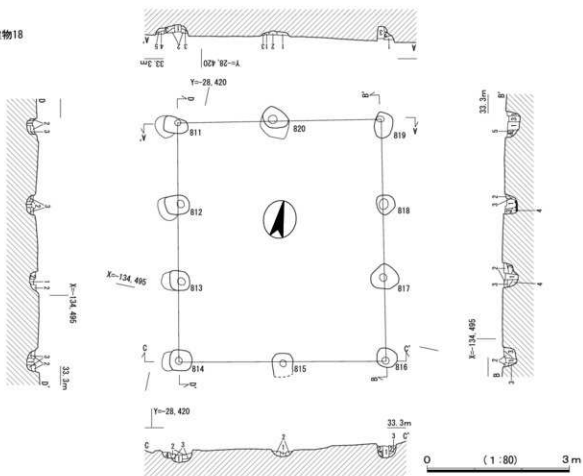


图25 建物16・17実測图

建物18



建物19

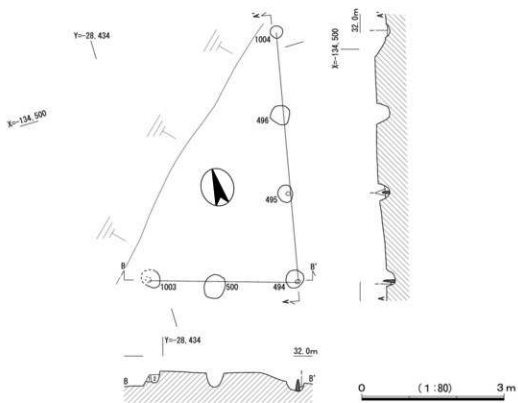


図26 建物18・19実測図

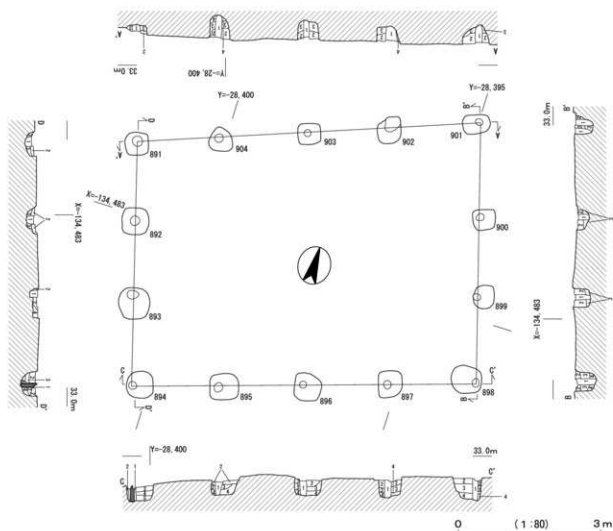


図27 建物20実測図

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形を呈し、検出面での規模は一辺50～60cm、深さは20～50cmである。柱痕の直径は15～20cmで、893・894・898・899・901柱穴では柱掘形の端に柱材を立て掛けて固定している。また、894柱穴では柱材が残存していた。主軸方向の振れは $N-16^{\circ}30' - W$ で、983住居の埋土を切って建てられている。

建物21 (図28、図版15-2)

1区中央部北端で検出した2間×3間の総柱建物で、建物西隅部は調査区外に展開する。南側柱のさらに南80cmの位置に小柱穴(959・972・973・974・975柱穴)を伴っているが、他の柱穴と比べて小さく柱間も極端に短いことから、建物に付属する縁柱と考えられる。この縁柱には2時期の作り替えが想定でき、当初は規模の小さい959・973・974柱穴で構成していたが、後にしっかりとした972・975柱穴に変えられたようである。建物規模をみると、東西の長さは4.0m、南北の長さは南側柱まで4.4m、小柱穴まで入れて5.2mで、南北に長い方形を呈している。床面積は建物本体部分で17.6㎡、縁まで含めると20.8㎡となる。

本体柱穴の平面形は隅丸方形で、検出面での規模は50～60cm、深さは30～40cmである。柱痕の直径は15～20cmで、963・971柱穴では柱掘形の端に柱材を立て掛けて、961・968柱穴では掘形段掘りで柱を落とし込んで固定している。また、縁柱は当初の柱穴が直径20～30cmの円形で深さも10cmと浅いのに対

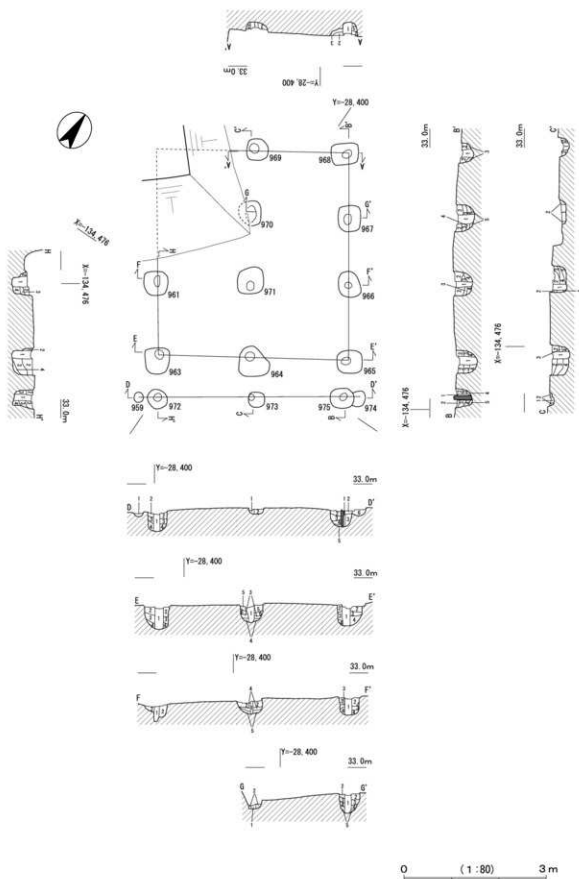


图28 建物21実測図

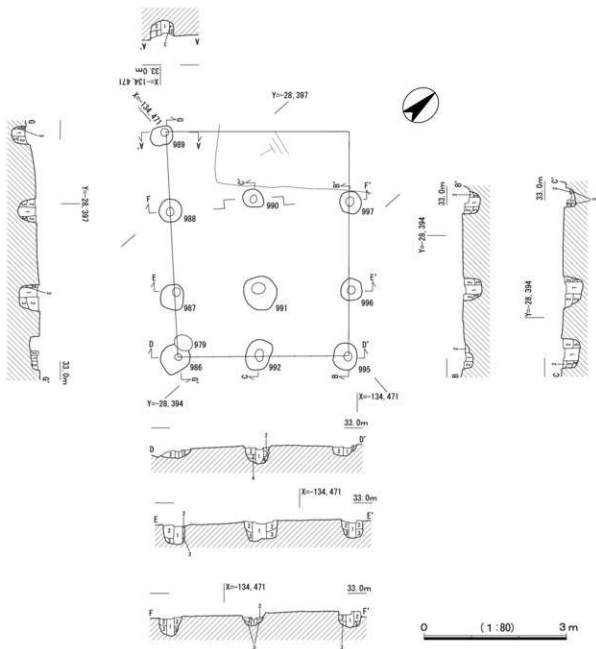


図29 建物22実測図

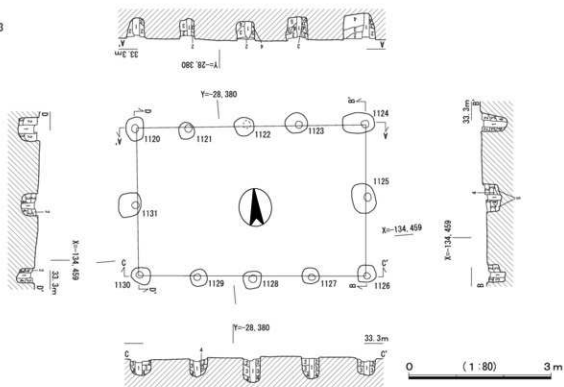
し、造り替え後の972・975柱穴は平面規模が40～50cm、深さ40cmと建物本体の柱穴と比べても遜色がない。とくに、975柱穴では柱材が良好に残存していた。主軸方向の振れは $N-33^{\circ}-W$ で、西に大きく振っている。

建物22 (図29、図版15-3)

1区中央部北端で検出した2間×3間の総柱建物で、建物北隅部は調査区外に展開する。建物規模は2間の北西側柱で推定3.9m、南東側柱で3.6m、3間の南西側柱で4.8mと、やや歪んだ長方形に想定できる。床面積は推定18㎡ほどである。

柱穴の平面形は円形に近く、検出面での規模は40～70cm、深さは20～40cm、柱痕の直径も15～25cmとばらつきがある。隣接する建物21と同様に長軸を主軸とすると、建物の振れは $N-50^{\circ}-W$ で、西に大きく振っていることになる。

建物23



建物24

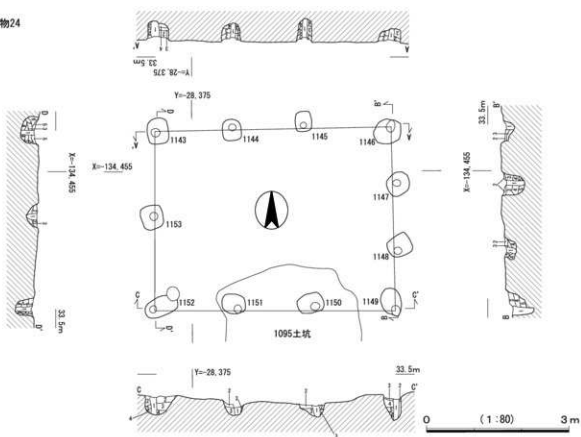


图30 建物23・24实测图

建物23 (図30上、図版19-1・2)

1区東部、136・138溝の北側で検出した東西4間、南北2間の東西棟建物である。桁行の長さは4.8m、梁行の長さは3.2mで、床面積は15.4㎡である。

柱穴の平面形は丸みを帯びた隅丸方形で、検出面での規模は一辺30～70cm、深さは30～60cmとややばらついている。柱痕の直径は約15cmで、1121・1124柱穴などでは柱掘形の端に柱材を立て掛けて、1126柱穴では掘形段掘りで柱を落とし込んで固定している。主軸方向の振れは $N-4^{\circ}-E$ である。

建物24 (図30下、図版18-2)

1区東部、136・138溝の北側で検出した東西棟建物である。桁行の柱間は3間で、梁行の西側柱は2間であるが、東側柱は3間と異なっている。規模も北側柱は5.0m、南側柱は5.1m、西側柱は3.8m、東側柱は3.9mとやや歪んだ長方形を呈する。床面積は19.4㎡である。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形で、検出面での規模は一辺40～60cm、深さは30～60cmとややばらついている。柱痕の直径は15～20cmで、1146・1149・1150・1151柱穴などは柱掘形の端に柱材を立て掛けて固定している。主軸方向の振れは、ほぼ真北である。なお、南側柱の1150・1151柱穴は1095土坑を完掘後に検出した。

建物25 (図31上、図版18-1・図版19-3・4)

1区東端部、136・138溝の北側で検出した東西5間、南北3間の東西棟建物である。桁行の長さは9.1m、梁行の長さは5.0mで、床面積は45.5㎡である。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形で、検出面での規模は一辺50～70cm、深さは30～70cmとややばらついている。柱痕の直径は15～20cmで、1184・1187柱穴は柱掘形の端に柱材を立て掛けて、1174・1176柱穴は掘形段掘りで柱を落とし込んで固定している。また、1175・1179・1181・1186・1190柱穴では柱材が良好に残存していた。主軸方向の振れは $N-6^{\circ}-W$ である。なお、1419柱穴は後述する建物26の1188柱穴に切られていた。

建物26 (図31下、図版18-1)

1区東端部、136・138溝の北側で検出した東西5間、南北3間の東西棟建物である。桁行の長さは7.2m、梁行の長さは4.6mで、床面積は33.1㎡である。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形で、検出面での規模は一辺40～60cm、深さは20～40cmとなる。柱痕の直径は約15cmで、1249・1251柱穴は柱掘形の端に柱材を立て掛けて、1198・1207柱穴は掘形段掘りで柱を落とし込んで固定している。また、柱が沈んでいる柱穴が多く認められる。建物25・35の柱穴を切って建てられている。主軸方向の振れは $N-1^{\circ}-W$ である。

建物27 (図32上、図版18-1)

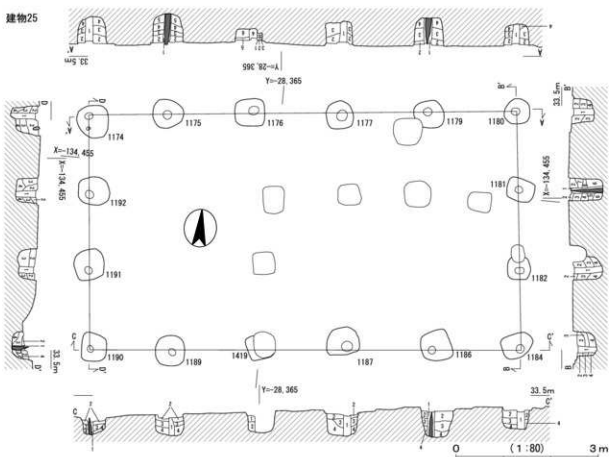
1区東端部、136・138溝の北側で検出した東西2間、南北2間の総柱建物である。東西の長さは北側柱で2.8m、南側柱で2.6m、南北の長さは西側柱で3.3m、東側柱で3.1mと、歪んだ方形を呈する。床面積は8.4㎡である。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形で、検出面での規模は一辺50～70cm、深さは20～30cm、柱痕の直径は約20cmである。主軸方向の振れは $N-2^{\circ}-W$ である。

建物28 (図33、図版16-2・図版17-3)

1区東部、136・138溝の南側で検出した東西2間、南北2間の総柱建物である。東西の長さは3.3m、南北の長さは4.1mで、床面積は13.5㎡である。

建物25



建物26

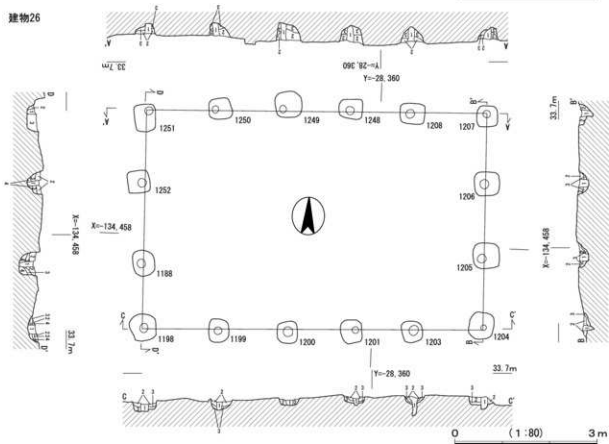
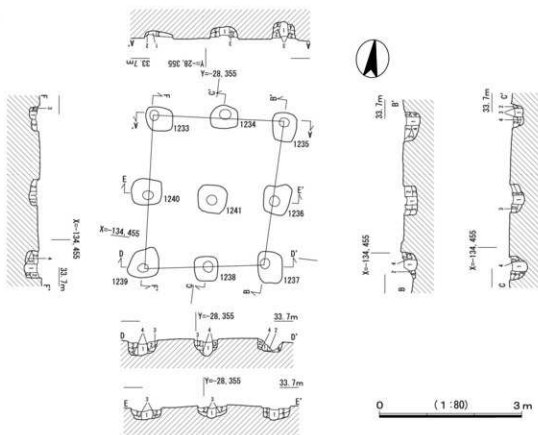


图31 建物25・26实测图

建物 27



建物 35

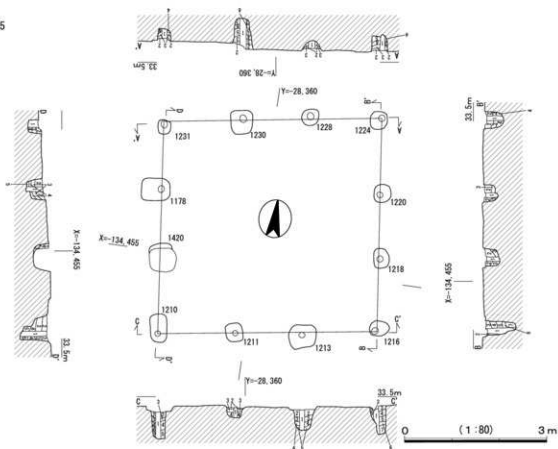


図32 建物27・35実測図

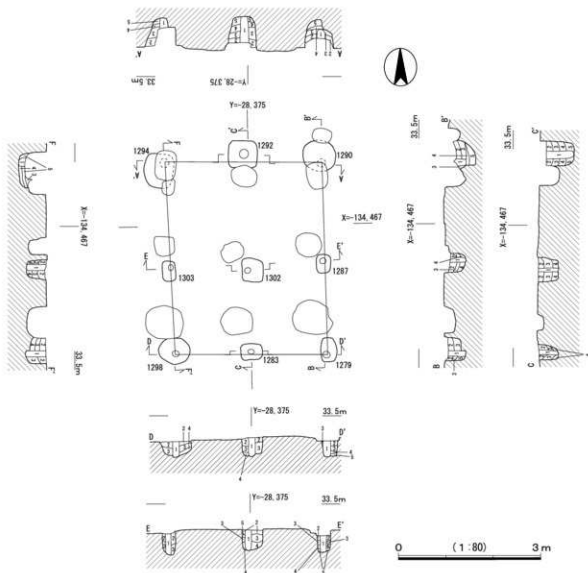


図33 建物28実測図

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方で、検出面での規模は一辺30～70cm、深さは50～70cmと深い。柱痕の直径は10～15cmで、1279・1298柱穴では掘形段掘りで柱を落とし込んで固定している。1290柱穴も掘形段掘りを行なっているが、柱材の長さが合わず段部を埋めてから柱を立てたようである。なお、北側柱すべてと1298柱穴が建物37の柱穴に切られている。主軸方向の振れは $N-1^{\circ}-W$ である。

建物29 (図34、図版17-1・2)

1区東部、136・138溝の南側で検出した東西3間、南北3間の総柱建物である。東西の長さは北側柱で4.6m、南側柱で4.4m、南北の長さは西側柱で3.8m、東側柱で3.6mと、歪んだ方形を呈する。床面積は16.2㎡である。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方で、検出面での規模は一辺50～100cm、深さは30～70cmと規模が大きい。柱痕の直径は約15cmで、掘形に比較して柱が細い。1325・1326柱穴は柱掘形の端に柱材を立て掛けて、1328・1334・1335柱穴では掘形段掘りで柱を落とし込んで固定している。なお、1325・1326・1336柱穴は後述する建物30の1315・1316柱穴に切られている。主軸方向の振れは $N-2^{\circ}-E$ である。

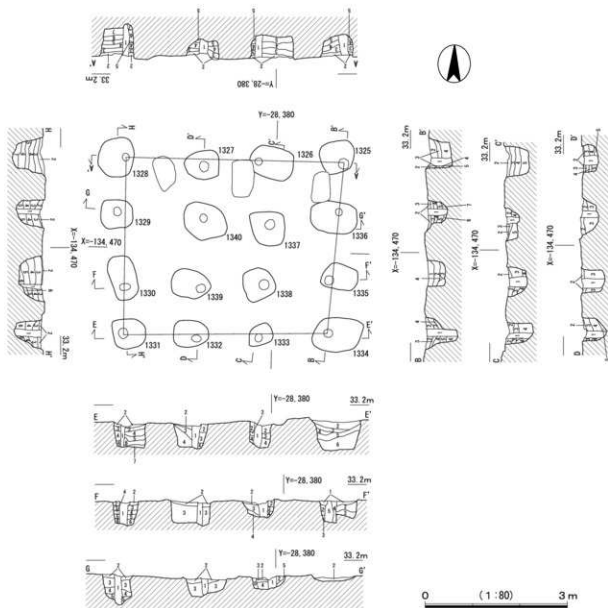


図34 建物29実測図

建物30 (図35)

1区東部、136・138溝の南側で検出した東西2間、南北2間の総柱建物である。東西の長さは3.4m、南北の長さも3.4mと、ほぼ正方形を呈する。床面積は11.6㎡である。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形で、検出面での規模は一辺40～80cm、深さは50～80cmと深い。柱痕の直径は15～20cmで、1319・1320・1322柱穴は掘形の端に柱材を立て掛けて、1314柱穴は掘形段掘りで柱を落とし込んで固定している。主軸方向の振れは $N-3^{\circ}-E$ である。

建物31 (図36、図版16-1)

1区東部、136・138溝の南側で検出した東西2間、南北2間の総柱建物である。東西の長さは3.4m、南北の長さも3.3mと、ほぼ正方形を呈する。床面積は11.2㎡である。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形で、検出面での規模は一辺50～70cm、深さは40～50cmとなる。柱痕の直径は15～20cmで、1360・1364柱穴は柱掘形の内側端に柱材を立て掛けて柱を固定している。主軸方向の振れは、ほぼ真北である。

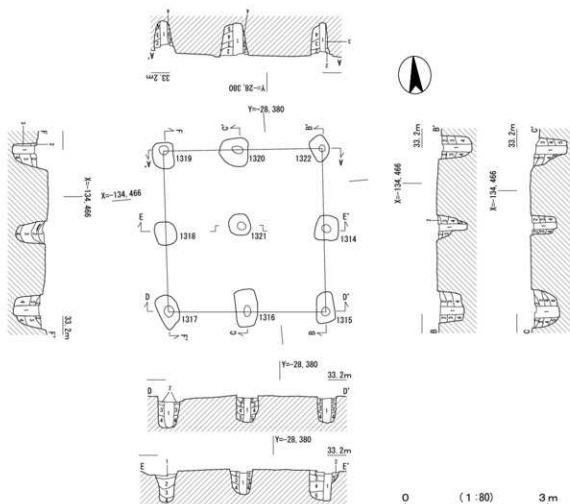


図35 建物30実測図

建物32 (図37、図版17-4)

1区中央部東寄りで見出した東西3間、南北2間の総柱建物で、建物の北東半は調査区外に展開する。東西の長さは南側柱で4.6m、南北の長さは西側柱で約4.2m、推定床面積は19.3㎡である。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形で、検出面での規模は一辺50~70cm、深さは20~50cmとなる。柱痕の直径は15~25cmで、939・940柱穴は柱掘形の端に柱材を立て掛けて柱を固定している。また、西側中央柱である1035柱穴は、柱筋からやや西外側に位置しており、棟持ち柱である可能性が高い。主軸方向の振れは $N-4^{\circ}-W$ である。

なお、南東隅柱1412柱穴は遺跡保存地区に入るため、断ち割り調査は行わず平面プランの確認にとどめている。

建物33 (図38上、図版19-2)

1区東部、136・138溝の北側で見出した東西3間、南北2間の東西棟建物である。桁行の長さは北側柱で4.7m、南側柱で4.6m、梁行の長さは西側柱で4.1m、東側柱で4.0mと、やや歪んだ長方形を呈する。床面積は18.9㎡である。

柱穴の平面形は丸みを帯びた隅丸方形で、検出面での規模は30~40cm、深さは20~40cmと小規模である。柱痕の直径は10~15cmで、1132・1158柱穴は柱掘形の内側端に柱材を立て掛けて、1137・1391・1397柱穴では掘形段掘りで柱を落とし込んで固定している。主軸方向の振れは $N-10^{\circ}-W$ である。

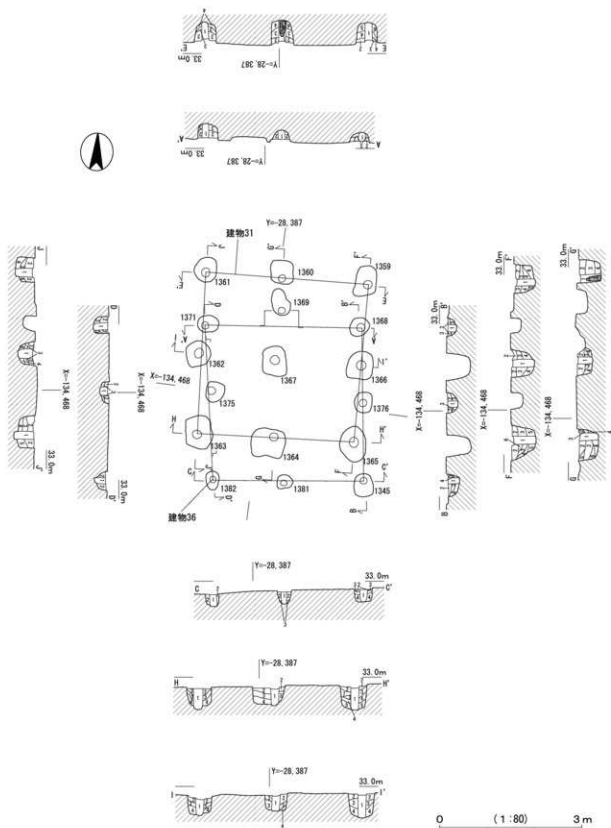


图36 建物31·36实测图

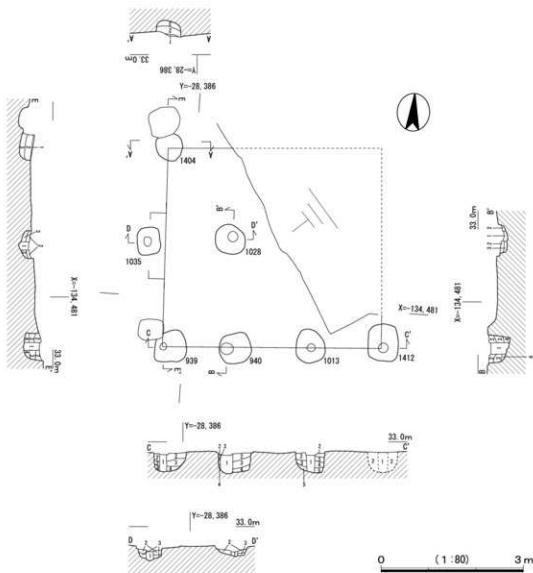


図37 建物32実測図

建物34 (図38下)

1区中央部東寄りで見出した東西3間、南北2間の東西棟建物である。桁行の長さは北側柱で4.9m、南側柱で4.8m、梁行の長さは西側柱で3.8m、東側柱で3.6mと、やや歪んだ長方形を呈する。床面積は17.7㎡である。

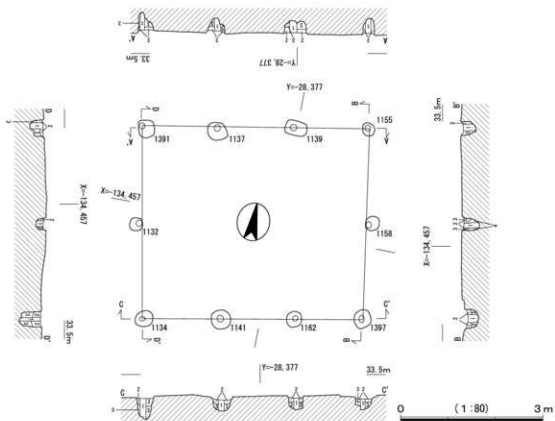
柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形で、検出面での規模は一辺40～70cm、深さは20～40cmである。柱痕の直径は10～15cmで、985・1019・1032・1402柱穴は柱掘形の端に柱材を立て掛けて柱を固定している。また、東側中央柱である1031柱穴は、柱筋からやや東外側に位置している。なお、985・1030・1402柱穴には柱材がわずかに残存していた。主軸方向の振れはN-6°-Eである。

建物35 (図32下、図版18-1)

1区東端部、136・138溝の北側で見出した東西3間、南北3間の建物である。東西の長さは4.6m、南北の長さは4.5mと、ほぼ方形を呈する。床面積は20.7㎡である。

柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形で、検出面での規模は一辺30～60cm、深さは20～70cmとばらつ

建物33



建物34

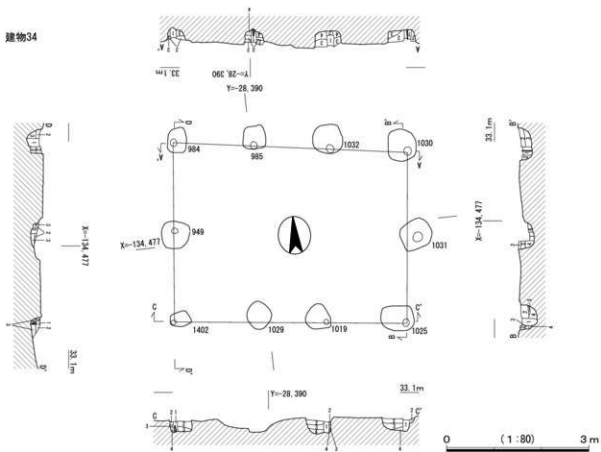


图38 建物33・34实测图

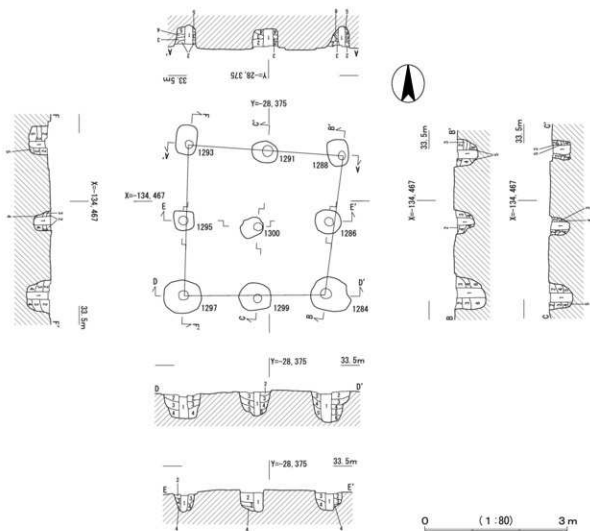


図39 建物37実測図

きが強い。柱痕の直径は10～15cmで、1216・1231柱穴は柱掘形の端に柱材を立て掛けて、1178・1210柱穴では掘形段掘りて柱を落とし込んで固定している。1420柱穴は建物26の1249柱穴に切られている。また、1178柱穴が建物25の1179柱穴を切る。主軸方向の振れは $N-6^{\circ}30'-W$ である。

建物36 (図36、図版16-1)

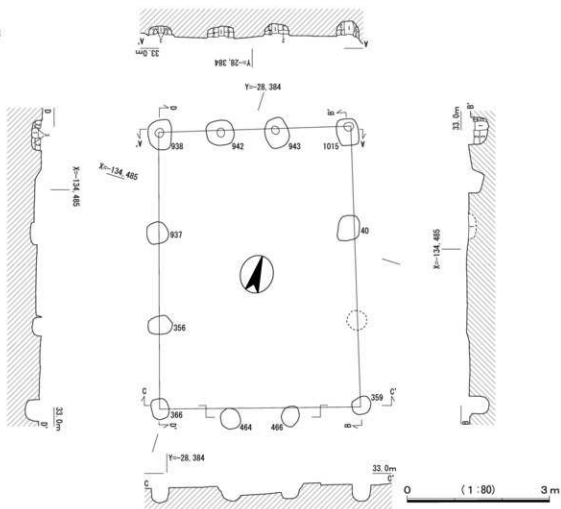
1区東部、136・138溝の南側で検出した東西2間、南北2間の建物である。東西の長さは北側柱で3.3m、南側柱で3.2m、南北の長さも西側柱で3.3m、東側柱で3.2mと、やや歪んだ正方形を呈する。床面積は10.6㎡である。中心東柱はないが、建物31と重複し規模もほぼ等しい。

柱穴の平面形は丸みを帯びた隅丸方形で、検出面での規模は30～50cm、深さは20～30cm、柱痕の直径は15～20cmである。北側中央柱の1369柱穴は、柱筋からやや北外側に位置しており、柱掘形の内側端に柱材を立て掛けて柱を固定している。主軸方向の振れは $N-3^{\circ}-W$ である。

建物37 (図39、図版16-2・図版17-3)

1区東部、136・138溝の南側で検出した東西2間、南北2間の総柱建物である。東西の長さは北側柱で3.2m、南側柱で3.0m、南北の長さも西側柱で3.2m、東側柱で3.0mと、やや歪んだ正方形のプランを呈する。床面積は9.7㎡である。建物28と重複し規模もほぼ等しく、柱の切り合い関係から建物28を建て

建物38



建物39

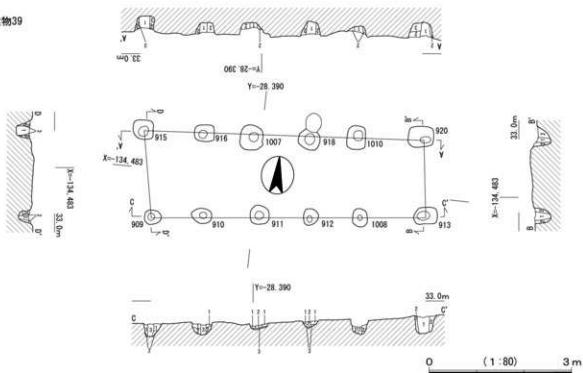


图40 建物38・39实测图

替えたものと考えられる。

柱穴の平面形は丸みを帯びた隅丸方形で、検出面での規模は40～80cm、深さは40～60cmとややばらついている。柱痕の直径は15～20cmで、1300柱穴は柱掘形の端に柱材を立て掛けて、1284・1286・1299柱穴では掘形段掘りで柱を落とし込んで固定している。主軸方向の振れは $N-4^{\circ}-E$ である。

建物38 (図40上)

1・2区中央部東寄り検出した東西3間、南北3間の南北棟建物である。桁行の長さは5.9m、梁行の長さは北側柱で4.0m、南側柱で4.2mと、平面形はやや歪んだ長方形を呈する。床面積は24.2㎡である。

柱穴の平面形は丸みを帯びた隅丸方形で、検出面での規模は40～60cm、深さは10～40cmと浅く、東側柱の南から2個目の柱穴は削平のため消滅している。柱痕は北側柱で、直径10～20cmの柱痕を確認できたのみである。主軸方向の振れは $N-18^{\circ}-W$ である。

建物39 (図40下、図版14-1)

1区中央部東寄り検出した東西5間、南北1間の東西棟建物である。桁行の長さは5.8m、梁行の長さは西側柱で1.8m、東側柱で1.6mと、やや歪んだ長方形プランを呈する。床面積は9.9㎡である。

柱穴の平面形は丸みを帯びた隅丸方形で、検出面での規模は30～50cm、深さは15～40cm、柱痕の直径は15～20cmである。主軸方向の振れは $N-5^{\circ}-W$ である。

3 柵

明確に柵と考えられる遺構は11列検出した。建物群を区画する溝に沿って検出した柵がほとんどで、溝の掘り直しに伴って柵も建て替えている事例がみられる。なお、ここで報告する柵の振れについては、東西柵は西に対する振れ、南北柵は北に対する振れを主軸方向の振れとして表記している。また、柵柱穴の断面観察については、建物柱穴と同様に後に一括して観察表を掲載している(表3)。

柵1 (図41左)

2区西端部、43溝の南に並行して検出した東西柵である。14.5m分検出しており、東西ともに調査区外に展開すると考えられる。柱穴の平面形は丸みを帯びた隅丸方形で、検出面での規模は30～50cm、深さは15～30cm、柱痕の直径は10～15cmである。503・508柱穴では先端をやや尖らせた長径10cmほどの柱材が残存しており、掘形底部から打ち込んで柱を固定した様子を窺うことができる。主軸方向の振れは $W-8^{\circ}-N$ である。

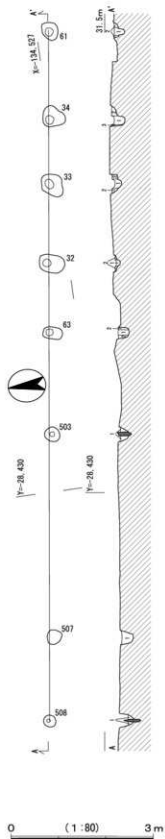
柵2・3・4 (図41右、図版21-2)

1区中央部西より、841溝の東に並行して検出した3列の南北柵である。西から柵2・3・4となり、柱穴の切り合い関係から柵3が最も新しい柵と判断できる。北は調査区外に展開すると考えられ、南端も1区と2区の間に設置した排水溝の側面や、不整形な落ち込みの底部に柱穴らしきビットが確認できることから、少なくとも柵3と柵4はあと2mほど南へ延びようである。

柵2は現状で13.2m分確認しており、南端の855柱穴の南には対応する柱穴は確認できなかった。柱穴の平面形は円形で、検出面での規模は15～30cm、深さは10～40cmとなる。また、柱痕の直径は5～10cmで、882柱穴では柱材が残存する。なお、869柱穴は後述する柵3柱穴に切られている。主軸方向の振れは $N-2^{\circ}-W$ である。

柵3は現状で21.1m分確認しているが、南端の1408柱穴の南2mあまりの地点でも、落ち込みの底部で柱穴らしきビットの痕跡が確認できる。このビットが柵3柱列に対応する柱穴であるならば、検出長

槽 1



槽 2 · 3 · 4

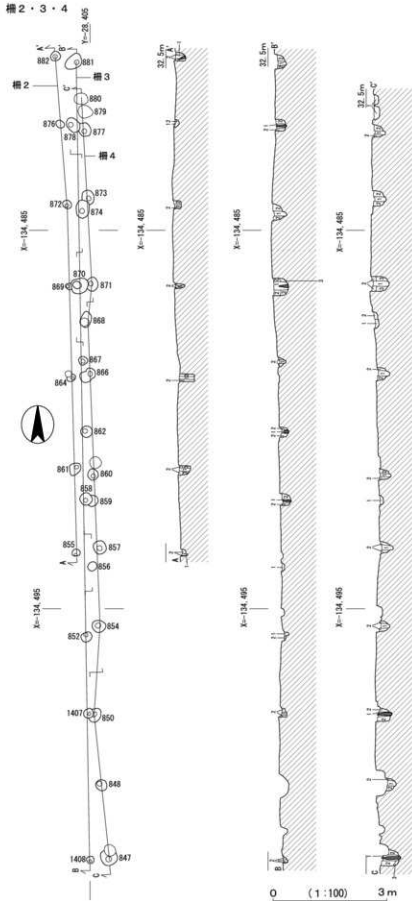
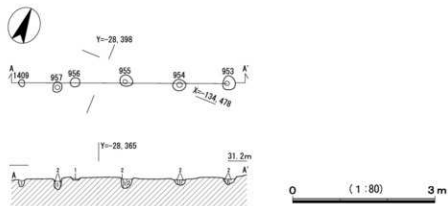
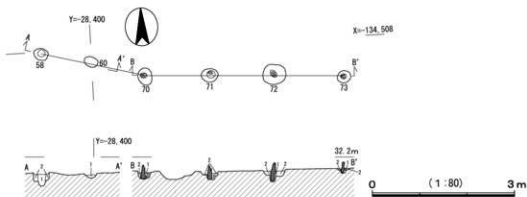


图41 槽 1 ~ 4 实测图

槽 5



槽 6



槽 7・8

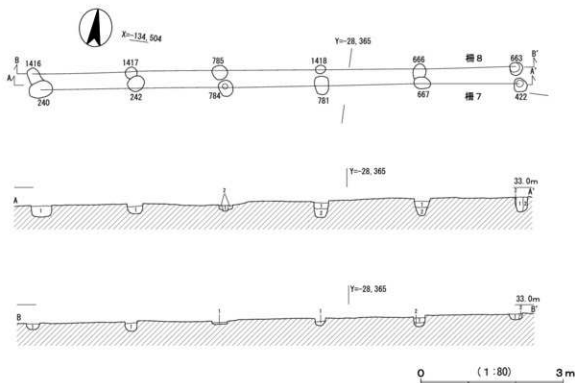


图42 槽 5~8 实测图

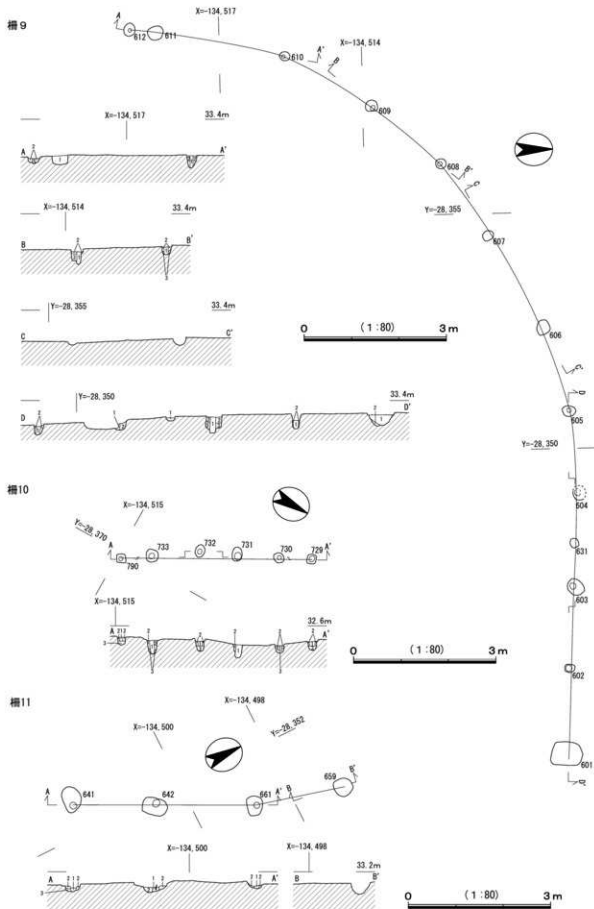


图43 楯 9 ~ 11实测图

は23.2mということになる。柱穴の平面形は円形で、検出面での規模は20～40cm、深さは15～40cm、柱痕の直径は10～20cmとなる。858・862・870・878柱穴には柱材が残存する。主軸方向の振れは $N-1^{\circ}-W$ である。

柵4は現状で19.2m分確認している。南端の847柱穴の南2mあまりの地点でも、排水溝の側面で柱穴らしきピットが確認でき、さらに4.5m南にも2区で検出した落ち込みの底部でピットの痕跡が認められる。これらのピットが対応する柱穴であるならば、検出長は約24mということになる。柱穴の平面形は円形で、検出面での規模は25～50cm、深さは30～50cm、柱痕の直径は10～20cmである。847・850柱穴には柱材が残存しており、柱材を掘形底部から若干打ち込んで固定した様子が窺える。なお、850・871・873・877柱穴は柵3柱穴に切られている。主軸方向の振れは $N-2^{\circ}-W$ である。

柵5 (図42上)

1区中央部西寄り、建物20の北側で検出した東西柵で、現状で4.3m分確認している。柱穴の平面形は円形で、検出面での規模は15～30cm、深さは10～25cm、柱痕の直径は約10cmである。構造的に区画内の目隠し扉のような性格をもつ柵と考えられる。主軸方向の振れは $W-22^{\circ}-S$ である。

柵6 (図42中、図版20-3)

1区中央部西寄り、55溝の南肩に沿って検出した東西柵である。溝の肩に合わせるように70柱穴の位置で若干北に折れるが、現状で6.4m分確認している。柱穴の平面形は円形で、検出面での規模は20～50cm、深さは10～30cm、柱痕の直径は約10cmである。70・71・72・73柱穴には径10cm弱の柱材が残存しており、72柱穴では柱材を掘形底部から若干打ち込んで固定した様子が窺える。主軸方向の振れは $W-3^{\circ}30'-N$ である。

柵7・8 (図42下)

2区南東突出部から4・5区にかけて、634溝の北肩に沿って検出した2列東西柵である。南側を柵7、北側を柵8とし、現状でともに約10m分確認している。柱穴の平面形は円形で、検出面での規模は20～50cm、深さは5～35cm、柱痕の直径は10～15cmである。柵7の柱穴が柵8の柱穴を切っており、主軸方向の振れは柵7が $W-8^{\circ}-S$ 、柵8が $W-8^{\circ}30'-S$ である。

柵9 (図43上)

4区南から5区南にかけて検出した柵で、539溝を囲うように円弧を描く。柱穴の平面形は円形で、検出面での規模は20～40cm、深さは5～35cm、柱痕の直径は5～15cmである。

柵10 (図43中)

5区中央部、678・753土坑の東肩に沿って検出した柵で、現状で約4m分確認している。柱穴の平面形は円形で、検出面での規模は20～30cm、深さは20～30cm、柱痕の直径は約10cmである。東側の平坦地と、小さな谷の始まりである678・753土坑との境界を画する柵と考えられる。主軸方向の振れは $N-28^{\circ}30'-W$ である。

柵11 (図43下)

4区中央部、537土坑の西肩に沿って検出した柵で、現状で約5.8m分確認している。661柱穴の位置で、若干西へ折れる。柱穴の平面形は丸みを帯びた隅丸方形で、検出面での規模は30～50cm、深さは15～25cm、柱痕の直径は10～15cmである。溝群が合流して地盤が不安定な537土坑を画する柵と考えられる。主軸方向の振れは $N-26^{\circ}-E$ である。

4 溝・土坑

建物群を区画する溝や土器が廃棄された不整形な土坑などを多く検出している。とくに、前者は同一位置での掘り直しが認められており、建物群の区画が長期間にわたって厳密に守られていたことを示唆している。ここでは各地区で検出した溝と土坑について、順次報告する。

43溝 (図44、図版20-1)

1・2区西端部で検出した川状の東西溝で、標高が31.0~31.3mと東から西へ緩やかに下がる調査地の最も低い地点に位置する。2区東の調査区外から流れる幅30~50cm、深さ10cm弱の小溝が徐々に広がり、Y=-28.420ライン付近で北西に深まって大溝となり、6mほどで西に向きを変えて流れている。大溝部の最大幅は約4m、深さは検出面から最大で約60cmとなっており、底部の標高は東端で30.8m、西端の最深部の標高は30.3mである。また、南岸には幅1.5m前後、深さ約15cmのテラス状の平坦地が認められる。この部分は西に向かう小さな開析谷になっていたようで、谷筋を流れる川がこの地点から始まっていたと考えられる。

491溝 (図44)

43溝の北側2~4mの位置に、43溝とほぼ平行して掘られた東西方向の小溝である。幅50~90cm、深さ5~40cmと底部の凹凸が激しい。検出時には一部途切れていたが、後世の削平によって浅い部分が消滅したためと考えられる。等高線に沿うように位置していることから明らかに人工的な溝で、底部の標高は東端で31.25m、西端で30.9mであった。東は遺跡保存地区となるが、方向として後述する55溝が繋がると想定できる。

492土坑 (図44)

43溝の南側に隣接して検出した方形の浅いテラス状の遺構である。東西10m以上、南北約6mで、43溝南肩から若干窪んで平坦となり、南への立ち上がりは20cmほどであった。遺構に伴う埋土は地盤土を一部攪拌した、厚さ約5cmの中粒砂を含む細粒砂(暗オリーブ 5Y4/3)単一層で、何らかの耕作に伴う遺構の可能性がある。先述した欄1は、492土坑の南に沿って東西に設けられていた。なお、492土坑では埋土上層の第3層の炭化材を試料として、放射性炭素年代測定を行っている。自然科学分析の章で報告するが、測定結果はやや古く5世紀初めから6世紀中頃の年代範囲を示している。

28土坑 (図44)

2区南西端部で検出した、深さ5cmほどの浅い不整形土坑である。南半部が攪乱で壊されており大きさが明確でないが、検出した最大幅は約1.3mであった。直径約40cmのビットに切られている。

55・24溝 (図45、図版20-2・3)

2区中央部西よりで検出した東西溝である。幅60cm~1.5m、深さ約40cmで、西は調査区外へ展開して491溝に連続すると考えられるが、東はY=-28.390ラインで途切れる。底部標高は東端で31.9m、西で31.7mと西へ緩やかに下がっており、南肩に沿って欄6が設けられる。なお、東端部では調査区外から西へ延びる24溝が、やや北へ屈曲して合流する。幅40~50cm、深さ5cmほどの小溝で、底部標高は東端で32.05m、西の合流部で31.95mである。24溝は後述する634溝に連続すると考えられ、建物群の南を限る溝と考えられる。

81・88溝 (図45・46、図版20-2)

55溝の北3~4mの位置で検出した東西溝である。断面観察から少なくとも2時期から3時期あるが、東では一本化して北へ湾曲し、南北溝である387溝に繋がる。また、西は調査区外になるため詳細は

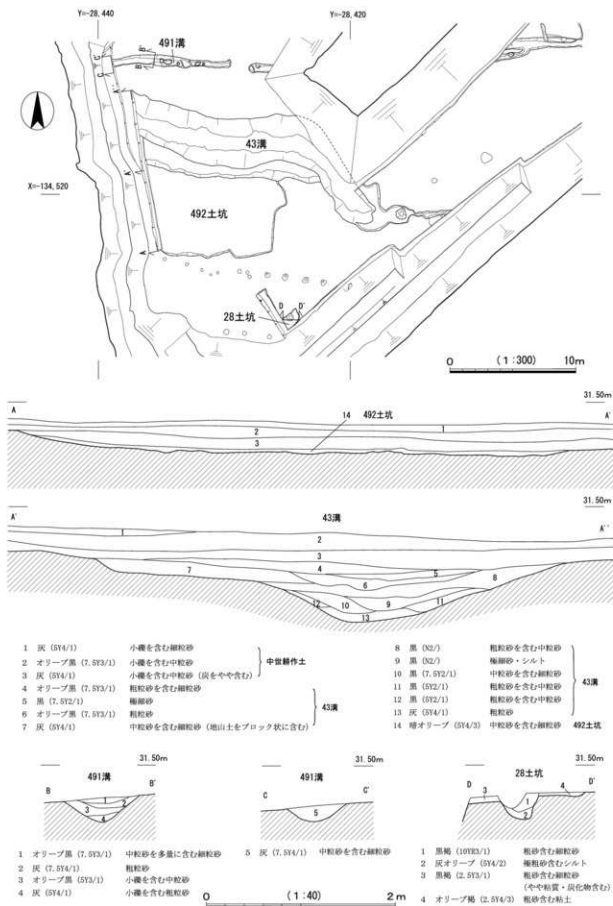
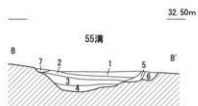
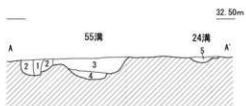
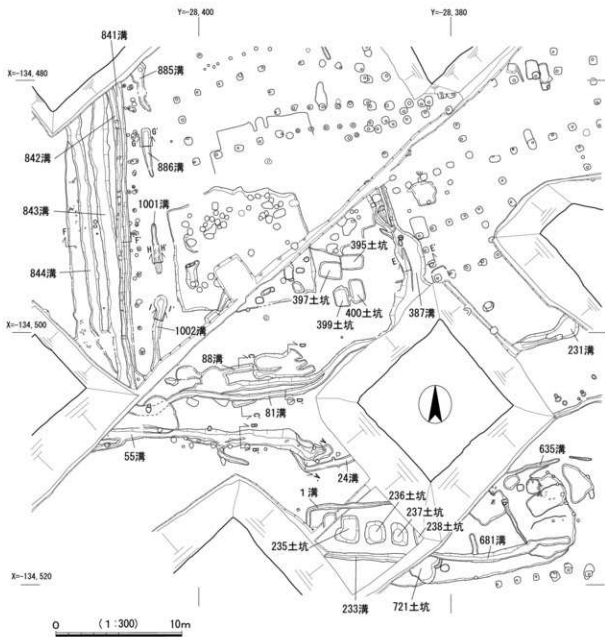


図44 1・2区西西部 溝・土坑配置図および断面実測図



- | | |
|----------------|-------------|
| 1 黒粘 (2.5Y3/1) | 小礫を少量含む極細砂 |
| 2 黒粘 (10YR2/1) | 粗粒砂を少量含む極細砂 |
| 3 灰 (5Y4/1) | 中礫を含む粗粒砂 |
| 4 黒粘 (2.5Y3/2) | 中礫を含む極細砂 |
| 5 黒粘 (2.5Y3/2) | 大礫を含む粗粒砂 |

- | | |
|-------------------|----------|
| 1 灰 (5Y4/1) | 極細砂 |
| 2 暗灰黄 (2.5Y4/2) | 小礫 |
| 3 黒粘 (2.5Y3/2) | 中礫を含む粗粒砂 |
| 4 暗灰黄 (2.5Y4/2) | 極細砂 |
| 5 灰オリーブ (5Y4/2) | 粗粒砂 |
| 6 灰オリーブ (5Y4/2) | 中粒砂 |
| 7 灰オリーブ (7.5Y4/2) | 極細砂 |

0 (1:40) 2m

図45 1・2区中央部 溝・土坑配置図および断面実測図

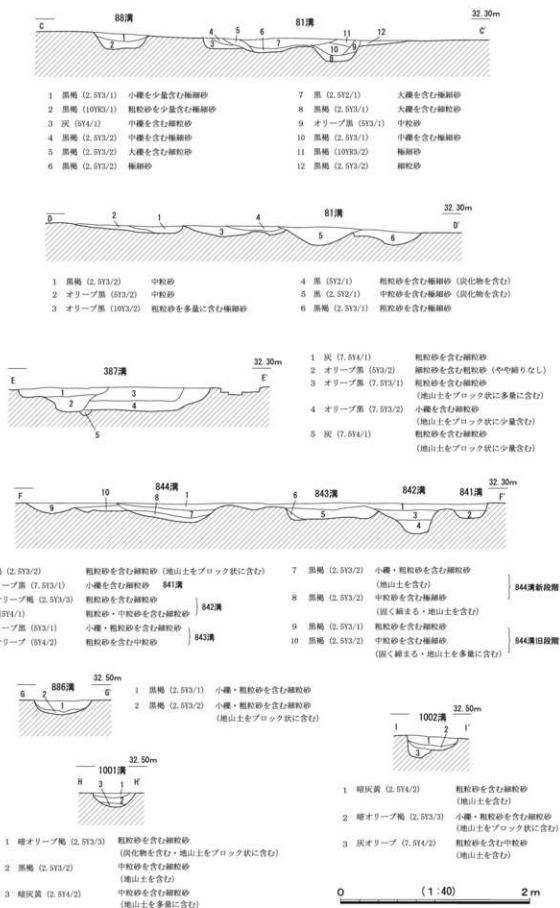


図46 1・2区中央部 断面実測図

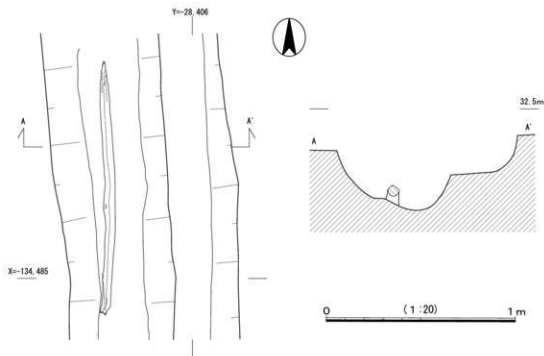


図47 842溝 杭出土状況実測図

不明であるが、南北区画溝である841～844溝と合流する可能性が高い。溝の幅は50cm～1.2mあり、深さは15～20cmで、北側の溝が南側の溝を切って成立している。底部標高は東端で32.05m、西端で31.8mと、西へ緩やかに下がっている。88溝は81溝の北約1mに掘られた東西溝であるが、長さ約6mで途切れている。幅約50cm、深さ15cmほどで、規模は88溝と変わらない。後述する885・886・1001・1002溝と類似した構造をもつ。これらの溝と、55溝・24溝が共存していたかどうかは明らかでないが、建物群の南西部を区画する溝であろう。

387溝 (図45・46)

2区中央部で検出した南北溝である。南端で合流する81溝と同様に、2時期から3時期の切り合いが認められる。また、北端に関しては1区の調査で検出できなかったことから、X=-134,488ライン付近で途切れていたようである。溝の幅は北半では60cmほどであるが、南では1～1.5mあり、深さは約30cmと深くなっている。底部標高は北端で32.45m、西端で32.3mと、南へ緩やかに下がっている。81溝・88溝とともに建物群の南西部を区画する溝と考えられる。

841～844溝 (図45～48、図版21-1～3)

1区中央西寄りで検出した南北溝群である。東には並行して欄2・3・4が順次設けられており、建物群の西を限る溝として機能したと考えられる。検出時に確認した平面プランでは、東から841～844溝の4条の溝としたが、少なくとも西端の844溝は断面観察から新旧2時期ある。また、溝群全体が窪んで黒褐色細粒砂が上層を覆っていたため、溝群の掘られた順序は確定困難な状況にあるが、切り合い関係から843溝が最も古く、842溝と844溝新段階は同時期に掘削された可能性が高い。

溝群はすべて直線的に掘られており、841溝・842溝・844溝旧段階はN-2°30'-W。843溝・844溝新段階はN-5°30'-Wとやや西への傾きが大きい。841溝と842溝は幅50cm前後で、前者が深さ15cmほどであるのに対し、後者は約30cmとやや深い。843溝と844溝新段階は、幅1～1.2mと幅広で、深さは15～20cmである。844溝旧段階の幅は不明であるが、844溝の新段階と同規模と考えられ、深さは約10

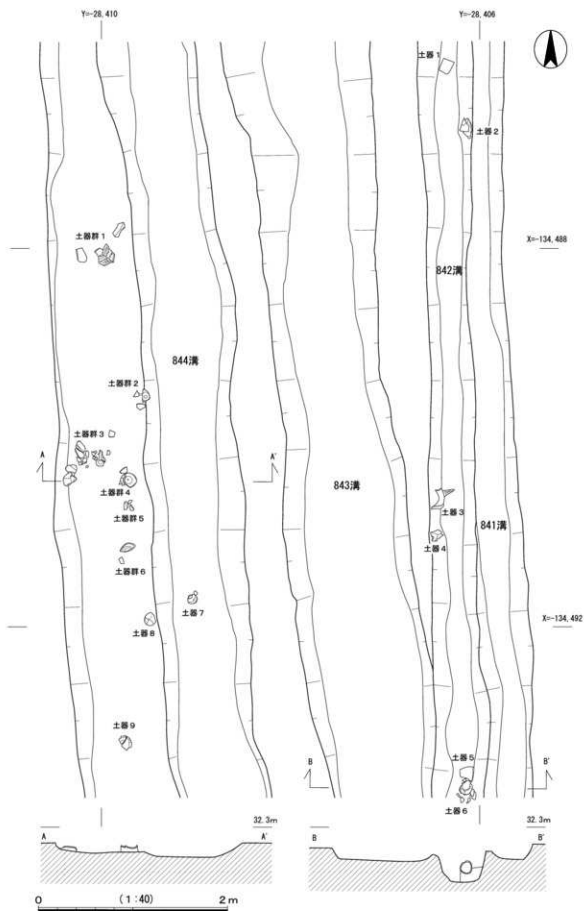


图48 841~844沟 土器出土状况实测图

cmと浅くなっている。

底部標高は、841溝の北端で32.15m、南端で32.0m、842溝の北端で32.0m、南端で31.85m、843溝の北端で32.0m、南端で31.9mと、北から南へ緩やかに下がっているが、844溝では逆で新段階の溝の北端で31.95m、南端で32.1mと北に緩やかに下がり、旧段階の溝は全体に32.05～32.1mと平坦である。南への排水を意識しつつも、厳密な排水方向は考えていなかった可能性が高い。

なお、842溝と844溝旧段階の埋土内から土師器や須恵器がまとまって出土しており、これらの土器群には地点別に番号を付して取り上げている(図48)。土器群の個々の遺物については、土器観察表の備考欄に出土地点を表示しているので参照されたい。また、842溝内から欄に使用されたと考えられる杭材が出土している(図47)。

885・886・1001・1002溝(図45・46)

欄2・3・4の東に並行して検出した溝群である。北から885溝・886溝・1001溝・1002溝と、断続しながら南北に並んでいる。885溝の検出長は約4m、幅は50cm～1mと一定せず、深さは約15cmである。埋土は粗砂を含む細粒砂(オリーブ黒 5Y3/2)の単一層で、北は調査区外にあまり延びず途切れそうである。

885溝から南の溝群は、886・1001溝が検出長約4m、1002溝が検出長約6mで、885溝と886溝の間が約1.3m、1001溝と1002溝の間が約1.7m、886溝と1001溝の間が約3.7mと離れている。これらの溝は幅が30～70cmで、深さは約15cmと885溝と共通しており、欄2・3・4の内溝として機能したものと考えられる。

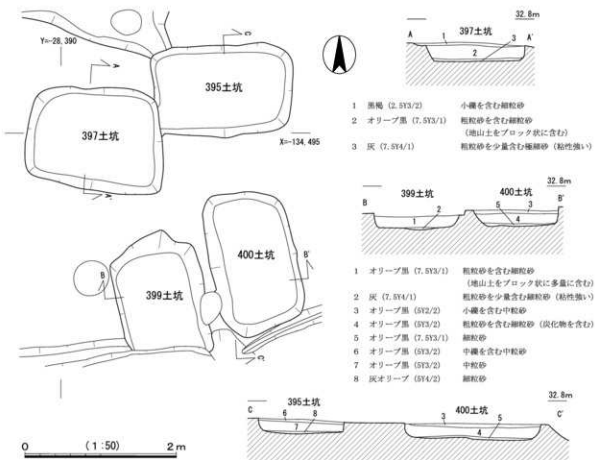


図49 395・397・399・400土坑実測図

395・397・399・400土坑（図45・49）

2区中央部で検出した長方形の土坑群である。長辺約1.8m、短辺約1.2m、深さ約20cmとはほぼ同一規模で、北側の395・397土坑は長辺を東西に、南側の399・400土坑は長辺を南北にして並んでいる。堆積状況も非常に類似しているが、出土遺物が極端に少なく、土坑の性格を示唆する遺物はまったく出土していない。

1・233溝・721土坑（図45・50）

2区南西突出部で検出した、小規模な方形区画を形成する溝群である。1溝は北側の東西溝で、東は調査区外に展開し、西側はY=-28,391ライン付近で南へ直角に折れ曲がる。幅25~45cm、深さ約10cmで、底部標高は東端で32.0m、西側の南へ折れ曲がった地点で31.87mと西へ緩やかに下がる。東の5区への繋がりをみると、635溝に連続する可能性が高い。233溝は1溝の南約4mの地点を東西に並行して掘られた溝である。幅40~70cm、深さ約15cmで、5区の681溝に連続すると考えられる。底部標高は東端

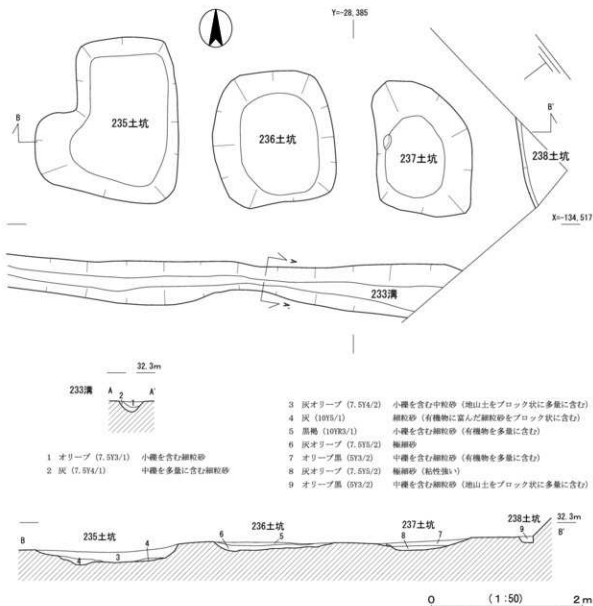


図50 233溝、235~238土坑実測図

で31.83m、西端で31.65mと、やはり西へ緩やかに下がっているが、西への繋がり不明である。後述する724溝と合流して43溝に流れ込むのが自然であろう。なお、233溝と681溝との間に、長径約2m、深さ15~20cmの不整形を呈する721土坑がある。谷状の地形に形成された窪み状遺構で、人工的に掘られたかどうかは疑わしい。

235~238土坑 (図45・50、図版24-1)

1溝と233溝で囲まれた方形区画内に掘られた土坑群である。形状は長方形を意識しているようで、長軸を南北に揃えて東西に4基の土坑が並んでいる。西端の235土坑が長辺約2mと最も大きく、236・237土坑は長辺約1.7mであった。東端の238土坑は一部を検出するにとどまる。深さは10~15cmと非常に浅く、須恵器蓋杯・甕腹や土師器甕が少量出土するだけで、遺構の性格を示唆する遺物は出土していない。

231溝 (図45・56・58)

2区南東突出部で検出した東西溝である。長さ6m弱の検出であり詳細は不明であるが、位置的に西は81溝・387溝合流地点に繋がる可能性がある。断面観察から2時期あることがわかり、当初は幅40~50cm、深さ約20cmの溝が、新しい段階には幅80cm~1m、深さ約10cmの浅い溝となり、東端では幅1.8mまで広がって収縮するようである。

723土坑・724溝 (図10)

5区西端部で検出した不整形土坑と東西溝である。723土坑は東西1.8m以上、南北約1mで、西は調査区外に展開する。深さ10cm弱の非常に浅い窪み状の遺構である。埋土は単層で、粗粒砂を含む細粒砂(オリーブ黒 5Y3/1)であった。724溝は幅約40cm、深さ約10cmの小溝で、約7m分を検出した。東西は調査区外に伸びる。底部標高は東端で31.9m、西端で31.83mと西へ緩やかに下がる。小礫を含むシルト(灰 5Y4/1)が堆積していた。233溝とともに西は43溝に流れ込むと考えられる。

136・138溝 (図51-53、図版22-1・2)

1区東半から2区東端部にかけて検出した東西方向の溝である。2時期の切り合いがあり、新段階の溝が136溝、旧段階の溝が138溝となる。136溝の幅は約1m、深さは約30cmなのに対し、138溝は幅1.5m前後と広く、深さは15~25cmでやや浅い。底部標高をみると、136溝は西端が32.5m、1区東端が33.0m、2区東端が33.18m、138溝は西端が32.6m、1区東端が32.84m、2区東端が33.23mで、東から西に緩やかに下がっている。

これらの溝は建物群の北を区切る機能をもっており、1区では $X = -134.463$ ライン付近で直線的に掘られ、西の延長部は調査区外で南北溝841~844溝の北延長部と合流すると考えられる。東は2区東端部で南東へ折れ曲がっており、 $Y = -28.351$ ラインで113溝と合流するとともに、調査区外では03-1調査7区で確認した溝3に繋がる。

また、113溝との合流地点の西側で、溝内を横切るピット群を検出した。直径20~50cm、深さ25cm前後の小ピット群で配置に規則性は認められない。ただ、ピット内に木材片が残存しているもの(473・474ピット)があり、溝内に材を打ち込んで簡単な橋渡しの支えにした痕跡と想定している。

137溝・255土坑 (図51・53、図版22-2)

137溝は、2区東端部において検出した136・138溝に切られる溝状の遺構である。最大幅約2mで、約8.5m分確認したが、西端は1区と2区との境で途切れ、東も03-1調査7区の土坑14に切られて途切れるようである。深さは約40cmあるが、遺物はまったく出土せず、遺構の性格は不明である。また、東

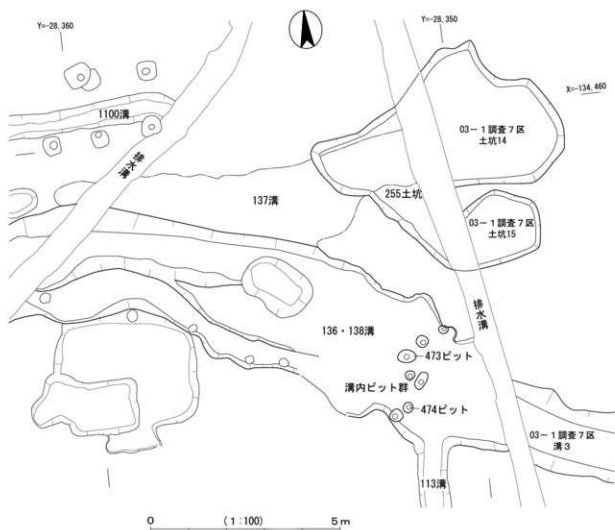


図51 136・138溝東端部および溝内ピット群平面実測図

端壁際では137溝を切る255土坑を検出した。確認した規模は最大幅で約4.5m、深さ約20cmで、03-1調査7区の土坑14・15に連続する不整形土坑と考えられる。須恵器杯片1点と土師器甕片が数点出土したにすぎず、長胴甕片が出土することから6世紀後半以降の遺構であることがわかる。

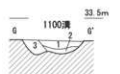
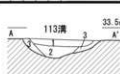
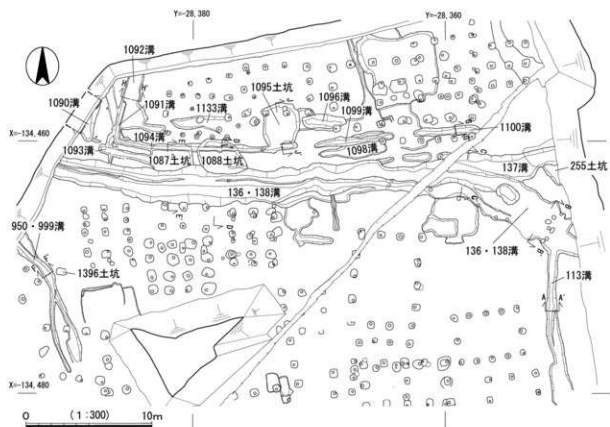
113溝・437土坑 (図10・51・52)

2区東端部で136・138溝と合流する南北溝である。幅80cm～1.5m、深さ20cm前後で、約12m分検出して南は途切れていた。さらに、南約4mに位置する溝状の437土坑も同一溝の残存遺構と考えられる。437土坑は最大幅約1.3m、南北長約4m、深さ約30cmで、遺物を比較的多く包含していた。

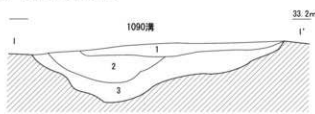
1090～1094・1096・1098～1100・1133溝 (図51～54)

136・138溝の北に並行して掘られた、断続した3条の溝群である。これらはともに西端部で北へ折れ曲がって、新たな区画を形成している。

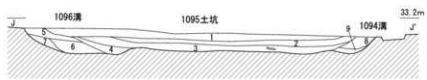
南側の溝群は1093溝が約4m、1098溝が約13m離れて5.5m分検出しており、西端では南北溝と考えられる1090溝によって北へ区画が曲がる。1090溝は北側の大半が調査区外に延びており規模が不明であるが、深い場所で60cmほどの深さがある。土器を多く包含していた。1093溝は幅60cm前後、深さ10～20cm



- | | | |
|---------------------------------------|---|--------------------------------------|
| 1 埴オリーブ堀 (2.5Y3/3) 埴粒砂を含む中粒砂 (炭化物を含む) | 1 黒堀 (2.5Y3/2) 小礫・粗粒砂を含む細粒砂 (炭化物を少量含む) | 1 黒堀 (2.5Y3/2) 小礫・粗粒砂を含む細粒砂 (炭化物を含む) |
| 2 黒堀 (2.5Y3/1) 中粒砂 | 2 暗灰黄 (2.5Y4/2) 小礫・粗粒砂を含む細粒砂 (炭化物と地山土を含む) | 2 黒堀 (2.5Y3/1) 中粒砂を含む細粒砂 (炭化物を含む) |
| 3 埴オリーブ (5Y4/2) 小礫を含む細粒砂 | 3 暗灰黄 (2.5Y4/2) 小礫・粗粒砂を多量に含む細粒砂 | 3 黒堀 (2.5Y3/1) 粗粒砂を含む細粒砂 (地山土を多量に含む) |
| | 4 オリーブ堀 (2.5Y4/3) 小礫・粗粒砂を多量に含む細粒砂 | |
| | 5 オリーブ黒 (5Y3/2) 小礫・粗粒砂を含む細粒砂 | |



- | | |
|---------------------------------------|---------------------------------------|
| 1 埴オリーブ堀 (2.5Y3/3) 粗粒砂を含む細粒砂 (炭化物を含む) | 1 暗灰黄 (5.5Y4/2) 粗粒砂を含む細粒砂 (炭化物を含む) |
| 2 黒堀 (2.5Y3/2) 粗粒砂を含む細粒砂 | 2 暗灰黄 (2.5Y4/2) 粗粒砂を含む細粒砂 (地山土を多量に含む) |
| 3 原堀 (2.5Y3/1) 粗粒砂を含む極細砂 | 3 黄灰 (2.5Y4/1) 粗粒砂を含む細粒砂 (炭化物と地山土を含む) |
| 4 原堀 (10Y3/2) 粗粒砂を含む細粒砂 | |
| 5 原堀 (2.5Y3/2) 粗粒砂を含む細粒砂 (地山土を多量に含む) | |



- | | |
|--|---|
| 1 黒堀 (2.5Y3/2) 小礫・粗粒砂を含む細粒砂 (炭化物を含む) | 6 黄灰 (2.5Y4/1) 粗粒砂を含む細粒砂 (地山土を多量に含む) |
| 2 黒堀 (2.5Y3/2) 粗粒砂を含む細粒砂 (炭化物を多量に含む) | 7 黄灰 (2.5Y4/1) 粗粒砂を含む細粒砂 (やや粘質・地山土を多量に含む) |
| 3 黒堀 (2.5Y3/1) 粗粒砂を含む細粒砂 (やや粘質・炭化物と地山土を含む) | 8 黒堀 (2.5Y3/1) 粗粒砂を含む細粒砂 (やや粘質・地山土を多量に含む) |
| 4 暗灰黄 (2.5Y4/2) 中粒砂を含む細粒砂 (炭化物と地山土を含む) | 9 黄灰 (2.5Y4/1) 粗粒砂を含む極細砂 (粘質) |
| 5 黒堀 (10Y3/2) 粗粒砂を多量に含む細粒砂 | |

図2 1・2区東部 溝・土坑配置図および断面実測図

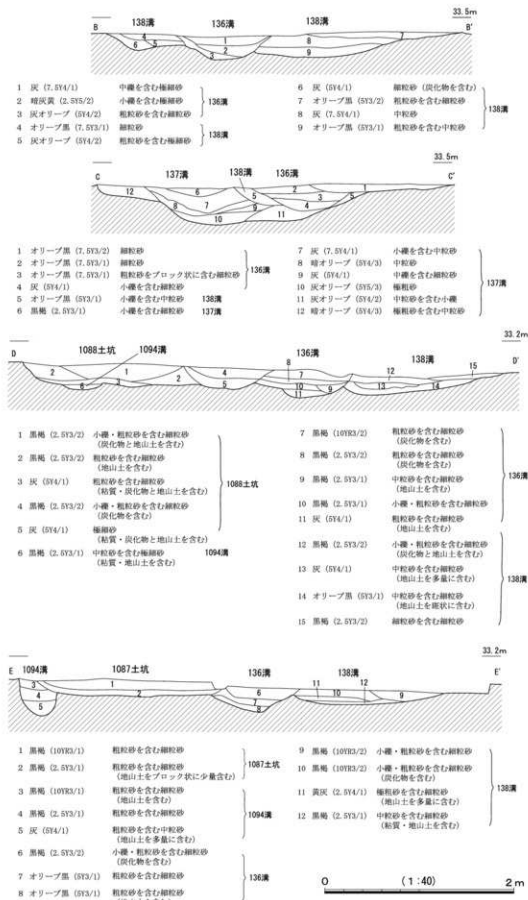


図53 1・2区東部 溝・土坑断面実測図

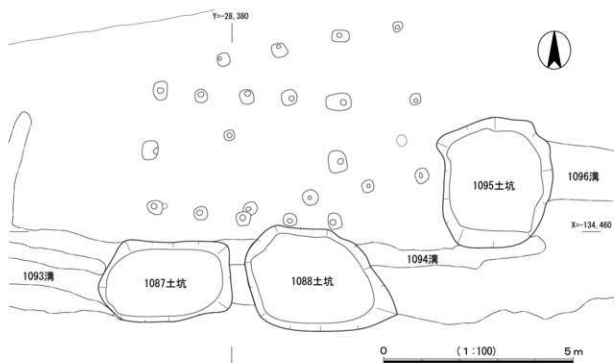


図54 1087・1088・1095土坑平面実測図

で、東端部は1087土坑に壊されている。1098溝は幅50cm～1mと一定せず、深さも5cm前後と非常に浅い。1098溝の南から南東にかけても、断続した浅い溝状遺構が認められ、これらの溝群によって何らかの区画を表現したものと思われる。

同じ断続した溝群であっても、北側で検出した1091・1094・1099・1100溝は、区画溝としてのラインが明確である。西端の南北溝である1091溝は、南端で東へ折れ曲がって1094溝となり、北側は調査区外に伸びる。1094溝は約14.5m分検出した東西溝で、幅50～60cm、深さ15～25cm、東端はY=-28.372ライン付近で途切れる。この1094溝の東への続きが1099溝と1100溝で、長さ6m前後、幅約60cm、深さ10cm前後と浅くなる。

最も北側に位置する溝群は、1092溝から1133溝・1096溝と断続的に続く一群である。1092溝は、1091溝と重複した南北溝で、1094溝への屈曲部より約1.5m北側で東へ屈曲する。1133溝と1096溝は幅約1m、深さ約10cmの浅い溝である。

これら3群の溝のうち、1091溝が1092溝を切って成立している。その他の溝は、直接切り合い関係がないため前後関係は明らかでない。なお、これらの溝群はすべて1087土坑・1088土坑・1095土坑の下層で検出している。また、建物柱穴との切り合い関係も、溝群が非常に浅いため、検出時には前後関係を明確にできなかった。

1087・1088・1095土坑 (図52～54)

136・138溝の北側で検出した土坑群である。1087土坑は東西の長さ約3.5m、南北の長さ約2m、深さ約20cm。1088土坑は東西約3.7m、南北約2.7m、深さ約25cm、1095土坑は東西約3m、南北約3.5m、深さ約20cmを測る。前述したように、136・138・1093・1094・1096溝を切って成立している。

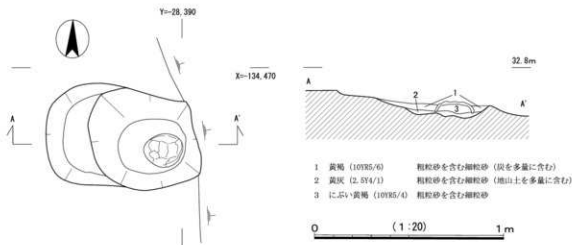


図55 1396土坑実測図

950・999溝 (図52、図版8-2)

1区中央やや東寄りで検出した、蛇行する南北溝である。950溝が999溝を切っている。北側は調査区外に延び、南端は $X=-134.478$ ライン付近で途切れる。幅は40~50cmほどで、深さは北ほど深く最大約30cmである。これらの溝から約10m南へ延長した位置に、387溝の北端があり、これらの溝で方形区画内を東西に細分したと考えられる。

1396土坑 (図52・55、図版25-3)

950・999溝の東で検出した小土坑である。検出時の東西の長さ約80cm、南北の長さ約50cm、東に向かって深くなるが最も深いところで10cmほどである。底部には上半を打ち欠いた土師器甕を伏せて据えており、この周辺には炭を多量に含む細粒砂が堆積していた。

534・634・635溝 (図56~58、図版5-1・図版23-1)

4区から5区にかけて、蛇行しながら東西に掘られた溝である。534溝は北に湾曲しながら西へ延び、 $Y=-28.345$ ライン付近でやや南へ屈曲し、 $Y=-28.352$ ライン付近で2条の溝に分かれる。分岐した溝は、北側が634溝、南側が635溝となり、前者は2区南西突出部で24溝に繋がり、後者は断続的に西へ延びて1溝と繋がる可能性がある。

534溝は屈曲部より東では幅70cm前後、深さ30~50cmと深く、西では幅約40cm、深さ10cmと小規模になる。634溝は北肩部に、欄7・8が設けられた場所では直線的で、幅も約80cmと広がっているが、他の場所では幅30~40cmと狭い。635溝も幅30cm、深さ10cmと小規模である。底部標高を東からみると、534溝の東端が32.9m、屈曲部が32.85m、西の分岐点が32.74m、634溝の中央部が32.6m、西端が32.45m、635溝の中央部が32.5m、途切れた西側の溝西端部が32.2mと、地形にあわせて西へ緩やかに下がっている。これらの溝は、2区で検出した55溝などとともに、建物群の南を区画する機能をもっていたと考えられる。

535・536溝 (図56・58・59、図版23-1・2)

535溝は534溝の南で検出した東西溝で、約14m分確認した。東は調査区外に延び、西は536溝と合流する。幅50cm前後であるが中央部は幅1.2~1.8mと広がり、中央部の東は底部標高32.9m、中央部の底部標高33.05m前後、西側で底部標高32.95mと中央部が浅くなっている。また、土器がまともな状態で廃棄されている部分が認められ(土器群1~4)、とくに中央部は溝の底が浅くなって土橋状になっている。

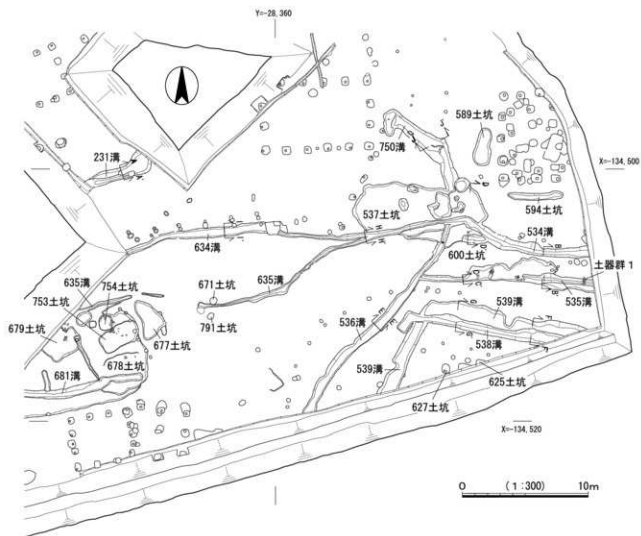


図56 4・5区東部 溝・土坑配置図

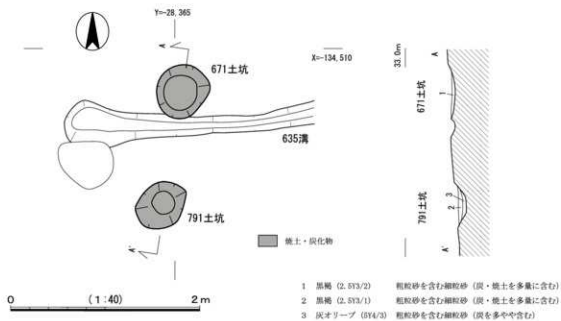


図57 671・791土坑実測図

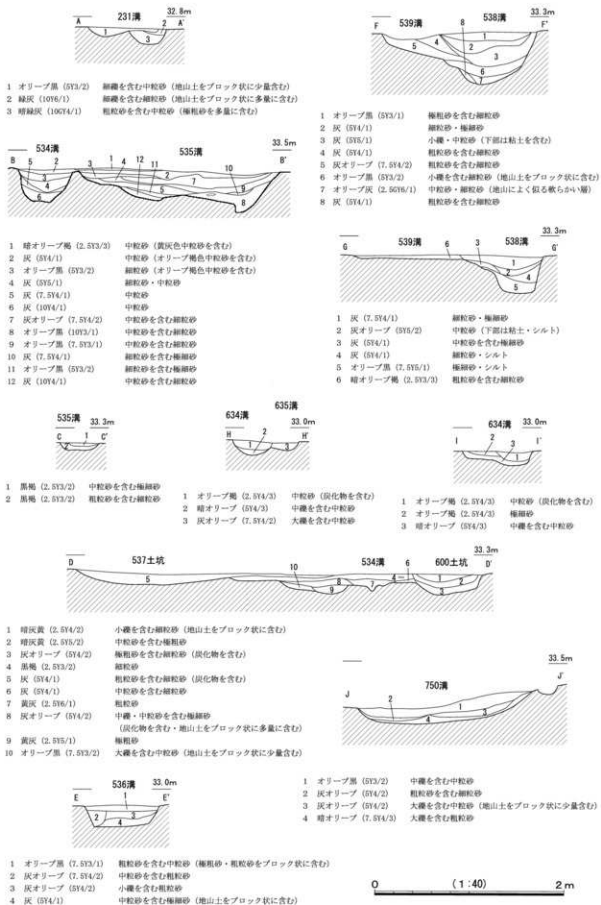


図58 4・5区東部 溝・土坑断面実測図

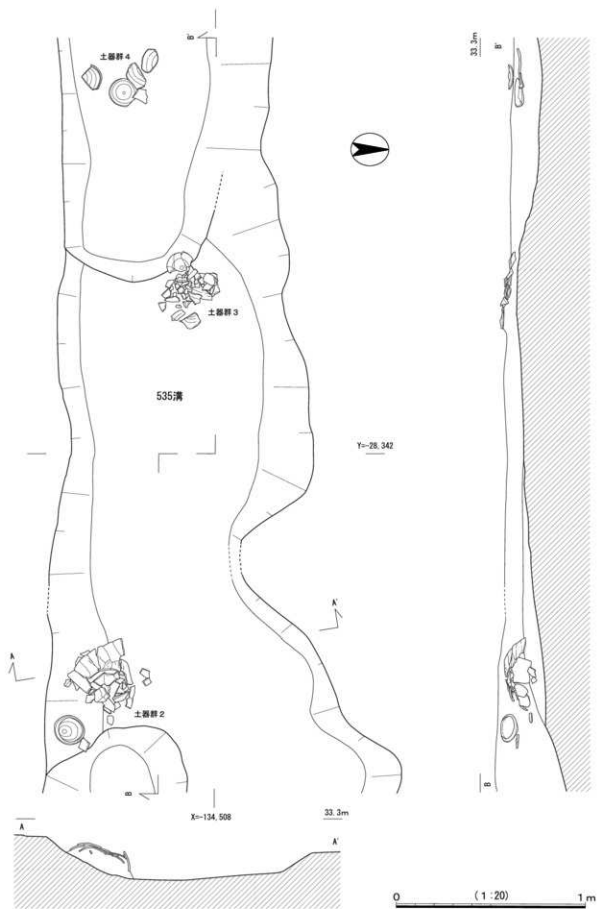


图59 535溝土器群2~4 出土状況実測図

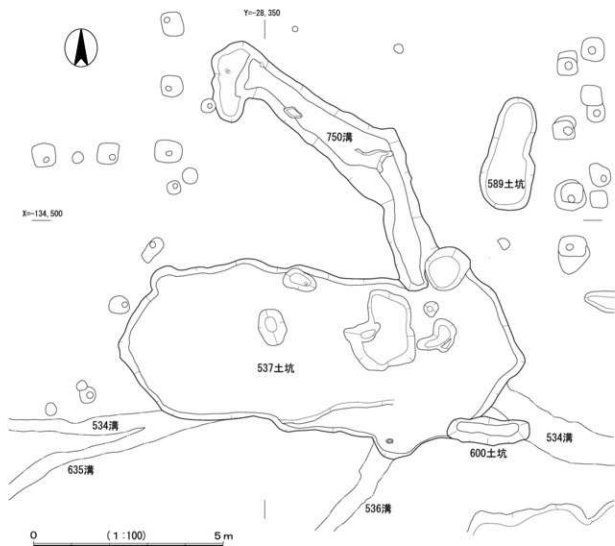


図60 537土坑、750溝平面実測図

後述する539溝でも、対応するように幅が大きく狭まっている箇所があり、この場所に溝を跨ぐ橋が掛けられた可能性がある。

535溝と合流する536溝は北東から南西に掘られた溝で、北端は534溝と合流するが、南端は調査区外に延びる。幅50～80cm、深さ20～25cmで、底部標高は北端で32.9m、南端で32.5mと北東から南西へと下がる。これらの溝群は後述する538・539溝とともに、調査区外で新たに展開すると予測される区画の北西隅を限る施設と考えられる。

538・539溝（図56・58、図版23-1）

4区南東隅で検出した区画溝である。新しい段階の538溝は、幅80cm～1m、深さ約50cmの東西溝で、東は調査区外に延び、西は若干南へ折れ曲がって途切れている。底部標高は西端で32.8m、東端で32.65mと、地形に逆行して西から東に向かって緩やかに下がる。

539溝は、535・536溝と並行するように東西溝が西端で南へ鈍角に屈曲する区画溝である。東西溝部は538溝に切られているために幅が不明だが、南北溝部の幅は1.2m前後あり、深さは20～25cmと浅い。ただ、538溝下層には539溝の深まりが確認でき、東西溝部は南側が段掘りになっていた可能性がある。前

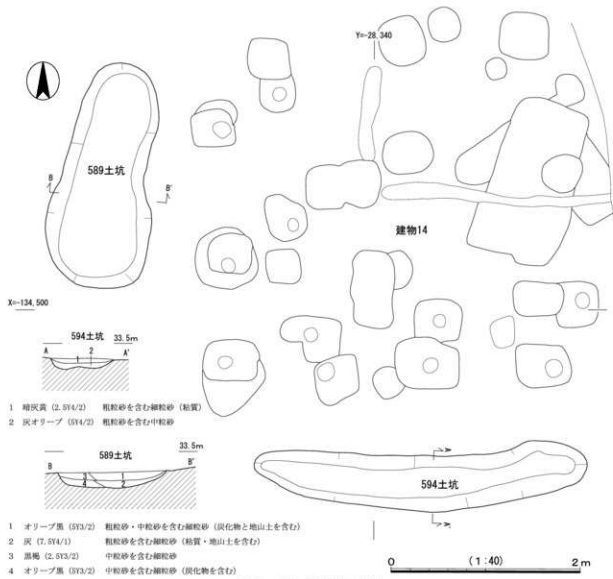


図61 589・594土坑実測図

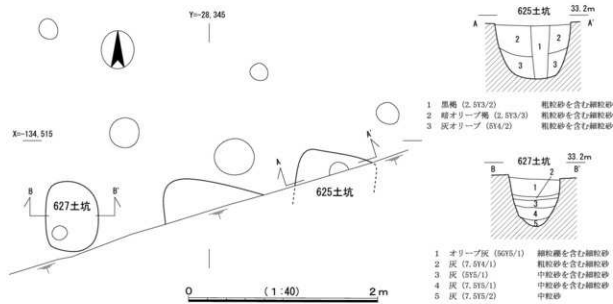


図62 625・627土坑実測図

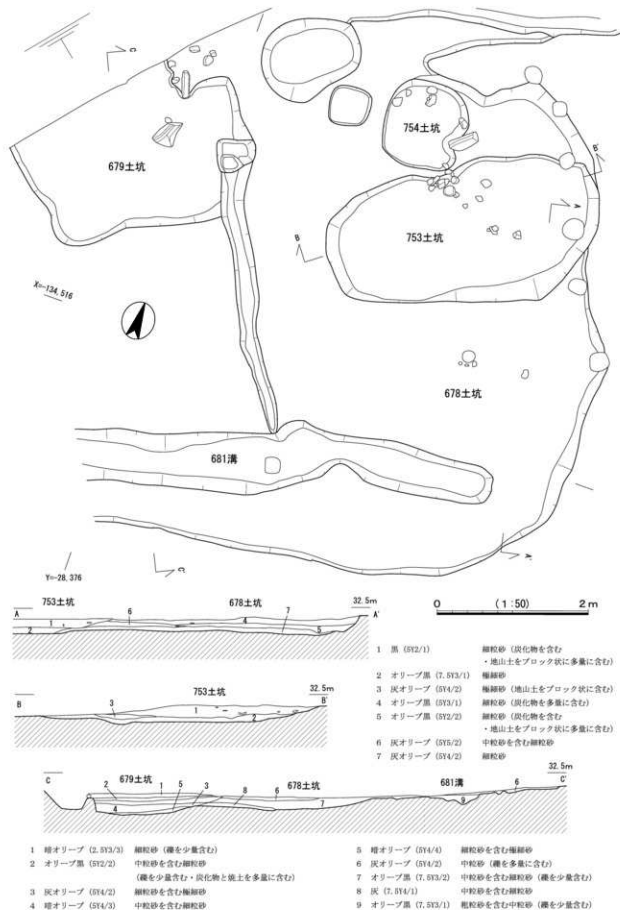


図63 681溝、678・679・753・754土坑実測図

述したように東西溝部の中央に土橋状の掘り残しがあり、溝幅が極端に狭まっている。底部標高は南北溝部南端で32.75m、屈曲部で32.8m、東西溝部は段上で33m前後、確認できる最深部で32.6mとなっており、北西隅から東と南へ下がっていたと考えられる。

537・600土坑・750溝（図56・58・60、図版23-3）

537土坑は、534溝と536溝の合流点周辺の上層で検出した不整形の落ち込み状遺構である。東西約11m、南北約4m、深さは5～10cmと非常に浅い。750溝との合流点付近の底部は、窪みが多く形成されている。

600土坑は537土坑の南東隅部で検出した、東西長約2.2m、南北幅約70cmの小土坑である。深さ25～30cmで、切り合い関係から最も新しい土坑と考えられるが、遺物は全く出土していない。

750溝は537土坑の北側に取り付く溝状遺構である。長さ約8m分を検出しており、幅1～1.5m、深さは10～25cmで、細長い形態の土坑が連続したような遺構である。北端部から口縁部が欠損した廬223と、やはり口縁部が欠損し底部に刻み状の穿孔を施した土師器短頸壺224が出土している。

589・594土坑（図56・61）

建物13・14の南西隅を囲うように掘られた土坑群である。西側の南北に長い土坑が589土坑、南側の東西に長い土坑が594土坑である。589土坑は長さ約2.4m、幅80cm～1.1m、深さ約10cm、594土坑は長さ約3.5m、幅約60cm、深さ約15cmであった。方位の共通性から、建物14に伴うと考えられる。

625・627土坑（図56・62）

4区南東端部、539溝で囲まれた区画内で検出した2基の土坑である。625土坑は南東の大半が調査区外となるが、検出した規模で東西70cm以上、南北40cm以上となる。深さは約55cmで、直径約20cmの柱痕跡が認められる。627土坑は東西約55cm、南北約70cmの隅丸方形を呈する。深さは約50cmで、約15cmの柱痕跡を確認した。一部のみの検出で全体は不明だが、ともに掘立柱建物の北西隅柱と考えられ、南東調査区外に建物群が展開することを示唆している。

671・791土坑（図56・57、図版25-2）

5区東端部、635溝が途切れる部分の南北で検出した、円形を呈する小土坑群である。671土坑は直径約55cm、深さ約5cm、791土坑は直径45～50cm、深さ約10cmで、ともに炭・焼土を多量に含む黒褐色細粒砂が堆積していた。遺物は出土せず性格不明だが、鍛冶に関わる遺構である可能性がある。

677～679・753・754土坑（図56・63、図版24-2・25-1）

5区建物16・17の北側で検出した落ち込み状遺構群である。678土坑は東西約15m、南北約7m、深さは約15cmと非常に浅く、西に向かって下がるテラス状を呈している。そして、678土坑の東に隣接して677土坑、埋土を切るかたちで679・753・754土坑が形成される。これらの土坑群には多量の土器群が廃棄されていた。これらの遺構の性格であるが、1・2区で検出した43溝に繋がる谷筋にあたっており、雨水などがこの部分に集まって自然に形成された遺構と考えられ、土器群は谷筋に意図的に廃棄されたものであろう。なお、678土坑の東端部に設けられた南北方向の欄10は、東の生活空間と谷筋を区切るための機能をもっていたと考えられる。

681溝（図56・63）

678土坑の下層で検出した東西溝で、約11m分検出した。幅60～70cm、深さ10～20cmの小溝である。底部標高は東端で32.2m、西端で31.88mと西に向かって緩やかに下がり、前述したように2区南西突出部の233溝に連続すると考えられる。

第3節 古代から中世の遺構

古墳時代遺構面上層は、第1節の基本層序で述べたように中世以降の耕作土層が堆積しており、遺構としては、畦畔本体および畦畔に付随する遺構と田面遺構のみである。古墳時代の遺構群が廃絶した後は、この地域では人々の居住を示す遺構は全く確認できず、稲作を中心とする生産地としての土地利用が連続と続けられた。少なくとも中世から現代に至るまでは水田耕作地として同じ景観を呈していたと思われる。

ところで、中世遺構面としては第1面中世田面において、14世紀に遡る水田関係遺構を調査したが、古墳時代遺構面においても、さらに遡る畦畔の痕跡を溝群として確認している。ここでは、古墳時代遺構面で検出した畦畔関係遺構群を、時期不明であるが「古代～中世の田面遺構」として報告し、上層第1面で検出した遺構を「中世の田面遺構」として項をわけて報告する。

1 古代～中世の田面遺構 (図64)

古墳時代遺構面で検出した畦畔に関わる溝群である。すべて古墳時代の遺構を切っており、古墳時代の集落が廃絶した後に形成されたことは確実である。ただ、時期を示す遺物はまったく出土せず、現状では水田利用が開始された当初の状況を示す遺構群として把握している。

溝群を概観すると、調査地北半では後の畦畔箇所と重複するように溝群を検出している。坪境の大畦畔(畦畔1)の位置に南北溝である48溝があり、坪内を南北に分割する106・822溝も上層の畦畔(畦畔2)と重複する。この106・822溝の北側では、畦畔の痕跡と思われる南北溝が西から894・907・1089・1173・105溝があり、田面の東西幅を示すと考えられる溝間の距離は、西から約17m、約14m、約11m、約13m、約7mである。

これに対し、南半の様相は北半とかなり異なっている。822溝の南約6mで東西溝の75・76・79溝を検出しているが、これらの溝は東に行くに従って南へ湾曲しており、 $Y = -28,385$ ラインで南北方向に曲がるようである。このような湾曲溝は東側でも14・26溝が認められ、4区東端部で検出した南北溝の541溝では、106溝から直線的に南へ延びる溝がこれらの湾曲溝に対応するかに南半で東へ湾曲する。また、76・79溝の西への延長も、48溝を越えて807溝が西へ延びており、北半部と比較してこれらの溝の南では水田耕作があまり行なわれた痕跡が認められない。

古墳時代の遺構を観察すると、この部分に小さな谷が入り込んでいる。古墳時代の集落が廃絶した後も、この谷筋が段丘上の基幹排水として機能していたため、水田開発が遅れたことを示唆すると考えられる。後述するように、中世田面では75・76・79溝の場所に東へ大きく湾曲する南北畦畔(畦畔8)が存在する。このような畦畔は、谷筋が水田化される過程の中で地形に規制されて形成されたものと考えられる。

2 中世の田面遺構 (図65)

中世田面を検出するうえで鍵層となったオリブ黒色細粒砂層より上層で検出した田面遺構群である。以下で畦畔遺構とそれに付随する遺構、そして各田面との関係について説明を加える。

畦畔1 (図版27-3)

1区西半から2区西端部で検出した坪境の大畦畔である。幅2.8mあり、中央に用水溝と考えられる南北溝が設けられている。用水溝の幅は約70cm、深さ約25cmで、底部標高は2区南端で約32.4m、1区南端で約32.3m、1区北端で約32.25mと南から北へ緩やかに下がる。また、畦畔を西に下がった裾部にも深



图64 古代~中世遺構配置図

さ5～10cmの南北方向の溝状遺構が設けられており、2区では東の田面8から用水溝への排水溝を検出している。この大畦畔を構築するにあたっては、地盤が安定している北半部では直接盛り上げて畦畔を形成するが、地盤面が谷筋にあたる南半部では西裾部の一部に人頭大の石を据えてから土盛りを行なっているのを確認した。畦の上部はほとんど削平を受けているが、南端の残りのいいところで田面8から10cmほど高まる。大畦畔を境とする東西の田面の比高差をみると、北半部では東の田面4が標高約32.6m、西の田面9が標高約32.1m、南半部では東の田面8が標高約32.6m、西の田面10が標高約32.15mで、約50cmほど西側の田面が低くなっていた。

畦畔2 (図66上、図版26-2)

1区から3区にかけて東西に作られた幅1.5～2mの畦畔である。遺存条里地割の南坪境を踏襲する現代用水溝から北へ約40mに位置し、不規則ながら坪内の半折畦畔として機能したと考えられる。畦畔1に直交して東に延びるが、畦畔1から約50mの地点で北にやや湾曲する。畦の高さは、残りのいいところで、田面から15cmほどである。畦畔の中心に幅40cm～1mの用水溝が設けられており、畦畔1の用水溝と合流する。用水溝の深さは場所によって異なるが、底部標高は東端で約33.3m、中央東寄り約33.0m、中央西寄り約32.9m、西端で約32.6mと東から西へ下がっている。また、畦畔5の用水溝への分岐点において、人頭大の花崗岩を袖石として平瓦を堰に再利用した施設が設けられており、この東では溝底部に平瓦を2枚敷いていた。なお、畦畔1と畦畔2は直交して基幹用水をもつことから、条里地割の基準となったと考えられるが、真北に対するこれらの畦畔の振れは $N-12^{\circ}-W$ であった。

畦畔3

1区東端から2区にかけて検出した南北方向の畦畔である。北は調査区外に延び、南は畦畔2と繋がる。畦の幅は約1.5m、田面1から約15cmの高まりで、用水溝は伴わないが、西側裾部の一部に浅い溝状の落ち込みが認められる。東の田面1が標高約33.7m、西の田面2が約33.2mで、東西の田面の標高差は約50cmである。

畦畔4 (図66下、図版26-3)

1区中央やや東寄りに検出した南北方向の畦畔である。北は調査区外に延び、南は畦畔2と繋がる。畦の幅は約2.2mで、東側の高い畦と西側の低い畦の間に用水溝を伴う。畦の高さは田面2から10cmほどである。用水溝の幅は60～70cm、底部標高は南端で33.0m、北端で32.87mと緩やかに北に下がっており、畦畔2用水溝から北に分流している。用水溝内には、 $X=-134.685$ ライン付近で花崗岩の板石を2つ立てた堰を設けている。また、この堰の約1m北側には、東側の畦内に川原石を並べて溝とした排水口を作る。東の田面2が標高約33.2m、西の田面3が約32.8mで、東西の田面の標高差は約40cmである。

畦畔5

1区中央部やや西寄りに検出した南北方向の畦畔である。北は調査区外に延び、南は畦畔2と繋がる。畦畔の高まりは削平のためほとんど消滅しているが、中央の用水溝が残る。溝幅は70cm～1m、底部標高は南端で32.7m、北端で32.55mと緩やかに北に下がっており、畦畔2用水溝から北に分流している。東の田面3が標高約32.8m、西の田面4が約32.6mで、東西の田面の標高差は約20cmである。

畦畔6

4区東端で検出した南北方向の畦畔である。北は畦畔2と繋がると考えられ、南は調査区外に延びる。畦畔の高まりは削平のためほとんど消滅しているが、段差として痕跡が残る。また畦の西側で、排

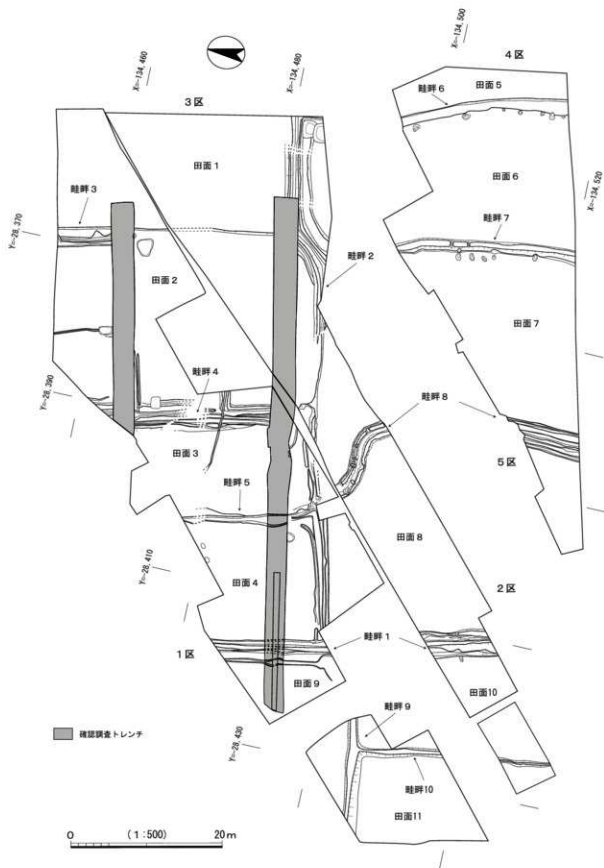


図65 中世遺構面平面実測図

水口からの水落ちによって形成された窪みを数箇所確認した。東の田面5が標高約33.6m、西の田面6が約33.4mで、東西の田面の標高差は約20cmである。

畦畔7 (図版28-2)

4区から5区にかけて検出した南北方向の畦畔である。北は畦畔2と繋がると考えられ、南は調査区外に延びる。畦畔の幅は約1.5mで、田面6から5cmほどの高まりが残る。畦上には2箇所排水口が確認でき、畦の西側では排水口からの水落ちによって形成された窪みを数箇所確認した。東の田面6が標高約33.4m、西の田面7が約33.0mで、東西の田面の標高差は約40cmである。

畦畔8 (図67・68、図版27-1・2)

2区中央部から5区西半にかけて検出した、大きく東へ湾曲した南北畦畔である。北は畦畔2と繋がると考えられ、南は調査区外に延びる。幅は2～2.5mで、東側の高い畦と西側の低い畦の間に用水溝を伴う。畦の東の高まりは田面7から10cmほどである。用水溝の幅は50cm前後で、底部標高は5区で約32.6m、2区でも32.6m前後、1区の畦畔2用水溝との合流点も32.55mと傾斜が極めて緩やかであるが、おそらく南から北に流れていたであろう。東側の畦内に排水口を数箇所確認しており、溝内には排水口からの水落ちによって形成された窪みも検出している。東の田面7が標高約33.0m、西の田面8が約32.6mで、東西の田面の標高差は約40cmである。なお、2区南壁断面で観察できるように、中世から現代まで同一位置に連綿と畦畔が形成され続けている。

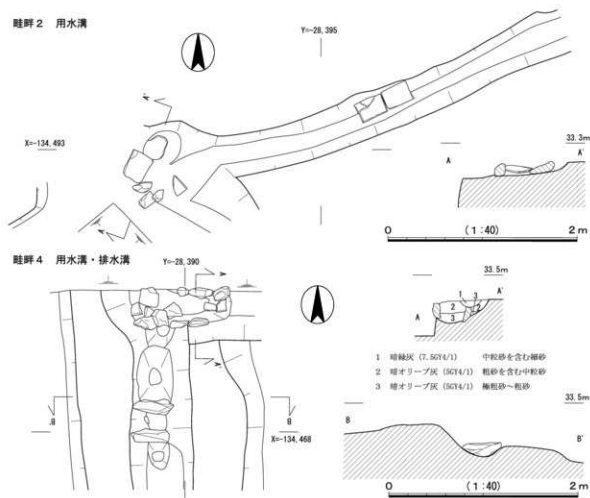


図66 畦畔2・4実測図

畦畔9・10 (図版28-3)

大畦畔1の西側で検出した小畦畔である。畦畔9は、1区西端部で検出した東西畦で、東は畦畔1と繋がると考えられ、西は調査区外に延びる。幅1.3~2mで、当初は用水溝を伴わないが、後に畦畔2用水溝からの水量を畦畔1用水溝で受け切れなくなり、少なくとも近世には畦畔2から連続する東西用水溝が構築されるようである。北側の田面9からの高まりは15cm前後である。畦畔10は1区西端部から2区西端部にかけて検出した南北畦で、幅1mほどの高まりをもつ。なお、畦畔9・10で分割される田面の標高差は、田面9が標高約32.1m、田面10が約32.15m、田面11が31.7mと、田面11が40cm以上下がる。

田面1~11

前述してきた畦畔群によって区切られた田面の幅は、旧地形に規制されて不規則な様相を呈している。半折の畦畔2より北では方形の田を形成していたようで、田面4が幅約17m、田面5が幅約13m、田面2が幅約12m、田面1が15m以上となっている。畦畔2より南では、下層に43溝から678土坑へつながる谷筋があるため畦畔が東へ湾曲しており、東西幅も田面8が約30m、田面7が約22m、田面6が約19m、田面5が5m以上と、北半とは対応しないようにみえる。しかし、畦畔3は畦畔7と、畦畔4は南への延長として畦畔8と対応しており、一定の土地区画の規制が伺える。田面の標高は、北東の田面1から南西の田面11まで段々と西へ低くなっており、畦畔2用水溝を中心に通すことで、これらの田面に満遍なく水を供給できるようになっている。なお、田面上では粗粒砂を包含する足跡が多く検出できた。また、畦畔も含めて田面包含層からの遺物は、土器の細片がほとんどであった。

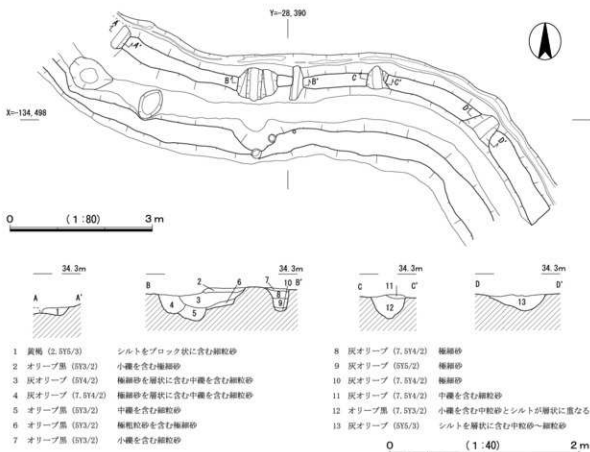
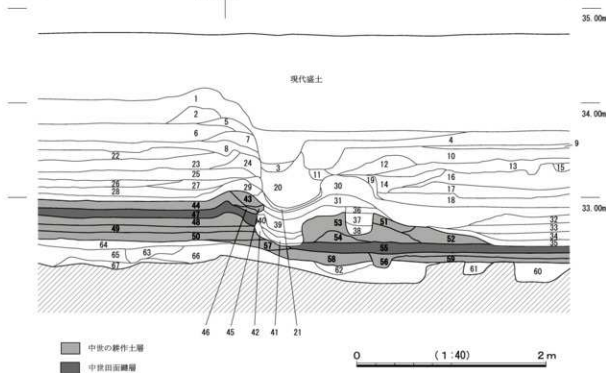


図67 畦畔8実測図

(N-E)

X=134,500

(S-W)



1 灰 (5T4/1)	粗粒砂	35 灰 (7.5T4/1)	大礫を含む細粒砂 (炭化物を含む)
2 黄褐 (2.5T5/3)	粗粒砂	36 灰 (7.5T4/1)	細粒砂と粗粒砂 (2.5T5/4) が層状に重なる
3 オリーブ灰 (5G15/1)	中粒砂	37 灰 (10T4/1)	粗粒砂
4 暗灰黄 (2.5T4/2)	中粒砂	38 灰 (7.5T4/1)	極細粒砂 (炭化物を含む)
5 オリーブ黄 (5T6/3)	極細粒砂	39 灰オリーブ (5T6/2)	中礫
6 黄褐 (2.5T5/4)	中粒砂	40 オリーブ灰 (2.5G15/1)	極細粒砂
7 緑灰 (10G15/1)	極細粒砂	41 灰 (7.5T4/1)	中粒砂
8 浅黄 (2.5T7/4)	粗粒砂	42 灰オリーブ (5T6/2)	極細粒砂
9 暗灰黄 (2.5T4/2)	粗粒砂	43 灰 (7.5T4/1)	中粒砂
10 緑灰 (10G15/1)	粗粒砂	44 灰オリーブ (5T4/2)	大礫を含む細粒砂
11 にぶい黄 (2.5T6/3)	極細粒砂	45 灰 (7.5T4/1)	中粒砂を含む極細粒砂
12 緑灰 (10G15/1)	中礫を含む細粒砂	46 灰 (7.5T4/1)	極細粒砂
13 暗灰黄 (2.5T5/2)	大礫を含む粗粒砂	47 灰 (5T4/1)	中粒砂 (中世田面遺層)
14 にぶい黄 (2.5T6/4)	極細粒砂をブロック状に含む小礫	48 灰 (7.5T4/1)	細粒砂
15 黄褐 (2.5T5/4)	小礫を含む粗粒砂	49 灰 (10T4/1)	中粒砂
16 暗灰黄 (2.5T4/2)	極細粒砂	50 灰 (7.5T4/1)	粗粒砂
17 浅黄 (2.5T7/3)	細粒砂と極細粒砂が層状に重なる	51 灰 (7.5T4/1)	中粒砂
18 暗オリーブ灰 (5G14/1)	中礫を含む細粒砂	52 灰 (7.5T4/1)	細粒砂 (炭化物を含む)
19 灰 (10T5/1)	細粒砂	53 灰 (5T4/1)	粗粒砂
20 浅黄 (2.5T7/3)	小礫	54 灰 (7.5T4/1)	中粒砂 (炭化物を含む)
21 灰 (7.5T4/1)	粗粒砂を含む中粒砂	55 灰 (5T4/1)	粗粒砂を塊状に含む中粒砂 (中世田面遺層)
22 灰 (10T4/1)	大礫を含む細粒砂	56 灰 (7.5T4/1)	粗粒砂 (5T4/2) を層状に含む粗粒砂
23 暗オリーブ灰 (2.5G14/1)	極細粒砂	57 浅黄 (2.5T7/3)	細礫
24 灰オリーブ (7.5T5/2)	極細粒砂をブロック状に含む中粒砂	58 灰 (5T4/1)	中粒砂 (炭化物を含む)
25 灰オリーブ (5T5/3)	極細粒砂	59 灰 (5T5/1)	中粒砂
26 灰オリーブ (5T4/2)	粗粒砂	60 灰 (5T5/1)	中粒砂
27 灰オリーブ (5T4/2)	粗粒砂	61 灰 (7.5T4/1)	大礫を含む粗粒砂
28 灰オリーブ (5T4/2)	中粒砂	62 灰 (7.5T4/1)	極細粒砂
29 灰 (7.5T4/1)	極細粒砂を含む極細粒砂	63 オリーブ黒 (7.5T3/2)	細粒砂
30 にぶい黄 (2.5T6/3)	粗粒砂	64 灰 (7.5T4/1)	粗粒砂
31 灰 (10T4/1)	小礫を含む中粒砂	65 オリーブ黒 (7.5T3/1)	粗粒砂を含む細粒砂
32 オリーブ黒 (2.5T4/3)	大礫を含む粗粒砂	66 オリーブ黒 (7.5T3/1)	粗粒砂
33 にぶい黄褐 (10T14/3)	中礫を含む細粒砂 (炭化物を含む)	67 オリーブ黒 (7.5T3/1)	中粒砂
34 灰 (7.5T4/1)	中礫を含む極細粒砂 (炭化物を含む)		

図68 2区南壁 畦畔8断面実測図

第4章 遺物

第1節 古墳時代の遺物

1 土器類

古墳時代の土器類は、主に建物群を区画する溝や土坑から須恵器と土器が多量に出土しており、出土遺物の大半を占めている。器種別にみると須恵器では圧倒的に杯が多くを占めているが、貯蔵具の壺や甕腹破片も一定量出土している。とくに、甕腹片は内側に当て具痕跡を残す事例が多いが、内面を擦り消した資料も少なからず認められる。

これに対し、土器器は須恵器とは逆に、甕や甌などの煮沸具の土器が多く出土しており、饗膳具では土師器高杯の破片も多く認められる。ちなみに、当調査地全体で把手部破片を126点確認しており、単純に考えても63個体以上の把手付きの甌や鍋甕類が遺跡内に存在し、煮沸具全体としてはそれ以上あったことになる。高杯は脚部破片で46本確認している。

これら須恵器の貯蔵具や土師器の煮沸具の土器などは、接合資料が少なく図化できなかった資料が多い。このため、ここで報告する土器類も必然的にこれらの資料は相対的に少なくなり、須恵器杯が主流にならざるを得ない。ただ、個体数に換算してみると出土遺物の中で須恵器杯が最も多くなることは間違いなく、遺跡全体の遺物の様相を知るうえで大きな支障にはならないであろう。

また、同一遺構から出土する土器類の時間幅についても、検出した遺構の性格上、一括遺物としての性格は乏しく、ある程度の時間幅を想定せざるを得ない。しかし、土器の形態を見る限り、大幅な型式差を示すものではなく、むしろ各遺構から出土した土器群をありのままに報告することが、遺構群の成立や変遷・展開を考えるうえで重要と考えている。ここでは、須恵器杯類を中心に、各遺構から出土した主要な土器類について報告する。

なお、ここでは実測図に掲載したすべての個体の説明は行なわないため、別に個々の遺物の観察表を作成している(表4)。また、土器群の年代についても概略的な年代を示すにとどめ、章を改めて検討してみたい。

435・983住居、982方形竪穴状遺構出土土器(図69、図版29)

これらの遺構から出土した遺物は細片が多く、図示できる資料は少ない。その中でも、435住居では口径15~16cmの須恵器杯蓋1・2が出土している。稜線は鈍いながら残り、口縁端部内側の段も明瞭で、その他の遺構から出土する遺物と比較して古い属性を残している。時期的に6世紀前半のものであろう。とくに、杯蓋2は改築された甕の構築土内から出土しており、竪穴住居が使用されていた時期を示している。その他、甕西側のピットや包含層から土師器高杯3・4や小甕5などが出土し、甕内からは土圧で潰れた状態の甕6が出土している。

983住居と982方形竪穴状遺構から出土した遺物は、さらに少ない。983住居の甕西側でやや土器片が集中して出土しており、そこから須恵器の杯蓋7・杯身8が出土している。杯蓋7はやや稜線が鋭い資料であるが口径は約14cmと小振りである。杯身8も小振りで、底部ヘラズリが粗く未調整部分が中心部に残り、内面に当て具痕跡が残る。435住居よりも時期的に下がる可能性がある。また、982方形竪穴状遺構から出土した須恵器杯蓋9は、推定口径が13.5cmとさらに小振りで稜線も鈍く、竪穴住居よりも

435住居・983住居・982方形竪穴状遺構

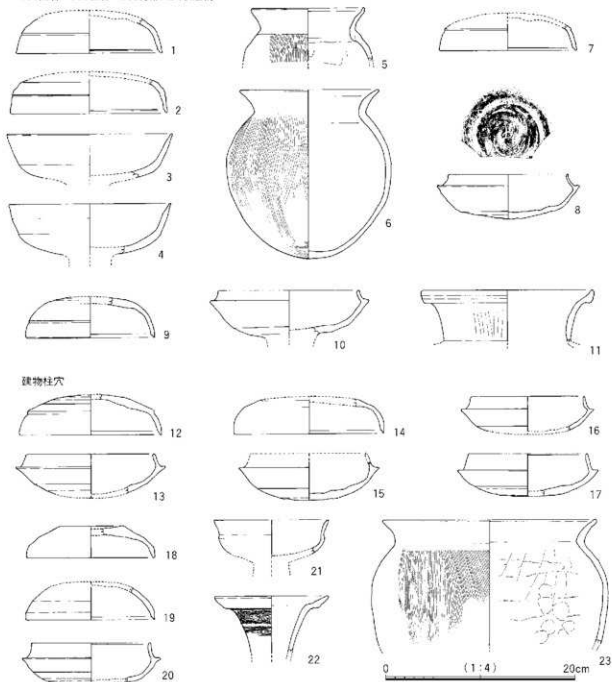


図69 竪穴住居・方形竪穴状遺構・建物柱穴出土土器実測図

新しい様相をもつ。なお、982方形竪穴状遺構の覆土内で検出した浅い落ち込みから、脚部を欠損した長脚高杯10が伏せた状態で出土している。

建物柱穴出土土器 (図69、図版29)

建物柱穴から出土する遺物は細片化したものがほとんどで、遺構の性格から建物の想定年代よりも古い型式の土器が出土する傾向にある。

建物3・4から出土した須恵器杯蓋12と杯身13は、稜線がしっかりしており古い様相を呈しているが、建物自体は柱穴の切り合い関係から最も新しい段階のものである。建物3・4と同時期と考えられる建物34柱穴からは、稜線は完全に消滅し推定口径も13.6cmと小さくなった須恵器杯蓋19が出土している。

また、建物26柱穴から出土した甕22も口頸部が細長く型式変化しており、6世紀末から7世紀初頭の年代を与えることができる。古い段階に想定できる建物群では、建物10の柱穴から無蓋の長脚高杯21が出土しており、建物7・25柱穴から出土する須恵器杯蓋14と杯身15・16・17は、6世紀前半から中ごろに比定できるものである。図示できなかったが、建物7柱穴からは口縁端部外面に刻み目状調整を施す杯蓋片が出土している。

なお、建物29柱穴から出土した須恵器杯蓋18は、稜線が完全に消滅し口径も小型化しているだけでなく、天井部ヘラケズリも認められず未調整である。型式としては7世紀前半まで下げるのが妥当であるが、1点のみの出土であり混入の可能性もあるため、建物の造営年代を示す遺物としては保留しておく。

全体として遺物が出土する建物柱穴は非常に少なく、造営と廃絶の時期差を示す掘り方と柱痕跡との遺物の分別も不可能であった。このため、大きく傾向を把握することはできるが、出土遺物から厳密な造営年代を導くことは難しいであろう。

842溝出土土器（図70、図版30）

西区画溝群のうち東側の842溝からは、古い型式の土器群と新しい型式の土器群が出土しており、存続時期の長さを想定することができる。須恵器杯では稜線を残す杯蓋24と、稜線が全く消滅する杯蓋25・26があり、杯蓋26では天井部のヘラケズリ調整が非常に粗く、ヘラ切り痕跡が中央部に広く認められる。ただ、推定口径は15cmを越えており、いまだ小型化していない。天井部に十文字のヘラ記号が施される。杯身27は口径13cm弱の小型化したもので、口径16cmの大型杯身28も出土している。これら新しい段階の須恵器群は、6世紀後半に位置づけることが可能であろう。

甕では外面にハケ調整を行う土師質のものが一般的で、把手の形状が舌状に反り上がる甕39と、体部形態は不明だが牛角状把手の上部に切り込みぎみの穿孔を施す甕36がある。甕38では、口縁から5cm下の内側に凹穴が施されていた。また、6世紀の資料としては珍しい須恵器の甕33が出土している。体部外面をハケ調整し、把手の付着位置を示す沈線を2条巡らした後、やや扁平な棒状把手を接合する。この他、土師器では鉢34が出土しており、壺35はほぼ完形で溝内に横たわっていた。

なお、図48によって出土地点を押さえることができる資料は、北から甕39が土器1で土器2も土師器甕の破片群である。そして、須恵器甕32が土器3、須恵器壺31が土器4、須恵器甕33が土器5、土師器壺35が土器6である。

844溝出土土器（図71・72・85、図版31）

西区画溝群の西端の844溝は、前述したように新旧2時期の切り合い関係が認められたが、出土遺物についてはそれらを分離することはできなかった。ただ、土器群をみると型式のまとまりが強く、842溝よりも古い様相をもっている。

須恵器杯蓋は口径15cm前後のものが主流で、杯蓋41・42・43のように凹線状に稜線を表現するタイプと、杯蓋40や44のように不明瞭な段や稜で稜線を表現するタイプがある。杯蓋40は推定口径が15cmを超えるが、他の口径は14～15cmに収まる。杯身45～53は口径13cm前後で、やや内傾する立ち上がりは共通している。また、口径21cmを越える大型杯身54が出土している。高杯は稜線が鈍くなった蓋55とともに、内湾ぎみで透かしを施す有蓋の短脚高杯56・57・58が多く認められ、2段方形透かしでカキメを施す長脚高杯61・62もある。これら杯類のうち、蓋44、身47・50・53、高杯蓋55、高杯58などの内面には当て具痕跡が明瞭に残る。また、杯身47の体部側面に朱線の痕跡がみられる。

その他、甕60は体部中央に巡らされた2条の沈線間に、カキメと列点文で装飾を施している。大甕63

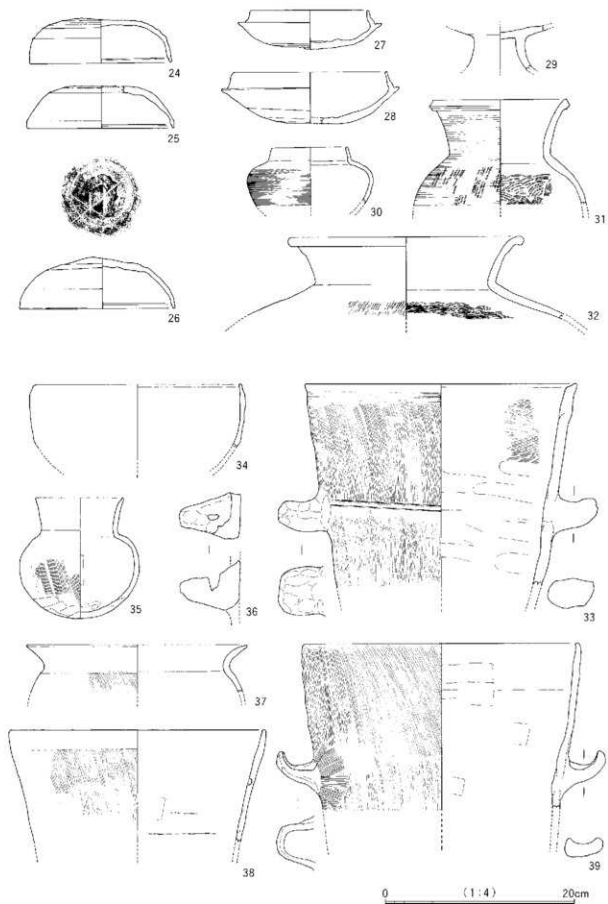


图70 842溝出土土器実測図

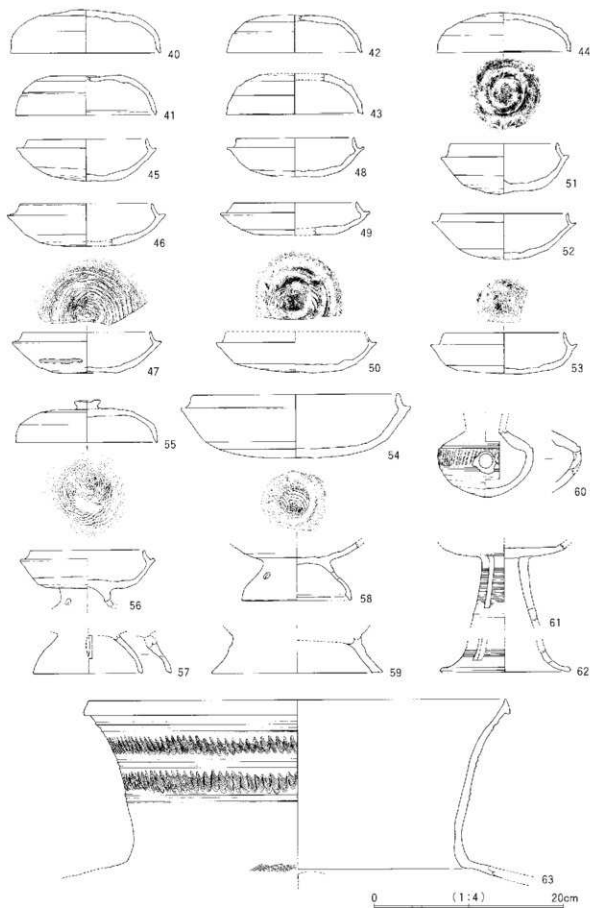


图71 844溝出土土器实测图(1)

は肩部に細かい格子叩きを施し、内面の当て具痕跡を擦り消すなど古い様相をもつが、口頸部の突帯は凹線状に削り出しており、波状文が乱れて突帯の一部を切っているなど、型式の退化傾向が窺える。これら杯を中心とする須恵器の様相から、6世紀前半から中ごろを中心とする年代を与えるのが妥当であろう。土師器については、甕64～66や鍋67にみられるように、煮沸具の破片が多く出土するが、図示できる資料は非常に少ない。

なお、842溝と同様に、出土地点を押さえられる資料が多くある。須恵器大甕63は土器群1から出土しており、外面細かい格子叩きで内面を擦り消した同一固体資料の甕腹290・291は、やや南に離れた土器群2から出土している。この他、土器群3からは土師器甕66と鍋67、土器群4からは須恵器高杯蓋55、土器群5からは須恵器杯蓋40、土器群6からは須恵器杯身46、土器群7からは須恵器甕60、土器群8からは須恵器杯身51、土器群9からは須恵器杯身50が出土している。

136溝出土土器（図73、図版32）

北区画溝の新しい段階の溝から出土した土器群である。須恵器杯蓋68は鈍い稜によって稜線を形成するもので、天井部ヘラケズリも粗く中心部まで及ばない。杯蓋69は口径が17cm弱と大きく、凹線状に表現した稜線も鋭く、杯蓋68よりも古い様相をもっている。杯身70・71は口径13cm前後で、立ち上がりはやや短く内傾しているのに対し、杯身72・73は口径12cm前後とやや小さいが立ち上がりが長い。なお、杯身73の底部外面に一文字の朱記号が施されており、内面には当て具痕跡が残っている。

その他の須恵器として、大型杯身74、壺75、器台76、鉢78が出土している。大型杯身74は口縁が欠損しているが口径約22cmに復元できるもので、当て具によって底部に丸みを持たせ手持ちヘラケズリで形を整えている。鉢78はいわゆる擦り鉢状の鉢で、円盤状の底部からコップ形に体部が立ち上がる。器台76は脚部の破片で、列点文による装飾が施されている。土師器は甕や甔などの破片が多く出土しているが、図示できたものは高杯79のみであった。

これらの土器群とともに、新羅土器の長頸壺77が共伴して出土した。頸部から口縁部にかけての破片で、頸部は外反しながら外上方に立ち上がり、口縁部で上方に屈曲する。口縁端部は内傾する広い面を持ち、内側を肥厚させて断面撥形に仕上げている。体部と頸部の境界に1条の削り出し突帯、頸部から口縁部への変換部に2条の削り出し突帯を巡らす。また、頸部は2条の削り出し突帯によって外面を上下3分割し、上段と下段には縦方向の短い櫛描き文を交互に3段配して市松模様状とし、中段には列点文で接続鋸歯文を表現する。櫛描き文と接続鋸歯文は同じ施文具による。

上私部遺跡で出土する須恵器は、ほとんどが砂粒を多く含む在地産と考えられるのに対し、長頸壺77は胎土が非常に緻密で、焼成も硬く焼き締まっており、色調は外面灰色で破面は灰赤色を呈するなど、明らかに産地が異なる舶載資料である。

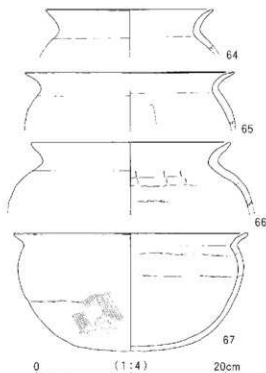
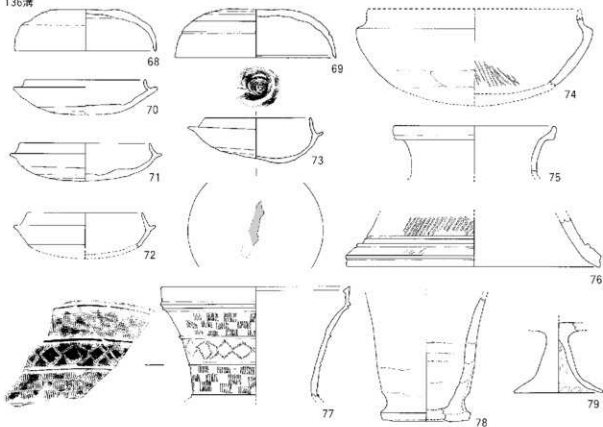


図72 844溝出土土器実測図（2）

136清



138清

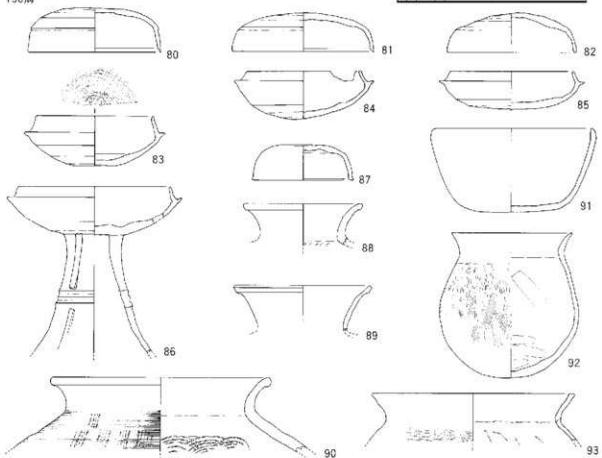
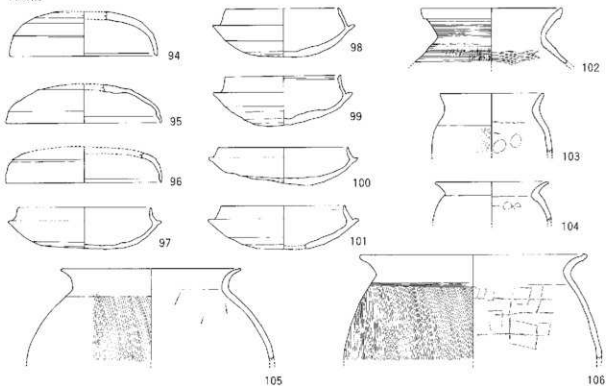


图73 136·138清出土土器实测图

1090 漢



1092 · 1093 · 1094 · 1100 漢

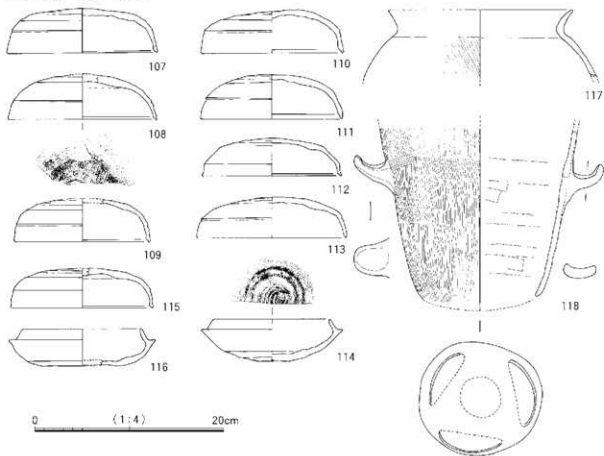


图74 1090·1092~1094·1100 漢出土土器実測図

138溝出土土器 (図73・85、図版33)

北区画溝の古い段階の溝から出土した土器群であるが、136溝の土器群と明瞭に掘り分けることが困難であり、新旧溝の資料が混在している可能性もある。須恵器杯蓋は稜線が鋭い杯蓋80が溝下層から出土しており、同じく下層からは立ち上がりが長く古い形態をもつ杯身83が共伴する。この杯身の内面には当て具痕跡が残る。

その他の須恵器杯は、稜線が鈍い杯蓋81・82と立ち上がりがやや短く内傾する杯身84・85で、杯身84の口縁部は一部欠損する。また、長脚方形2段透かしをもつ高杯86も出土している。これらは136溝出土の須恵器杯とあまり型式差は認められず、136溝へ連続する新しい様相として認識することができる。

また、須恵器甕90は外面叩き後にカキメ、内面は当て具痕跡を明瞭に残す資料で、同様の甕腹片も多くみられるが、中には外面に細かい格子叩き痕跡が残るが内外面ともに丁寧なナデ擦り消しを行なう甕腹292や、外面は細かい平行叩きで内面擦り消しの甕腹293も出土している。これらは844溝から出土した格子叩き内面擦り消し甕63・290・291とともに、6世紀前半まで内面擦り消しの甕が多く残ることを示唆している。

なお、土師器は136溝と同様に甕や甔などの破片が多く出土しているが、ここでは鉢91、壺92、甕93を図示しておく。鉢91は口径16.5cmに対して高さ8.2cmの深い平底の鉢である。壺92は胎土に砂粒を多く含む小甕の形態をもつが、体部外面に黒斑が残り底部には火にかけられた痕跡が認められない。

1090・1092～1094・1100溝出土土器 (図74、図版34)

136・138溝北側の区画溝から出土した土器群である。1090溝からまともな土器類が出土したが、他の溝からはあまり遺物は出土しなかった。1090溝から出土した須恵器杯蓋は、稜線を残す杯蓋94・96と、稜線がほとんど消失して口縁部の屈曲だけとなる杯蓋95があるが、推定口径では16cm強と小型化していない。杯身は立ち上がりがやや短い杯身97・100・101と、立ち上がりが直線的に長い杯身98・99に分かれている。前者は口径13～14cmであるのに対し、後者は口径12cm前後とやや小さい。このような須恵器杯身の傾向は、136・138溝と共通する。土師器は広口壺103、小甕104、甕105・106などが出土している。

1092溝からは須恵器杯蓋107・108が出土している。口径16cm弱で小型化しておらず、稜線も明確に意識していることから、やや古い様相をもつといえる。その他の溝から出土した須恵器杯蓋109～113・115では口径15cm弱とやや小振りのものが多く、稜線の明確なもの他に、112のように稜線が消滅して口縁の屈曲するものが認められる。杯身114・116は立ち上がりがやや短く、口径も12cm強となっている。杯蓋108や杯身114内面などに当て具痕跡が残る。

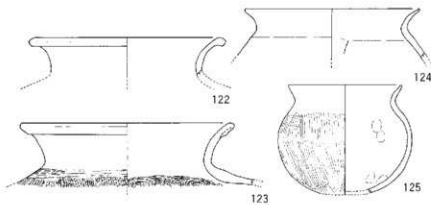
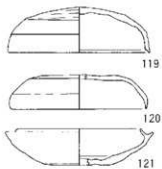
土師器は甕117と甔118を図示している。甔118は把手の形状が舌状に反り上がっており、底部には丸みを帯びた半月形の穿孔の痕跡が3箇所認められた。おそらく底部は、中央の円孔の周囲に3箇所の半月形穿孔を巡らすタイプであったと想定できる。

1087・1088・1095土坑出土土器 (図75、図版34)

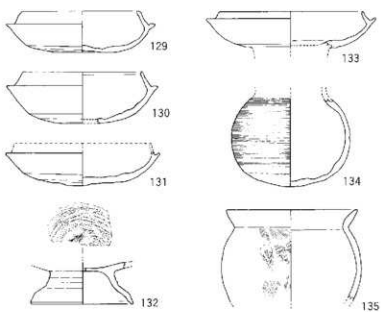
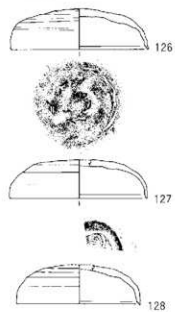
136・138溝が埋没した後で形成された土坑群から出土した土器類である。須恵器杯に関しては136・138溝と共通する要素が非常に多いが、1087土坑から出土した杯蓋120は稜線が完全に消滅し天井部ヘラケズリが中央まで及んでおらず、杯身121は立ち上がりが非常に短く底部はヘラ切り未調整であった。

1088土坑からは稜線が退化し、口径も13cmと小型化した杯蓋128が出土しており、体部が球状でカキメが外面に施された壺134も認められる。貯蔵具では1087土坑から口縁端部が丸く肥厚する甕122・123が出土した。なお、杯蓋128の内面には、黒漆が多量に付着していた。

1087土坑



1088土坑



0 (1:4) 20cm

1095土坑

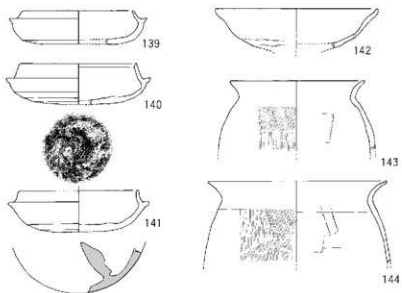
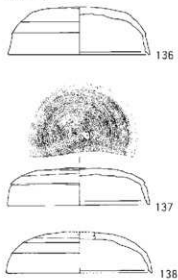


图75 1087·1088·1095土坑出土土器实测图

遺物群全体には古い土器類が多く混入するが、最も新しい段階の遺構であることは問題ないであろう。なお、杯蓋126・127、杯身141、高杯132の内面には当て具痕跡が残る。また、杯蓋137天井部には一文字のヘラ記号が、杯身141底部外面には朱記号が施されている。

なお、土師器は1087土坑から広口壺125が、1095土坑ではやや粗雑な作りの高杯142が出土している。煮沸具は全体的に甕多く出土し、甕124・135・143・144を図示している。

113溝、437土坑出土土器 (図76)

東区画溝関係の遺構から出土した土器類である。須恵器杯蓋145～147は口径14cm前後とやや小型であるが、杯蓋148では口径17cmと大きく、稜線は概して明瞭に残っている。杯身149・150は推定口径13cm弱で、前者は立ち上がりやや長い。土師器は煮沸具の破片が主流だが、把手付鉢151が113溝から出土している。

55・81・387溝出土土器 (図77、図版35)

南区画溝群のうち55溝から出土する遺物は、ほとんどが図示できない須恵器杯・甕の小片や土師器甕の破片である。ただ、西端部において口縁部だけが欠損した甕164が、1点横たわるように出土している。そのほかの大半の遺物は81溝と387溝から出土した。

81溝から出土した須恵器杯をみると、杯蓋152・153は稜線がほとんど消滅しており、153では口径も14cm弱と小さくなっている。さらに、杯身154では口径11cm強と小型化が進み、立ち上がりも非常に短い。同様に387溝でも口径13cm弱で立ち上がりの短い杯身169・170が出土しており、6世紀末の年代を与えることができる。

ただ、81溝では高杯159～161などの透かしをもつ短脚高杯が多く出土しており、推定口径14.4cmの杯身156や推定口径17cm弱の大型杯身162もみられる。387溝でも立ち上がりはやや短い古い形態の杯身168などが出土していることから、溝の成立は6世紀中ごろまで遡る可能性がある。なお、杯身156内面には当て具痕跡が残る。土師器は煮沸具が多く出土しているが、図化できたものは甕166・174・175、甕176である。また、把手付鉢の良好な資料173も出土している。

535溝出土土器 (図78・79・85、図版36・37)

535溝からは比較的まとまって土器群が出土している。須恵器杯蓋177～183は口径15cm前後で稜線が比較的明瞭な資料が多い。杯身185～192も口径13cm弱で、比較的立ち上がりが長くなっている。相伴する高杯193は短脚で円形の透かしをもつ。これらは型式的にも非常にまとまっていることから、6世紀前半の良好な資料群といえる。とくに、杯蓋177・179の口縁部外面には、ハケによる刻み目状調整が認められ注目できる。なお、杯身185底部には一文字の朱記号とヘラ記号が施されており、杯蓋178・180、杯身189・192、高杯193の内面には当て具痕跡が残る。

また、この他の須恵器として壺194や甕195、あるいは体部が球状となった横瓶196が出土している。甕腹資料については、内面当て具痕跡を残すものが多いが、外面に細かい平行叩きを施す内面擦り消しの甕腹294・295も出土しており、138溝出土遺物でみたように6世紀前半段階まで内面擦り消し甕が残る

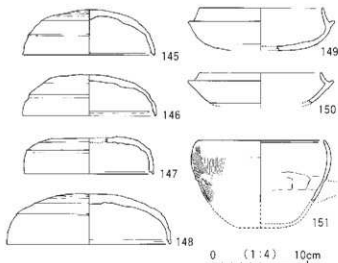
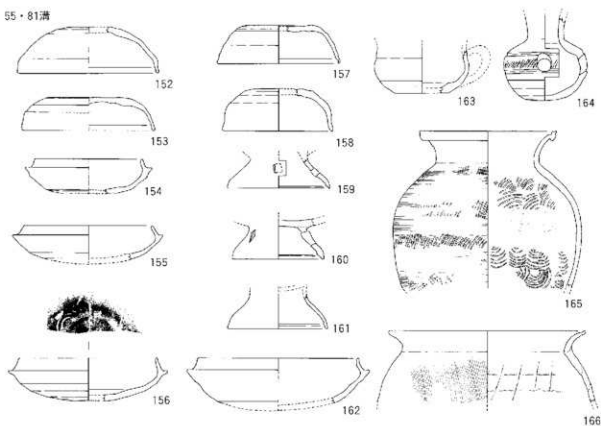


図76 113溝、437土坑出土土器実測図

55・81溝



387溝

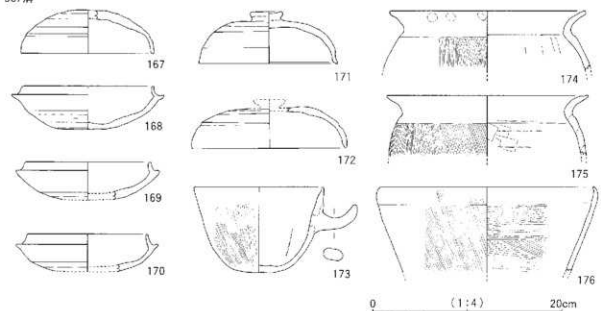


図77 55・81・387溝出土土器実測図

事例となる。

土師器は要膳具として碗197や高杯198～200が認められる。高杯199は脚部がラップ状に外反し、杯部も緩やかに碗状に開くタイプであるが、高杯200は柱状の脚部で杯部には口縁の屈曲線が認められる。煮沸具では小甕201・202、甕203～205とともに、把手杯甕206や甕207が出土している。これらの把手は舌状に反り上がる形状で、甕207の底部には3箇所の半月形穿孔の痕跡が認められる。

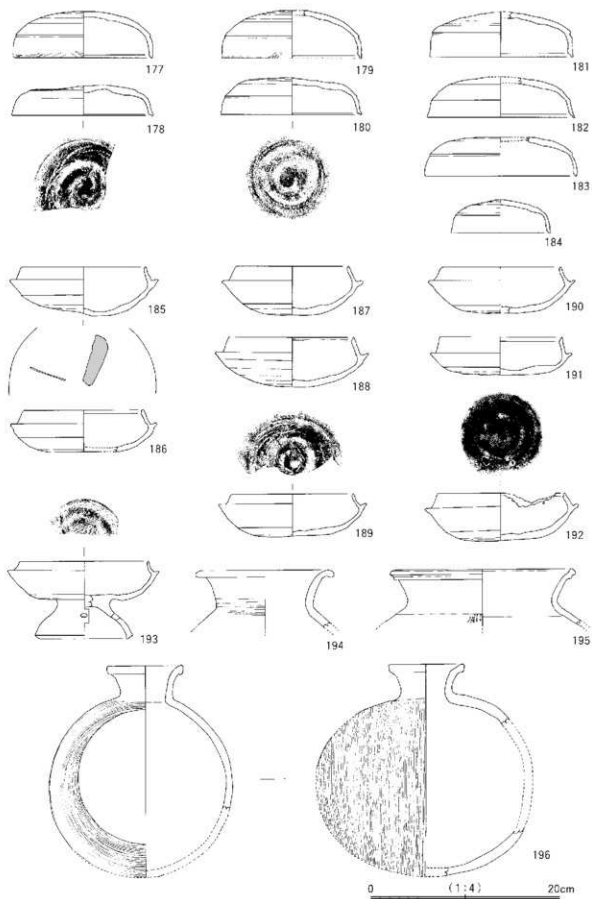


图78 535溝出土土器实测图(1)

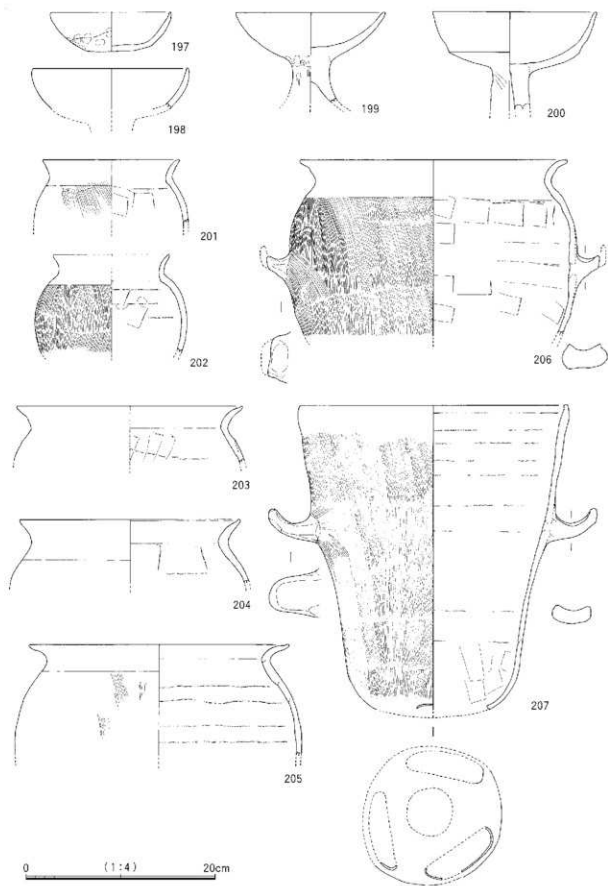


图79 535溝出土土器实测图(2)

これらの土器群のうち、図59によって出土位置が確認できるものは、須恵器杯身185と土師器甕207が土器群2、須恵器杯身189と土師器甕205が土器群3、須恵器杯蓋180・183・杯身187・191と須恵器高杯193が土器群4で、高杯193は後述する679土坑出土資料と接合した。また、須恵器壺194と横瓶196は、図56に示した溝東端部の土器群1のものである。

534・538溝出土土器（図80、図版38）

535溝に比べて土器の出土量が少ないが、534溝からは推定口径15cm弱で、稜線が比較的明瞭な須恵器杯蓋208や、推定口径13cmで立ち上がりのしっかりした杯身209が出土している。また、切り込み状透かしや方形透かしをもつ短脚高杯212・213もみられる。ただ、口径がやや小さく立ち上がりもやや短い杯身210・211も出土することから、6世紀前半から中ごろまでの年代を与えるのが妥当であろう。538溝も、須恵器杯蓋217は稜線がしっかりした古いタイプであるが、杯身218・219は稜線がほとんど消滅しており、534溝と同じやや下がる時期が想定できる。なお、杯身218の天井部中央には削り残された平行叩きがあり、内面に同心円文当て具痕跡が認められる。その他、貯蔵具として須恵器甕214と小型短頸壺220が出土しており、土師器は甕216・221とともに手捏土器215がみられる。

750溝、537土坑出土土器（図80、図版38）

534溝の廃絶後に形成された溜まり状遺構から出土した土器群である。両遺構からは立ち上がりが非常に短く、口径11cm前後の小型化した須恵器杯身222・226・227が出土しており、集落の下限を示す資料となっている。とくに、750溝からは、口縁部を意図的に欠損させたと考えられる須恵器甕223と土師器広口壺224が共伴して出土しており、後者の底部には切り込み状の穿孔も施されていた。537土坑の遺物も少ないが、須恵器高杯228、提瓶の口縁部229や横瓶230・231、土師器甕232が出土した。

677～679・753・754土坑出土遺物（図81・82、図版39・40）

谷頭の窪み状遺構に次々と廃棄された土器群で、当調査地の中では最も一括性が高い資料である。

須恵器杯蓋233～247は口径15cm前後で、233や238のように比較的明瞭な稜線をもつものが多い。杯身248～259は口径13cm前後で、248や250のように立ち上がりがやや短いものと、255や256のように立ち上がりが直線的で長いものが認められる。ただ、杯身251は口径12.2cmとやや小さく、立ち上がりも短いことから、型式として下がる可能性がある。杯蓋237・242・247、杯身249・254などの内面には当て具痕跡が残り、杯身255の口縁部は意図的に打ち欠いたような痕跡がある。また、杯蓋244の端部外面にはハケによる刻み目状調整が認められ、口縁外面にも同一工具によるハケ状調整が及んでいる。その他、口頸部を波状文で装飾した甕260や短頸壺261・262、壺263、甕腹片などが共伴している。6世紀前半が中心であるが、一部後半の土器が含まれる。

土師器は煮沸具の破片が多く出土しており、小型甕265・269や中型甕268、大型甕266・267と大きさも様々である。また、甕272は把手部が欠損するがほぼ全容がわかる資料で、底部の穿孔は中央円孔の周囲に半月形孔を3箇所巡らしている。また、数量的にかなり少ないが甕264も出土している。

235～237・721・723土坑、233・724溝出土土器（図83・85、図版41）

678土坑の西に形成された土坑群や溝の遺物である。須恵器杯を見ると、杯蓋271・272は明瞭な稜線をもち、杯身273～276はしっかりした立ち上がりを持っている。また、236土坑からは細かい平行叩きに内面擦り消しの甕腹296も出土するなど、比較的古い様相をもっており、時期的に東の土坑群出土遺物と大きく変わらないであろう。土師器は甕278・279・280が出土している。

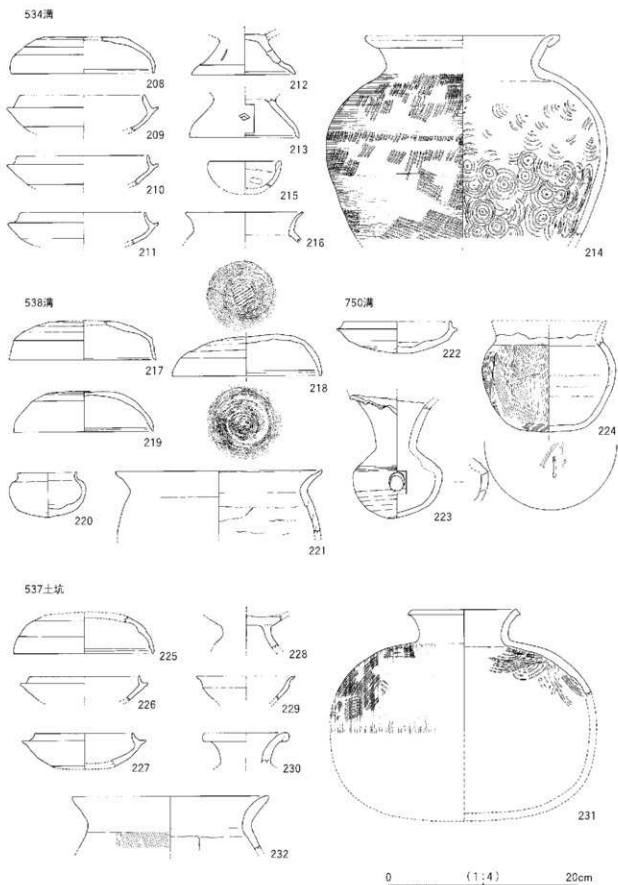


图80 534·538·750溝、537土坑出土土器实测图

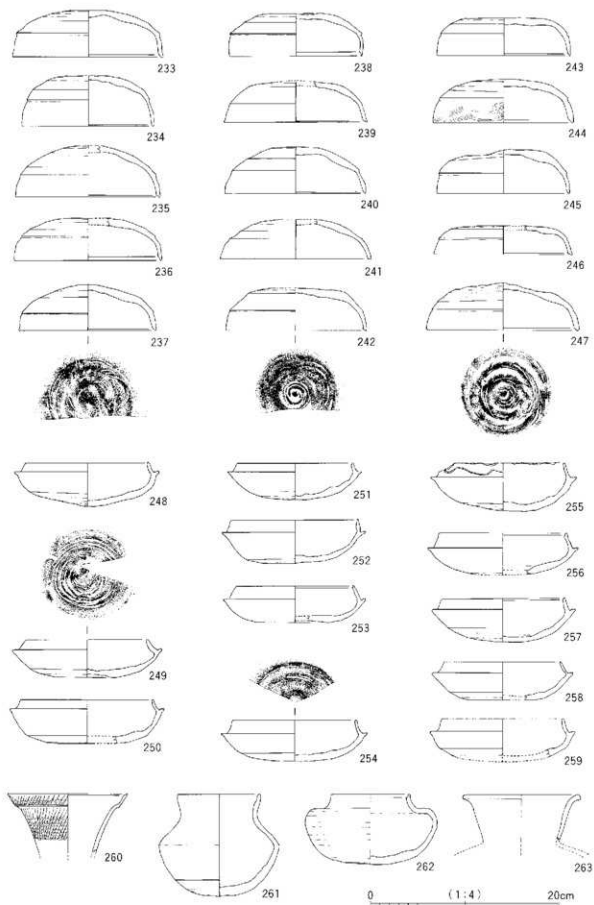


图81 677~679·753·754土坑出土土器实测图(1)

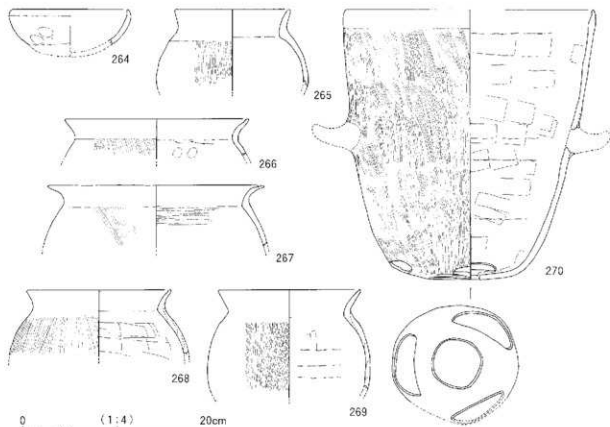


図82 677~679・753・754土坑出土土器実測図(2)

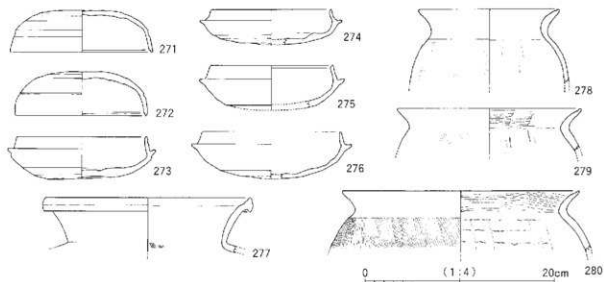


図83 235~237・721・723土坑、233・724溝出土土器実測図

43・491溝、28・492土坑出土土器(図84、図版41)

調査区西端を流れる43溝からの遺物は非常に少なく、須恵器では杯身283、提瓶284、韓式系土器甌の底部片285、甕腹などで、土師器も甕や甌の破片は出土するが図化できたのは小型広口壺286だけである。韓式系土器甌285は外面に細かい平行叩きを施し、底部には細長い楕円形の穿孔を平行に並べている。43溝南の492土坑から出土した須恵器杯281・282は、蓋の稜線が明瞭で杯身の立ち上がりが長く直線的になっており、明らかに古い形態である。43溝出土の杯身283はやや口径が小型化しており、底部内面に当

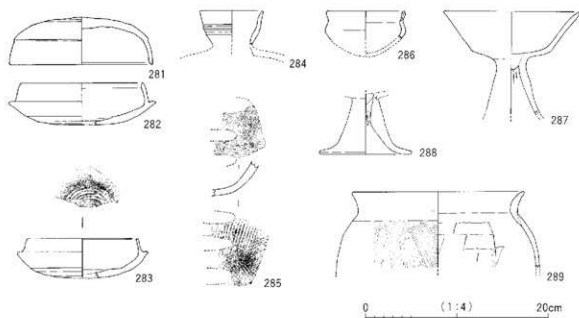


图84 43・491溝、28・492土坑出土土器実測図

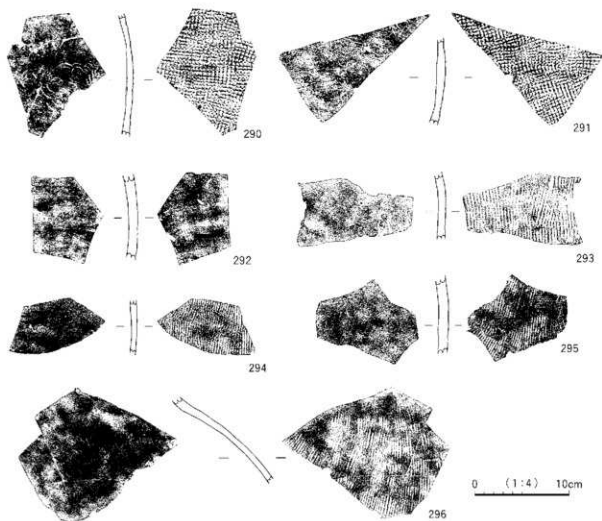


图85 84・138・535溝、236土坑出土 須恵器甕腹拓影および実測図

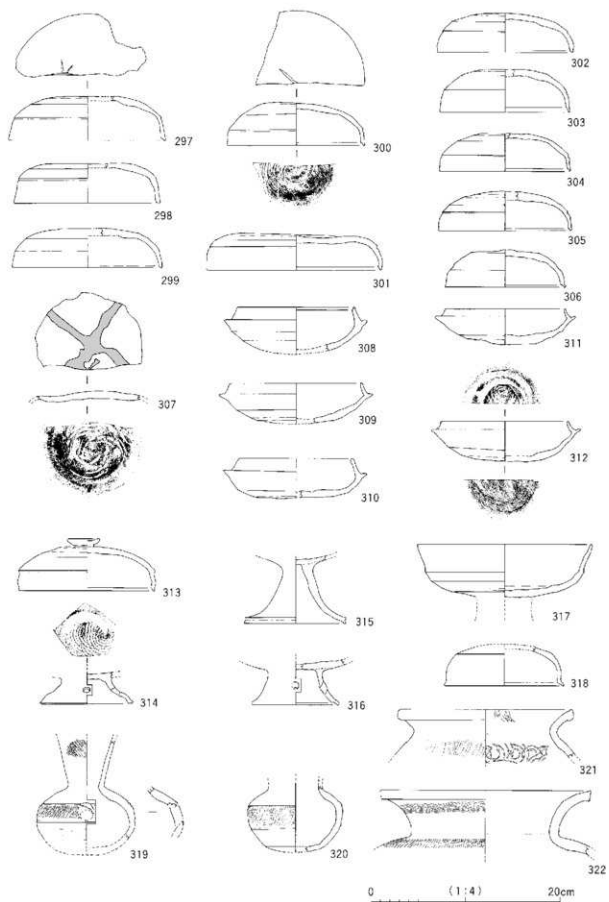


圖86 古墳時代包含層・遺構検出中出土土器実測図(1)

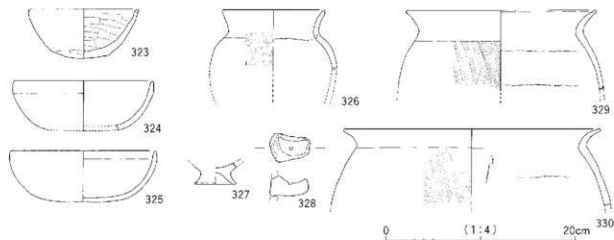


図87 古墳時代包含層・遺構検出中出土土器実測図(2)

て具痕跡が残る。492土坑出土の杯身282よりも、若干時期が下がりそうである。さらに、南端の28土坑からは土師器高杯287・288が出土しており、南への遺跡の広がりを示唆している。43溝北側の491溝からは遺物があまり出土せず、甕289を図示するにとどまる。

古墳時代包含層出土土器(図86・87、図版42・43-1)

古墳時代遺構面を検出するにあたって、包含層の掘り下げや遺構検出時に多くの遺物が出土した。須恵器杯蓋は口径が15cm以上で稜線が明瞭に残るもの(297~299・301)と、口径14cm前後で稜線が鈍いもの(300・302~305)、さらに口径が小型化し天井部がヘラ切り未調整と判断できるもの(306)がある。杯身も口径13cmを越えるもの(309・312)と、口径12cm前後の小型のもの(308・310・311)があり、立ち上がりの形状からは直線的に立ち上がるもの(308・310)と、短く湾曲して立ち上がるもの(309・311・312)がある。なお、蓋297と300には天井部にヘラ記号が施され、蓋307天井部には十字に朱記号がみられる。また、蓋300・307、身312の内面には当て具痕跡が残る。

高杯は蓋(313)と無蓋杯部(317)が認められ、脚部資料では透かしをもつ短脚高杯(314・316)と、ラッパ状に短く外反する脚部をもつもの(315)がある。甕319・320は体部に2条の沈線を巡らし、間を列点文で装飾しており、波状文を施した細長い口頸部をもつと考えられる。甕321は口縁内部にヘラ記号をもち、甕322は口縁外面に波状文を施す。

土師器は要購具資料として杯323~325があり、煮沸具として小型甕326、中型甕329、大型甕330がある。また、上面に円孔を施した韓式系土器の把手328や時期が遡ると考えられる製塩土器脚部327も興味深い資料である。

2 土製品

古墳時代の土製品は、移動式甕、土錘、輪羽口が出土している。このうち移動式甕の個別資料については巻末に観察表を掲示し、ここでは概略を述べておく(表6)。

移動式甕(図88、図版43-4)

点数は少ないが移動式甕の破片が数点出土している。遺構に伴うものは1095土坑から3点(D1・D6・D8)と537土坑から1点(D3)で、最も新しい遺構から出土していることは示唆的である。03-1調査区では中央方形区画の南を限る溝8周辺で多く出土しており、この方形区画建物群が6世紀末から7世紀初頭と考えられることから、移動式甕が最も新しい段階で使用された可能性を指摘すること

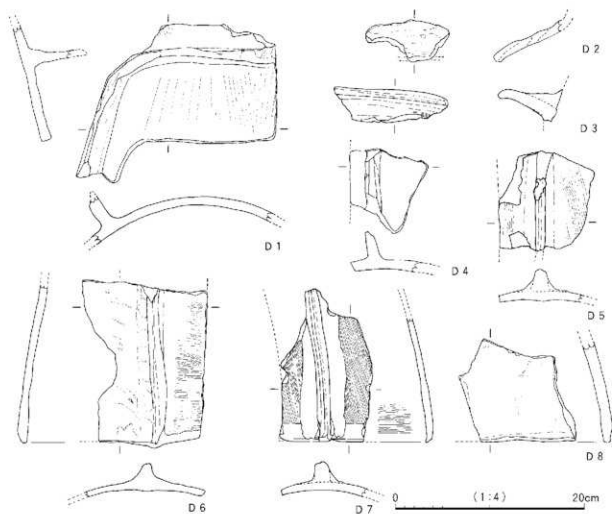


図88 移動式竈実測図

ができる。個別にみるとD1は付け底系統で竈口前面の右上部の破片である。D2は曲げ底系統の底部破片、D3は付け底系統の上部底が剥離したものと考えられる。D4～D7は付け底系統の竈口側部の破片である。D8は移動式竈の底部破片で、D1と胎土・色調が類似しており、出土構構も同じであることから同一個体の可能性がある。

土錘 (図89、図版43-2)

調査地全体で3個体出土している。D9は土師質の小型土錘で、中心に0.2cmの貫通孔を穿つ。長さ3.1cm、最大幅1.1cmで、重量は1.9gである。胎土は緻密で、ぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。2区包含層から出土した。D10・11は須恵質に焼成された土錘で、中心に0.4cmの貫通孔を穿つ。D10は長さ6.5cm、最大幅1.9cmで、重量は24.4gである。胎土は白色砂粒をまばらに含み、灰白色(N7/)を呈する。1区包含層から出土した。D11は3分の1が欠損しているが最大幅2.1cmで、残存重量は2.0gである。胎土は白色砂粒を多量に含み、灰色(N6/)を呈する。255溝から出土した。

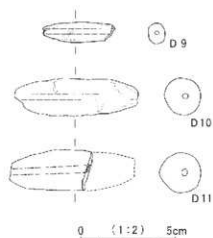


図89 土錘実測図

輪羽口 (図93、図版45-3)

鑄造関係の土製品として、輪羽口D12が1点出土している。先端部分の破片で、直径2.2cmの棒に粘土を巻きつけて送風孔を作り、外面は縦方向のナデ調整によって仕上げている。胎土には白色砂粒をやや多く含み、細かいスサが多く混入されていた。浅黄橙色 (10YR8/3) を呈するが、先端部は被熱のため形状が崩れ、にぶい赤褐色 (5YR5/4) に変色している。建物27の1233柱穴から出土した。

3 木製品

古墳時代の木製品は非常に少なく、火付け棒が2本出土したほかは、柱材などの建築部材が出土するだけである。柱材は建物や柵の柱穴から総数67本出土しているが、遺存状況の良いものから、ほとんど朽ちかけているものまで状態は様々である。それらのうち、ここでは遺存状況の良い資料についてだけ報告する。

火付け棒 (図90、図版43-3)

M1はやや湾曲する断面円形の木片で、先端部は尖り炭化している。残存長16.9cm、最大幅1.2cmで、材質はヒノキである。2区の遺構検出中に出土した。M2はやや湾曲する断面方形の切割木片で、先端部は丸く炭化している。残存長13.2cm、最大幅1.4cmで、材質はヒノキである。844溝から出土した。

杭材・柱材 (図91、図版44)

M3は残存長133.2cmの杭材である。最大径6.6cmの木材の先端部を、金属工具によって斜めに切り落として尖らせている。842溝の中に横たわった状態で出土した。材質はヒノキである。M4からM6は建物柱穴から出土した柱材である。すべて底部が平坦な円柱材で、上部は腐朽のため細まるが、底部は良好に遺存しており金属工具による加工痕跡が明瞭に残る。材質はヒノキで、自然木の材をそのまま柱材に加工したと考えられる。M4は建物25の1186柱穴から出土したもので、残存長が50.5cm、最大径12.2cmである。M5は建物5の178柱穴から出土したもので、残存長が57.5cm、最大径16.0cmである。M6は建物25の1175柱穴から出土したもので、残存長が69.6cm、最大径14.6cmである。

M7とM8は柵柱穴から出土した柱材である。M7は角柱材で、先端部は金属工具によって削って、粗く斜めに切り尖らせる。残存長が50.2cm、最大幅9.6cmで、柵4の847柱穴から出土している。M8は断面楕円形の柱材で、先端部は金属工具によってやや円錐状に粗く削る。残存長が38.6cm、最大長径9.8cmに対し短径5.2cmと扁平な材である。柵1の508柱穴から出土している。

柵の柱材はともにカヤで、建物の柱材がほとんどヒノキであることと対照的である。また、建物の柱材は底部を平坦に加工するのにに対し、柵の柱材は底部を若干尖らせているのが特徴的である。建物は柱穴掘形に落とし込んで柱を立てるとともに、構造材で柱間を連結されて安定させる。しかし、柵は直線的な構造物のため前後が不安定であり、倒壊を防ぐためにも柱を掘形内にある程度打ち込む必要があったのであろう。上部構造によって、柱の材質や加工が異なる事実は興味深い。

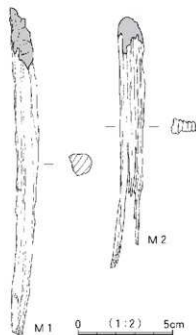


図90 火付け棒実測図

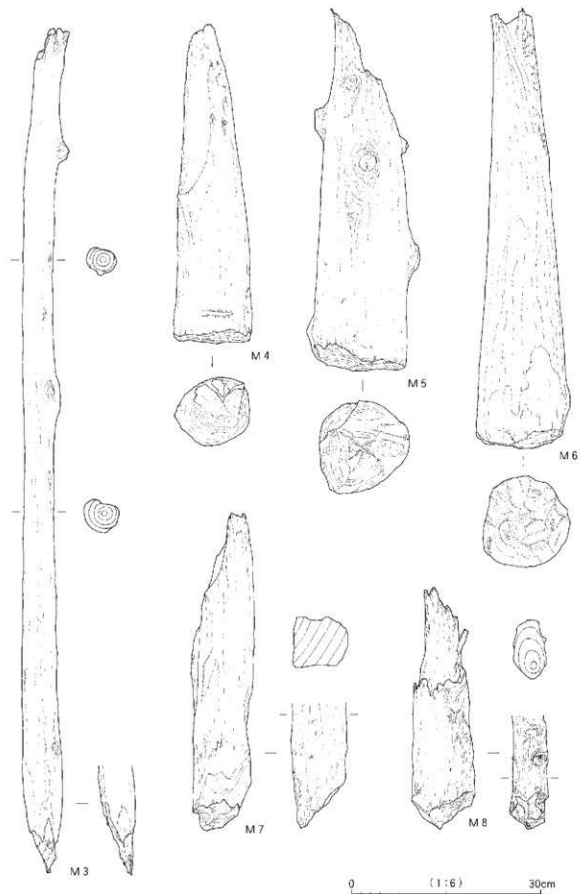


図91 杭および建物・欄柱材実測図

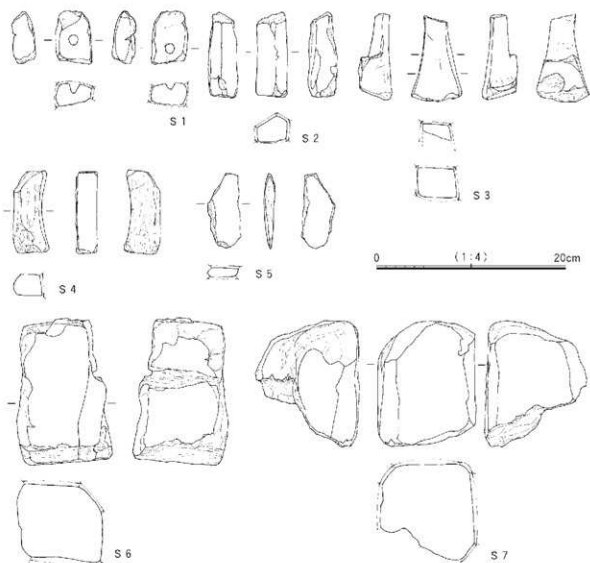


図92 砥石実測図

4 石製品 (図92、図版45-1・2)

古墳時代の石製品はすべて砥石で、提砥 (S1～S5) と置砥 (S6・S7) の両方が出土している。提砥はS1～S3が凝灰岩質流紋岩、S4が緑泥片岩、S5が頁岩のものである。S1は残存長5.5cm、最大幅3.8cmの長方形を呈し、先端に向かってやや薄くなる。片方の面に擦痕が残るが、表面は剥離のために不明である。両面から穿孔を施すが、位置がずれており、貫通していない。535溝から出土した。S2は断面五角形の柱状提砥である。残存長9.0cmで、各面に擦痕が残るが、被熱のため表面が黒ずんでいる。678土坑から出土した。S3は椀状を呈する断面方形の提砥である。残存長9.3cmで、各面に擦痕が残る。建物26の1188柱穴から出土した。S4は残存長8.5cmで、片面に内湾した擦痕が残るが、他面は割れているため不明である。建物15内の窪みから出土した。S5は長さ7.8cm、厚さ1cmほどの薄板で、椀状に端部が薄くなり、両面に擦痕が残る。1区包含層から出土した。

置砥はS6が凝灰岩質流紋岩、S7が砂岩と思われる。S6は長さ約15cm、幅約9cm、厚さ約7.5cmの方形柱状を呈し、表裏面に擦痕が残る。81溝から出土した。S7は大きく欠損しているが、長さ約13cm、幅約10cmの断面正方形で、各面に擦痕が残る。138溝から出土した。

5 鉄滓 (図93、図版45-3)

鑄造関係遺物として、前述した輪羽口の他に鉄滓が少量ながら出土している。

T 1は最大長5.9cm、厚さ1.9cmの椀形滓で、比重は大きく95.3gである。質はやや密で重量感があり、小さな気孔が下面全体にみられる。上面は茶褐色、下面は暗灰色を呈する。4・5区包含層から出土した。T 2は最大長5.3cm、厚さ2.0cmの椀形滓で、比重は小さく30.1gである。下部は緩やかに湾曲し、上面はやや中央が影らみをもつ。質はやや粗く小さな気孔が全体にみられる。全体に茶褐色で、木炭が含まれている。492土坑から出土した。T 3は最大長5.9cm、厚さ1.8cmの椀形滓で、比重はやや小さく42.9gである。下部はやや湾曲し、上面は窪んでいる。質はやや密で小さな気孔がみられ、全体に茶褐色を呈する。1区包含層から出土した。T 4は最大長5.2cm、厚さ2.2cmの椀形滓で、比重は小さく29.6gである。下部はやや湾曲し、上面は凹凸がある。質はやや粗く、上面に若干気孔があるが、下面にはあまりみられない。全体に灰白色を呈する。2区包含層から出土した。T 5は最大長8.2cm、厚さ2.9cmのやや大きい椀形滓で、比重は大きく134.8gである。下部はやや湾曲し、上面は凹凸がある。質はやや密で重量感があり、破面に大きな気孔が観察できる。上面はやや滑らかで長石が付着し、下部は小さな気孔が多く認められ、炉壁土が付着する。全体に暗灰色を呈する。2区包含層から出土した。

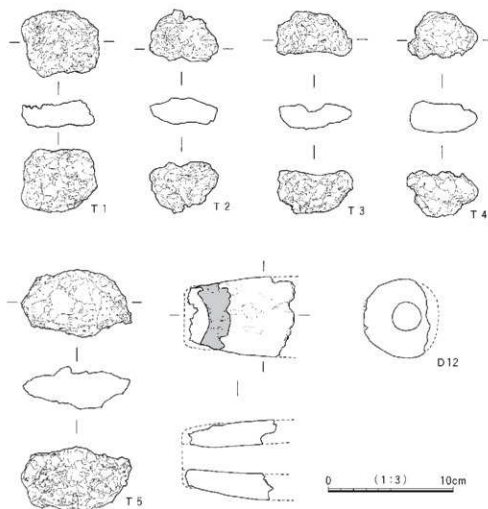


図93 鉄滓および輪羽口実測図

第2節 古代から中世の遺物

1 土器類

基本層序の節で述べたように、中世田面鍵層の上層に堆積する水田面を第1面と認識し、鍵層上層から出土した遺物を田面上層遺物、鍵層から下層で古墳時代包含層までの遺物を田面下層遺物として取り上げている。古墳時代以降、耕作地として土地利用されていたため、出土土器は細片化したものばかりであった。しかし、これらの土器群は耕作土層の年代を示す重要な資料であり、層位的に前後関係が追えるため、ここでは田面下層出土土器と田面上層出土土器にわけて報告する。なお、個々の土器については、別に観察表を作成した(表5)。

田面下層出土土器(図94、図版46-1・2・図版47-1)

中世田面下層から出土する土器は非常に少ないが、時期的に古い遺物が出土する。土師器皿331は、いわゆる「て」の字状口縁をもつタイプで、推定口径は10.4cmと小型化しており、11世紀前半のものであろう。また、須恵器杯A332および杯B333は、やや直線的に立ち上がる口縁や低く外側に踏ん張った高台形態から、8世紀末から9世紀に遡る資料と考えられる。土師器小皿334と大皿335は、内湾して短く立ち上がる口縁部の形態と、一段化した口縁のナデ調整から、12世紀の資料であろう。これらの土器群には時期幅があるが、少なくとも平安時代後期の遺物群は当地に条里制地割りが形成され、耕地利用が行なわれ始めた初期の資料といえる。

次に瓦器碗をみると、内面のヘラミガキが比較的密に施され、口縁部外面にも粗くヘラミガキが認められるもの(336・337)と、粗くなったもの(338-341)に分かれる。前者では口縁端部の内側に沈線状の段が巡り、碗336は楠葉型碗、碗337は大和型碗の範疇に納まるものであろう。その他の碗338-341は、楠葉型瓦器と考えられる。底部の形状は不明だが、図示できなかった底部破片をみると断面三角形の低い高台が多くあり、これらの瓦器碗にも同様の高台が設けられていたと考えられる。碗336・337は12世紀末から13世紀前半、碗338-341は13世紀中ごろから後半に位置づけるのが妥当である。

輸入陶磁器は、10世紀後半から11世紀前半に遡ると考えられる白磁の輪花皿342や、12世紀から13世紀の龍泉窯系青磁碗343・345が出土している。また、12世紀後半の標識磁器である同安窯系青磁皿344・346が出土しており、その他の土器類との時期的鑑別はみられない。

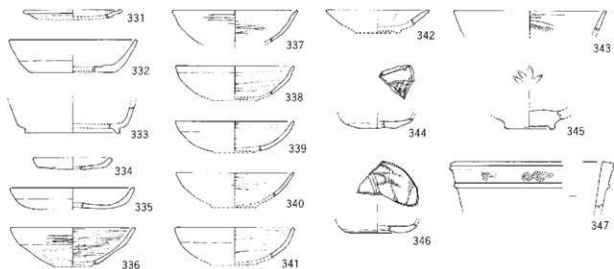
なお、体部外面に花文スタンプを施す瓦質土器の奈良火鉢347が田面10下層から出土しているが、これは14世紀から15世紀初頭に編年されており、掘削時に上層の遺物が混入した可能性が高い。本来ならば田面下層遺物としては排除すべき資料であるが、奈良火鉢の出土例としてここに図示しておく。

田面上層出土土器(図94、図版46-1・2・図版47-1)

中世田面上層からは、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器などが出土しているが、下層出土土器と同様に細片化した資料ばかりである。

土師器の大半は、器高の浅い小皿と、やや深い中皿である。このうち小皿を口径の大小で細分すると、口径7cm前後のもの(348-352)と、口径8cm-9cm前後のもの(353-360)に分かれる。これらは平坦な底部から、口縁部が直線的あるいは内湾ぎみに短く立ち上がるのが特徴的である。中皿も口径が10cm未満のもの(362-364)と10cm以上のもの(365-367)に分かれており、前者は口縁部が内湾ぎみに立ち上がるのに対し、後者は口縁部が外側に屈曲しながら立ち上がる。なお、小皿361と大皿368は、口縁の立ち上がりが緩やかで、端部ではやや外方に延びており、若干時期が下がる形態である。

田面下層



田面上層

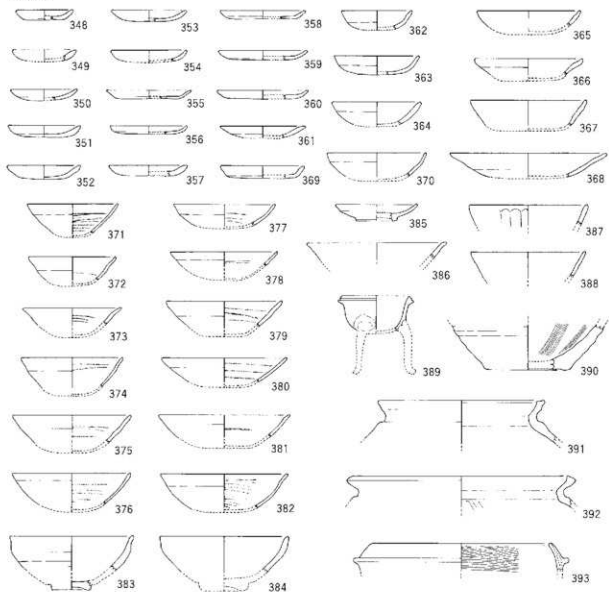


图94 田面出土土器实测图

瓦器は小皿369のほかは、すべて桶葉型の椀（370～382）の破片である。内面のヘラミガキは非常に粗く、下層の瓦器椀に比較して口縁部立ち上がりが外反きみとなる。底部は欠損しているが、高台資料が少なく全体的に小型化していることから、高台を持たないタイプが高い比率で出土していると思われる。

輸入陶磁器では、白磁皿385・白磁椀386、龍泉窯系青磁椀387・388が出土しており、陶器では、備前陶器の播鉢390とともに、古瀬戸の天目茶碗383・384が出土している。また、瓦質土器の三足小鍋389や、甕392と羽釜393が出土しており、391も羽釜となる可能性が高い。

これらの土器群の年代であるが、土師器皿や瓦器椀から14世紀を主体とする土器群と考えられる。ただ、土師器小皿361と大皿368の形態や、天目茶碗383の高台が内反りとなっていることを考え合わせると、15世紀まで時間幅をもって考えるのが妥当であろう。

2 木製品 (図95、図版47-2)

M9は畦畔7内から出土した横櫛である。残存長7.2cm、基部の厚さ1.9cmで、イヌノキの一枚の材から作られている。平面形態は円弧状を呈し、挽葉式によって密な葉をもつ。基部の断面は面取りによって丸みを帯び、葉部の先端は薄く断面三角形となる。M10は畦畔1内から出土した漆器椀の底部破片である。漆色は内外面ともに黒色で、内面には朱漆で文様が描かれている。底部外面には削り出し高台が欠損した痕跡が明瞭に残る。材質はクリである。

3 石製品 (図96)

中世の石製品は砥石が2点である。S8は薄板状の粘板岩で、表裏面に擦痕が残る。長さ10.9cm、最大幅3.5cm、厚さ1.0cmで、田面6の上層から出土した。S9は長方形を呈する砂岩の片面に擦痕が認められる。長さ7.6cm、最大幅3.7cm、厚さ1.7cmで、2区の田面下層から出土した。

4 宋銭 (図97、図版47-4)

Z1は北宋の「祥符通寶」(初鑄1009年)である。直径2.5cm、重量2.3gで、裏面の縁がずれている。2区の田面上層から出土した。Z2は北宋の「天禧通寶」(初鑄1017年)である。直径2.4cm、重量3.7gで、2区の田面上層から出土した。Z3は北宋の「政和通寶」(初鑄1111年)である。直径2.5cm、重

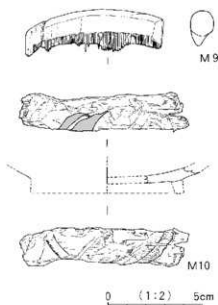


図95 中世木製品実測図

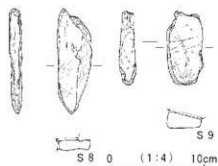


図96 中世砥石実測図

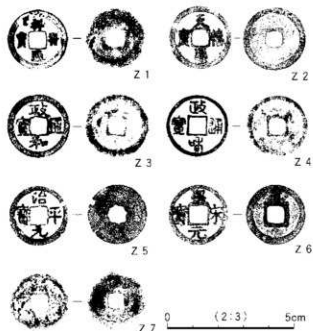


図97 宋銭拓影

量26gで、銭銘は楷書で表される。田面6上層から出土した。Z4も北宋の「政和通寶」である。直径2.4cm、重量3.2gで、銭銘は篆書で表される。畦畔7排水口下の窪みから出土した。Z5は「治平元寶」(初鑄1064年)である。直径2.4cm、重量3.4gで、裏面に縁はなく、中央の方形穿孔が八角状を呈する。4区の田面上層から出土した。Z6は南宋の「皇宋元寶」(初鑄1253年)である。直径2.3cm、重量2.5gで、裏面に背文字で「五」が記されている。2区の畦畔1から出土した。Z7は銭銘不明である。直径2.3cm、重量2.9gで、4区の田面上層から出土した。

5 瓦 (図98・図版47-3・図版48・図版49)

瓦の出土量も非常に少ないが、凸面斜格子叩きで裏面布目を残す古代平瓦K5の破片が、1区の田面下層の掘り下げ中に出土している。裏面は細かい布目で、枠板痕跡が若干残る。最大長5cmほどの小片で出土点数も1点であり、偶発的に当地にもたらされた可能性が高いが、類似した瓦は交野郡衙跡周辺で出土している。この他は、畦畔2用水溝に使用された平瓦3点と、その周辺で出土した丸瓦1点が、ほぼ完形の中世瓦として注目できる。

丸瓦K1は後述する平瓦群と同じく畦畔造成時に、外部よりもたらされた瓦と考えられる。凸面には縦縞叩き痕跡が、凹面には布目とともに外側に縦じ付けられた釣り紐痕跡が明瞭に残る。平瓦K2は、他の平瓦に比べて長さが29cm強と小さい平瓦である。凹面とともに凸面も縦方向に丁寧にナデしており、凹面狭端部にやや広い面取りを施すが、広端部には面取りはみられない。平瓦K3・4は長さが31cm強と同じ規格であり、凸面が粗いナデ調整で糸切り痕跡と離れ砂を残す点や、凹面の丁寧な調整など共通した技法によって製作されている。凹面狭端部だけに面取りを施す点は、平瓦K2と共通する。

これらの瓦類の年代であるが、丸瓦K1は外縦じの釣り紐痕跡から14世紀末以降に置くことができ、玉縁部の形状・調整から15世紀前半くらいの年代を与えるのが妥当であろう^{註1)}。平瓦K2~4は布目が完全に消失している点や、15世紀後半以降に成立する細かい面取りの調整が見られないことを考慮すると、丸瓦と同様に14世紀後半から15世紀前半におくことができる。ただ、平瓦K2は胎土・焼成は異なるが、新宮山遺跡出土の平瓦と規格が全く同じで、調整も共通している^{註2)}。新宮山遺跡出土の平瓦には「明應」とへら書きした資料が残されており、明應年間(1492~1501)にまで下がる可能性がある。

また、平瓦K3・4と類似した同規格の平瓦は、当遺跡の南約750mの地点に所在する奈良時代後半創建の須弥寺から出土している^{註3)}。須弥寺ではh4d類と分類されており、端部にかなかな糸切り痕跡も観察することができるが、凹面狭端部だけでなく広端部も浅い面取りを行なう点や、凸面のナデ調整が丁寧である点が異なっており、元来の使用場所としては断定できない。しかし、13世紀後半には奈良薬師寺と同範の軒瓦が須弥寺に選ばれていることが判明しており、同範軒平瓦は獅子窟寺でも出土するなど、13世紀後半から14世紀初頭にかけて南都との密接な関係が想定されている。上私部遺跡出土の平瓦K3・4も南都系の平瓦と考えられ、これらの歴史的背景のもとに当地に運ばれたものと想定できよう。須弥寺は石清水八幡宮との関係が深く、15世紀前半まで存続したことが記録に残されていることから、このころ平瓦K3・4は上私部遺跡に供給されたと考えておく。

註

註1) 山崎信二 2000 『中世瓦の研究』 奈良国立文化財研究所学報第59冊

註2) 交野市教育委員会 1993 『新宮山遺跡』 交野市埋蔵文化財調査報告1992-II

註3) 交野市教育委員会・(財)交野市文化財事業団 2004 『須弥寺遺跡』 交野市埋蔵文化財調査報告2003-II

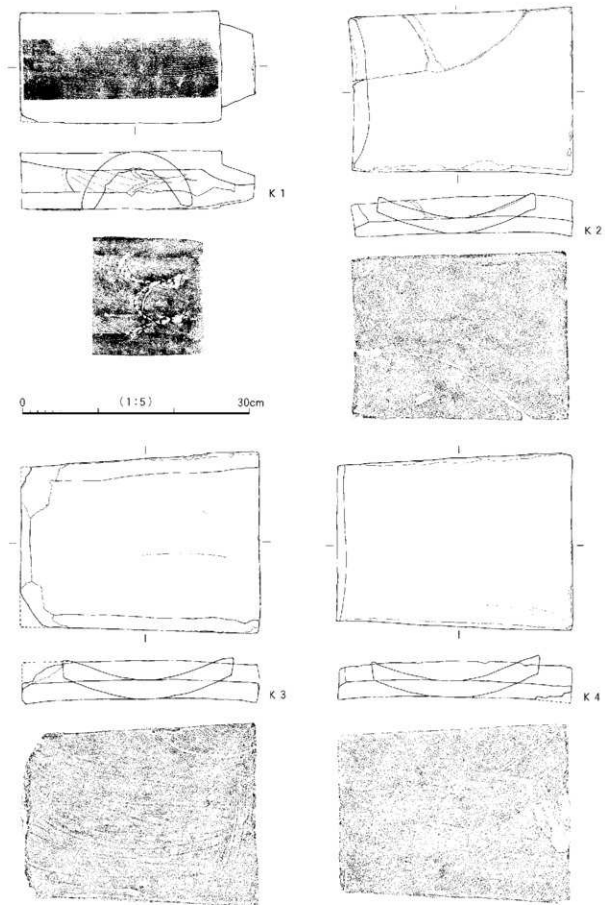


図98 中世瓦拓影および実測図

第3節 その他の遺物 (図99、図版50)

石鏃 S10・11、剥片 S12、扁平片刃石斧 S13、磨製石斧 S14・15、水晶 S16が出土している。

サヌカイト製石器類は石鏃と、剥片が出土している。石鏃は2点とも非常に丁寧な作りである。剥片は石鏃と比較して風化が著しく、時期を異にする可能性が高い。

石斧は加工斧である扁平片刃石斧と縄文時代に特徴的な乳棒状を呈する磨製石斧が出土している。扁平片刃石斧は輝緑岩製で、刃部先端には使用によると考えられる潰れが確認できる。磨製石斧は蛇紋岩製であるが、明瞭な被熱の痕跡が残る。刃部を欠損しているが、被熱が欠損部まで及んでいることから、欠損したのちに熱を受けたことがわかる。

水晶はややいびつな六角柱状を呈し、色調は白色である。加工痕は確認できない。母岩が一部に残ることから、花崗岩の空隙に産出していた水晶を採集したと考えられる。装飾用としてはやや透明度が低く、石英がガラスの原料として利用されることが多いことから、ガラスの材料として遺跡内に持ち込まれた可能性が考えられる。

今回の調査で出土した石器は、すべて混入であるが、周辺に縄文時代から弥生時代の遺構が存在した可能性が高いであろう。

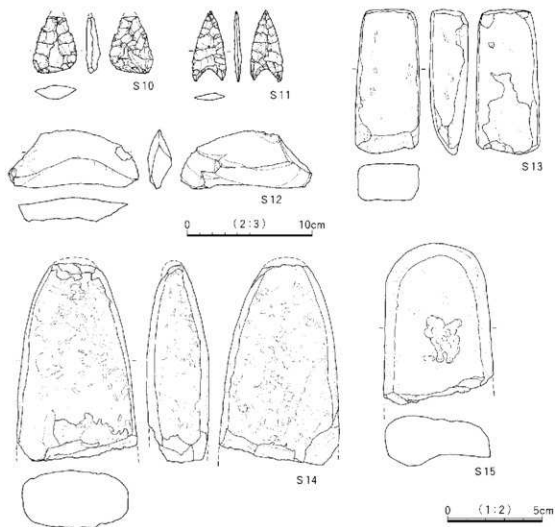


図99 石器実測図

第5章 遺構と遺物の検討

第1節 古墳時代の遺構の立地と掘立柱建物群の抽出

今回の発掘調査で、6世紀を中心とする多数の掘立柱建物群と溝群などを検出した。北東に隣接する03-1調査区では、5世紀に遡る竪穴住居跡を多く検出しており、上私部遺跡の集落の成立は5世紀初めと考えられるが、当調査地では5世紀の遺構がまったく確認できなかった。また、竪穴住居が非常に少なく、ほとんどが掘立柱建物で構成される点も前回の調査とは大きく異なっている。発掘調査の所見では、6世紀になって溝によって形成された方形区画と多くの掘立柱建物が、集落の南西部に整然と建てられるようになり、集落全体の中心地域となっていくことが判明したのである。

ところで、建物群の分布をみると、調査区北東部のやや高燥な場所に集中していることに気づく。古墳時代遺構面に10cmの等高線を表現したのが図100であるが、調査区南端に東西方向の谷が入っており、建物が集中する北東部は上私部遺跡の集落が形成される段丘の西南端部にあたる。現在では私部北川の天井川化などによって地下水位が上昇し湧水が非常に多いが、古墳時代には安定した段丘面を形成していたようで、建物群は谷筋を避けて北側の平坦地に建てられた。さらに、建物群を方形に区画する溝も、段丘裾部を切るように西限溝(841~844溝)や南限溝(491・55・634溝)が直線的に掘られており、地形を充分考慮して居住域が設定されていたと考えられる。

方形区画の規模は、南北約45m、東西幅は113溝が東限溝とするならば約60mの規模をもつ。とくに、西限溝では、少なくとも4時期にわたる溝の掘り直しが認められ、それに対応して南北方向の柵(柵2~4)が設けられている。また、南限溝である55溝や634溝にも柵が設けられており(柵6~8)、西方と南方とに対して閉鎖性の強いものであったことがわかる。北限溝(136・138溝)も非常にしっかりした直線溝であり、北側との隔離がかなり意識されているが、柵などの閉鎖施設は設けられていない。

これに対し、東側の113溝は規模が小さく、閉鎖性も非常に弱い。113溝から東へも建物群が展開しており、387・950・999溝と同様に区画内を細分する溝の可能性がある。これらの区画溝群は、後述するように6世紀後半には埋没していったようで、建物群が西方や谷筋の南など区画外へと広がっていく。

次に建物群の様相を概観すると、柱穴の切り合い関係や位置関係、振れの共通性などを考慮して、大きく3群4時期の変遷を想定できる(図101~103)。最も古い段階の建物群は、東西棟建物1・12を南北に2棟並置し、東に脇建物の建物10を配置する、北に対して西へ振った建物群(A群)である。これらの中心建物群は西へ21°~24°振っており、北西にはさらに西へ大きく振った建物21・22があるが、東には同時期の建物はなかったようである。建物21・22は前述したように倉庫と考えられ、主殿域の後に倉庫をもつ構造をとっていたと考えられる。

これらの建物群は、前述した区画溝の方位と大きく異なっており、区画溝の掘削以前の建物群である可能性もあるが、建物群の造営時期を示す遺物がなく相互の関係は明らかでない。ただ、A群建物の規則的配置を考えると、この段階で何らかの閉鎖施設が設けられたと想定しても不思議ではない。倉庫と考えられる建物21・22が区画の北西隅に収まるように配置されているのも、区画溝との関係で考えると素直に理解できる。そして、溝による建物群の区画がA群段階で成立するならば、調査区北端では1092・1133・1096溝を北側に形成された区画の南西隅部として新たに認識でき、南東部でも535・536溝



图100 古墳時代遺構面等高線図

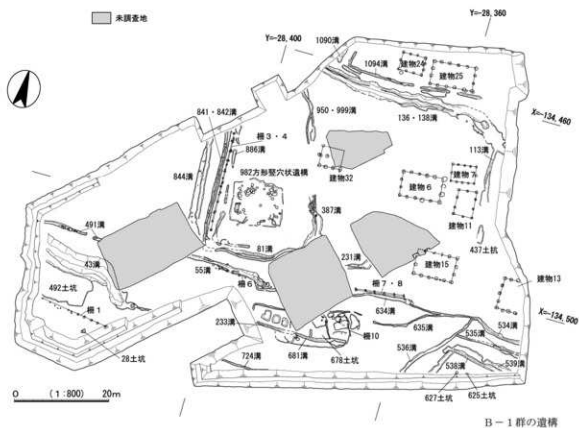
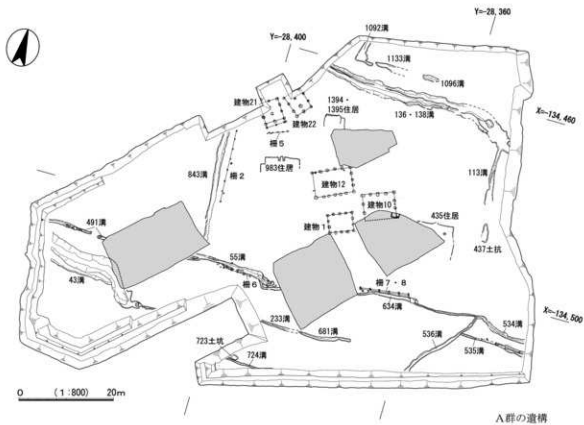


図101 05-1調査区 古墳時代遺構変遷図(1)

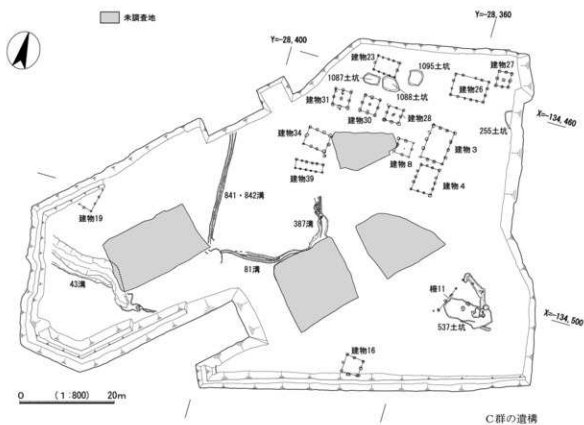
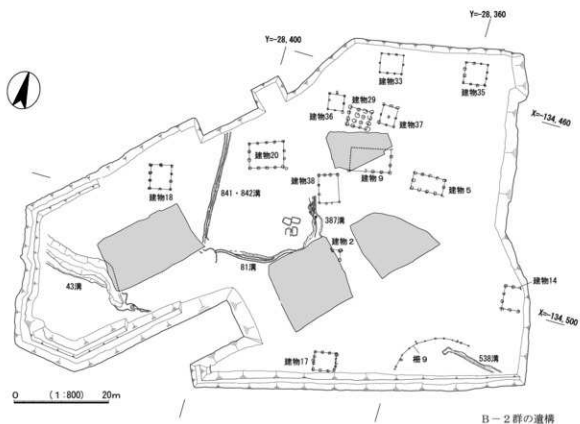


図102 05-1調査区 古墳時代遺構変遷図(2)

によって新たな区画が形成され始め、次のB-1群段階につながるようである。

なお、掘立柱建物群に先行すると考えられる大型の堅穴住居を中心建物の東西で1棟ずつ検出しており、北側でも竈を持たない小型の堅穴住居を確認している。ただ、大型住居から出土した土器は、区画溝から出土する土器と比較して若干古い様相は示しているが、A群建物と併存する可能性もあるため、一応このグループの中に入れて図示しておく。

次の段階のものとして、5間×3間の大型建物を中心として配置された、ほぼ正方位の建物群(B群)を想定できる。これらの建物群の共存関係を判断するのは非常に難しいが、建物に重複関係があることや位置関係が不自然なことから、さらに2時期に細分できるようである。

B-1群は正方位からやや西へ振った建物群で、柱穴の切り合い関係や出土遺物から古段階と考えられるグループである。建物の振れの範囲は、N-8°-Wから真北の中に納まっており、まとまりが強い。方形区画東寄りの中央部に大型建物6を建て、その東には南北棟の建物11と東西棟の建物7が脇建物として付属する。建物6の南10mには同規模の大型建物15、さらに建物15の東約10mには東限溝ラインを超えて大型建物13が建てられており、これらの建物群で居住域を形成していたと思われる。ただ、同時並存と考えられる倉庫に関しては、建物6の西13mで建物32を1棟確認するのみであり、大型建物群で構成される居住域に比較して貧弱な様相を呈している。柱穴からの出土土器は新しいが同一規模であることから、あるいは建物29もこの時期に建てられた可能性が残る。また、方形区画の西南部には堅穴住居とは異なる方形を呈する浅い窪み(982方形堅穴状遺構)を検出している。この空間は建物群と小溝で区切られており、独立して何らかの機能を有していたと考えられるが、性格は不明である。

さらに、この段階には北限溝(136・138溝)の北に沿って1090・1091・1094・1099・1100溝が掘られ、北に展開する区画が明確になるとともに、大型建物25と建物24が東西に並んで建てられる。とくに、建物25は床面積45.5㎡と今回検出した建物群の中で最も大きく、北区画の主殿クラスの建物であったと考えられる。建物24は北側柱列を建物25と揃えるように建てられており、建物25の脇建物として機能したのであろう。このような新しい区画の展開は調査地南東部でも認められ、538・539溝が新たに掘削されるとともに、区画内に建物が見られる。また、南西部でも43溝の南に平坦地492土坑が形成され、耕作地として開発されたと考えられるが、492土坑の南に沿って東西方向の溝1が作られており、南への土地利用の拡大を想定することができる。

B-2群はやや西に振りつつも、全体としては振れの幅が大きい建物群である。振れの幅はN-18°-W~N-4°-Eとなる。中央に大型建物9を建て、南西に南北棟の建物38を配して建物群の中心とする。B-1群中央部の大型建物6は同一場所で4間×2間の建物5に小さく建て替えられており、南東端部の建物13も同一場所で建物14への建て替えが認められる。建物9の北側には建物29・36・37の倉庫群が建てられ、西側の建物20も同時期の建物であろう。

ここで注目すべき点は、この時期に区画溝の機能低下がかなり進行することである。北と東の区画溝群は埋没した可能性が高く、西区画の842溝と南区画の81溝も排水のために機能するだけで、調査地南東の区画溝群もほとんどが廃棄されるようである。それとともに、掘立柱建物が周辺に広く展開しはじめており、北側には同一規模の建物33・35が併存し、西側には建物18、南側には谷筋を挟んで建物17が建てられる。また、集落全体の排水を担った43溝も、この時期にはある程度埋没が進行したであろうが、排水溝としての機能は谷地形とともに次のC群段階まで残ったと考えられる。

最後に最も新しい建物群として、南北に並列した建物3・4を中心とする東へ振れる建物群(C群)

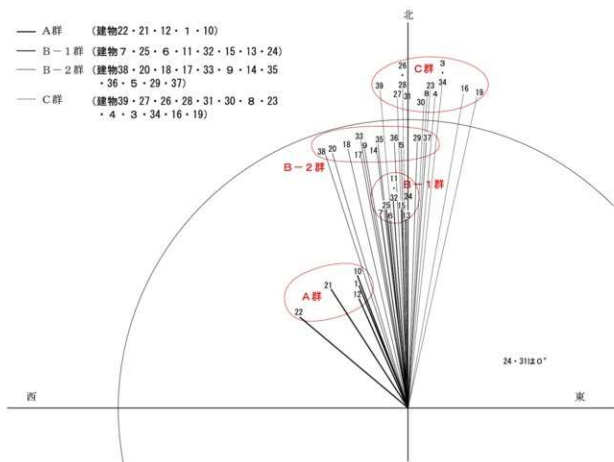


図103 掘立柱建物主軸方向分布図

がある。振れの幅は $N-5^{\circ}-W-12^{\circ}30'-E$ となる。B-2群の倉庫群と同一の場所に、2間×2間の小型倉庫建物を3棟東西に並置し(建物28・30・31)、建物28の南東に同規模の建物8を建てる。建物31の南にも建物34・39を南北に並置し、北側には東西建物23・26とともに小型倉庫27が建てられる。C群建物の特徴として、倉庫を主体に建物群が南側に開く「コ」字状に配置されており、南に空地をもつ谷が重要であろう。なお、出土遺物の様相からみると、西区画溝である842溝と南区画溝である81・387溝は、この時期まで遺存していた可能性が高い。とくに、842溝は03-1調査区で検出した溝8とともに、6世紀末まで集落を大きく区画する基幹溝として機能したと考えられ、当該期の上私部遺跡全体の構成を考えるうえで重要となる。

以上、方形区画内の遺構群について概観してきたが、調査区南部でも区画溝の一部や倉庫建物・櫓を検出しており、調査区外の南へも遺構が広がる可能性がある。ただ、方形区画の南西は前述したように西へ向かう谷となっており、ここから谷筋を流れる川が始まっている。谷の南や西区画溝の西側では遺構密度は極端に低く、集落としては西端部にあたることは明らかである。

なお、今回検出した建物群の年代であるが、区画溝あるいは谷状遺構で一括廃棄された土器群をみると、6世紀前半から中ごろの土器が大半を占めており、A群およびB-1群がこの時期に相当するのであろう。細かく遺構の前後関係を見ると、建物12南西隅柱は387溝の下層にあり、建物32柱穴も建物12柱穴を切っている。これらの事実から、B群がA群に後続するグループであることは明らかである。B-2群では、建物5柱穴が建物6柱穴を切っており、建物29柱穴からは天井部ヘラ切り未調整の須恵器杯蓋が出土している。当資料は、口径が大きく形態的に6世紀第4四半期に位置づけられることから、B

ー2群はB-1群に後出して6世紀後半から末の年代を与えるのが妥当であろう。

C群については、建物4柱穴が建物5・6柱穴を切っていること、倉庫群柱穴の切り合い関係が最も新しいことなどから、B-2群に後続する建物群であると想定できる。実年代については根拠が少ないが、1087・1088土坑、81・842溝、537土坑や750溝などから出土する須恵器蓋杯の中に、稜線がほとんど消滅し天井部がへら切り未調整のままである蓋や、立ち上がりがかなり短く小型化した杯身などが認められる。また、谷の埋没土の中からも少ないながら7世紀初頭の土器が出土していることから、6世紀末から7世紀初頭と考えられるのが妥当であろう。ただ、それ以降の年代を示す土器はまったく出土しておらず、03-1調査の所見と合わせて集落の廃絶は7世紀第1四半期までと想定しておく。

第2節 上私部遺跡における古墳時代の遺構変遷

上私部遺跡の調査は、前節で述べたように2003年度から行われた03-1調査と、今回報告する2006年度に行われた05-1調査に分割して行われている(図104)。前回と今回の調査区は、同一地形上に位置し、集落の始まりに違いはあるものの同時代、同一の集落と認識している。したがって本節では、前回と今回の調査成果を踏まえた上で古墳時代の遺構変遷を整理し、本遺跡の古墳時代における総合的な評価の一助としたい。

また、今回の調査において質・量ともに中心となった古墳時代の遺構・遺物の中でも、計画的に配置された掘立柱建物群を含む方形区画は特筆すべきものであろう。なぜこの地に、後代の官衙関連遺跡と見紛うばかりの建物群が作られるに至ったのであろうか。これを明らかにすることは、本遺跡の理解に欠かせないと考える。遺構変遷の整理とあわせて、方形区画成立の背景にも迫ってみたい。

なお、03-1調査では堅穴住居を多数検出し、これを時期判定の中心としている。すなわち、遺構の切り合いと豊富な出土遺物から、各遺構の時期判定を行い、遺構量や規模形状の変化を勘案してI~V期に分類している。これに対し05-1調査では、掘立柱建物が遺構の中心である。このため建物方位からA・B-1・B-2・C群の4群に大別し、出土遺物と切り合いから各群の時期判定をしている。

このように、時期判定の方法に差があり、それぞれの小期と群を同じ時間軸の中で評価するにはやや問題が残る。特に、堅穴住居が姿を消した後から集落の廃絶までの時期は、推測の域を出てはいない。しかし少量ながら出土する遺物から、前回・今回ともにほぼ同じ時期幅を想定している。他の時期も、多少相前後する可能性はある。以上のような問題点を踏まえた上で、05-1調査のA~C群と03-1調査のI~V期の併行関係を整理すると、おおよそ表1のようになる。以下、上記併行関係から作成した、各期別の遺構変遷図(図105・106)を使い、各期ごとの変遷を概観する。

I・II期

I期は5世紀前半~中頃に相当する。上私部遺跡が、本格的に居住域とされるのはこの時期からである。遺構は、03-1調査区の中央から北東にかけて、高燥な部分にのみ検出されている。属する堅穴住居は11棟(住居1~11)である。平面形態は、隅丸方形~方形を呈するものが多く、一辺5.5m以下の小型のもののみである。建て替えの方法は、新しい住居の一角が古い住居の一角を切って構築する方法のみが見受けられる(住居1・2および住居3・4)。掘立柱建物は堅穴住居に比べて少なく、小型の3棟(建物4~6)がこの時期に属する可能性がある。また、当該期の遺構から、韓式系土器やそれを模倣した土師器が出土しており、本遺跡周辺の開発と渡来系集団との関わりが想定できる。

II期は、5世紀後半~6世紀初頭に相当する。遺構の広がり、I期よりもやや南に拡大している。

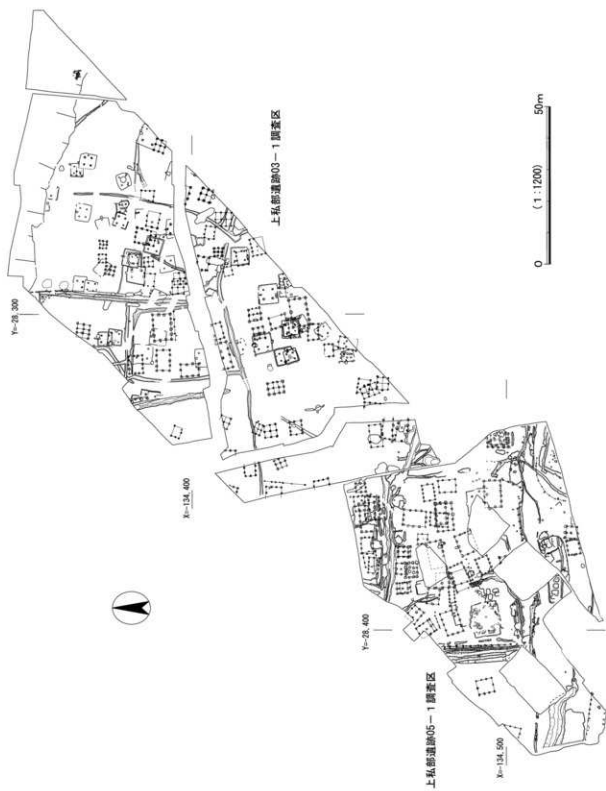


图104 上私部遺跡調査地全体図

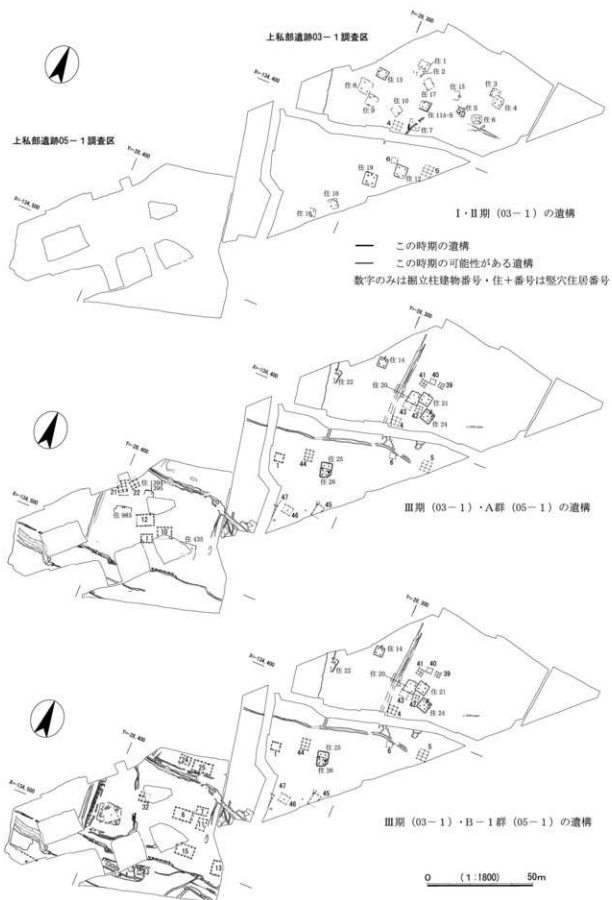


図105 上私部遺跡変遷図 (1)

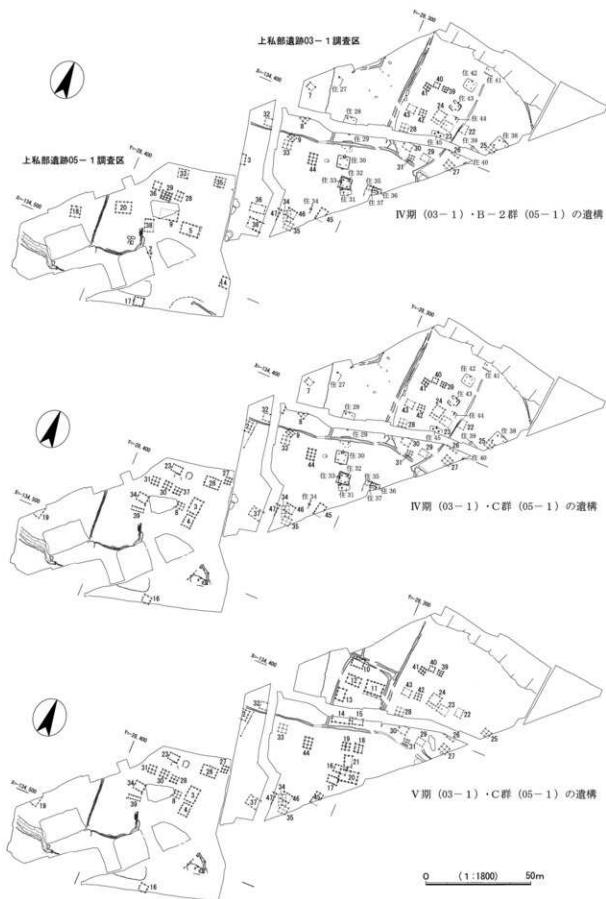


図106 上私部遺跡変遷図 (2)

表1 上私部遺跡小期対応表

期	03-1区調査区			05-1調査区	
	年代	陶邑田辺編年	陶邑中村編年	群	年代
I	～5C中葉	～TK208型式	～I型式第3段階		
II	5C後葉～6C初頭	TK23～TK47型式 MT15型式	I型式第4・5段階 II型式第1段階		
III	6C初頭～6C中葉	TK10型式	II型式第2・3段階	A群	6C初～6C前葉
				B-1群	6C前半
IV	6C後葉～7C初頭	TK43～TK209型式	II型式第4・5段階	B-2群	6C後半
				C群	6C末～7C初頭
V	7C前半	TK209～TK217型式	II型式第5・6段階		

この時期に属する竪穴住居は7棟（住居12・13・15～19）。平面形態は、方形を呈するものが多い。一辺5.5m以下の小型住居が主体であるが、大型の住居も少数ながら存在する（住居12・19）。建て替えの方法は、前後の時期と同じ新しい住居の一角が古い住居の一角を切って構築する方法と推定できる（住居13・14）。掘立柱建物はI期と同様、小型の3棟（建物4～6）がこの時期に属する可能性がある。

Ⅲ期・A群

Ⅲ期は、6世紀前半～6世紀中頃に相当し、05-1調査のA群とB-1群の年代観と一致する。しかし、A群とB-1群を時期的に区別することが難しく、A群の時期を特定することは困難である。

この時期におけるもっとも顕著な変化は、05-1調査区に大型の掘立柱建物を中心とする建物群を有する方形区画が出現することである。これに呼応するかのように03-1調査区でも、前代までは遺構が検出されていない南西部でも遺構が確認されるようになる。

この時期に属する竪穴住居は12棟（03-1調査区8棟、05-1調査区4棟）である。平面形態は、方形を呈するものが多いものの、隅丸方形を呈する住居も少量存在する。一辺5.5m以下の小型住居が主体を占めるが、大型の住居も少数ながら05-1調査区などに存在する（435・983住居）。建て替えの方法は、前の時期と同じ新しい住居の一角が古い住居の一角を切って構築する方法をとる（住居20・21、23・24、25・26、1393・1394）。

この時期に属する掘立柱建物は、8棟（03-1調査区3棟、05-1調査区5棟）。2×3間以下の小型建物が多いものの、05-1調査区に限ると大型・中型の建物が多数である。建物の規則的な配置は、05-1調査区の建物1・10・12で認められるが、空地を指摘できるような配置ではない。掘形の平面形態は、03-1調査区で円形主体の建物が多く、05-1調査区では隅丸方形主体の建物が多数であった。

区画については05-1調査区の方形区画以外に、03-1調査区において逆T字型に溝が開削され、南と東西に居住域が分断される。これが区画を意識したものであるかは、現在のところ不明である。

Ⅲ期・B-1群

当該期は6世紀前半～6世紀中頃に、A群に後続する。前述の通り、B-1群の時期を特定することは困難である。03-1調査区についてはⅢ期・A群と重複するためここでは割愛する。

この時期に属する掘立柱建物は、12棟（03-1調査区3棟、05-1調査区9棟）である。03-1調査区では小型が多数を占めるが、05-1調査区では大型・中型の建物が多数である。建物の規則的な配置は、05-1調査区の建物6・7・11で認められるが、空地を指摘できるような配置ではない。掘形の平面形態は、Ⅲ期・A群と同様、03-1調査区では円形主体の建物が多く、05-1調査区では隅丸方形主体の建物が多数である。

区画は、05-1調査区の南東側にL字型の溝（534～537溝）と、方形の掘形を有する大型の柱穴（625・

627土坑)を検出した。このことから、南東にも別区画が存在する可能性がある。

Ⅳ期・B-2群

Ⅳ期は6世紀後半～7世紀初頭、05-1調査区のB-2群は6世紀後半～末に想定している。

この時期に属する竪穴住居は、03-1調査区のみで19棟である。平面形態は、確認できたもの全てが方形を呈する。規模は、前代と変わり、大型住居が主体を占めるようになる。建て替えの方法も、前の時期と変化し列状に並ぶ方式が採用される(東列:41～45, 西列:28～30)。

この時期に属する掘立柱建物は、16棟(03-1調査区3棟、05-1調査区13棟)である。03-1調査区では小型が多数を占めるが、05-1調査区では大型・中型の建物が多数である。建物の規則的な配置は、05-1調査区で認められる。建物5・9・38の組み合わせは、南側に空閑地を持つ品字型の配置の可能性がある。また、その北側では総柱建物29・36・37が東西に3棟並んでいる。柱穴掘形の平面形態は、03-1調査区も05-1調査区と同様、隅丸方形主体の建物が多数となった。なお、03-1調査区の建物3は報告書では、Ⅲ期に属すると報告されている。しかし、当該期に建物33・35が付近で建てられること、方位が近似することから、建物3は当該期に属すると判断した。

区画については、05-1調査区において、方形区画の北と南の区画溝が埋没し、建物群が外へ拡大している。また、05-1調査区南東には、一部溝と横列が残っており、前代からの別区画が存在する可能性がある。

Ⅳ期・C群

当該期は、6世紀末～7世紀初頭に想定している。03-1調査区についてはⅣ期・B-2群と重複するためここでは割愛する。

この時期に属する掘立柱建物は、16棟(03-1調査区3棟、05-1調査区13棟)である。05-1調査区でも03-1調査区と同様、小型が多数を占める。これは、05-1調査区が総柱建物群を中心とするようになったためである。建物の規則的な配置は、05-1調査区で認められる。建物3・4・28・30・31・34・39が、南側に空閑地を持つコの字状を呈する。掘形の平面形態は、Ⅳ期・B-2群と同様、隅丸方形主体の建物が多数である。

なお、03-1調査区の建物2とこれに平行する柵列1は、報告書ではⅢ期に属すると報告されている。しかし、C群の建物方位と近似することから、これらの遺構を当該期に属するものと判断した。

Ⅴ期・C群

Ⅴ期は、7世紀初頭から、上私部の古墳時代集落が廃絶する7世紀前半に想定している。05-1地区についてはⅣ期・C群と重複するためここでは割愛するが、集落内において、総柱建物群だけが先に廃絶する可能性は低いと考え、Ⅴ期とC群は同時期に廃絶していると想定した。

この時期に属する掘立柱建物は、25棟(03-1調査区12棟、05-1調査区13棟)である。03-1調査区でも大型・中型が多数を占めるようになり、建物の規則的な配置も認められる。03-1調査区の建物10～15は、東側に空閑地を持ち、四周を溝で囲まれている。掘形の平面形態は、前代と同様、隅丸方形主体の建物が多数を占める。

以上、上私部遺跡全体の遺構変遷を概観してきた。これをまとめたものが表2である。この表をみると、各要素の変化する時期にまとまりが存在することがわかる。特にⅡ期とⅢ期・A群の間(以下、画期1)と、Ⅲ期・B-1群とⅣ期・B-2群の間(以下、画期2)に各要素の変化が集中している。

画期1は言うまでもなく、05-1調査区の集落域としての開始時期である。それまで集落域からは外れ

表2 上私部遺跡変遷表

03-1 調査区 (期)			I	II	III	IV	V			
05-1 調査区 (群)					A	B-1	B-2	C	C	
形状	隅丸方形 ～方形	03-1	■							
		05-1	■							
	方形	03-1	■	■	■	■	■	■	■	
		05-1	■	■	■	■	■	■	■	
	竪穴住居 (一辺5.5m 以上を大型)	小型	03-1	■	■	■	■	■	■	■
			05-1	■	■	■	■	■	■	■
大型		03-1	■	■	■	■	■	■	■	
		05-1	■	■	■	■	■	■	■	
建て替え規制	隅・隅	03-1	■	■	■	■	■	■	■	
	05-1	■	■	■	■	■	■	■	■	
列状	03-1	■								
	05-1	■								
掘立柱建物	規模 (2×3間 以下を小型)	小型	03-1	■	■	■	■	■	■	
			05-1	■	■	■	■	■	■	
	中・大型	03-1	■	■	■	■	■	■		
		05-1	■	■	■	■	■	■		
	規則的な 配置	空閑地なし	03-1			■	■	■	■	
		05-1				■	■	■	■	
空閑地有り	03-1				■	■	■	■		
	05-1				■	■	■	■		
柱穴掘形 平面形態	丸主体	03-1	■	■	■	■	■	■		
		05-1	■	■	■	■	■	■		
	隅丸方形 ～方形	03-1	■	■	■	■	■	■		
		05-1	■	■	■	■	■	■		
区画		03-1	■	■	■	■	■	■		
		05-1	■	■	■	■	■	■		

有り・同時期中の多数 ■
 同時期中の少数 ■
 可能性有り ■
 なし・不明 □

ていた区域に突如として、大型建物を中心とした掘立柱建物群と、それらを取り囲む方形の区画施設が現れている。ここで注目しておきたいのは、それまで集落の中心であった03-1調査区では、それほど大きな変化を見受けられないことである。

画期2も多くの変化が集中している。竪穴住居は、住居として生活の基本である。その竪穴住居の建て替え方式が、変化することに注目したい。この変化は、当時の土地所有認識を超えるような何らかの規制があったことを意味している。しかも、南北に2列ほぼ一定間隔で住居が並ぶということは、その規制が人為的であった可能性を示唆している。また、南側に空閑地を持ち、北側に掘立柱建物群が並び、方形の掘形を持つといった、後の官衙関連遺跡と共通するような特殊な建物配置がC群に先立って出現するのもこの時期である。画期1と比べこの画期は、一般の集落部分と特殊な部分の両方に影響を与えている点で、上私部遺跡にとって重要な画期と考えている。

では、画期2を伴うような規制は、どこから派生したものであろうか。例えば、古代の官衙に於ける建物に囲まれた空閑地は、儀礼の場であり、行政を円滑に行なうため、支配者の権威付けを行なうための装置でもある。上私部の特殊な建物配置が同様な機能を果たしていたとすれば、この時期に何らかの権威付けを必要としたか、新たな制度を導入する契機となった事件を想定しなければならない。

そこで注目したいのが、本遺跡から約1kmの距離に位置する森遺跡である。この遺跡は、大規模な鉄生産遺跡として知られており、それに携わっていた集団として「肩野物部」の存在が真鍋成史氏により指摘されている³⁴⁾。さらに、森遺跡は集落の開始と終焉を本遺跡と同じくし、6世紀末には製鉄が行われなくなるという大きな画期も共有する。また、森遺跡の大規模な鉄生産には新しく渡来した人々の技術が使われたと想定されることから、森遺跡での鉄生産に上私部遺跡にいた渡来系の集団が関与した可能性もある。そして、上私部遺跡の居住集団と「肩野物部」氏が何らかの関わりをもつのであれば、真鍋氏が指摘するように6世紀末の物部守屋とその一族が滅亡した影響を受け、集落に大きな変革が起こり、それが遺構の画期として反映されていたことも充分考えられるのである。

第3節 上私部遺跡出土の須恵器の系譜と展開

今回の調査で出土した土器群については、前述したように廃棄が繰り返されたと考えられる区画溝や土坑からの資料である。このため、一括遺物としての良好な資料群は少ないが、出土量が多く時期幅が非常に限定できる資料として、844溝と535溝および677～679・753・754土坑の資料が挙げられる。これらの資料は、少なくともA群からB-1群建物の成立時期を考えるうえで重要な資料といえる。

ここでは、これらの遺構から出土した須恵器、中でも蓋杯類を中心として分析を行なうことによって、須恵器群の系譜や年代観を明らかにする。そして、他の遺構から出土した須恵器にも検討の対象を広げて、遺跡の性格をより明確にしたいと考えている。

844溝と535溝から出土した須恵器の杯類を観察すると、蓋は口径15cm前後が主流で、大きくは凹線状に稜線を表現するものと、不明瞭な段や稜で稜線を表現するものが認められる。また、杯身は口径13cm前後で、短く湾曲しながら内傾するものと、やや長く直線的に内傾するものがある。天井部および底部のヘラケズリは全体の3分の2から2分の1ほどで、粗く仕上げるものが多い。このような特徴は一部古い様相を持つものも含むが、677～679・753・754土坑の資料でも多く確認でき、建物群の成立時期を示す土器群の属性として把握できよう。

これらの属性を陶邑古窯跡群の編年観に照らし合わせると、田辺編年のTK10型式のTK10号窯段階からMT85号窯段階、中村編年のⅡ型式第2段階から第3段階に相当すると考えられる^(R3)。この年代観については、当時期に盛行する内面の当て具痕跡が多く認められることから確認することができる^(R6)。ただ、杯身口縁端部を観察すると、内傾する面や凹線状に段をもつものが多く残っており、端部の退化が進み丸く納めることが型式属性となる陶邑の編年に対応していない。また、内面の当て具痕跡が同心円文(図107左上)だけでなく、刻目目同心円文や細かい斜格子文など特殊な当て具痕跡がみられ(図107左下)、土器群の胎土・焼成を観察すると砂粒を多く含み灰色から灰白色を呈するものが多く、陶邑産須恵器とは異なるものが多く出土している。このような陶邑資料との型式属性や胎土・焼成の違いは、当遺跡にもたらされた須恵器群が陶邑産のものではなく、大半が在地窯で生産供給された可能性を示唆している。

ここで注目すべきことは、上私部遺跡から出土する高杯では、内湾する短脚をもつ高杯が主体となることである。陶邑窯ではⅡ型式第1段階(MT15型式)まで有蓋短脚高杯が認められるが、Ⅱ型式第2段階(TK10型式)以降は急速に消滅していく。ところが、Ⅱ型式第2段階から第3段階(TK10型式)に相当する上私部遺跡において多くの短脚高杯が出土している。とくに、脚部の形態を観察すると、5世紀から伝統的に踏襲されてきた外反ぎみに下方へ開き端部を下へ屈曲させるものは認められず、やや内湾ぎみにスカート状に開くタイプだけとなっている。透かしも一般に多くみられる円形や方形だけでなく、切り込み形が新たに成立しており、端部は平坦面あるいは凹線状の段をなす。このような有蓋短脚高杯は、菅原雄一氏によって「陶邑窯西地域系譜」として分析されており、近畿地方周辺部において小規模に拡散していく系譜として捉えられている^(R7)。

また、杯蓋についても凹線状稜線をもつものと退化した稜や段で表現するものが同時期に共存する可能性が高く、新旧の型式が共存する実態は窯跡資料である吹田53号窯での分析結果と共通する^(R8)。5世紀末から6世紀初頭に在地へ拡散していく須恵器生産では、陶邑窯の形態を踏襲しつつ前代の型式属性を残しながら独自の変化を遂げていることが指摘されているが、6世紀前半における交野地域の須恵器を

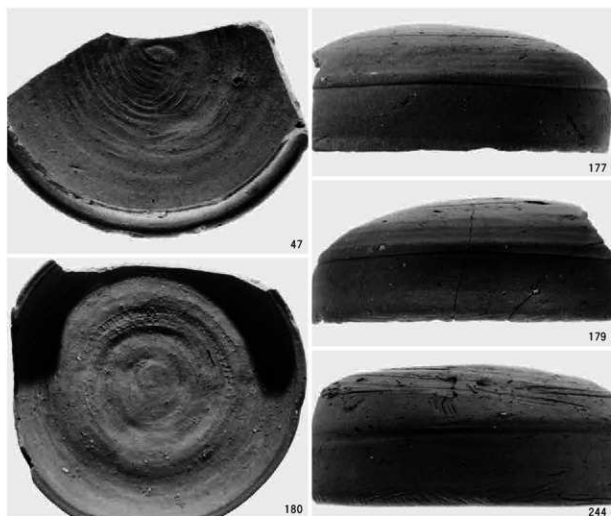


図107 蓋杯にみられる当て具痕(左)と刻み目状調整(右)

みると、新旧様相をもつ蓋杯の多様性ととも、短脚高杯が新しい段階まで残る地域色をもって発展していると捉えることができる。

さらに、上私部遺跡出土須恵器に特徴的なのは、844溝を掘り直した842溝から須恵器の甎が出土していることである。外面調整にタテハケを施し、内面調整にも一次調整にヨコハケが認められるなど、土師器の製作技法が多用されており非常に特殊な資料である。842溝から出土する蓋杯には稜線が消滅した蓋や、天井部のヘラケズリが非常に粗くヘラ切り痕跡を明瞭に残す蓋などが出土しており、Ⅱ型式第3段階から第4段階(TK10型式MT85号窯段階～TK43型式)に比定することができる。しかし、この段階には陶邑での甎の生産は認められず、千里丘陵の桜井谷窯跡群で特徴的に多く生産されている⁸¹⁰⁾。中でも桜井谷2-29号窯跡の灰原北側斜面から出土した甎は、ハケ調整こそ認められないが、口径がほぼ同じで端部に内傾する広い面をもつなど、形態的に類似している⁸¹¹⁾。

このように上私部遺跡の須恵器群には、吹田窯や桜井谷窯を包括した千里古窯群の須恵器との共通性が強く認められそうである。千里古窯群は初期須恵器段階から採業を開始し、6世紀には陶邑とともに畿内を代表する須恵器生産地として機能していた。とくに、北摂地域へ主体的に供給し、その供給先は淀川水系を背景として乙調地域まで広がる⁸¹²⁾ことが推定されている。千里古窯群では6世紀段階での短脚高杯の生産は認められないため、上私部遺跡の須恵器との直接的関係を想定することはできないが、交野地域において須恵器生産が行なわれたのであれば、甎の生産に特徴付けられるように千里古窯群から

の一部工人の移動など、何らかの関係を考えるのが自然であろう。

ところで、上私部遺跡から出土する須恵器杯蓋には、口縁端部外面にいわれる刻み目状調整のみられる資料が図示したものを含めて12点確認できた(図107右)。日置荘遺跡の須恵器窯出土土器を検討した江浦洋氏によれば、同様の須恵器杯蓋は陶邑窯でも北側と東側に展開する周辺地域に分布が集中しているという。⁸¹³⁾ 同じく刻み目状調整をもつ杯蓋は桜井谷窯跡群でも確認されており、特定工人集団のクセともいえる成形技法によって陶邑周辺地域の須恵器窯群と千里古窯群が密接に結びついていたことがわかる。さらに、この杯蓋が物集女車塚古墳からも出土しており、物集女車塚古墳の須恵器が千里古窯群から供給された可能性の根拠とされている。⁸¹⁴⁾

上私部遺跡のこれらの杯蓋の系譜については、陶邑周辺窯群と千里古窯群のどちらとも決め難いが、前述したハケ調整を多用する飯生産や蓋杯類の様相から千里古窯群の影響を考慮しておきたい。そして、短脚高杯の伝統も陶邑窯の主流ではなく、中佐備窯など一部の周辺地域で展開していることから⁸¹⁵⁾、陶邑周辺窯の形態的伝統を継承する北摂系の工人たちによって、在地趣向の需要から取捨選択されたと思われるのである。

ここで視点を変えて、交野地域の群集墳との関係をみてみたい。上私部遺跡の須恵器を考えるうえで、倉治古墳群の第1号墳から出土した須恵器群が重要であろう(図108)。第1号墳は長さ2.1m、幅0.8mの石室をもつ小古墳であるが、石室構造は堅穴状の横穴式石室であり在地性が強く現われた古墳といえる。⁸¹⁶⁾ 石室内からは杯蓋や有蓋高杯・壺類などが出土しているが、有蓋高杯は上私部遺跡出土資料と非常に類似した短脚高杯で、方形の透かしを四方に穿っており、同一生産地からの供給であることは間違いない。高杯蓋の稜線は凹線状のタイプで、杯蓋は不明瞭な稜線で表現するなど、上私部遺跡の844溝や535溝出土須恵器と同型式であり、掘立柱建物群の成立と古墳群の成立がほぼ同時期であったことを示している。千里古窯群と西摂の八十塚古墳群との供給関係を検討した藤原学氏は、「須恵器の在地生産体制が確立された6世紀以降は、地域の目立った後期古墳の展開においては、必ず在地の須恵器生産の体制があり、また、在地の須恵器生産が確立した背景には、必ず地域にそれを裏付ける有力な後期古墳文化の特質を認めることもできるはずである」と、明確に在地須恵器生産と後期古墳の成立との密接な関係を指摘している。⁸¹⁷⁾

歴史的環境でもみたように、交野地域は良質な粘土が広く採取される地域であり、上の山遺跡や茄子作遺跡の調査成果から初期須恵器の窯跡の存在も想定されている。⁸¹⁸⁾ 上私部遺跡の集落が大規模な掘立柱建物群で構成されるようになる6世紀前半において、交野地域に群集墳が成立するとともに在地須恵器生産が盛んになったことは充分考えられる。そして、そのような須恵器生産の伝統は、大谷窯や大谷北窯あるいは枚方須恵器窯群などの操業にみられる6世紀末から7世紀の須恵器生産に引き継がれる。

ちなみに、上私部遺跡からは口径20cmを超える大型蓋杯が、844溝と136溝から出土している。これらの特殊な蓋杯は6世紀前半に集中して生産された器種であり、滋賀県内では掘立柱建物群が採用され始める集落遺跡において多く出土する傾向から、集落内首長層による地鎮などの祭祀に伴う可能性が指摘されている。⁸¹⁹⁾ 上私部遺跡でも大型蓋杯が出土した溝は方形区画を形成する東溝と北溝であり、掘立柱建物群で構成される集落の成立を契機として在地窯で生産され供給使用されたと考えられる。一般集落とは異なる規格性をもつ掘立柱建物群の出現は、在地支配層の居住空間の成立を示唆しており、それと対応して群集墳の造営や儀礼で使用する須恵器の在地窯での生産を促したのである。

また、朱記号をもつ須恵器蓋杯も5点確認でき、03-1調査区での成果をふまえると6点の出土とな

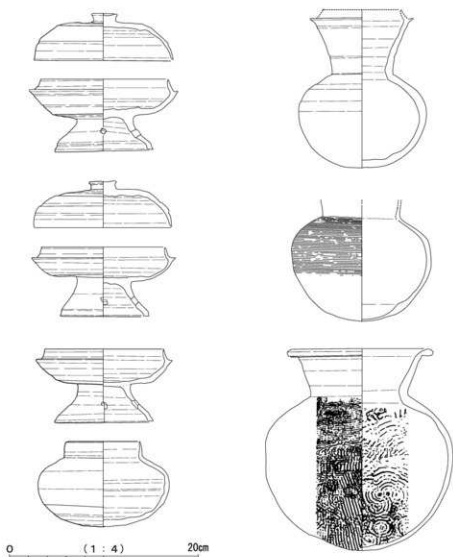


図108 倉治古墳群第1号墳出土須恵器（註16文献より引用）

る。記号は十文字や一文字を底部外面に施すのが一般的であるが、側面に朱記号を施す事例もみられる。朱記号を施す須恵器は、大畷遺跡周辺で多く出土することから鍛冶工人との深い関連が指摘されており、今回の調査でも少量ながら輪羽口と鉄滓が出土していることは注目できる。上私部遺跡の南1kmの地点には、北河内最大の製鉄遺跡である森遺跡が所在し、北東1.3kmの山麓、倉治古墳群の北側には時期不明ながら鉄滓が横穴式石室から出土した清水谷古墳が造営されている。上私部遺跡周辺では鍛冶製鉄に関係の深い遺跡が広がっており、前節で述べたように森遺跡での鍛冶製鉄に強く関わった集団の居住域である可能性もある³²¹⁾。

さらに、集落内祭祀の事例として、口縁部打ち欠きの須恵器が若干確認できる。土器の口縁部を意図的に打ち欠いたかどうかを判断するのは非常に難しいが、少なくとも750溝から出土した須恵器壺は二重口縁部が綺麗に欠損しており、周辺から破片は全く出土しなかった。共存した土師器広口壺も口縁部が打ち欠かれており、底部は内面から穿孔が施されるなど、明らかに祭祀具として使用された土器群である。

口縁部打ち欠きの土器については、弥生時代以来の伝統に基づいており、古墳の副葬品だけでなく集

落遺跡からも認められることから、再生復活・五穀豊穡・水の恵みの祭祀と深く関わる事が指摘されている¹³²⁾。上私部遺跡でも一部図示したように、区画溝である55・136・535・844溝や678土坑などから口縁部を打ち欠いたと思われる蓋杯や甕が出土しており、水に関わる祭祀との関連が目できよう。

なお、今回の調査で出土した須恵器の大半がⅡ型式第2～4段階（TK10～TK43型式）のもので、この調査区の掘立柱建物群は6世紀中頃に前後する時期に最も栄えていたことがわかる。それ以降の遺物は極端に少なくなるが、136・138溝が埋没した後に形成された1087土坑や、4区の537土坑と750溝などからⅡ期5～6段階（TK209～TK217型式）併行と考えられる蓋杯が出土している。これらの土器はC群建物の時期を示すものであり、それ以降の型式の須恵器がほとんど出土しないことから、遺跡の終焉は7世紀初頭ということになる。

そして、上私部遺跡の衰退と対応するかのようには、倉治古墳群や寺古墳群などの後期群集墳が追葬も含めて6世紀末から7世紀初頭には造営されなくなり、森遺跡での鉄・鉄器生産も同時期に終焉することは重要である。7世紀初頭の推古朝には前代とは異なる大規模な開発が国家的規模で行なわれたことが、文献史学や考古学の立場から提唱されており、時代の画期として非常に重視されている¹³³⁾。推古朝における耕地や交通網の新たな開発に伴って在地の支配構造が変化し、拠点集落域の変動を引き起こしたのであろう。「肩野物部」氏との関係も含めて、遺構の衰退の歴史的背景を検討していく必要がある。

第4節 新羅土器について

今回の調査では、集落域の北を区画する136溝内より新羅土器が出土した。ここでは、新発見の新羅土器を資料紹介するとともに、上私部遺跡から新羅土器が出土した意義について考えてみたい¹³⁴⁾。

今回出土した新羅土器は、長頸壺の頸部から口縁部にかけての破片である。口径約20cmの大型壺で、口縁部が上方に屈曲し、口縁端部は内傾する広い面を持つ点や、頸部に上下三分割の文様帯を設け、市松模様の櫛描き文と列点文による接続鋸歯文を交互に配置するなど、新羅土器特有の形態と装飾もっている。胎土・焼成も上私部遺跡で出土する他の須恵器とは全く異なっており、産地の差は明らかである。

日本国内で出土した新羅土器の類例をみると、鳥取県塔ヶ平遺跡で出土したと伝えられている長頸短脚壺が目できる¹³⁵⁾（図109-1）。実測図でみる限り大きさは一回り小さいが、頸部から口縁部への屈曲や境界の文帯、頸部を三段の文様帯に分割するなど器形や構成が非常に類似しており、櫛描き施文具によって列点接続鋸歯文や櫛描き文を施す点も共通している。当資料は耕作中に出土したということで遺跡の性格はまったく不明であるが、定森秀夫氏は二重口縁に移行する前の形態を残す資料として、6世紀前葉に位置づけている¹³⁶⁾。上私部遺跡の新羅土器と共存した136溝出土の須恵器蓋杯は、凹線状に稜線を表現し口縁端部に段を有する杯蓋と、にぶい稜で稜線を表現する蓋杯が共存しており、立ち上がりが短く浅い杯身に若干の新しい様相を認めつつも、前節で検討した844溝や535溝からあまり下らない時期に比定するのが妥当であろう。大型蓋杯が出土している点も考慮して、Ⅱ型式第2～3段階（TK10型式）のやや新しい時期に位置づけられる土器群である。

朝鮮半島に目を移すと、まったく同じ文様構成の長頸壺は認めることができなかったが、縦方向の櫛描き文を交互に配する文様構成は、慶山林堂地域古墳群や慶州隄城洞遺跡の積石木郭墓から出土した5世紀後半から6世紀前半の高杯蓋や壺・器台などに多く施されている。林堂2号墳南主郭から出土した大型長頸壺には縦櫛描き文だけでなく×字状の列点文も交互に配置しており、隄城洞遺跡8号積石木郭¹³⁷⁾

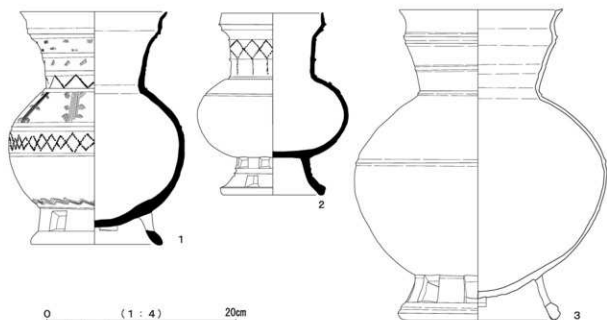


図109 新羅土器長頸壺（1：塔ヶ平遺跡 2：慶州皇吾洞遺跡 3：慶州陸城洞遺跡）

墓から出土した長頸壺は、形態の上私部遺跡の前段階に位置するもので、5世紀末から6世紀初頭に編年される資料である（図109-3）。また、列点連接鋸歯文は、二重口縁が発達したタイプである、皇吾洞381番地A号墳から頸部に施した長頸壺が出土している（図109-2）。全体のプロポーションや文様の構成では、昌寧地方から出土したと伝えられる長頸壺が非常に類似しており、新羅土器の特徴をもつ土器であることは間違いないであろう。新羅土器の詳細な型式分類と編年については、白井克也氏が新羅地域の土器を集成して行ない、日本の須恵器との並行関係を綿密に分析している³¹⁾。上私部遺跡の長頸壺の形態をみると、前述した陸城洞遺跡の長頸壺と皇吾洞381番地A号墳の長頸壺の中間型式であり、白井氏の編年によれば「付加口縁」が発達しはじめる新羅ⅡC期古段階から中段階に相当すると考えられる。新羅ⅡC期古段階は須恵器では田辺編年でT K47型式からM T15型式との並行関係が想定されているが、上私部遺跡では共存する須恵器が若干新しい様相を見せている点でやや問題を残している。

このように、上私部遺跡出土の新羅土器は6世紀前半から中頃に朝鮮半島よりもたらされた舶載品であると考えられ、土器の移動の背景にはやはり新羅系渡来人の存在を想定することができるであろう。上私部遺跡では、03-1調査で検出した5世紀の竪穴住居から韓式系土器の平底鉢が出土しており、今回の調査でも43溝などから韓式系土器の甌の破片や牛角状取手が出土するなど、集落成立期における渡来人の存在を示唆する遺物が若干認められる。天野川対岸の茄子作遺跡でも韓式系土器が多数出土した特殊な竪穴住居が検出されており、交野台地の開発に際して在来の人々とともに北河内の渡来系の人々も移住してきた可能性がある³²⁾。そして、今回出土した新羅土器は、居住空間が竪穴住居から掘立柱建物へと発展し、集落域が区画溝で囲まれるようになる6世紀段階になっても、当地域において渡来人とくに新羅系の人々の活動が盛んであったことを物語っているのである。

ここで、交野地域と新羅系渡来人の関係を考えるうえで注目されるのが、茨田屯倉の成立伝承である。茨田屯倉の成立過程については、『日本書紀』では仁徳天皇11年に新羅人を役して茨田堤を造営し屯倉を

立てたことが記されている。「古事記」仁徳天皇記でも「秦人を役ちて、茨田堤および茨田三宅を作」ったとされており、屯倉の設置に新羅系氏族である秦氏が深く関与していたことがわかる。茨田屯倉の実態については茨田堤の造営と深く関係しており、枚方丘陵西側の低地の開発が中心であったことは間違いない。しかし、前述したように交野郡にも屯倉との関係を暗示する「三宅郷」が設置されており、当地域にも屯倉の施設が所在したと想定できる。

おそらく、屯倉の設置によって交野台地の開発も進められたと考えられ、それとともに天野川流域を押しやることによって淀川水系の左岸地域全体を掌握しようとしたのであろう³²⁰⁾。韓式系土器の様相から、交野台地の開発には伽耶系統や百濟系統など様々な出自の渡来人が参加したと想定されているが、屯倉の経営に大きく関与したのは秦氏を中心とする新羅系渡来人であり、屯倉の重要施設が交野に設けられたのならば、かれらの多くが天野川流域にも移住してきたと推測できる。

上私部遺跡の新羅土器は、そのような歴史的背景の中で天野川流域に移住してきた新羅系渡来人の活動の一端を示す資料であり、かれらの文化的伝統は在地に深く根ざしていった。7世紀以降に建立された天野川流域の古代寺院をみると、他の地域よりも強く新羅の要素が確認できることが指摘されている³²¹⁾。これらの事実は、上私部遺跡に新羅土器を持ち込んだ6世紀に生きる渡来人の末裔たちが、時代を超えて在地に深く根ざしていたことを示しているのである。

第5節 古代から中世以降の土地利用

上私部遺跡では層位の検討やプラントオパールの分析により、古墳時代集落面の直上層から現地表の盛土直下に到るまで、耕作土層が連続して続いており、継続的に生産地として利用されてきたことが判明している。これらの遺構面のうち、実際に面的に精査を行なったのは14～15世紀田面（第1面）のみであるが、古墳時代面にみられた上層からの耕作溝跡や調査区壁面の層位から、調査区内での耕作の状況を概観し、検討を行なう。

第1段階（古墳時代直上層～13世紀田面直下）

平面での検出はしていないが、13世紀田面（第2面）の下層から古墳時代集落面まで土壌化した層が数層続き、一部では畦畔の痕跡がみられた。このことから、古墳時代集落面の直上層から耕作地として利用されたものと考えられるが、10cm程度の薄い層が幾層も累重していることもあり、畦畔はわずかに一部でその痕跡を確認できるのみである。しかし古墳時代集落面では、上層の畦畔に伴うとみられる溝跡が検出されており、不完全ながら畦畔の位置を推測することができた。これらの溝はほぼ方位と一致し、また方形を指向する区画をもつ。調査区内は中央付近を走る東西溝（106溝）と、1・2区の西より走る南北溝（48溝）によって区画され、106溝の北側は直線的な方形区画をなすが、南側は不整形で、106溝の手前で西側に曲折するものもある。

これらの溝からは出土する遺物がほとんどなく、時期は不明であるが、数条の溝が並行して走る状況からは、ある程度長期間の耕作の痕跡と考えてよいだろう。すべての溝が同時期とは断定できないために、一筆の大きさを決定することは困難であるが、参考までに溝間距離をみると106溝の南北で形状にかなりの差があるものの、おおむね15m前後となっている。

これらの溝は上層で面として検出した14～15世紀の畦畔の位置と近似するものが多い。また、1・2区西端や4・5区の谷筋部では耕作溝がみられず、807溝のような水溜状の遺構などがみられることから考えて、この部分には古墳時代集落面にみられる谷状地形がまだ残存しており、水田区画が形成されて

いない状態であったと推測される。

なお、珪藻および花粉分析ではこの期間の当地周辺が安定した土地であり、洪水も少なかったであろうことが指摘されている。とくに、耕作土層が厚く堆積した谷筋上では、一層の層厚が薄く、土壌化が著しく進んでいる。これらの事実は、当地での安定した用水確保が困難な状況であり、継続的な水田利用ではなく多くの場所で畑作が行なわれていたことを示唆している。

第Ⅱ段階（第1・2面）

14～15世紀とみられる田面（第1面）は報告でも述べた通り、面で検出して精査した。13世紀の田面（第2面）はその直下にみられる。第1面は粗砂層で覆われている部分が多く、良好に畦畔が残存していた。また第1面の畦畔は第2面の畦畔の上にさらに土を盛っているものが多いため、第2面の畦畔も下層と比べるとよく残されている。

これらの畦畔は先に述べた通り、古墳時代面に残された溝跡とほぼ同位置にある。畦畔1と2を区画の基礎として、それらに正方位を指向する畦畔を取り付けている（図110）。畦畔2の北側は下層と同様

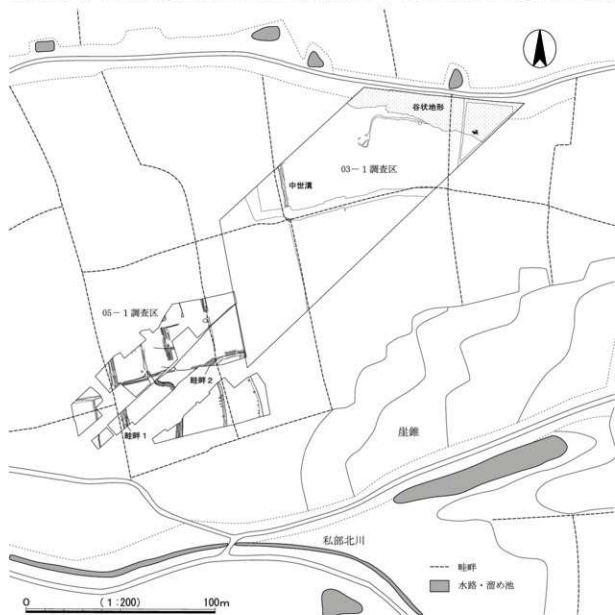


図110 調査区と周辺の地形

に直線的な方形区画で、南側も同様に畦畔2付近で西に向かって屈曲するが、下層よりも直線的になっている。一筆の東西幅も下層とそれほど変わらず、畦畔2の北側では15m前後、南側では25m前後となっているが、大きさはほぼつきがある。また、隣り合う筆間の比高差は比較的大きく、20~50cmである。特に畦畔2の南側では50cm程度と大きな差となっている。第1面で注意されるのは、1・2区の西端で新たに下層ではみられなかった畦畔9・10が作られていることである。また、4・5区谷筋部でも畦畔7・8が形成される。これらの畦畔がいつの段階で作られたのかは不明であるが、畦畔1の東では畦畔が曲折しているのに対し、畦畔10が直線的に作られていることは興味深い。この部分は下層段階では水田化することができなかった場所であるが、その後谷が埋まったことで水田が造営されたのであろう。畦畔1より東側は従来の畦畔の位置を踏襲したか、あるいは高低差がまだ激しかったために自然地形に沿った畦畔しか作ることができなかったのに対し、新設された部分では比高差も少なく、直線的な畦畔を造営することができたものとみられる。

珪藻・花粉・土壌粒度分析では、第2面段階以降の洪水の増加が指摘されており、その背景に森林資源の過剰利用による生駒山系のハゲ山化による土壌流失と、そのことに起因する私部北川天井川化が推測されている。また、この時期には周辺地域において溜池が多く造営されており、用水確保がかなり安定することで水田経営が広い範囲で可能になったことを示している。用水溝が発達した畦畔や、そこから取水・排水した痕跡がみられる田面遺構は、中世の土地開発の活性化を示す貴重な資料といえる。

第Ⅲ段階（第1面直上~現代）

面としては検出していないが、調査区壁面では畦畔とそれに伴う田面が良好に残っていた。畦畔の位置は壁面で確認する限り、第1面とあまり変わらない。

第1面を覆った砂の上面を耕作面とし、その後数層にわたり砂層と土壌化層が重なっている。これらの砂には発達したラミナが観察され、洪水によってもたらされたことが明らかである。場所によっては人頭大の花崗岩を含んでおり、東の交野山系からの大規模な土石流を受けたのであろう。洪水砂が完全に土壌化する前に次の洪水砂を受けている面もあり、かなりの頻度で洪水が発生していたようだが、土層断面の検討からはその度に砂層の上面を耕作面として畦畔を作っていたことがわかった。また、土壌粒度分析でも洪水の頻発が確認されており、砂に覆われた地表に他所から泥を持ち込んで耕作土とした可能性も指摘されている。この洪水砂により地表面の上昇は著しく、第1面から現代耕作土上面まで70~120cmもの上昇がみられる。また、水田耕作とともにこれらの洪水により地形の平坦化が進み、古墳時代面では調査区西端で2.2mあった比高差は、現代耕作土上面では0.7mにまで減少している。

なお、米軍航空写真や昭和36年大阪府地形図などでは、調査地周辺が住宅地化する以前の地形が記録されており、当地における現代の水田区画は条里地割(83)に基づくものであることがわかる（図111）。

以上をまとめると、まず上でみてきたように第Ⅰ段階から第Ⅲ段階（現代）に到るまで、畦畔の位置に大きな変化は確認されなかったことから、本調査区で確認された水田耕作の痕跡はすべて条里地割によるものと考えてよい。第1面で確認された区画の基礎となる畦畔1と2は、それぞれ坪境、半折の畦畔であるといえよう。第Ⅰ段階においても第1面の畦畔1・2と近似する位置に溝（106溝・48溝）がみられることから、これらは条里地割による坪境、半折畦畔に伴う溝であったと推測される。

第Ⅰ段階では大畦畔の西側や半折畦畔の南側は、地形に即した土地利用となっており、谷筋に規制されていたのであろう。用水の安定確保が困難な状態であったことが推測でき、水田利用だけでなく畑作も行なわれたと考えられる。第Ⅱ段階では、第Ⅰ段階で水田化できなかった調査区西端や南半の谷が埋

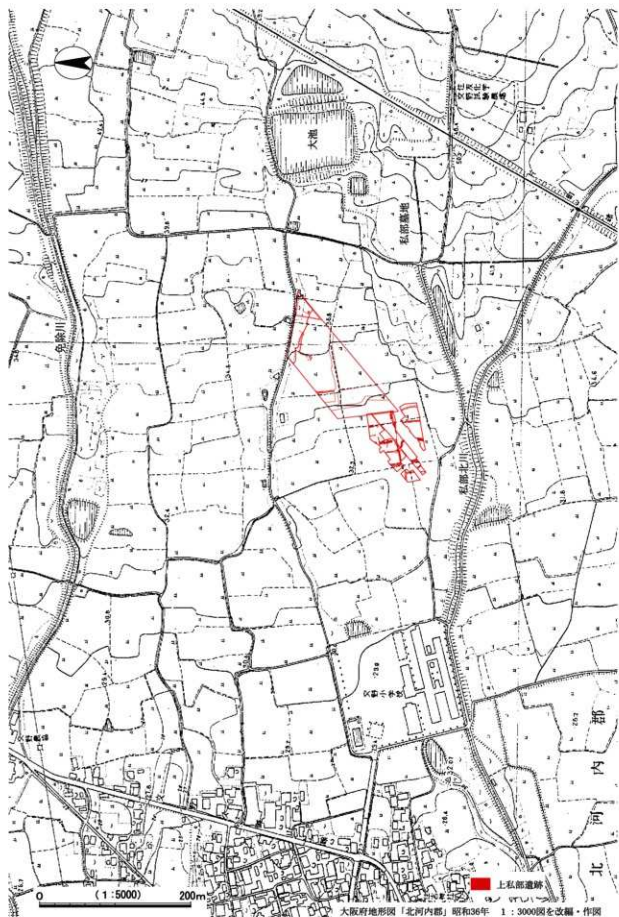


図111 調査地周辺の水田と畦畔

没したことにより、あらたに畦畔が設置され、耕地の拡大がみられる。これらの要因として、地下水位の上昇に伴う用水の安定した確保により、広域の耕地開発が進められ、用水体系が整備されたことがあげられよう。ただ、田面の形態は旧地形に規制されており、前代の地割痕跡を踏襲して畦畔が形成された。そして、第Ⅲ段階では洪水が頻発しており、もたらされる大量の洪水砂上面に再び水田を形成している様子がみられる。池島・福万寺遺跡をはじめ、河内地域の多くの遺跡で中世後期以降の洪水の増加が指摘されており、当該期の山林と人々の経済活動のあり方を考える上で示唆的である。

このように、古代以降の土地利用のあり方について状況整理を行なったが、最後に第Ⅰ段階で確認された条里地割に基づく耕作溝の時期について触れてみたい。これらの溝に伴う遺物はほとんどなく、直接時期を決めることはできない。第Ⅰ段階に含まれる層から出土した古相の遺物は、最も古いもので8世紀から9世紀初めの須恵器片が出土しているが、他は10世紀から12世紀のものである。また、上私部遺跡の東側に接する有池遺跡は上私部遺跡を含む周辺地の耕作を担った人々の集落とみられるが、調査により11世紀から集落の形成が確認されている³²⁶。なお、池島・福万寺遺跡では7世紀から条里地割が確認されているが、10世紀に大幅な区画変更があり、その後現代に到るまで畦畔の基本的な位置は変化しないとされている³²⁷。これらの事実を総合すると、上私部遺跡における条里地割の導入は、遅くとも10～11世紀には達成されていたとみられる。

なお、本遺跡に近接する森遺跡は三宅山荘園の有力比定地であるが、石清水八幡宮領となった10世紀には灌漑水路等の整備が行なわれたことが発掘調査によって推測されている³²⁸。関連性は明確ではないが、近接地での動きが上私部遺跡での耕地開発の契機となった可能性も考えられよう。本遺跡の調査成果は府下で調査された他の水田遺跡と比較すると非常に狭い範囲で得られたものであり、情報量が不足していることは否めない。今後のさらなる調査によって、水田耕作と条里プラン導入の起源や当地の景観復原などについて、より正しい結論が導かれることを期待したい。

第6節 自然科学分析からみた上私部遺跡の土壌環境

上私部遺跡は、最終氷期後半に形成された低位段丘面に対比される扇状地末端部に位置する。古墳時代の遺構は、地山となる最終氷期後半の扇状地堆積物最上部に形成された古土壌において検出された。地山直上の古墳時代の遺構検出面では、調査区西端部において、更新統である低位段丘相当層の扇状地面と完新統の扇状地面を境する落ち込みをなす地形傾斜が認められた。古墳時代の遺構検出面では、古墳時代の居住域に関連する遺構が高密度で検出された。ここでは、自然科学分析によって明らかとなった、上私部遺跡の土壌環境の変遷を概略する。なお、詳細な分析結果については、後の付章を参照されたい。

居住域であった古墳時代には、調査区内やその近辺において、草地や裸地が卓越する植生であった。居住域に関連する遺構は、低位段丘相当層の扇状地面上を中心に確認された。この部分では、高燥な土壌環境が形成され、安定した土地条件が広がっていた。ここでは、明るく開けた場所によく認められるイネ科ネザザ節やオオバコ属、ヨモギ属、オナモミ属などの草本が生育していた。一方、落ち込み部分やこの部分に存在する43溝内では、居住域に比べ湿潤な土壌環境が形成されていた。溝内などの湿地部分では、ガマ属、サジオモダカ属、スブタ属、ミズアオイ属、アヤメ科、ゴキズル属、ヨシ属といった水湿地生の草本が生育していた。なお、古墳時代には、調査区内で稲作が行なわれておらず、また多量にイネが居住域に持ち込まれるような状況でもなかったと推定された。

遺跡の後背地の生駒山地山麓部には、古墳時代に温帯性針葉樹が混生するカシ類・シイ類などからなる常緑広葉樹林が存在していた。このような森林では、古墳時代以前の時期に比べ、人為的な攪乱の影響による二次林化の徴候がうかがえた。森林環境の変化については、本地域において生駒山地山麓部の古墳時代に展開した遺跡動態に関連したものと考えられた。遺跡周辺の氾濫原では、流路沿いなどにニレ属—ケヤキ属、エノキ属—ムクノキ属、さらにコナラ亜属が分布していた可能性が示唆された。

古代から13世紀以前の中世の時期には、調査区西端部を中心に氾濫堆積物が累重するようになり、古墳時代に比べ堆積環境が不安定化した。ただし、洪水時以外の時期には、乾燥した地表面が広がっていた。居住域が展開した古墳時代以降に調査区内では、土地利用が放棄された状態ではなく、古代から中世にかけて畑地を中心した耕作地として利用されたことが推察された。なお、発掘調査結果からは、調査区内において水田が形成された時期も存在していることも示唆された。栽培種としてはイネ属、ソバ属、栽培種としての可能性があるものとしてオオムギ属が検出された。当該期には、古墳時代に比べ遺跡後背地の森林域において、さらに人為的な攪乱による二次林化が進行した。

13世紀には、調査区内において水田圃場が整備され、安定した稲作地が一定期間広がった。このような耕作地環境の変化は、それまでの灌漑水利体系の再整備を伴う再開発であり、当該期に台地から扇状地面斜面における地域的な農業システムの画期が存在するものと認識された。本時期における集落形態と耕作地形成の画期としては、隣接する有池遺跡でも確認された。調査区内で形成された水田は、13世紀以降から15世紀代まで継続した。イネ以外に栽培されていた植物としてはソバ属、栽培種としての可能性があるものとしてオオムギ属が検出された。

なお13世紀以降には、それ以前の時期よりも調査区全体的にわたって土壌環境が湿潤化した。このような土壌環境の変化は、私部北川の河床上昇に伴う相対的な水位上昇と局地的な排水不良の影響であると推定された。この時期には、マツ属が急増し、背後の生駒山地で急激な森林植生の後退があったことが指摘された。私部北川の河床上昇は、このような植生変化に伴うハゲ山化によって土砂流出量が増大したことに起因する可能性が極めて高いと判断された。河床上昇を伴う後背山地斜面からの土砂流出は、13世紀以降も継続し、14～15世紀に調査区内への洪水堆積物の流入頻度が増大し、水田耕作地環境が次第に不安定化した。14～15世紀代の遺構検出面である第1面は、13世紀代の第2面の上に土盛りしている領域が多いことが発掘調査で確認された。このような土盛りは、流入する洪水堆積物に対応する耕作地の維持管理に伴う工学的対応と認識された。後背山地への人為的な攪乱の増大は、13世紀代の画期がみられた集落形態の変化と生産性向上を目指した耕作地拡大や集約性の効率化に伴う森林バイオマス資源獲得領域増大とその利用頻度の過度化によって生じたと推測された。このような変化は、河床上昇を引き起こし耕作地環境を不安定化させ、当該期の社会における生産性の向上にとって、負のフィードバックとなったことが認識された。

15世紀以降から近世にかけては、さらに堆積環境が不安定化した。近世には、厚い洪水性の礫質砂の流入も認められた。私部北川の河床は、13世紀以降継続的に上昇した。現在みられるような天井川や、遺跡周辺に広がる舌状の扇状地ロープは、13世紀以降に形成されたものである。特に、舌状の扇状地ロープは、近世に形成されたことが確認された。このような、上私部遺跡で確認された中世に開始した河床上昇と天井川化、森林植生の急激な後退およびマツ林ないしハゲ山化は、交野地域で普遍的に認められる状況である。近世に調査区は、現在の地形で認識されるような天井川沿いの微高地をなす領域に存在していた。このような場所において、近世には、流入する洪水性の砂礫を母材として耕作地の造成

が繰り返された。イネ属以外の栽培種としては、ナス近似種、ソバ属、栽培種としての可能性があるものとしてオオムギ属が検出された。近世に生駒山地では、草山ないしハゲ山化していたものと認識された。近世以降には、調査区に流入する洪水堆積物が少なくなる。このような状況は、生駒山地での植生回復や治山事業の影響と推察された。

註

- 註1) 財団法人大阪府文化財センター 2007 『上私部遺跡Ⅰ』(財)大阪府文化財センター調査報告書第151集
- 註2) 以前、建物群の変遷について概要を述べたが、今回の報告をもって正式見解とする。
網 伸也 2007 『上私部遺跡出土の新羅土器と渡来人の動向』『考古学論究—小笠原好彦先生退任記念論集—』真陽社
- 註3) 古代における官衙関連遺跡の建物配置については、以下の文献を参照した。
古代官衙研究会編 2005 『古代の官衙—遺構編』
同会編 2005 『古代の官衙—遺物編』
- 註4) 真鍋成史 1994 『羽野物部と鉄・鉄器生産』『考古学と信仰 同志社大学考古学シリーズⅥ』同志社大学考古学研究室
真鍋成史 1997 『河内国・守部氏に関する基礎的考察—古墳時代説治遺跡の実態解明に向けて—』『河内古文化研究論集』柏原市古文化研究会
- 註5) 平安学園考古学クラブ 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』
大阪府教育委員会 1976~1978 『陶邑Ⅰ~Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第28~30輯
なお、田辺福年と中村福年の対応関係については、以下の文献に掲載された「陶邑窯跡群須恵器福年対照表」に依拠している。
大阪府立近つ飛鳥博物館 2006 『年代のものさし—陶邑の須恵器—』
- 註6) なお、内面の当て具痕跡の機能については、ヘラケズリのシッタの代用とする説や内面を平坦に成形した痕跡とする説などが提示されており、この問題について江浦洋氏が学史的整理を行い、製作過程における多種多様な成形・調整に伴うものであることを明らかにしている。
江浦 洋 1986 『同心円文スタンプを有する須恵器蓋杯の製作技術』『鴨谷池遺跡』明石市教育委員会・同志社大学考古学研究室
- 註7) 菅原雄一 2006 『陶邑窯跡群の地域差と技術拡散』『考古学研究』第53巻第1号
- 註8) 吹田市教育委員会 1990 『吹田53号須恵器窯跡の調査』『平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査概要』
- 註9) 兼田哲郎 1992 『須恵器生産の拡散と工人の動向』『考古学研究』第39巻第3号
- 註10) 木下 亘 1983 『摂津桜井谷窯跡群における須恵器福年』『桜井谷窯跡群2—17窯跡』少路窯跡遺跡調査団
杉井 健 1994 『甗形土器の基礎的研究』『待兼山論叢』第28号
- 註11) 豊中市教育委員会 1996 『桜井谷窯跡群2—29号窯跡』
- 註12) 秋山浩三 2006 『古墳調養須恵器の産地推定一例—物集女車塚・井ノ内稲荷塚における微細特徴からの追究—』『陶磁器の社会史』桂書房
- 註13) 江浦 洋 1995 『陶邑周辺部における須恵器生産点描』『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- 註14) 註11・12文献に同じ。
- 註15) 富田林市教育委員会 1987 『中佐備須恵器窯跡発掘調査概要』富田林市埋蔵文化財調査報15
- 註16) 交野市古文化研究会 1975 『倉治古墳群発掘調査概要』交野市古文化同好会記録1

- 注17) 藤原 学 2002 「群集墳と群集室—八十塚古墳群出土須恵器と周辺の生産地の関連から—」『八十塚古墳群の研究』
関西大学文学部考古学研究第7冊 関西大学文学部考古学研究室
- 注18) 南 孝雄 2006 「北河内の初期須恵器と渡来人」『シンポジウム古墳時代に生きた渡来人の軌跡—長原遺跡・郡屋北遺
跡—上私部遺跡を中心に—要旨集』財団法人大阪文化財センター
- 注19) 山崎秀二 1984 「大型蓋杯の1、2の問題について」『滋賀文化財だより』No90
- 注20) 北野 重 1994 「朱記号を持つ須恵器」『韓式系土器研究V』
- 注21) 註4文献と同じ。
- 注22) 浅岡俊夫 2002 「須恵器の口縁部・舞台部の打欠き儀礼—弥生農耕社会からの土俗的祭祀の予察—」『田辺昭三先生古
稀記念論文集』真陽社
- 注23) 龍野和己 1978 「屯倉制の成立—その本質と時期—」『日本史研究』第190号
- 広瀬和雄 1983 「古代の開発」『考古学研究』第30巻第2号
- 注24) 新羅土器については、註2文献の観察および考察によっている。
- 注25) 埋蔵文化財研究会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会 1987 「弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題」
- 注26) 定森秀夫 1993 「日本出土の陶質土器—新羅系陶質土器を中心に—」『ミュージアム』503号
- 注27) 嶺南大学校博物館 2002 「慶山林堂地域古墳群Ⅵ—林堂2号墳—」嶺南大学校博物館学術調査報告第42冊
- 注28) 韓国文化財保護財団・慶州市 2002 「慶州隄城洞遺蹟」学術調査報告第132冊
- 注29) 社団法人韓国文化財普及協会 1976 「慶州地区古墳発掘調査報告書」第1輯
- 注30) 国立中央博物館 1972 「陳列品図録」
- 注31) 白井克也 2003 「新羅土器の型式・分布変化と年代観—日韓古墳編年の並行関係と暦年代—」『朝鮮古代研究』第4
号
- 注32) 西田敏秀 1998 「朝鮮半島と古代の枚方—発掘調査の成果から」『継体大王と渡来人』大巧社
- 注33) 網 伸也 2005 「淀川水系のミヤケ」『考古学ジャーナル』533号
- 注34) 亀田修一 1998 「朝鮮半島からみた枚方の寺院造営と瓦生産」『継体大王と渡来人』大巧社
- 注35) 金田章裕氏は「条里制」の語の使用を避け、一町方格の径溝網とその内部の半折型・長地型といった規則的な地割形態
である条里地割と、六町四方の「里」の区画と一町四方の「坪」の区画を単位とする土地表示のための呼称である条里
呼称法からなるシステムに「条里プラン」の語をあてている。
金田章裕 1985 「条里と村落の歴史地理学的研究」大明堂
- 注36) 財団法人大阪府文化財センター 2007 「有池遺跡Ⅰ」（財）大阪府文化財センター調査報告書第152集
- 注37) 江浦 洋 1991 「条里制施行の諸段階とその背景—大阪府八尾市・東大阪市所在池島・福万寺遺跡を中心に—」『大阪文
化財研究』創刊号 財団法人大阪文化財センター
江浦 洋 1992 「条里型水田をめぐる諸問題」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅵ』財団法人大阪文化財センター
- 注38) 交野市教育委員会 2001 「森道跡Ⅵ」交野市埋蔵文化財調査報告2000—Ⅱ

第6章 総括

今回、2次にわたる発掘調査によって、古墳時代後期における交野地域の拠点集落の一つである、上私部遺跡の全容がかなり明らかになってきた。竪穴住居数棟で構成された5世紀の小規模な集落が、6世紀になると掘立柱建物が規則的に配置されるようになるとともに、溝によって方形区画が成立する。このような掘立柱建物群は、小規模な倉庫建物を除けば当初は南西部に限られていたが、7世紀初頭には調査地全域に及ぶようになり、集落の構成が大きく変化していった。

とくに、当初の集落の南西に方形区画が成立すると、掘立柱建物群で構成される南西区画と、竪穴住居と小型倉庫建物が構成される北東区画に分かれるようになり、居住集団の階層分化が建物群の違いに顕在化し始めたことを示している。一般集落域から特化された、これら方形区画内建物群は、私部北川の河岸段丘北側の高燥地に立地する集落全体の中でも、南面する非常に良好な場所を占有しており、敢えて推測するならば在地支配に関与した人々の居住空間が成立し始めたことを示唆している。

在地首長の居住空間については、群馬県三ツ寺I遺跡のように周辺域から隔絶した規模をもつものから、大阪府大園遺跡のように区画溝を伴い区画内に数棟の建物を配置するものまで、多様な遺跡の存在が指摘されている^{註11}。これら集落遺跡にみられる多様性については、広域支配を担った大首長から在地支配層である中小首長まで、古墳時代における重層的支配体系が反映していると考えられている^{註21}。上私部遺跡における方形区画の成立は、小規模といえども竪穴住居群から隔絶した空間が生まれたことを示しており、まさに在地支配を担った集団の居住域として把握することができる。

さらに、6世紀末から7世紀初頭にかけての掘立柱建物群は、集落全体に計画性をもって広がっていた可能性がある。竪穴住居が中心であった北東域では、方形区画が成立するとともに大型建物群が規則的に建てられるのに対し、大型建物の中心であった南西区画では、倉庫を中心とした中小規模建物が南に開けたコの字状に配置されるようになる。北東部の方形区画の東には隣接して倉庫建物が多く検出されており、居住単位として南西部とは異なる集団とも考えられるが、遺跡全体に認められる計画性から、上私部遺跡は在地首長層に関係する一連の遺構群と考えるのが妥当であり、居住域の中心が南西部から北東部へと移行したと想定できる。

このように広く遺構の変遷をみた場合、上私部遺跡は重層的構造をもつ在地支配層の居住の実態を如実に表していると考えられ、さらに遺跡群全体を見渡せば、前述したように森遺跡における鉄・鉄器生産地や倉治古墳群や寺古墳群における葬送地も密接に関わってくる。在地首長層の拠点は実際に首長が居住した建物空間だけに限定されるのではなく、在地支配に関わる様々な遺跡が重層的・有機的に繋がっている^{註31}のであり、当遺跡を中心とする地域が交野における在地支配の拠点であったことを示唆しているのである。

ところで、遺跡全体の顕著な特徴として、広い集落遺跡であるにも関わらず井戸が一基も発見されていない点が注意される。つまり、この集落に居住した人々が、どのようにして生活水を確保していたかが大きな問題となろう。ここで遺跡周辺の地形をみると、交野山地の岩石組成は主に花崗岩で構成されているため、花崗岩の風化した砂が河川によって多く流出し、崖錐を形成している。現状では遺跡の南は私部北川に向かって高くなる地形となっているが、これらの高まりは私部北川の土石流によって形成されたものである。現在でも地下水が豊富に湧出しており、遺跡の南を流れる私部北川もこの湧水

を水源としている。おそらく、集落周辺に豊富な湧水地点があり、そこを共同管理して生活水を確保していたことが想定できる。

上私部遺跡の構造を見る限り、中小首長の居住空間としての条件を充分満たしているが、出土遺物で目立ったものは新羅土器だけであり、在地首長層の存在を示す特徴的な遺物はほとんど出土していないのが実態である。ただ、生活水を確保するための湧水施設が必ず近辺に存在するはずで、そこでどのような祭祀が行なわれていたか明らかになれば、遺跡の性格をより絞り込むことが可能となろう。少なくとも、新羅土器を入手することが可能な集団が居住した遺跡であることは間違いないのである。

上私部遺跡は第二京阪道路の建設に伴う発掘調査で初めて明らかとなった遺跡であり、全体像の解明については集落域の具体的な広がりや遺物に認められる集落内祭祀の実態など、多くの問題が残されているといえる。また、上私部遺跡の南西に隣接する私部南遺跡においては、古墳時代後期の水田遺構を検出し生産域としての土地利用が推定されるとともに、近年の調査で古墳時代後期の集落の一部が発見されており、上私部遺跡との関係が注目されるようになった。今後は、周辺域の発掘調査が継続して行なわれることによって、上私部遺跡を中心とする私部地域の歴史が考古学的に明らかにされることを期待する次第である。

註

註1)「豪族居館」に対する研究は1980年代半ばから活発に行なわれるようになり、1998年には東日本埋蔵文化財研究会群馬県実行委員会によって全国的な資料集積がなされ、『古墳時代の豪族居館めぐる諸問題』としてシンポジウムが開かれている。「豪族居館」に関する研究史については同シンポジウム資料に掲載された加部二生氏の論考を参照した。

加部二生 1998 「豪族居館と関連遺跡研究史」『古墳時代の豪族居館めぐる諸問題』 第8回東日本埋蔵文化財研究会・群馬大会シンポジウム

註2) 寺沢 薫 1998 「古墳時代の首長居館—階級と権力行使の場としての居館—」『古代学研究』 第141号

註3) 辰巳和弘 2004 「中央氏族の本拠とその構造—「居館」論を見直す—」『畿内の巨大古墳とその時代』 季刊考古学別冊14

註4) 財団法人大阪府文化財センター 2007 「私部南遺跡Ⅰ」(財)大阪府文化財センター調査報告書第154集

表3-8 建物・掘土層一覧表

棟名	階層番号	層番号	名	土質	層番号	階層番号	層番号	名	土質
棟1	34	1	埋戻 (33/3)	粗粒砂を含むシルト	1616	1	オーソープ (3.314/3)	大礫を含む中粒砂	
		2	埋戻 (33/3)	粗粒砂を含むシルト	1617	1	オーソープ (33/3/2)	小礫を含む中粒砂	
		3	埋戻 (33/3)	粗粒砂を含むシルト	1760	1	オーソープ (3.314/3)	大礫を含む中粒砂	
	35	1	埋戻 (33/3)	粗粒砂を含むシルト	1618	1	埋戻 (3.314/2)	細粒砂	
		2	埋戻 (33/3)	粗粒砂を含む中粒砂	666	1	オーソープ (33/3/2)	粗粒砂	
	32	2	埋戻 (33/3)	粗粒砂を含むシルト	667	1	オーソープ (33/3/2)	粗粒砂	
		2	埋戻 (33/3)	粗粒砂を含む中粒砂	663	1	埋戻 (3.314/2)	細粒砂	
	45	1	埋戻 (103/1)	中粒砂を少量含む細粒砂					
		2	埋戻 (103/1)	中粒砂を含む中粒砂	601	2	埋戻 (3.314/2)	中粒砂	
	60	1	オーソープ (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
507	1	オーソープ (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂						
508	1	埋戻 (33/3)	中粒砂を含む中粒砂	602	1	オーソープ (33/3/2)	中粒砂 (炭化物を含む)		
棟2	665	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂	603	1	オーソープ (3.314/2)	中粒砂	
		2	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
	661	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む中粒砂	631	1	オーソープ (33/3/2)	大礫を含む中粒砂	
	664	1	埋戻 (3.314/2)	少礫を含む細粒砂	604	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂	
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	662	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂	650	1	オーソープ (33/3/2)	粗粒砂を含む細粒砂	
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂	608	1	オーソープ (33/3/2)	中粒砂を含む細粒砂	
	672	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
	676	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂	609	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂	
棟3	682	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む中粒砂	610	1	オーソープ (33/3/2)	中粒砂を少量含む細粒砂	
	1408	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	少礫・細粒砂を含む細粒砂	611	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂	
	1407	1	埋戻 (3.314/2)	少礫・粗粒砂を含む細粒砂	612	1	オーソープ (33/3/2)	中粒砂を含む細粒砂	
		2	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む中粒砂	613	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂	
	652	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
	656	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	660	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂	733	1	オーソープ (33/3/2)	粗粒砂	
	662	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
棟4	667	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む細粒砂	732	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂	
		2	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
	670	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	少礫・粗粒砂を含む細粒砂	731	1	埋戻 (3.314/2)	細粒砂	
	674	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
	678	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂・中粒砂を含む細粒砂	730	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂	
		2	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む中粒砂					
	681	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂	729	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂	
	687	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
棟5	689	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂	641	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂	
	648	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む中粒砂	642	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂	
	650	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む中粒砂	661	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂	
	654	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂・中粒砂を含む細粒砂					
	657	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂・中粒砂を含む細粒砂					
棟6	659	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む中粒砂					
	660	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	668	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	671	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	少礫・粗粒砂を含む細粒砂					
	673	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
棟7	677	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む細粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	679	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	680	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む中粒砂					
	685	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	695	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
棟8	694	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	702	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	704	1	埋戻 (3.314/2)	中粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	706	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	710	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
棟9	711	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	712	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	713	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	714	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	715	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
棟10	740	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	741	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	742	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	743	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	744	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
棟11	745	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	746	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	747	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	748	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
	749	1	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					
		2	埋戻 (3.314/2)	粗粒砂を含む中粒砂					

*柱穴の空セクションは一覧表から除外した。

表4-1 古墳時代土器観察表

単位:cm

遺物番号	遺構名	種類 器種	口径 器高 底径	色調 胎土 施色	形態・手法の特徴	残存率	備考	
1	435住居	須恵器 杯蓋	(15.2) — —	5P B6/1青灰 磨面・白色砂を含む 焼成良好	縁部は沈凹状で、鈍くなっている。口縁端部はやや鋭く、内側に段を有している。	1/8		
2	435住居	須恵器 杯蓋	(16.2) — —	5P B6/1青灰 磨面・白色砂を含む 焼成良好	天井部は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。縁部は沈凹状で、鈍くなっている。口縁端部はやや鋭く、内側に段を有している。	破片	前庭壁内	
3	435住居	土師器 高杯	(17.3) — —	— — —	内: 10Y R8/3黄緑 外: 7.5Y R8/4黄緑 磨面・白色砂を含む 焼成良好	杯部の調整は、内外面ともココナダ。端部は、やや丸い。	1/4	東西側ピット
4	435住居	土師器 高杯	(17.0) — —	— — —	内: 10Y R7/3黄い黄緑 外: 10Y R6/4黄緑 磨面・白色砂を含む 焼成良好	杯部の調整は、内外面ともココナダ。強いココナダにより段がついている。端部は、やや細くつまみ上げられている。	1/2	東西側上面
5	435住居	土師器 小壺	11.8 — —	— — —	内: 10Y R6/3黄い黄緑 外: 10Y R6/3黄い黄緑 やや粗い・金盃片含む 焼成良好	口縁部の調整は、内外面ともココナダ。口縁端部はつまみ上げ、丸くおさめらる。底部外面はタテハケ。底部内面はヘラケズリ後ココナダ。被熱のためくずんでいる。	破片	
6	435住居	土師器 壺	14.5 — —	— — —	内: 2.5Y R5/2暗灰 外: 10Y R7/2黄い黄緑 やや粗い 焼成良好	口縁部の調整は、内外面ともココナダ。口縁端部はやや丸い。底部外面はタテハケ。底部内面は粘土粘りき上げ直が残る。	4/5	壺内
7	983住居	須恵器 杯蓋	(14.4) — —	— — —	内: N6/灰 外: 10Y 6/灰 やや粗い 焼成良好	やや鋭い縁部がある。口縁端部はやや鋭く、内側に段を有している。外面に自然紋が付着。	破片	壺西側
8	983住居	須恵器 杯蓋	(12.6) 4.8 —	— — —	内: N7/灰白 外: 2.5Y 7/灰白 磨面 焼成良好	底部外面は、ロクロ左回りの粗い回転ヘラケズリで、ヘラ切り痕跡が残る。受部はほぼ水平であり、端部はやや鋭い。立ち上がりは内傾しつつ両面して垂直となる。口縁端部は丸い。底部内面は同心円文の当て具痕が若干残る。底部外面の中心部までヘラケズリがほぼヘラ切り痕が残る。	3/5	壺西側
9	983方形 竪穴状 遺構	須恵器 杯蓋	(13.5) — —	N7/灰白 磨面 焼成良好	天井部は、やや丸い。天井部外面は、回転ヘラケズリ。縁部は沈凹状で、鈍くなっている。口縁端部はやや鋭く、外傾する面をもつ。	1/4		
10	982方形 竪穴状 遺構	須恵器 笠形高杯	14.7 — —	内: 5B5/1青灰 外: 5P B6/1青灰 磨面・細い砂を含む 焼成良好	脚部は欠損しているが、方形スカシの痕跡が残る。杯部の立ち上がりは短く内傾し、口縁端部は丸い。受部はほぼ水平であり、杯部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。内面の中心は同心円文の当て具痕が若干残る。	1/5	982方形竪穴状遺構 横上層?	
11	982方形 竪穴状 遺構	須恵器 短頸壺	(17.8) — —	— — —	内: N6/灰 外: N7/灰白 磨面・白色砂を含む 焼成良好	口縁部は外反して立ち上がり、口縁部で、下方と上方方に肥厚させ、端部をおくさめらる。口縁部外面はタテハケ方向のカメが若干残る。	1/8	
12	270柱穴	須恵器 杯蓋	(15.8) — —	N6/灰 磨面 焼成良好	天井部はやや丸い。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。やや鋭い縁部がある。口縁端部はやや鋭く、内面にふすかに段を有している。	1/10	建物3	
13	215柱穴	須恵器 杯蓋	(12.6) — —	— — —	内: 5P B6/1青灰 外: N6/灰 磨面・白色砂を含む 焼成良好	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部は丸い。立ち上がりは若干内傾し、口縁端部は丸い。	1/8	建物4
14	162柱穴	須恵器 杯蓋	(15.6) — —	— — —	内: 2.5Y R5/2赤 外: 5P B6/1青灰 磨面・白色砂を含む 焼成良好	天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。口縁端部は鋭く内側に段を有している。縁部はほとんど消えかけている。天井部内面に同心円文の当て具痕がある。	1/8	建物7
15	163柱穴	須恵器 杯蓋	(12.2) — —	— — —	内: 5B6/1青灰 外: 5B5/1青灰 磨面 焼成良好	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部は水平であり、端部はやや鋭い。底部内面は不定方向のナダ。	1/2	建物7
16	1179 柱穴	須恵器 杯蓋	(12.0) — —	— — —	内: 5P B6/1青灰 外: 5P B6/1青灰 磨面・白色砂を少量含む 焼成良好	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部は水平であり、端部は鋭い。立ち上がりは両面して垂直となり、口縁端部は鋭い。	1/10	建物25
17	1191 柱穴	須恵器 杯蓋	(12.6) — —	— — —	内: 7.5Y 5/灰 磨面・砂粉を含む 焼成良好	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平で、端部はやや鋭い。立ち上がりはやや長く、若干内傾している。口縁端部はやや鋭く、内傾する面をもつ。	1/4	建物25
18	1329 柱穴	須恵器 杯蓋	(13.4) — —	— — —	内: N7/灰白 磨面 焼成良好	天井部はヘラ切り未調整。縁部はほとんど消えかけている。口縁部は下方に屈曲し、端部は丸い。	2/5	建物29
19	1402 柱穴	須恵器 杯蓋	(13.6) — —	— — —	内: N7/灰白 磨面 焼成良好	口縁部は下方にやや粗出し、端部は鋭く、外傾する面をもつ。縁部はほとんど消えかけている。外面に巻き上げ直が残る。	1/10	建物34
20	1158 柱穴	須恵器 杯蓋	(13.6) — —	— — —	内: N6/灰 磨面 焼成良好	底部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部は丸い。立ち上がりは長く、やや垂直である。口縁端部は丸い、内傾する段を有している。	1/5	建物33
21	332柱穴	須恵器 短頸高杯	(11.8) — —	— — —	内: N6/灰 外: N5/灰 磨面 焼成良好	口縁部は底部から屈曲して、緩やかに外反し、口縁端部は丸い。杯部外面は、回転ヘラケズリ。	1/8	建物10

表4-2 古墳時代土器観察表

遺物番号	遺構名	種別 器種	口徑 器高 底径	色調 胎土 施装	形態・手法の特徴	残存率	備考
22	1188 柱穴	須恵器 甕	(12.80) — —	内：10Y R7/4鈍い黄緑 外：10Y R6/4鈍い黄緑 褐色・白色粒を含む 焼成堅緻	口縁部はやや縮く、外面には放射状文が施されている。胴部と口縁部の境は段を有し、口縁は外方へひらいている。口縁端部は丸い。	1/4	建物26
23	1318 柱穴	土師器 甕	(22.3) — —	内：7.5Y R7/4鈍い黄緑 外：7.5Y R5/1焼成 赤土・黒土 焼成良好	口縁部の調整は、内外面ともヨコナダ。口縁端部はややつまみ上げ、丸くおさまっている。体部外面はタテハク。内面は粘土継ぎ巻上げ痕があり、調整は横方向のヘラズリとニゴヤエス。	1/8	建物30
24	842溝	須恵器 杯蓋	14.9 4.7 —	内：N6/灰 外：N3/焼灰 やや軟い・縞をまばらら 含む 焼成堅緻	天井部はやや平たい。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラズリ。縁端の痕跡はやや残る。口縁端部は鋭く、内側に段を有している。内面中央部に不定方向のナダ。	3/5	
25	842溝	須恵器 杯蓋	(15.2) — —	N6/灰 白色粒を多く含む 焼成良好	天井部はやや平たい。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラズリ。縁端はほとんど消滅している。口縁部は下方へ傾斜し、口縁端部は丸く、内側に段を有している。	1/4	
26	842溝	須恵器 杯蓋	16.2 5.3 —	内：N6/灰 外：N7/灰白 白色粒を多く含む 焼成堅緻	天井部は、やや丸い。天井部外面はロクロ左回りの粗い回転ヘラズリで、中央部まで及ぼすへら切り痕跡と板状圧痕が残る。縁端はほとんど消滅している。口縁部は下方にやや傾斜し、口縁端部は丸く、内側に段を有している。天井部外面に「X」状のヘラ記号がある。	1/2	
27	842溝	須恵器 杯身	12.4 4.1 —	内：N4/灰 外：N7/灰白 やや軟い・縞をまばらら 含む 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラズリ。受部はほぼ水平であり、端部はやや縮く、まね巻きの痕跡が残る。立ち上がりはやや内傾し、口縁端部はやや軟い。底部内面は不定方向のナダ。	4/5	
28	842溝	須恵器 杯身	16.0 5.4 —	内：5B6/青灰 外：5B5/青灰 白い砂粒を含む 焼成良好	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラズリ。受部はほぼ水平であり、端部はやや丸い。立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸い。底部内面は不定方向のナダ。	2/5	
29	842溝	須恵器 高杯	— — —	内：N6/灰 外：N3/焼灰・N5/灰 褐色・縞をわずかに含む 焼成堅緻	杯部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラズリ。内面は、不定方向のナダ及び指痕。脚部は、縞やかに外反している。	1/3	
30	842溝	須恵器 短胎甕	(7.8) — —	内：5P 白7/明青灰 外：N7/灰白・7.5Y 5/1 灰 白色粒を多く含む 焼成堅緻	体部の肩はやや張っている。わずかに内傾して短く立ち口縁を持つ。体部外面の調整は、ヨコカキメ。外面肩部から体部にかけて自然釉がかかっている。	1/6	
31	842溝	須恵器 壺	(13.6) — —	内：10Y R6/2灰黄緑 外：10Y 6/1灰 やや軟い・長石と石英を 含む 焼成やや不良	口縁端部は平頭面をもち、外に肥厚させてやや縁端をつくる。口縁部は外反し、口縁部から肩部の外面は、カキメ。体部は、平行タテキ後カキメ。体部内面は当て具痕後傾いたナダ。	1/2	土器4
32	842溝	須恵器 壺	(24.2) — —	内：N7/灰白 外：7.5Y 6/1灰 縞を 含む 焼成良好	口縁端部の先端は丸く、やや肥厚させる。口縁部は外反し、肩部外面はタテキ後ナダ。内面は当て具痕後傾いたナダ。口縁部内面は自然釉が多くかかっている。	1/4	土器3
33	842溝	須恵器 瓶	(28.4) — —	内：7.5Y 6/1灰 外：10Y 5/1灰 粗い・縞を多く含む 焼成軟質で生地けざり	口縁部は内外面ともヨコナダ。口縁端部は鋭く外側につまみだし、内側する部を持っている。体部外面はタテハク。底縁を2条施している。体部内面は、ヨコハク後にヨコナダ。縁端み痕がある。把手は指環圧及びナダによる成形。	1/3	土器5
34	842溝	土師器 鉢	(21.6) — —	内：10Y R6/3鈍い黄緑 外：7.5Y R6/6暗 白色粒を含む 焼成良好	内外面とも準圓のため調整不明。口縁部はやや縮く丸くわずかに内傾している。	細片	
35	842溝	土師器 壺	(9.2) 12.8 —	内：10Y R7/2鈍い黄緑 外：7.5Y R7/鈍い黄 緑 やや軟い・縞をまばらら 含む 焼成不良	内外面とも口縁から肩部にかけてヨコナダ。口縁はやや外反し口縁端部は丸い。体部外面はタテハク後ナダ。底部はヘラズリ後ナダ。体部内面には輪縁み痕があり、底部は指環圧。	4/5	土器6
36	842溝	土師器 飯把手	— — —	7.5Y R7/4鈍い黄 緑 やや軟い・長石と石英を 含む 軟質	指環圧及びナダによる成形。先端から3cmのところは縦0.5cm、横1.1cm長さ1.5cmの凹み。	細片	
37	842溝	土師器 壺	(23.0) — —	内：10Y R6/3鈍い黄緑 外：10Y R6/3鈍い黄 緑 白い砂粒と雲母を含む 焼成ややはい	口縁部は、内外面ともヨコナダ。口縁端部はやや丸く外反している。体部外面はタテハク後ナダ。内面は板ケズリ後ナダ。	細片	
38	842溝	土師器 瓶	(26.5) — —	内：7.5Y R6/4鈍い黄 緑 外：5Y R7/6暗 やや軟い・長石を多く、 石英を少し含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともヨコナダ。口縁端部は丸く、わずかに内傾している。体部外面はタテハク。内面は、板ナダ後ナダ。輪縁み痕が残る。口縁から5cmのところには横5mmの凹み。	1/5	土器1

表4-3 古墳時代土器観察表

遺物番号	遺構名	種別 器種	口徑 器高 底径	色別 胎土 施彩	形態・手法の特徴	残存率	備考
39	842墳	土器類 土器類	(28.6) —	内：10Y R7/3鈍い黄緑 外：5Y2/1黒 磨面・磨みむずかき含む 焼成堅緻	口縁部は、内外面ともコノナブ。口縁部は内傾して底心に内傾へ配する。体部外面はヘケテ、体部内面は、ヘラズリ兼ナブ。磨面が残る。底面の外面は指印圧及びナブによる成形。内面は、ケリ後焼成後。	細片	
40	844墳	須恵器 杯蓋	(16.6) 4.5 —	内：5R6/1赤灰 外：N6/灰 白い砂粒を多く含む 焼成堅緻	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。縁線は鈍くなっている。口縁部は丸く、内側に段を有している。	1/4	土器群5
41	844墳	須恵器 杯蓋	(14.7) — (4.2)	N6/灰 白い砂粒を含む 焼成良好	天井部は扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。縁線は沈線状で、やや鋭い。口縁部は丸く、内側に段を有している。	1/3	
42	844墳	須恵器 杯蓋	(14.0) (3.9)	N7/灰白 白色粒を含む —	天井部は扁平である。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。縁線は鈍く沈線状。口縁部は丸く、内側に段を有している。外面に自然軸を残すかぶる。	3/8	土器群4
43	844墳	須恵器 杯蓋	(14.2) —	N7/灰 磨面・白色粒を多く含む 焼成良好	天井部はやや丸い。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。縁線は鈍くなっている。口縁部は外につまみだし、内側に段をかかす。	1/8	
44	844墳	須恵器 杯蓋	14.2 4.1	N4/灰 黒い・織を多く含む —	天井部はやや丸い。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。縁線は鈍くなっている。口縁部は重ね焼きの痕跡がある。内面には、同心円文の当て具痕がかかすに残る。	4/5	
45	844墳	須恵器 杯蓋	12.5 4.4	内：7.5Y7/1灰白 外：N6/灰 磨面・白色粒を多く含む 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。底部外面にヘラ記号あり。受部はほぼ水平であり、端部は丸い。立ち上がりはやや鋭く、内傾している。口縁部は丸い。底部内面は同心円文の当て具痕が一定方向のナブ。	ほぼ 完存	
46	844墳	須恵器 杯蓋	(13.9) —	内：5R6/1青灰 外：5R6/1青灰 白い砂粒を含む —	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部はやや鋭い。立ち上がりは内傾し、口縁部は丸い。	2/5	土器6
47	844墳	須恵器 杯蓋	(13.4) 4.3	内：5P 6/1青灰 外：N7/灰白 磨面・白色粒を少量含む —	底部外面は、ロクロ右回りの粗い回転ヘラケズリで、ヘラ切り痕が残る。受部はほぼ水平であり、端部はやや丸い。立ち上がりはやや内傾し、口縁部は丸い。底部内面には同心円文の当て具痕が残り、体部外面に朱塗りの痕跡があるが、不明確。	1/3	
48	844墳	須恵器 杯蓋	12.2 4.1	内：N7/灰白 外：5Y6/1灰 やや粗い・織をまばらに 含む —	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部はやや鋭い。立ち上がりは湾曲して垂直ぎみとなり、口縁部はやや鋭い。	2/3	
49	844墳	須恵器 杯蓋	(13.0) —	N5/灰 粗い・砂粒を多く含む —	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部はやや鋭い。立ち上がりは内傾し、口縁部は鋭い。	1/5	
50	844墳	須恵器 杯蓋	— — —	内：5P 6/1青灰 外：5R6/1青灰 白い砂粒を含む —	底部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部はやや鋭い。底部内面には、同心円文の当て具痕の後、不定方向のナブ。	3/3	土器9
51	844墳	須恵器 杯蓋	(11.2) 5.3 —	内：N6/灰 外：N6/灰 白色粒を少し含む —	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部は鋭い。立ち上がりはやや内傾し、口縁部は丸い。底部内面は指印圧痕、一定方向のナブ。	3/4	土器8
52	844墳	須恵器 杯蓋	13.2 4.8 —	内：2.6Y7/1灰白 外：2.5Y6/1黄灰 白色粒を多く含む —	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部は鋭い。立ち上がりは湾曲して垂直ぎみとなり、口縁部は丸い。底部内面にかかすに当て具痕が残る。	1/2	
53	844墳	須恵器 杯蓋	12.6 4.3 —	内：N7/灰白 外：N7/灰白 黒い・織を多く含む —	底部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部はやや鋭い。立ち上がりは湾曲して垂直ぎみとなり、口縁部は丸い。底部内面には、同心円文の当て具痕が薄く残る。	3/8	
54	844墳	須恵器 大型杯蓋	(21.6) 6.7 —	内：7.5Y R7/6橙 外：7.5Y R6/6橙・5Y 7/1灰白 砂粒を多く含む —	底部外面は、回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部は丸い。立ち上がりは湾曲し、口縁部は丸い。口縁部は丸い。底部内面はナブ。	1/4	
55	844墳	須恵器 高杯蓋	14.7 4.5 —	内：5P 6/1青灰 外：N6/灰 白色粒を少し含む —	天井部はやや扁平で、中俣のみつまみがつく。天井部外面はロクロ右回りの回転ヘラケズリで、縁線は鈍くなっている。口縁部はやや鋭く丸く、内側に段を有する。内面中央には当て具痕が残り、軽くなブ。天井部は自然軸がかかっている。	9/10	土器群4
56	844墳	須恵器 高杯	(12.0) —	N7/灰白 磨面・白色粒と織を含む —	立ち上がりはやや内傾し、口縁部はやや鋭い。受部はやや上方を向いている。体部外面は回転ヘラケズリ。基部はナブ。内面は不定方向のナブ。脚部の方に直径7mmの円形透かし。杯蓋外面から脚部内面にかけて、自然軸がかかる。	1/8	
57	844墳	須恵器 高杯	— — (11.4)	内：10Y 5/1灰 外：N6/灰 長石を含む —	脚部は内傾し、脚端部は外傾した平坦面をもつ。切り込み状の透かし。内面全体と外面の一部に自然軸がかかっている。	細片	
58	844墳	須恵器 高杯	— — 11.4	N7/灰白 長石を含む —	杯部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。脚部は内傾し、脚端部は、丸く内側に段を有している。内面の中心は同心円文の当て具痕が残る。脚部の三方に円形透かし。外面の一部に自然軸がかかっている。	1/3	
59	844墳	須恵器 高台付鉢	(17.8) —	内：10Y R7/3鈍い黄緑 外：7.5Y6/1灰 白色粒を多く含む —	脚部はやや外反している。脚端部はやや外方につまみ出し、平坦面をもつ。焼成良好	細片	

表4-4 古墳時代土器観察表

遺物 番号	遺物名	種別 器種	口径 高さ 底径	色調 胎土 構成	形態・手法の特徴	残存率	備考
60	844墳	須恵器 壺	— — —	内：N6/灰 外：N7/灰白 陶器・白色粒を含む 焼成堅質	体部外面は、2条の波線が施されその間にカキメ後列点文が施されている。 底部は回転ヘラケズリ。中央部には器具を彫刻しながら斜り貫いた1.5cm の穿穴が施されている。基部内面はナダ。	体部 定存	土器7
61	844墳	須恵器 高杯	— — —	内：5P B6/青灰 外：N5/灰 陶器・白色粒を多く含む 焼成堅質	体部外面はロクロ右回りの回転ヘラケズリとカキメ。基部はナダ。内面の中心は、同心円文の当て具痕をナダ消している。脚部外面はカキメで下部はカキメに繋いナダ。脚部の三方に長方形通かし。	杯部 2/3	62と同一体物の可能性あり。
62	844墳	須恵器 高杯	— — (13.0)	内：5P B6/青灰 外：N5/灰 陶器・白色粒を多く含む 焼成堅質	脚部は外反し。腹部は広がっている。頸部にはわずかに肥厚し、段を有している。脚部外面はカキメ。脚部に三方に長方形通かし。	脚部 1/4	
63	844墳	須恵器 大甕	(43.8) — —	N7/灰白 陶器・白色粒を少量含む 焼成堅質	口縁部は上下につまみ出して断面扇形にする。口縁部内面には、2条の削り出し突帯が3段あり、それぞれ間に右方向へ連続した波状文が施されている。体部外面には格子タタキ。口縁部と体部の接合部分は内外面とも不定方向のナダ。体部内面は当て具痕をナダ消す。	1/4	土器群1
64	844墳	土器 甕	(17.3) — —	内：10Y R6/2灰黄陶 外：10Y R5/3黄い黄褐色 白粒を含む。雲母を含む 焼成堅質	口縁部外面は、ヨコナダ。口縁部は、やや丸くおさめている。口縁部、体部内面とも距離して調整不明。	破片	
65	844墳	土器 甕	(22.0) — —	7.5Y R7/4黄い橙 白色粒を含む 焼成堅質	口縁部は、内外面ともヨコナダ。口縁部は、上方へ肥厚している。体部外面は、摩滅のため調整不明。内面は、ケズリ後ナダ。	破片	
66	844墳	土器 甕	(20.8) — —	内：7.5Y R6/4黄い橙 外：7.5Y R6/3黄い陶 陶器・白色粒を含む 焼成堅質	口縁部は、内外面ともヨコナダ。口縁部はやや上方へ肥厚し、丸くおさめている。体部外面はナダ。墨痕がある。肩部内面は、ヘラケズリ後ナダ。体部内面は、ヨビナダ。輪轆み痕が復る。	1/10	土器群3
67	844墳	土器 甕	24.3 12.5 —	内：10Y R5/3～5/4黄い 黄褐色 外：10Y R6/3黄い黄褐色 7.5Y R6/4黄い橙 陶器・白色粒を含む 焼成良好	口縁部内外面とも、ヨコナダ。口縁部は、やや丸くおさめている。体部外面は、一部ヘラメがあるが、内外面とも摩滅のため、調整不明。体部外面の一部に、墨痕がある。体部内面は、輪轆み痕が復る。	3/5	土器群3
68	136墳	須恵器 杯蓋	(14.8) 4.3 —	N6/灰 やや粗い・白色砂を含む 焼成堅質	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリだが、中心部は、未調整。腹線はかなり鈍くなっている。口縁部は、やや鋭い。天井部内面は、一定方向のナダ。	1/4	
69	136墳	須恵器 杯蓋	(16.8) 5.1 —	N5/灰 陶器・白色砂を含む。礫 が混じる 焼成堅質	天井部はやや丸みをもつ。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。腹線は正確で、やや鋭くなっている。口縁部は、やや鋭く、内側に段を有している。天井部内面は、一定方向のナダ。	1/8	
70	136墳	須恵器 杯身	(12.7) 3.7 —	内：2.6GY6/1灰オリーブ 外：2.6GY5/1灰オリーブ 粗い 焼成堅質	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリだが、中心部は未調整で、ヘラで施された正帯が数条ある。受部はほぼ水平で、端部は丸い。立ち上がりは薄帯で連続のみとなり、口縁部は丸い。底部内面はかすかに当て具痕あり、不定方向のナダ。	4/5	
71	136墳	須恵器 杯身	(13.6) 4.0 —	内：N6/灰 外：N5/灰 陶器・白色砂を含む 焼成堅質	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平で、端部はやや丸い。立ち上がりは内傾し、口縁部はやや鋭い。底部内面は、不定方向のナダ。	4/5	
72	136墳	須恵器 杯身	(12.2) — —	N6/灰 陶器・白色砂を含む 白色粒を含む 焼成堅質	外面は、回転ヘラケズリ。受部はやや上方を向き、端部はやや丸い。立ち上がりはやや鋭く、内傾している。口縁部は丸い。	1/4	
73	136墳	須恵器 杯身	(11.0) 4.8 —	内：N6/灰 外：N5/灰 陶器・黒色粒を含む 焼成堅質	底部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部は上方を向き、端部は丸い。立ち上がりはやや鋭く、内傾している。口縁部はやや丸い。基部内面は、同心円文の当て具痕。外面に、朱書きが施されている。	1/4	
74	136墳	須恵器 大型杯身	— — —	10Y5/1灰 やや粗い・白色粒を含む 焼成良好	底部外面は、ケズリ後ナダ。口縁部は、やや垂直に 立ち上がる。底部内面は、同心円文の当て具痕。	1/5	
75	136墳	須恵器 煎茶壺	(16.8) — —	内：N7/灰白 外：N6/灰 やや粗い・黒色粒を含む 焼成堅質	口縁部は外反して立ち上がり、口縁部で、上方に肥厚させ、やや垂直に立ち上がる。口縁部は、丸くおさめる。	1/9	
76	136墳	須恵器 盃台	(26.1) — —	N7/灰 陶器・黒色粒と白色粒を 含む 焼成堅質	脚部は外反し。端部には幅2cmの粘土帯を貼り付けて厚みを作り、上端部に削り出して突帯を作り出す。外面には波線を施らし、その上に列点文を施す。粘土帯の一部に爪状工具圧痕がある。内面全体に、自然痕。	1/8	
77	136墳	新羅土器 長頸壺	(19.6) — —	内：2.5Y R4/2灰赤 外：6N/灰 陶器・白色砂子や多く 含む。赤褐色粒子を若干 含む 焼成堅質	口縁部は縁や外反し。口縁部は、ほぼ垂直に立ち上がる。口縁部はやや鋭く、内方につまみ出して断面扇形にする。内面内面は、削り出し突帯で3分割し、上下2段は、市川模様の7条の縦帯文を配置し、中段は、列点格子文を施す。	1/6	

表4-5 古墳時代土器観察表

遺物番号	遺構名	種別 器種	口径 高さ 底径	色調 胎土 施装	形態・手法の特徴	残存率	備考
78	136溝	須恵器 鉢	— — (6.0)	内：5P B6/1青灰 外：5P B7/1青灰 やや粗い、白色礫を含む 焼成堅脆	底部は、扁平な厚い平底で、肩部は、方形で面をなす。底部から体部への屈曲が鋭く、外上方へ急傾斜にのびる体部をもつ。底部外面の中心部までヘラケズリが施すが、ヘラ切り痕が浅く、	1/3	
79	136溝	土師器 高杯	— — (9.0)	7.5Y R/4黄い焼 成土、黒色粒と白色礫を 含む 焼成良好	口縁部は外反し、肩部は丸くおさまる。外面は、厚減が著しく調整不明。内面は、絞り痕がみられ、肩部付近はニヒオキエ。	1/3	
80	138溝 下層	須恵器 杯蓋	(13.0) — 4.7	内：N7/灰白 外：N6/灰 濃赤・黒色粒と白色礫を 含む 焼成堅脆	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。鋭い稜線がある。口縁端部は、やや鋭く、内側に段を有している。	1/6	
81	138溝	須恵器 杯蓋	(14.0) — 4.1	内：N6/灰 外：N7/灰白 濃赤・黒色粒と白色礫を 含む 焼成堅脆	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。稜線は鈍くなっている。口縁端部は鋭く、外傾する面をもつ。天井部内面は、一定方向のナズ。	1/6	
82	138溝	須恵器 杯蓋	15.5 — 4.2	内：5P B6/1青灰 外：N6/灰 濃赤・白色礫を含む 焼成堅脆	天井部はやや丸い。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。稜線は鈍くなっている。口縁端部は、やや丸い。天井部内面は、一定方向のナズ。	7/8	
83	138溝 下層	須恵器 杯蓋	(12.2) — 5.2	内：N6/灰 外：N7/灰白 濃赤・白色礫を含む 焼成堅脆	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリだが、中心部までヘラケズリが弱かすへら切り痕が残る。受部は、ほぼ水平で、肩部はやや鋭い。立ち上がりは鋭く、内傾している。口縁端部はやや丸く、外傾する面をもつ。底部内面に、同心円状の当て具痕がわずかに残る。	1/8	
84	138溝	須恵器 杯蓋	11.8 5.1 —	N8/灰白 やや粗・黒色粒と砂粒を 含む 焼成堅脆	底部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平で、肩部はやや鋭い。立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸い。底部内面は、一定方向のナズ。口縁部は打ち欠いている。	劣形	
85	138溝 上層	須恵器 杯蓋	(12.0) — —	内：5P B6/1青灰 外：N6/灰 濃赤・白色礫を含む 焼成堅脆	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平で、肩部はやや鋭い。受部には、蓋をかぶせて造成した痕跡が残る。立ち上がりは内傾し、口縁端部は鋭い。底部内面に一定方向の傾きナズ。	3/8	
86	138溝	須恵器 高杯	(16.0) — —	内：N7/灰白 外：5Y3/1オリーブ黒 — — 焼成堅脆	肩部は外反し、中央に削り出し突起を帯らす。上下2段に、方形の透かしを三方に施す。杯部底部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。内面は、不特定方向のナズ。受部は上方を向き、肩部はやや丸い。立ち上がりは傾斜し、口縁端部はやや鋭い。	1/2	
87	138溝	須恵器 盃蓋	(10.0) — 4.1	内：N6/灰 外：N7/灰白 濃赤・白色礫を含む 焼成堅脆	天井部は扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリだが、中心部はヘラケズリが施かない。口縁端部は外方へややつまみ出し、平底面を有する。天井部内面は、ナズ。	1/8	
88	138溝	須恵器 盃蓋	(12.2) — —	内：N6/灰 外：N7/灰白 濃赤・白色礫と黒色粒を 含む 焼成堅脆	口縁部は外反して立ち上がり、口縁部で、下方に肥厚させ、肩部を丸くおさめる。体部内面は、当て具痕。当て具痕。	1/4	
89	138溝 下層	須恵器 盃蓋	(14.0) — —	内：N5/灰 外：N7/灰白 — — 焼成堅脆	口縁部は外反して立ち上がり、口縁部で、下方に肥厚させ、肩部は段を有している。	1/6	
90	138溝	須恵器 盃蓋	(22.0) — —	内：N6/灰 外：7.5Y5/1灰 白色粒を少し含む 焼成良好	口縁部は外反して立ち上がり、口縁部で、下方に肥厚させ、肩部を丸くおさめる。体部外面は、單行タテタテ後ナズキエ。体部内面は、同心円状の当て具痕。上から自然蝕を多くかぶる。	細片	
91	138溝 上層	土師器 鉢	(16.5) 8.2 —	内：10Y R6/3黄い黄緑 外：2.5Y6/2灰黄 白色粒を多く含む 焼成良好	内外面とも、厚減のため調整不明。口縁端部はやや内傾し、丸くおさめている。	細片	
92	138溝	土師器 盃蓋	(12.7) 15.2 —	内：10Y R8/1灰白 外：7.5Y R6/4焼 成土を多く含む 焼成軟質	口縁部は、内外面ともヨコナデ。口縁端部は、丸くおさめている。体部外面はタテハケ。体部内面は、ヘラケズリ後ナズによるすり消し。下部は、指ナズ。体部に黒斑あり。	2/3	
93	138溝	土師器 盃蓋	(21.0) — —	内：7.5Y R6/3黄い焼 成土、7.5Y R4/2灰黄 濃赤・白色礫を含む 焼成良好	口縁部は、外面ともヨコナデ。口縁端部は、外方にややつまみ出して面をつくる。体部外面はヨコハケ。内面はケズリ後ナズ。	1/8	
94	1090溝	須恵器 杯蓋	(15.0) — —	内：N5/灰 外：N6/灰 濃赤・砂を含む 焼成良好	天井部はやや丸みを持つ。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。稜線は比醸状で、鈍くなっている。口縁端部はやや鋭く、外傾する面をもつ。	1/3	
95	1090溝	須恵器 杯蓋	(16.2) — —	内：N6/灰 外：N5/灰 濃赤・礫を含む 焼成良好	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。稜線はほとんど消滅している。口縁端部は鋭く、内側に段を有している。	1/3	
96	1090溝	須恵器 杯蓋	(16.0) — —	5P B7/1青灰 濃赤・白色砂を少量含む 焼成堅脆	天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。稜線は比醸状で、鈍くなっている。口縁端部はやや鋭く、外傾する面をもつ。	1/8	

表4-6 古墳時代土器観察表

遺物番号	遺構名	種別 器種	口徑 器高 底径	色調 胎土 産成	形態・手法の特徴	残存率	備考
97	1090溝	須恵器 杯身	13.8 4.4 —	内：5P B6/青灰 外：N4/灰 継ぎ・白色砂を多く含む 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はやや方角を向いており、肩部はやや鋭い。立ち上がりは湾曲しつつ垂直となり、口縁部ははやや鋭い。底部内面はナズ。	1/2	
98	1090溝	須恵器 杯身	11.8 5.1 —	N6/灰 継ぎ・継を少し含む 焼成良好	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、肩部はやや鋭い。立ち上がりは長く、内傾している。口縁部は内側に良く凹んで段とす。底部内面は一定方向のナズ。底部外表面は自然釉がかかる。	3/4	
99	1090溝	須恵器 杯身	12.2 5.4 —	内：N6/灰 外：N4/灰 やや鋭い・継を含む 焼成良好	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、肩部はやや鋭い。立ち上がりは長く、やや内傾している。口縁部は上方につまみ上げて、内傾する面をつくる。	3/5	
100	1090溝	須恵器 杯身	(13.8) 4.1 —	N3/黒灰 継ぎ・継を多く含む 焼成やや不良	底部はロクロ右回りの回転ヘラケズリだが、中央まで及ばずへら切り痕跡が残る。受部はほぼ水平であり、肩部は鋭い。立ち上がりはやや傾く、内傾している。口縁部はやや鋭い。	1/2	
101	1090溝	須恵器 杯身	(13.0) (4.5) —	内：N7/灰白 外：7.5Y R7/灰白 継ぎ・白色砂を少量含む 焼成良好	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、肩部はやや鋭い。立ち上がりは長く、内傾している。口縁部は上方へつまみ上げて、内側に浅い凹み面をつくる。	3/8	
102	1090溝	須恵器 壺	(14.8) — —	内：N5/灰 外：5P B6/青灰・7.5Y R6/黒灰 継ぎ・白色砂を含む 焼成良好	口縁部は下方に肥厚して、縁部をつくる。口頸部外面は、カキメ。体部外面には平行タテ後方カキメ。口縁部から口頸部内面に沿ってココナデ。体部内面は、当て具痕。	1/4	
103	1090溝	土師器 壺	(10.8) — —	内：7.5Y R7/鋭い埋 外：7.5Y R7/鋭い埋 継ぎ・継を多く含む 焼成軟質	口縁部は、内外面ともココナデ。口縁部は鋭い。体部外面はハケメが若干みえる。口頸部内面は粘土粒の痕跡が残る。体部内面は指痕ナズ。	細片	
104	1090溝	土師器 壺	(11.8) — —	内：10Y R3/2灰黒焼 外：5Y R6/鋭い埋 やや鋭い・継をまばらに含む 焼成良好軟質	口縁部は、内外面ともココナデ。口縁部は鋭い。体部外面はナズ。体部内面は輪縁のみ痕跡が残る。その痕跡を滑すように指痕汪がある。	細片	
105	1090溝	土師器 壺	(18.8) — —	7.5Y R6/鋭い埋 継ぎ・継を多く含む 焼成軟質	口縁部は、内外面ともココナデ。肩部は上方をやや肥厚している。体部外面はタテハク。体部内面はヘラケズリ後ナズ。輪縁のみ痕跡が残る。	細片	
106	1090溝	土師器 壺	(23.4) — —	内：2.5Y 6/鋭い黄 外：2.5Y 6/鋭い黄 継ぎ・継をわずかに含む 焼成軟質	口縁部は、内外面ともココナデ。肩部は上方へ肥厚している。頸部から肩部外面は、ココナデ。体部外面はタテハク。体部内面はヘラケズリ後ナズ。輪縁のみ痕跡が残る。	細片	
107	1092溝	須恵器 杯身	(15.8) 4.7 —	N7/灰白 やや鋭い・白色砂と黒色 砂を少量含む 焼成堅緻	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。やや鋭くは鈍くなっている。口縁部は外傾する面となる。天井部内面は不 定方向のナズ。	1/8	
108	1092溝	須恵器 杯身	(15.8) — —	内：5P B7/青灰 外：5P B6/青灰 やや鋭い・白色砂少量と 黒色砂を多量に含む 焼成堅緻	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。縁線は沈線状で、やや鋭く、外傾する面をなす。天井部内面は平行式の当て具痕が残る。	1/4	
109	1093溝	須恵器 杯身	(14.2) — —	内：N7/灰白 外：5P B7/青灰 継ぎ・白色砂少量と黒色 砂を少量含む 焼成堅緻	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。縁線は沈線状で、鈍くなっている。口縁部は下方に凹曲し、内側に段を有している。天井部内面は不定方向のナズ。	1/8	
110	1094溝	須恵器 杯身	14.8 4.4 —	内：5P B5/青灰 外：N6/灰 継ぎ・細かな砂粒を多く含む 焼成堅緻	天井部はやや扁平で、ロクロ右回りの回転ヘラケズリを施すが、中央まで及ばずへら切り痕跡が残る。縁線はやや鋭い。口縁部は鋭く、外傾する面となる。天井部内面は、回転ナズ後不定ナズ。	3/4	
111	1094溝	須恵器 杯身	14.9 4.7 —	内：N6/灰 外：N5/灰 継ぎ 焼成堅緻	天井部は丸みを持ち、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。縁線は鈍くなっている。口縁部は鋭く、内側に段を有している。	3/4	
112	1094溝	須恵器 杯身	(14.4) 4.9 —	内：N6/灰 外：7.5Y R6/黒灰 継ぎ・砂を含む 焼成良好	天井部はやや丸みを持つ。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。縁線はほとんど消滅している。口縁部は下方に凹曲し、口縁部は外側に若干つまみ出し、外傾する面をなす。天井部内面に当て具痕が若干に残り、不定方向のナズ。	3/5	
113	1094溝	須恵器 杯身	(15.6) 4.3 —	N4/灰 継ぎ 焼成堅緻	天井部はやや扁平。ロクロ右回りの回転ヘラケズリを施すが、中央まで及ばずへら切り痕跡が残る。縁線は沈線状で、やや鋭い。口縁部は鋭い。天井部内面は一定方向のナズ。	3/10	
114	1094溝	須恵器 杯身	(12.2) 4.8 —	内：N6/灰 外：N7/灰白 継ぎ・赤褐色の砂少量と 黒色砂を多量に含む 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、肩部はやや鋭い。立ち上がりは内傾し、口縁部は鋭く、内傾した面をもつ。底部内面は一定方向のナズだが、同心円式の当て具痕が残る。	1/8	

表4-7 古墳時代土器観察表

遺物番号	遺構名	種別 器種	口徑 底径	色調 胎土 施色	形態・手法の特徴	残存率	備考		
115	1100溝	須恵器 杯蓋	(14.8) 4.1	— —	NT/灰白 縹赤・白色砂を少量含む 焼成堅緻	—	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。口縁端部はやや外方につまみ出し、外縁すなわち。天井部内面は、同心円文の当て具痕がみられる。	1/4	
116	1100溝	須恵器 杯身	(12.4)	—	内：N6/灰 外：N6/灰 白色粒を含む 焼成堅緻	—	底部はロクロ右回りの回転ヘラケズリだが、中央まで及ばずへり切り縁部を残す。受部はほぼ水平で、端部はやや丸い。立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸い。	3/8	
117	1092溝	土師器 壺	(19.2)	—	内：7.5Y R6/3黄緑 外：10Y R8/3黄緑 やや粗い・白色砂を少量 含む 焼成良好	—	口縁部は、内外面ともコナダ。口縁部はややつまみ上げ、丸くおさめている。体部外面はタテハケだが華感している。	1/10	
118	1094溝	土師器 瓶	—	—	内：7.5Y R6/3黄緑 外：10Y R7/3黄緑 縹赤・砂をわずかに含む 焼成良好	—	体部外面はタテハケ。内面はヘラケズリ後ナダ。輪軸が痕が残る。把手は指頭圧及ビナダによる成形。	1/2	
119	1087 土坑	須恵器 杯蓋	(14.8) 4.8	— —	内：N6/灰 外：N6/灰 白色粒と縹赤を少し含む 焼成良好	—	天井部は、やや丸い。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。縁部は鈍くなっている。口縁端部はやや丸く、内側に段を有している。天井部内面はかすかに当て具痕がみられる。不定方向のナダ。	3/8	
120	1087 土坑	須恵器 杯蓋	(14.2) 3.6	— —	2.5Y R7/1黄灰 縹赤・砂を含む 焼成堅緻	—	天井部は、扁平である。天井部外面はロクロ右回りの回転ヘラケズリだが、中央まで及ばず回転ヘリ切り縁と板状口縁を残す。縁部はほとんど磨滅している。口縁端部は鋭く、内面に向かい屈曲している。天井部内面はナダ。	2/8	
121	1087 土坑	須恵器 杯身	(12.9) 3.9	— —	内：13Y R6/1青灰 外：5Y 7/1黄灰 縹赤・白色粒を含む 焼成堅緻	—	底部外面はへり切り未調整。受部は、やや上方を向いており、端部はやや丸い。立ち上がりは短く、内傾している。口縁端部は鋭い。底部内面は不定方向のナダで、同心円文の当て具痕がみられる。	1/5	
122	1087 土坑	須恵器 壺	(19.4)	—	内：N6/灰 外：N4/灰 縹赤・白色砂を少量含む 焼成堅緻	—	口縁部は外反し、端部は肥厚しやや丸まっている。頸部外面に成形時の絞り痕がみられる。	細片	
123	1087 土坑	須恵器 壺	(21.9)	—	内：N6/灰 外：10Y 3/1オリーブ黒・ NT/灰白 縹赤 焼成堅緻	—	口縁端部は、丸く折り曲げて肥厚させる。肩部外面は、平行タタキと一部カキメ。内面は、当て具痕。	細片	
124	1087 土坑	土師器 壺	(18.2)	—	内：10Y R7/2鈍い黄緑 外：10Y R8/2灰白 縹赤・白色粒を含む 焼成良好	—	口縁部は、内外面ともコナダ。端部はやや上方に肥厚させる。体部外面はナダ。体部内面は板ナダ。	1/6	
125	1087 土坑	土師器 壺	(11.8)	—	内：10Y R8/3黄緑 外：7.5Y R5/6黄緑 縹赤 焼成軟質	—	口縁部は、内外面ともコナダ。口縁端部は丸い。体部外面はタテハケ。肩部内面はヘラケズリ。体部内面は指頭圧痕後ナダ。	1/8	
126	1088 土坑	須恵器 杯蓋	14.4 4.3	— —	N6/灰 やや粗い・白色粒と黒色 粒を含む 焼成堅緻	—	天井部はやや丸みを持つ。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。縁部は凸線状で、鈍くなっている。口縁端部は鋭く、やや外方につまみ出して内側に段を有している。天井部内面は、同心円文の当て具痕を不定方向にナダ割れている。	2/3	
127	1088 土坑	須恵器 杯蓋	(14.4) 4.1	— —	NT/灰白 縹赤・白色砂を含む 焼成堅緻	—	天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。縁部はほとんど磨滅している。口縁端部はやや丸く、内側にかすかな段を有している。天井部内面は同心円文の当て具痕後ナダ。	1/8	
128	1088 土坑	須恵器 杯蓋	(13.0)	—	N3/黄灰 縹赤・砂をわずかに含む 焼成堅緻	—	天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。縁部は鈍くなっている。口縁端部はやや丸く、内側に段を有している。内面全面に指痕が付着。	1/4	
129	1088 土坑	須恵器 杯身	(12.8) 4.3	— —	内：N6/灰 外：N6/灰 縹赤ほとんど含ま ない 焼成堅緻	—	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部はやや丸く、幅お離れの縁部が残る。立ち上がりはやや丸く、内傾している。口縁端部は丸く、内側へ若干屈曲する。底部内面はナダ。	1/2	
130	1088 土坑	須恵器 杯身	(12.4) 5.4	— —	N6/灰 縹赤・白色砂を少量含む 焼成堅緻	—	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平で、端部はやや丸い。立ち上がりは長く、内傾している。口縁端部はやや丸く、内傾する面をもつ。底部内面はナダ。	1/5	
131	1088 土坑	須恵器 杯身	— —	— —	内：N5/灰 外：N4/灰 粗い・縹赤を多量に含む 焼成堅緻	—	底部外面はロクロ左回りの回転ヘラケズリだが、中央まで及ばずへり切り痕が残る。受部は、やや上方を向いており、端部はやや丸い。底部内面に当て具痕、中心部は一定方向のナダ。	2/3	
132	1088 土坑	須恵器 高杯	— (10.8)	— —	N6/灰 — 長尺を含む 焼成堅緻	—	底部内面の中心部は不定方向のナダで、同心円文の当て具痕が残る。肩部はやや内傾している。端部はやや丸く、内側に段を有する。	1/8	
133	1088 土坑	須恵器 高杯	(15.4)	—	NT/灰白 縹赤・白色粒と灰色粒を 多量に含む 焼成堅緻	—	杯部外面は、回転ヘラケズリ。受部は上方を向き、端部はやや丸い。立ち上がりは短く、内傾している。口縁端部は丸い。頸部近くは接合時粘土付けナダ。	1/4	
134	1088 土坑	須恵器 壺	— —	— —	内：N6/灰 外：N5/灰 長尺を含む 焼成堅緻	—	体部は球形に近く肩部はならぬがみられている。体部外面はカキメ。底部は、ヘラケズリ後ナダ。ほぼ直方である。底部内面は、強いナダと斜交痕がある。	1/4	

表4-8 古墳時代土器観察表

遺物番号	遺構名	種別 器種	口径 器高 底径	色調 胎土 施彩	形態・手法の特徴	残存率	備考
135	1088 土坑	土器器 壺	(13.7) — —	内: 10Y R6/5鈍い黄緑 外: 5Y R6/6緑・7.5Y R 6/鈍い黄 長石・石英・雲母を含む 焼成堅緻	口縁部は、内外面ともコナダ。口縁部は太い。体部外面はタテハケ後ナダ。コビオサエもみられる。体部内面はナダ。		破片
136	1095 土坑	須恵器 杯蓋	(14.8) 5.0 —	内: N7/灰白 外: N6/灰 白色粒を含む 焼成堅緻	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ回りの回転ヘラケズリ。やや鋭い稜線がある。口縁部ははややく、内側に段を有している。	1/4	
137	1095 土坑	須恵器 杯蓋	14.8 4.0 —	内: N5/灰 外: 5G Y7/1明オリーブ 灰 やや粗い・礫をまばらら 含む 焼成堅緻	天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。鋭い稜線がある。口縁部ははややく、内側に段を有している。天井部外面にヘラ記号がある。	1/2	
138	1095 土坑	須恵器 杯蓋	(15.2) (4.3) —	内: 5P R6/1青灰 外: 5P R6/1青灰 白色粒を極少含む 焼成堅緻	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。稜線はかなり鈍くなっている。口縁部はやく、内側に段を有している。天井部内面は不定方向のナダ。同心円状の当て具痕がわずかに残る。	1/4	
139	1095 土坑	須恵器 杯身	(12.6) — —	内: N6/灰 外: N7/灰白 白色粒を含む 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部はややく、立ち上がりは内傾し、口縁部は鋭い。底部内面には成形時の縦合線が残る。	1/4	
140	1095 土坑	須恵器 杯身	(12.2) 4.3 —	N4/灰 やや粗い・礫をまばらら 含む 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部は、ほぼ水平であり、端部は鋭い。立ち上がりはややく内傾し、端部には内傾する面をもつ。	1/4	
141	1095 土坑	須恵器 杯身	12.5 4.4 —	内: 2.5Y 8/1灰 外: 10Y 5/1灰 繊維・中礫を含む 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部は、ほぼ水平であり、端部は鋭い。立ち上がりは高曲して垂直ぎみとなり、口縁部は鋭い。底部内面に同心円状の当て具痕、一定方向のナダ。体部外面に赤記号がある。	9/10	
142	1095 土坑	土器器 高杯	(17.0) — —	内: 5Y R6/4鈍い黄 外: 7.5Y R6/4鈍い黄 繊維・白色砂を極少含む 焼成良好	器口は広がりが広がる杯部は、内外面ともコナダ。口縁部は、やく上方を向いている。縦線はやく、横線はやく。	1/8	
143	1095 土坑	土器器 壺	(14.0) — —	内: 10Y R7/2灰黄緑 外: 10Y 5/2鈍い黄緑 雲母を多量に含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともコナダ。口縁部は鋭い。体部外面はタテハケ。体部内面はケズリ後にタテナダ。	1/8	
144	1095 土坑	土器器 壺	(18.6) — —	内: 2.5Y 8/1鈍い黄 外: 10Y R7/2鈍い黄 やや粗い・白色粒を含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともコナダ。口縁部はやく丸くつまみ上げている。体部外面はタテハケ。体部内面はヨコヘラケズリ。	1/9	
145	437土坑	須恵器 杯蓋	13.7 4.7 —	内: N5/灰 外: N4/灰 繊維・礫をまばらら含む 焼成堅緻	天井部は鋭い。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。鋭い稜線が残る。口縁部はやく丸く、内側はかすかな段をなす。	1/8	
146	437土坑	須恵器 杯蓋	(14.0) 4.3 —	内: N6/灰 外: N5/灰 繊維・礫をまばらら含む 焼成堅緻	天井部はやや丸みを帯びる。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリで、痕が残る。稜線はかなり鈍くなっている。口縁部はやく丸く、内側に段を有する。天井部内面にナダ。	1/3	
147	437土坑	須恵器 杯蓋	13.5 3.9 —	内: N5/灰 外: N4/灰 繊維・礫をまばらら含む 焼成堅緻	天井部は扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。鋭い稜線が残る。口縁部はやく丸くつまみ出しで鋭く、内側に段を有する。	1/3	
148	437土坑	須恵器 杯蓋	17.0 5.3 —	内: N6/灰 外: N5/灰 細かな砂粒を多量に含む 焼成良好	天井部はやや丸みを帯びる。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。鋭い稜線が残る。口縁部はやく丸く、内側に段を有している。	1/4	
149	437土坑	須恵器 杯身	(12.6) 4.4 —	内: N6/灰 外: N7/鈍い黄 繊維・白色砂を含む 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部は上方を向いており、端部は鋭い。立ち上がりは長く、内傾している。口縁部はやく丸く、内傾する面をもつ。	1/2	
150	113溝	須恵器 杯身	(12.8) — —	内: N5/灰 外: N4/灰 細砂をわずかに含む 焼成堅緻	受部はやや上方を向いており、端部は鋭い。立ち上がりは短く、内傾している。口縁部は鋭い。	1/8	
151	113溝	土器器 把手付鉢	(13.2) — —	内: 10Y R7/2鈍い黄緑 外: 7.5Y R6/3鈍い黄 繊維・白色粒を含む 焼成良好	口縁部は内外面ともコナダ。口縁部はやく丸く、内傾している。体部は把手接合後タテハケ。内面はケズリ後ナダ。	1/5	
152	81溝	須恵器 杯蓋	(14.6) — —	内: N6/灰 外: N5/灰 繊維・白色粒を含む 焼成堅緻	天井部はやや丸みを帯びている。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。稜線はほとんど消滅している。口縁部はやく丸く外反して丸くおさめ、内側にかすかな段の痕跡を有している。	1/9	
153	81溝	須恵器 杯蓋	(13.8) 3.5 —	N7/灰白 繊維・黒色粒を含む 焼成堅緻	天井部は扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。稜線はほとんど消滅している。口縁部はやく丸く、内側に段の痕跡を有している。	1/8	

表4-9 古墳時代土器観察表

遺物番号	遺構名	種類 器種	口径 器高 口径 口径	色調 胎土 施装	形態・手法の特徴	残存率	備考
154	81溝	須恵器 杯身	(11.2) 3.6 —	内: 5P7/1明赤灰 外: N7/灰白 やや粗い、白色礫を少量 含む 焼成堅緻	底部外面は、回転ヘラケズリ。受部は水平であり、端部は丸い、立ち上がりは短く、やや内傾している。口縁端部はやや丸く、内傾する面をもつ。	1/5	
155	81溝	須恵器 杯身	(13.4) — —	内: 5P B6/1青灰 外: N4/灰 緻密、白色礫を少量含む 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部は水平で、端部はやや鋭い。立ち上がりは短く内傾し、口縁端部は丸い。	1/4	
156	81溝	須恵器 杯身	(14.4) — —	内: 7.5Y R7/4鈍い黄 外: 5Y 8/1灰白 緻密、白色礫を少量含む 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部はやや丸い。立ち上がりは内傾し、口縁端部はやや丸く、内傾する面をもつ。底部内面に同心円文の当て具痕が残る。	1/4	
157	81溝	須恵器 煎蓋	(12.8) — —	N6/灰 緻密、白色砂を含む 焼成堅緻	天井部は扁平で、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ後ナデ。口縁端部はやや鋭く、内側に段を有している。	1/5	
158	81溝	須恵器 煎蓋	(11.4) — —	N8/灰白 緻密、黒色粒を含む 焼成堅緻	天井部はやや丸みを帯びている。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。口縁端部はやや丸く、縁やかに内反している。天井部内面はナデ。	断片	
159	81溝	須恵器 高杯	— (10.8)	5P B6/1青灰 緻密、白色礫を多く含む 焼成堅緻	脚部は内湾し、脚端部はやや鋭く内側に段を有している。脚部に方形の透かし。	3/8	
160	81溝	須恵器 高杯	— (9.5)	内: N6/灰 外: N7/灰白 緻密、白色礫、白色砂を 含む 焼成堅緻	脚部は内湾し、脚端部はやや鋭く内側に段を有する。脚部の三方に切り込み状の透かし。杯部底部は、内面に同心円文の当て具痕が残る。	3/4	
161	81溝	須恵器 高杯	— (10.4)	5Y 6/1灰 緻密、黒色粒を含む 焼成堅緻	脚部は縁やかに内湾し、脚端部はやや鋭く内側に段を有している。	1/4	
162	81溝	須恵器 杯身	(16.8) — —	内: 5P B5/1青灰 外: N6/灰 緻密、白色礫を多く含む 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部はやや方角を向いており、端部はやや丸い。立ち上がりは内傾するが、端部で上へ曲がる。口縁端部はやや丸い。	1/4	
163	81溝	須恵器 把手付輪	— (5.6)	N8/灰白 緻密、白色粒を含む 焼成堅緻	底部から体部にかけて、やや内湾しながら立ち上がる。底部外面は、雑な回転ヘラケズリ。把手接合部はナデ。	1/8	
164	55溝	須恵器 煎	— — —	N6/灰 緻密 焼成堅緻	体部外面に、2条の沈線が斜め交差する間に列点文が施されている。底部は回転ヘラケズリ。中央部には直径2cmの穿穴が施されている。基部内面はナデ。	1/2	
165	81溝	須恵器 広口蓋	(14.3) — —	内: N6/灰 外: N5/灰 緻密、礫を含む 焼成堅緻	口縁端部は、上外方へ屈曲させる。体部外面は、格子タタキ後カキメ。体部上方、下方は、格子タタキとカキメをナデ削している。体部内面は、同心円文の当て具痕後強いコナデ。	2/5	
166	81溝	土師器 蓋	(20.4) — —	10Y R 6/3鈍い黄橙 やや粗い、白色礫を多量 に含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともコナデ。口縁端部はややつまみ上げ、肥厚し丸くおさめられている。体部外面はタテハタ。内面は軟ナデ、輪積み痕が残る。	1/3	
167	387溝	須恵器 杯蓋	(13.8) — —	内: 5Y R 5/2灰黄 外: 7.5Y R 5/2灰黄 緻密、細かい砂粒を多量 に含む 焼成堅緻	天井部はやや丸い。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。鈍い稜線がある。口縁端部は丸い。	1/4	
168	387溝	須恵器 杯身	13.6 4.6 —	N6/灰 緻密、白色粒を含む 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はやや方角を向いており、端部は丸い。立ち上がりはやや短く、内傾している。口縁端部は丸い。底部内面は一定方向のナデ。	3/4	
169	387溝	須恵器 杯身	(13.0) — —	内: N6/灰 外: 5P B6/1青灰 緻密、白色礫を多く含む 焼成良好	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部は水平で、端部はやや丸い。立ち上がりはやや短く、内傾している。口縁端部は丸い。	1/8	
170	387溝	須恵器 杯身	(12.5) — —	内: N5/灰 外: N6/灰 緻密 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部はやや方角を向いており、端部は丸い。立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸い。	1/5	
171	387溝	須恵器 杯蓋	(14.4) 5.4 —	内: N4/灰 外: N6/灰 やや粗い 焼成堅緻	天井部は丸く、中央が僅かに扁平つまみがつく。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。稜線はほとんど消滅している。口縁部はやや外反し、端部は鋭く、内側に段を有している。天井部内面は、つまみを貼り付けた痕跡をナデ削している。	1/2	
172	387溝	須恵器 有蓋高杯 蓋	(16.2) — —	内: N5/灰 外: N4/灰 緻密 焼成堅緻	天井部は扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。鈍い稜線がある。口縁端部はやや鋭く、内側に段を有している。天井部内面は、同心円文の当て具痕をナデ削している。	1/2	

表4-10 古墳時代土器観察表

遺物番号	遺構名	種別 器種	口徑 器高 底径	色調 胎土 施装	形態・手法の特徴	残存率	備考
173	387溝	土器器 把子付鉢	(13.8) 9.0 —	内：7.5Y R7/4鈍い橙 外：10Y R7/3鈍い黄橙 胎土・長石と赤褐色粒を 含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともココナデ。口縁端部はやや内側に肥厚し、丸くおさま っている。底部外面はタテハク。内面はナデ。把子の接合部はナデ。	1/3	
174	387溝	土器器 壺	(20.4) — —	内：7.5Y R6/4鈍い橙 外：5Y R6/6 胎土・長石を含む 焼成軟質	口縁部は、内外面ともココナデ。口縁端部はやや上方に肥厚し、丸くおさま っている。底部外面はタテハク。内面はココナデナデ。	断片	
175	387溝	土器器 壺	(21.0) — —	内：10Y R7/2鈍い黄橙 外：10Y R7/3鈍い黄橙 胎土 焼成軟質	口縁部は、内外面ともココナデ。口縁端部はやや上方つまみ上げ。丸くおさま めている。底部外面はタテハク。内面はココナデナデ。	断片	
176	387溝	土器器 瓶	(22.2) — —	内：7.5Y R8/4鈍い黄橙 外：7.5Y R7/6暗 褐色・白色粒を少量含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともココナデ。口縁端部は内傾し、丸くおさまっている。体 部外面はタテハク。内部内面はココナデ。	1/8	
177	535溝	須恵器 杯蓋	(14.2) 4.9 —	N6/灰 砂粒を多く含む 焼成堅緻	天井部はやや丸みを帯びる。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。 鈍い黄線がある。口縁端部はやや丸く、外縁する面をもつ。端部外面にハク による弱目状調整がみられる。天井部内面はココナデ。	3/8	
178	535溝	須恵器 杯蓋	14.9 3.1 —	N4/灰 やや強い・線をまばららに 含む 焼成堅緻	天井部は扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。線 線はほとんど消滅している。口縁端部はやや丸く、内側に段を有している。天 井部内面に、弱目をもち同心円状で具装が残る。	1/2	
179	535溝	須恵器 杯蓋	(14.4) 5.0 —	S P B7/1青灰 胎土・白色粒を少量含む 焼成堅緻	天井部はやや丸い。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。鈍い 線がある。口縁端部はやや丸く、内側に段を有している。端部外面にハクに よる弱目状調整がみられる。天井部内面は不定方向のナデ。	1/4	
180	535溝	須恵器 杯蓋	14.7 4.0 —	N6/灰 胎土・白色粒を多く含む 焼成堅緻	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。 やや鋭い線がある。口縁端部はやや外側につまみ出して鋭く、内側に段を有 している。天井部内面に、弱目をもち同心円状で具装がわずかに残る。	1/2	土器群 4
181	535溝	須恵器 杯蓋	(14.8) 4.7 —	N6/灰 胎土・白色砂粒少と黒色 粒を少量含む 焼成堅緻	天井部はやや丸みを帯びる。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。 線線は比喩状でやや鋭い。口縁端部はやや丸く、内側に段を有している。天 井部内面にわずかに具装が残る。	1/2	
182	535溝	須恵器 杯蓋	(15.4) — —	内：N3/灰 外：N6/灰 やや強い・白色粒を含む 焼成堅緻	天井部はやや丸い。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。鈍い 線がある。口縁端部はやや外方につまみ出して鋭く、内側に段を有している。	1/6	
183	535溝	須恵器 杯蓋	(15.8) 4.1 —	N7/灰白 胎土・白色粒を少量含む 焼成堅緻	天井部は扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。やや 鋭い線をもつ。口縁端部はやや丸い。	1/5	土器群 4
184	535溝	須恵器 盃蓋	(10.2) 3.3 —	内：S P B7/1明青灰 外：S P B6/1青灰 胎土・白色粒を少量含む 焼成堅緻	天井部はやや丸い。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。口縁 端部はやや丸く、内側に段を有している。天井部内面はナデ。	1/8	
185	535溝	須恵器 杯身	13.0 5.2 —	内：S P B5/1青灰 外：N6/灰 胎土・黒と黒色粒を含む 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部 は鋭い。立ち上がりはやや内傾し、口縁端部は上方にやや傾斜し、丸くおさ める。底部内面は軽く一定方向のナデ。外面にハク記号と来記号がある。	ほぼ 完全	土器群 2
186	535溝	須恵器 杯身	(12.8) — —	N6/灰 白色粒を少量含む 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部 は丸い。立ち上がりはやや長く、内傾している。口縁端部は丸く、端部は1/8 近く弱目、段を有している。	1/8	
187	535溝	須恵器 杯身	(11.8) 5.1 —	S P B6/1青灰 胎土・白色粒を少量含む 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部 はやや丸い。立ち上がりはやや長く、内傾している。口縁端部は丸く、やや 上方に上がる。底部内面は不定方向のナデ。	1/4	土器群 4
188	535溝	須恵器 杯身	13.0 5.2 —	内：N6/灰 外：N5/灰 砂を多く含む 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はやや上方を向いており、 端部は鋭い。立ち上がりは長く、内傾している。口縁端部は丸く、内側に段 を有している。	1/2	
189	535溝	須恵器 杯身	(12.6) 4.5 —	内：N8/灰白 外：N7/灰白 胎土・白色粒を少量含む 焼成良好	底部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部はやや上方を向いており、 端部は丸い。立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸い。底部内面は当て具装が わずかに残り、中心部は不定方向のナデ。	1/3	土器群 3
190	535溝	須恵器 杯身	(12.4) 4.8 —	内：S P B6/1青灰 外：N6/灰 胎土・白色砂粒少と黒色 粒を少量含む 焼成堅緻	底部外面はロクロ右回りの回転ヘラケズリだが、ケズリが甘く未調整に近い。 受部はほぼ水平であり、端部は丸い。立ち上がりはやや長く、内傾している。 口縁端部は丸い。底部内面は不定方向のナデ。外面に白粉が少く残っている。	1/4	
191	535溝	須恵器 杯身	(12.8) 4.1 —	内：S P B6/1青灰 外：N7/灰白 胎土・白色粒を含む 焼成堅緻	底部外面はロクロ右回りの回転ヘラケズリだが、中心部までヘラケズリが弱 かずヘラ切り残る。受部はほぼ水平であり、端部は丸い。立ち上がりは 長く、やや内傾している。口縁端部はやや丸く、内側に段をもつ。底 部内面は不定方向のナデ。気泡による地味時の破綻がみられる。	1/4	土器群 4
192	535溝	須恵器 杯身	13.1 5.1 —	内：S P B5/1青灰 外：N6/灰 胎土・白色粒を含む 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部 は丸い。立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸く、内側に段を有する。底部内 面は弱目状調整がみられる。底部内面は不定方向のナデ。口縁部に打ち穴のような 痕跡がある。	9/10	

表4-11 古墳時代土器観察表

遺物番号	遺構名	種類 器種	口径 高さ 底径	色調 胎土 施成	形態・手法の特徴	残存率	備考
193	S35溝	須恵器 高杯	13.5 8.2 (9.2)	内：N7/灰白 外：N5/灰・N6/灰 縹から砂粒を多く含む 焼成堅軟	杯部の立ち上がりは湾曲しながら内傾し、口縁端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平である。杯部外面は、ロクロ右回りの回転ヘタケズリ。内面の底部は同心円文の当て具痕。脚部は内傾し、端部は内傾する面をなす。脚部の四方に直径7mmの円形透かし。	3/3	土器群4 S467出土土 器片と接合
194	S35溝	須恵器 壺	(13.2) — —	内：N6/灰 外：N5/灰 粗い・縹を多く含む 焼成堅軟	口縁部は外反し、口縁端部は丸く肥厚する。頸部から脚部にかけてカキメ後回転ナズ。	—	細片 土器群1
195	S35溝	須恵器 壺	(18.6) — —	内：N7/灰白 外：2.SY7/灰白 やや粗い・黒色粒を少量 含む 焼成良好	口縁端部は上下に肥厚させ、外面には突帯を造らす。体外外面は、平行タタキ。内面は、同心円文の当て具痕をナズ消す。	1/5	—
196	S35溝	須恵器 横瓶	(7.8) 22.3 —	内：N6/灰 外：2.SY5/黄灰 やや粗い・白色縹を多く 含む 焼成堅軟	口縁部は外反し、口縁端部は丸くややややに肥厚させる。頸部はナズ。体部外面はカキメ。外面には口縁部から底部にかけて自然輪がかかっている。	1/4	土器群1
197	S35溝	土器器 筒	(12.5) 4.2 —	内：10Y R7/3鋭い黄緑 外：1.SY R7/4鋭い やや粗い・白色縹を多量 に含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともヨコナズ。口縁端部はやや内傾し、丸くおさめている。体部内外面ともにナズ。体部外面は、輪積み痕を消すために指図圧が残る。	1/5	—
198	S35溝	土器器 高杯	(16.4) — —	内：10Y R6/3鋭い黄緑 外：5Y R7/4明赤 粗い 焼成軟質	口縁部は湾曲しながら、やや垂直に立ち上がり、端部は丸い。内外面ともヨコナズ。	—	細片
199	S35溝	土器器 高杯	(15.6) — —	内：2.SY R7/4鋭い 外：10Y R7/3鋭い黄緑 粗い 焼成軟質	杯部口縁部は、上外方に湾曲しながら立ち上がり、端部は丸くおさめる。脚部は外反して広がる。杯部は内外面ともヨコナズで、杯底部の接合部は指図圧。脚部外面はタテハツ後ナズ、内面はナズ。	2/5	土器群1
200	S35溝	土器器 高杯	(16.8) — —	内：10Y R7/4鋭い黄緑 外：10Y R7/3鋭い黄緑 長石を含む 焼成軟質	杯部は体部と口縁部の境に線をもち、口縁端部はやや外反し丸くおさめる。内外面ともヨコナズで、端部と接合部は、特に強いヨコナズ。杯底部外面は、ヨコナズ後ヨコナズ。脚部は指図で、ヘアで数本の切り込みがある。脚部外面はナズ。	1/8	—
201	S35溝	土器器 付手	(14.2) — —	内：10Y R5/2灰黄緑 外：10Y R7/3鋭い黄緑 やや粗い・白色縹を少量 含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともヨコナズ。口縁端部は丸くおさめる。体外外面はタテハツ。体部内面はケズリ後ナズ。	1/2	—
202	S35溝	土器器 壺	(12.0) — —	内：10Y R7/3鋭い黄緑 外：10Y R4/1焼灰 粗い 焼成不良	口縁部は、内外面ともヨコナズ。口縁端部はやや粗い。体外外面はタテハツ。体部内面はヘタケズリ後ナズと指図圧。輪積み痕が明確に残る。	1/4	—
203	S35溝	土器器 壺	(23.6) — —	内：10Y R7/2鋭い黄緑 外：2.SY R7/4鋭い やや粗い・白色縹を多量 に含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともヨコナズ。口縁端部はややつまみ上げている。体外外面はナズ。内面はケズリ後に板ナズ。輪積み痕が残る。	1/5	—
204	S35溝	土器器 壺	(23.0) — —	内：10Y R5/3鋭い黄緑 外：10Y R6/3鋭い黄緑 縹・白色粒を含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともヨコナズ。口縁端部はややつまみ上げ、丸くおさめている。体外外面は摩滅している。体部内面は、ヨコナズ後ナズ。輪積み痕が残る。	1/6	—
205	S35溝	土器器 壺	(27.1) — —	内：10Y R7/3鋭い黄緑 外：10Y R6/4鋭い黄緑 白色粒を含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともヨコナズ。口縁端部はややつまみ上げ、丸くおさめている。体外外面はタテハツ後ナズ。内面は板ナズ。輪積み痕が明確に残る。	—	細片 土器群3
206	S35溝	土器器 把手付壺	(27.8) — —	内：10Y R7/4鋭い黄緑 外：2.SY R8/4焼黄緑 縹 焼成軟質	口縁部は、内外面ともヨコナズ。口縁端部は丸くおさめている。体外外面はタテハツ。体部内面は、ヘタケズリ後ナズ。輪積み痕が残る。把手は、指図圧及びびナズによる成形。	1/5	—
207	S35溝	土器器 瓶	(28.0) — —	内：2.SY R6/3鋭い 外：2.SY R6/3鋭い 粗い 焼成良好	口縁部は、内外面ともヨコナズ。口縁端部は、わずかに内傾し内面に肥厚している。体外外面はタテハツ。体部内面はナズで、下部部はヘタケズリ後ナズ。輪積み痕が残る。把手は、指図圧及びびナズによる成形。把手の裏面に1/3に、黒帯が付き着。	1/3	土器群2
208	S34溝	須恵器 杯蓋	(14.8) — —	内：N5/灰 外：N6/灰 白色粒を含む 焼成堅軟	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘタケズリ。やや鋭い稜線がある。口縁端部はやや丸く、内面に段を有する。	1/4	—
209	S34溝	須恵器 杯身	(19.0) — —	N5/灰 縹から砂粒を含む 焼成堅軟	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘタケズリ。受部は上方を向き、端部はやや粗い。立ち上がりは内傾し、口縁端部はやや丸く、内傾する面をなす。	1/4	—
210	S34溝	須恵器 杯身	(13.6) — —	N6/灰 縹・白色縹を少量含む 焼成堅軟	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘタケズリ。受部は上方を向き、端部は丸い。立ち上がりはやや粗く内傾し、口縁端部は丸い。	1/8	—
211	S34溝	須恵器 杯身	(13.0) — —	N6/灰 縹・白色縹を少量含む 焼成堅軟	受部は上方を向き、端部は丸い。立ち上がりは内傾し、口縁端部はやや粗い。外面の一部に自然輪がかかる。	1/4	—

表4-12 古墳時代土器観察表

遺物番号	遺構名	種別 形状	口径 高さ 底径	色調 胎土 施装	形態・手法の特徴	残存率	備考
212	534溝	灰志器 高杯	— — (10.8)	N6/灰 磨密・白色砂を多量に含む 焼成堅緻	脚部は外反ぎみで、脚端面でやや下方に屈曲し丸くおさまる。肩部は内傾する面をもち、内側に段を有している。脚部の三方に切り込み状の透かし。杯底部内面は、同心円文の当て具痕をナゲ削している。	1/5	
213	534溝	灰志器 高杯	— — (11.6)	5P B6/青灰 磨密・白色糠をやや多く含む 焼成堅緻	脚部は内湾ぎみで、脚端面はやや鋭く内側に段を有している。脚部に方形透かし。	1/4	
214	534溝・ 537土坑	灰志器 壺	20.3 — —	内：N4/灰 外：N5/灰 磨密・線をわずかに含む 焼成堅緻	口縁部は短く外反し立ち上げ、肩部で折り曲げて有段とする。口縁部内外面はナゲ。体部外面は、平行タタキ状キレキレ。体部内面は、同心円文の当て具痕をナゲする。	3/5	
215	534溝	土師器 手捏土器 杯	(7.5) — —	内：10Y R7/2黄い黄橙 外：7.5Y R5/4黄橙 やや粗い、白色糠を多量に含む 焼成良好、一部二次焼成あり	口縁部は、内外面ともナゲ。口縁肩部は内側に肥厚し、丸くおさまっている。体部内面は頸部正腹がある。	1/8	
216	534溝	土師器 壺	(12.2) — —	内：10Y R6/3黄い黄橙 外：7.5Y R6/4黄い黄橙 磨密・白色糠を多量に含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともヨコナゲ。口縁肩部は、鋭くおさまっている。体部外面は頸部のため不明。内面の口縁部と体部の間に接合痕がある。	1/5	
217	538溝	灰志器 杯蓋	(15.2) 4.1 —	内：N7/灰白 外：5Y3/1オリーブ風 磨密・白色糠少量と黒色粒を多量に含む 焼成堅緻	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。縁部は明瞭だが突出は鈍い。口縁肩部は、やや鋭く、内側に段を有している。天井部内面は、ナゲ。外面全体に自然釉がかかっている。	1/8	
218	538溝	灰志器 杯蓋	(15.7) 4.2 —	内：N6/灰 外：N5/灰 磨密・線を多く含む 焼成堅緻	天井部はやや丸い。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリだが、中央部まで及びず平打キ痕跡が残る。縁部はほとんど消滅している。口縁肩部は、やや鋭く、内側に段を有している。内面は同心円文の当て具痕が部分的に残る。天井部外面に、覆度の残った自然釉が残る。内面には自然釉がかる。	1/2	
219	538溝	灰志器 杯蓋	(14.6) 4.3 —	N5/灰 磨密・白色砂と黒色粒を含む 焼成堅緻	天井部はやや丸い。天井部外面は、ロクロ右回りの軽い回転ヘラケズリで、へラ切り痕跡と板状圧痕が残る。縁部はほとんど消滅している。口縁肩部は、やや鋭く、内側に段を有している。天井部内面には、同心円文の当て具痕が部分的に残る。	1/4	
220	538溝	灰志器 短頸壺	(6.0) 4.7 —	N7/灰白 磨密・黒色粒を少量含む 焼成堅緻	口縁部はやや垂直に立ち上がり、口縁肩部はやや丸くおさまる。底部内外面ともナゲ。体部外面の一部に、自然釉がかかっている。	1/2	
221	538溝	土師器 壺	(21.6) — —	内：10Y R7/2黄い黄橙 外：10Y R6/3黄い黄橙 磨密・白色糠を多く含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともヨコナゲ。口縁肩部はややつまみ上げ、丸くおさまっている。体部正腹として調整不明だが、外面にハマメ痕がわずかに残る。内面に輪様みねが明瞭に残る。	1/8	
222	750溝	灰志器 杯蓋	(11.2) 4.4 —	N7/灰白 磨密・白色糠多量と黒色粒を多量に含む 焼成堅緻	底部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部は水平で、肩部は丸い。立ち上がりは短く、ほぼ垂直である。口縁肩部は丸い。	1/3	
223	750溝	灰志器 壺	— — —	N7/灰白 磨密・白色糠を含む 焼成良好	体部外面に、2条の沈線が施されている。底部外面は回転ヘラケズリ。底部内面はナゲ。中央部には直径2cmの穿穴が行われている。口縁部は打ち欠いている。	4/5	
224	750溝	土師器 壺	— — —	内：10Y R7/2黄い黄橙 外：7.5Y R7/2黄い黄橙 磨密・白色糠を含む 焼成良好	体部外面はタテハケ、下半分ハケを行ない、中途で一度止める痕跡が認められる。体部内面はヨコナゲ。輪様みねが残る。体部外面に頸部がある。底部には内面から穿った長さ2.2cm、幅0.3cmの穿孔がある。口縁部は打ち欠いている。	2/3	
225	537土坑	灰志器 杯蓋	(14.6) — —	内：N6/灰 外：N5/灰 やや粗い・線を多く含む 焼成堅緻	天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。縁部はほとんど消滅している。口縁肩部はやや丸く、内側に段を有している。	断片	
226	537土坑	灰志器 杯蓋	(11.5) — —	内：10Y6/1灰 外：2.5Y6/1黄灰 磨密 焼成堅緻	受部はほぼ水平で、肩部はやや鋭い。立ち上がりは短く、垂直ぎみで、口縁肩部はやや丸い。	断片	
227	537土坑	灰志器 杯蓋	(10.3) — —	内：N6/灰 外：N3/3緑灰 磨密 焼成堅緻	底部外面は、回転ヘラケズリ。受部は水平で、肩部はやや丸い。立ち上がりはやや短く、内傾している。口縁肩部はやや鋭い。	断片	
228	537土坑	灰志器 高杯	— — —	内：N5/灰 外：N6/灰 粗い・線を多く含む 焼成堅緻	脚部はやや外反している。脚部から杯部の屈曲は緩やかである。調整は回転ナゲ。	1/4	
229	537土坑	灰志器 短頸壺	(10.3) — —	内：N6/灰 外：10Y5/1灰 やや粗い・線を多く含む 焼成堅緻	口縁部は、緩やかに上外方に立ち上がり、肩部で外反する。口縁肩部はやや鋭く、内傾する段を有している。	断片	
230	537土坑	灰志器 短頸壺	(8.5) — —	内：N6/灰 外：N5/灰 粗い・線を多く含む 焼成堅緻	口縁部は、肩部を外に折り曲げて丸くおさまっている。	断片	

表4-13 古墳時代土器観察表

遺物番号	遺構名	種別 器種	口徑 高さ 底径	色調 胎土 施装	形態・手法の特徴	残存率	備考
231	537土坑	須恵器 甕	(10.4) — —	S/B6/青灰 胎土・黒色粒を含む 施成堅緻	口縁部は外反して立ち上がり、肩部には平直面をもつ。腹部はやや張っている。底部外面は、平行タテキ後キキ。体内内面は、当て具痕跡ナシ。	3/8	
232	537土坑	土師器 甕	(20.2) — —	内：7.5Y R7/鈍い橙 外：7.5Y R7/鈍い橙 胎土・白色粒と褐色粒を 多量に含む	口縁部は厚く、内外面ともコナダ。口縁端部は丸くおさめている。底部外面はタテハク、内面はケズリ。	1/4	
233	677土坑	須恵器 杯蓋	(15.4) 4.9 —	内：N6/灰 外：N7/灰白 やや鋭い・白色粒と黒色 粒を含む	天井部はやや丸い。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。やや鋭い稜線がある。口縁端部はやや丸く、内側に段を有している。天井部内面は、不定方向のナダ。	顔片	
234	677土坑	須恵器 杯蓋	(13.4) 5.3 —	N7/灰白 胎土・白色粒を含む 施成堅緻	天井部は丸い。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。やや鈍い稜線がある。口縁端部はやや鋭く、内側にかすかな段を有している。	1/4	
235	677土坑	須恵器 杯蓋	(15.2) — —	N8/灰白 胎土・黒色粒を含む 施成堅緻	天井部は丸い。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。稜線はやや丸い。口縁端部はやや丸く、内側に段を有している。天井部内面はナダ。	1/4	
236	679土坑	須恵器 杯蓋	(15.4) — —	内：N6/灰 外：N6/灰 胎土・白色粒を含む 施成堅緻	天井部は丸い。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。稜線は鈍くなっている。口縁端部はやや鋭く、内側に段を有している。	1/8	
237	679土坑	須恵器 杯蓋	14.4 4.8 —	内：N5/灰 外：N4/灰 胎土・白色粒を含む 施成良好	天井部は丸い。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。稜線は鈍くなっている。口縁端部はやや鋭く、内側に段を有している。天井部内面には、当て具痕跡が残り、一定方向のナダ。	5/8	
238	678土坑	須恵器 杯蓋	(14.0) 4.5 —	内：N6/灰 外：5P B6/青灰 やや鋭い・白色粒と黒色 粒を含む	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。やや鋭い稜線がある。口縁端部は鋭く、内側に段を有している。	1/4	
239	678土坑	須恵器 杯蓋	(15.2) — —	N6/灰 胎土・白色粒を少し含む 施成良好	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。稜線は、鈍くなる。口縁端部はやや外方にのみ出し、内側に段を有している。	1/4	
240	678土坑	須恵器 杯蓋	(14.4) 4.9 —	内：N6/灰 外：N7/灰白 胎土・黒色粒を含む 施成堅緻	天井部はやや丸い。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。稜線は鈍くなる。口縁端部はやや鋭く、外縁する面をもつ。天井部内面はナダ。	1/4	
241	678土坑	須恵器 杯蓋	(16.0) — —	内：N7/灰白 外：N6/灰 やや鋭い・黒色粒と白色 粒を含む	天井部はやや丸い。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。稜線は鈍くなる。口縁端部はやや鋭く、内側に段を有している。	1/10	
242	678土坑	須恵器 杯蓋	(14.8) 5.5 —	S/B6/青灰 胎土・白色粒を含む 施成良好	天井部は扁平である。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。稜線はやや丸い。口縁端部は外縁する面をもつ。天井部内面は、同心円状の当て具痕跡が残る。	2/8	
243	678土坑	須恵器 杯蓋	(14.0) 4.0 —	内：N6/灰 外：N5/灰 胎土・白色粒を含む 施成堅緻	天井部は扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。稜線は波線状でやや丸い。口縁端部はやや鋭く、内側に段を有している。天井部内面は、コナダ。	3/8	
244	678土坑	須恵器 杯蓋	(14.4) 4.4 —	N6/灰 胎土 施成堅緻	天井部はやや丸みをもつ。天井部外面はロクロ右回りの回転ヘラケズリだが、中央まで及ばず、板状圧痕が残る。稜線はやや丸い。口縁端部は丸く、内側に段を有している。口縁部から肩部にかけてヘタキによる割目目状調整がみられる。天井部内面はナダ。	1/4	
245	733土坑	須恵器 杯蓋	14.0 4.7 —	N7/灰白 胎土 施成堅緻	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。稜線はやや丸い。口縁端部は鋭く、内側に段を有している。天井部内面はナダ。	1/2	
246	733土坑	須恵器 杯蓋	(14.4) — —	内：N7/灰白 外：5P B6/青灰 胎土・灰白色粒を含む 施成堅緻	天井部は扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。稜線はやや鈍くなる。口縁端部はやや鋭く、内側に段を有している。天井部内面は、割目目をもつ同心円状の当て具痕跡が残る。	1/4	
247	733土坑	須恵器 杯蓋	15.8 5.0 —	N6/灰 胎土・白色粒を含む 施成堅緻	天井部は丸い。天井部外面はロクロ左回りの回転ヘラケズリだが、中央まで及ばず同心円状の痕跡が残る。稜線はやや丸い。口縁端部は丸く、内側にかすかな段を有する。天井部内面に同心円状の当て具痕跡が残り、不定方向のナダ。	3/5	
248	679土坑	須恵器 杯蓋	13.0 4.4 —	内：N7/灰白 外：N6/灰 胎土・白色粒を含む 施成堅緻	底部外面はロクロ左回りの回転ヘラケズリだが、中央まで及ばずヘタ切り痕が残る。受部はやや上方を向いており、肩部は丸い。立ち上がりはやや鋭く、内側に段を有している。口縁端部は丸い。底部内面にかすかに当て具痕跡が残り、一定方向のナダ。	5/8	
249	679土坑	須恵器 杯蓋	12.6 4.6 —	内：N6/灰 外：7.5Y R7/鈍い橙 胎土・白色粒を含む 施成良好	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はやや上方を向いており、肩部は丸い。立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸い。外面は自然輪がかかる。底部内面は同心円状の当て具痕跡が残り、一定方向のナダ。	3/4	
250	679土坑	須恵器 杯蓋	(13.9) — —	N6/灰 胎土・白色粒を含む 施成堅緻	底部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、肩部は丸い。立ち上がりはやや鋭く、内側に段を有している。口縁端部は丸い。	1/4	
251	678土坑	須恵器 杯蓋	(12.2) 3.9 —	内：N6/灰 外：N5/灰 胎土・白色粒を含む 施成良好	底部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、肩部はやや丸い。立ち上がりは短く、やや垂直である。口縁端部は丸い。	1/2	

表4-14 古墳時代土器観察表

遺物番号	遺構名	類別 器種	口径 器高 底径	色調 加工 焼成	形態・手法の特徴	残存率	備考
252	478土坑	須恵器 杯身	13.5 4.6 —	内：N7/灰白 外：N4/灰 縹赤 焼成良好	底面外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部はやや丸い。立ち上がりは、やや垂直向きで、口縁端部は鋭い。底面内面はナデ。	3/5	
253	678土坑	須恵器 杯身	(12.4) — —	内：N6/灰 外：5P白/青灰 縹赤・白色砂を含む 焼成整熟	底面外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部は上方を向いており、端部は丸い。立ち上がりは長く、内傾している。口縁端部はやや鋭く、内傾する面をもつ。	1/5	
254	478土坑	須恵器 杯身	(13.0) 4.3 —	内：N6/灰 外：N7/灰白 縹赤・白色砂を含む 焼成良好	底面外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部は丸い。立ち上がりはやや長く、内傾し、口縁端部は丸い。底面内面は、不定方向のナデ。同心円文の当て具痕が若干残る。	1/4	
255	478土坑	須恵器 杯身	(12.8) 5.1 —	N6/灰 縹赤・白色砂を含む 焼成整熟	底面外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部は丸い。立ち上がりはやや長く、内傾している。口縁端部は丸い。口縁部に打ち欠いたような痕跡がある。	1/4	
256	478土坑	須恵器 杯身	(13.2) — —	N6/灰 — 粗い・白色砂を含む 焼成整熟	底面外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部はほぼ水平であり、端部は丸い。立ち上がりは長く、内傾している。口縁端部は丸く、内側に段を有している。底面内面は、不定方向のナデ。	1/4	
257	478土坑	須恵器 杯身	12.8 4.8 —	内：N5/灰 外：N4/灰 縹赤・黒か/縹赤を含む 焼成整熟	底面外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はやや上方を向き、端部はやや丸い。立ち上がりは、やや内傾している。口縁端部はやや鋭く、内傾する面をもつ。底面内面は当て具痕が若干残る。一方、一定方向のナデ。	3/4	
258	753土坑	須恵器 杯身	(12.3) — —	N6/灰 縹赤・黒色砂を含む 焼成整熟	底面外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。受部はやや上方を向いており、端部は丸い。立ち上がりは薄く内傾し、口縁端部はやや鋭い。	1/5	
259	478土坑	須恵器 杯身	(12.8) — —	内：N8/灰白 外：5P B6/白青灰 やや粗い・黒色砂を含む 焼成整熟	底面外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。受部はやや上方を向き、端部は丸い。立ち上がりはやや内傾し、口縁端部は丸い。	1/5	
260	753土坑	須恵器 蓋	(12.6) — —	内：N7/灰白 外：N6/灰 縹赤・白色砂を含む 焼成整熟	口縁部は外反して開き、口縁部はやや上方へ屈曲する。口縁端部は内傾する面をもつ。口縁部と口蓋部の痕跡。削り出しによって突帯が認められる。口縁部には3条、口蓋部には6条の痕跡が施されている。	1/6	
261	478土坑	須恵器 短頸蓋	(8.8) (10.8)	内：7.5Y4/1灰 外：7.5Y3/1灰 やや粗い 焼成整熟	口縁部はわずかに外反し、口縁はわずかに内傾して短く立つ。端部は丸い。体部の肩は緩やかである。底面外面は、回転ヘラケズリ。口縁部から前面にかけて自然釉が掛かっている。	2/5	
262	754土坑	須恵器 短頸蓋	7.4 8.2 —	内：N6/灰 外：N7/灰白 縹赤・白色砂を含む 焼成整熟	口縁部はわずかに内傾して短く立つ。端部はやや鋭く、内側に段を有する。体部の肩は削っている。体部外面は調整は、回転ヘラケズリ。	1/2	
263	679土坑	須恵器 蓋 (口縁部)	(11.4) — —	N7/灰白 縹赤・白色砂を含む 焼成整熟	口縁部は上方へ直線的に立ち上がり、口縁部で外方に屈曲させる。端部はやや下方に肥厚させて丸くおさめる。	1/4	
264	478土坑	土師器 碗	(12.3) — —	内：10Y R7/2鈍い黄褐色 外：10Y R6/2灰黄褐色 縹赤・白・砂粒と雲母を含む 焼成軟質	口縁部は、内外面ともコナデ。口縁端部は、緩やかに内傾し、丸くおさめる。外面は指オサエトナデ。体部外面に巻き上げ痕跡が残る。	1/6	
265	753土坑	土師器 羹	(12.0) — —	内：10Y R6/2鈍い黄褐色 外：10Y R6/2灰黄褐色 縹赤・長石・石英・雲母を含む 焼成軟質	口縁部は緩やかに外反している。口縁部は、内外面ともコナデ。口縁端部は丸くおさめている。体部外面はタテハク。内面はケズリ後物ナデ。	1/8	
266	477土坑	土師器 羹	(19.0) — —	内：10Y R7/2鈍い黄褐色 外：10Y R6/2鈍い黄褐色 縹赤・白色砂と褐色粒を少量含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともコナデ。口縁端部はややつまみ上げ、肥厚させて丸くおさめる。体部外面はタテハク。内面は指オサエトナデ。	口縁部 1/8	
267	477土坑	土師器 羹	(22.6) — —	内：10Y R5/4鈍い黄褐色 外：7.5Y R7/4鈍い橙 やや粗い・白色砂と褐色 粒を少量含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともコナデ。口縁端部は調整するが、やや丸くおさめる。体部外面はタテハク。肩内面はコナデ。	細片	
268	754土坑	土師器 羹	(15.0) — —	内：10Y R6/2灰黄褐色 外：2.5Y 7/2灰黄 やや粗い・白色砂を極少量含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともコナデ。口縁端部はややつまみ上げ、肥厚させて丸くおさめる。体部外面はタテハク。内面は軟ナデ。	1/4	
269	479土坑	土師器 羹	(14.8) — —	内：10Y R7/3鈍い黄褐色 外：10Y R7/2鈍い黄褐色 やや粗い・白色砂を少量含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともコナデ。口縁端部はややつまみ上げ、肥厚させて丸くおさめる。体部外面はタテハク。肩内面はケズリ。体部内面にナデ。輪積み痕が残る。器面の内外面に著熱の調整がみられる。	1/8	
270	478土坑	土師器 瓶	(26.1) 28.7 —	内：10Y R6/4鈍い黄褐色 外：7.5Y R5/4鈍い褐 縹赤・黄をまばらに含む 焼成軟成	口縁部は、内外面ともコナデ。端部はわずかに内傾しやや丸い。口縁から体部は下から上のタテハク。体部内面は、ヘラケズリ後物ナデ。粘土粒の巻き目がある。器身は包みられているが、器壁に凹孔を穿ち、液の込んで装着。底面外面に、黒痕がある。	細片	
271	721土坑	須恵器 杯蓋	(14.8) 4.4 —	N7/灰白 縹赤・白色砂を含む 焼成整熟	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリ。縁部はやや鋭い。口縁端部はやや鋭く、内側に段を有している。	1/4	

表4-16 古墳時代土器観察表

遺物番号	遺構名	種別 器種	口徑 器高 底径	色調 加工 施成	形態・手法の特徴	残存率	備考
293	136溝 上層	須恵器 壺	— — —	内：T.5Y5/1灰 外：N3/黄灰 褐色・黒色粒を少量含む 施成堅緻	外面は、平行タタキ。内面は、当て具痕を繰り返す。	断片	
294	536溝	須恵器 壺	— — —	内：N6/灰 外：5P B6/1青灰 褐色・長石を少量含む 施成堅緻	外面は、平行タタキ。内面は、当て具痕を繰り返す。	断片	
295	536溝	須恵器 壺	— — —	N7/灰白 褐色・黒色粒を少量含む 施成堅緻	外面は、平行タタキ。内面は、当て具痕を繰り返す。	断片	
296	236土坑	須恵器 壺	— — —	10R6/2灰赤 褐色・長石を極少量含む 施成堅緻	外面は、平行タタキ。内面は、当て具痕を繰り返す。	断片	
297	4・5区 遺構 検出中	須恵器 杯蓋	(16.2) 4.6 —	N6/灰 褐色・白色礫と黒色粒を 多く含む 施成堅緻	天井部はやや丸い。天井部外面は、ロクロ回りの回転ヘラケズリ。稜線は やや鋭い。口縁部は、やや鋭く、内側に段を有する。天井部外面に、ヘラ 記号。	1/4	
298	1区 遺構 検出中	須恵器 杯蓋	(15.2) 4.2 —	内：N7/灰白 外：N4/灰 やや粗い・白色砂少量と 黒色粒多量を含む 施成堅緻	天井部は扁平である。天井部外面は、ロクロ回りの回転ヘラケズリ。稜線 はやや鋭い。口縁部は突出は小さく、外縁する面となる。天井部内面に ナゲ。天井部外面に「—」ヘラ記号。	1/5	
299	1区 遺構 検出中	須恵器 杯蓋	(15.6) 4.1 —	内：5P B6/1青灰 外：N6/灰 褐色・白色砂を極少量含む 施成堅緻	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ロクロ回りの回転ヘラケズリ。 稜線は鋭く立ち、口縁部は外縁する面となる。天井部内面は、不定方向 のナゲ。同心円の当て具痕がわずかに残る。	1/4	
300	2区 包含層	須恵器 杯蓋	(14.0) 4.4 —	内：N7/灰 外：N6/灰 褐色・白色礫を多量に含 む 施成堅緻	天井部はやや丸い。天井部外面は、ロクロ回りの回転ヘラケズリ。稜線は 沈線状で、やや鋭い。口縁部は、やや鋭く、内側に段を有する。天井 部内面に同心円の当て具痕が残り、一定方向のナゲ。天井部外面にヘラ記 号。	1/4	
301	1区 包含層	須恵器 杯蓋	18.2 3.7 —	内：5P B6/1青灰 外：5P B7/1青灰 白色砂をやや多く含む 施成良好	天井部はかなり扁平である。天井部外面は、ロクロ回りの回転ヘラケズリ。 鋭い稜線がある。口縁部はやや鋭く、外縁する面を有する。	3/5	
302	1区 遺構 検出中	須恵器 杯蓋	14.3 4.2 —	内：N6/灰 外：N5/灰 褐色・礫を多く含む 施成堅緻	天井部はやや丸い。天井部外面は、ロクロ回りの回転ヘラケズリ。稜線は やや鋭い。口縁部は外縁する面をもつ。天井部内面は、同心円の当て 具痕がわずかに残る。	2/5	
303	1区 包含層	須恵器 杯蓋	(13.5) 4.5 —	内：5P B7/1明青灰 外：10Y5/1灰 白・砂を多く含む 施成良好	天井部はやや丸い。天井部外面は、ロクロ回りの回転ヘラケズリ。稜線は ほとんど消滅している。口縁部は、やや鋭く、内側に段を有している。外 面の一部に灰がかかっている。	2/5	
304	2区 遺構 検出中	須恵器 杯蓋	(13.8) 4.0 —	内：N7/灰白 外：N6/灰 褐色・白色礫少量と黒色 粒多量を含む 施成堅緻	天井部はやや丸い。天井部外面はロクロ回りの回転ヘラケズリだが、中央 まで届かずヘラ切り痕が残る。稜線は沈線状で、やや鋭い。口縁部は、や や鋭く、内側に段を有している。天井部内面に同心円の当て具痕。	断片	
305	1区 包含層	須恵器 杯蓋	(13.8) 4.1 —	内：5P B6/1青灰 外：5P B7/1明青灰 黒・砂を多く含む 施成良好	天井部はやや丸い。天井部外面は、ロクロ回りの回転ヘラケズリ。稜線は 沈線状で、やや鋭い。口縁部は、やや丸く、内面に段を有している。	1/4	
306	2区 包含層 下層	須恵器 杯蓋	(12.6) 4.0 —	N6/灰 褐色・礫を含む 施成堅緻	天井部はやや扁平である。天井部外面は、ヘラ切り未調整か、稜線はほとん ど消滅している。口縁部は外方にややつまみ出して鋭く、内側に段を有し ている。天井部外面は、灰が多量にかかる。天井部内面は、不定方向のナ ゲ。	1/3	
307	2区 包含層	須恵器 杯蓋	— — —	内：N7/灰白 外：N6/灰 褐色 施成良好	天井部は扁平である。天井部外面は、ロクロ回りの回転ヘラケズリ。「x」 の朱記号がある。天井部内面は、同心円の当て具痕が残り、一部ナゲ消し。	断片	
308	1区 遺構 検出中	須恵器 杯身	(12.2) — —	N7/灰白 褐色・黒色マンガンを多 く含む 施成堅緻	底部外面は、ロクロ回りの回転ヘラケズリ。受部は上方を向き、端部は鋭 い。立ち上がりは内傾し、口縁部は鋭く、内側に段を有する。	1/5	
309	1区 包含層	須恵器 杯身	(13.8) — —	N7/灰白 黒色粒を多く含む 施成良好	底部外面は、ロクロ回りの回転ヘラケズリ。受部は水平で、端部は鋭い。 立ち上がりはやや鋭く、内傾している。口縁部はやや鋭い。	1/5	
310	1区 包含層	須恵器 杯身	11.8 4.1 —	内：5P B6/1青灰 外：N6/灰 褐色・砂粒を含む 施成堅緻	底部外面は、ロクロ回りの回転ヘラケズリ。受部は水平で、端部は鋭い。 立ち上がりはやや鋭く、内傾している。口縁部は鋭く、内側に段を有し て不定方向のナゲ。底部外面に、灰がかかっている。	3/5	
311	2区 遺構 検出中	須恵器 杯身	(12.6) 3.8 —	内：2.5Y6/1黄灰 外：N6/灰白 褐色・白色礫を多量に含 む 施成良好	底部外面は、ヘラ切り未調整。受部は上方を向き、端部は鋭い。立ち上 りは短く、内傾している。口縁部はやや丸い。	1/5	

表4-17 古墳時代土器観察表

遺物番号	遺構名	種別 器種	口径 器高 底径	色調 胎土 構成	形態・手法の特徴	残存率	備考
312	1区 包含層	須恵器 杯身	(13.0) 4.3 —	内：N6/灰 外：N7/灰 やや粗い・線をまばらに 含む 焼成堅軟	底部外面は、ロクロ右回りの回転ヘラケズリだが、中央まで及びず板状圧痕が残る。受部はやや上方を向き、脚部は丸い。口縁端部は丸い。底部内面に同心円状の当て具痕。	1/2	
313	2区 包含層	須恵器 有蓋高杯 蓋	(14.3) 6.3 —	内：5Y R 6/1焼灰 外：N3/焼灰 粗い・線を多く含む 焼成堅軟	天井部はやや丸い。扁平で中央が窪むつまみがつく。天井部外面は、ロクロ左回りの回転ヘラケズリ。縁部はやや粗い。口縁端部は、やや鋭く、外縁する面をもつ。	2/5	
314	1区 包含層	須恵器 高杯	— — (9.7)	内：N5/灰 外：2.5Y 5/1焼粉 長糸を含む 焼成堅軟	脚部は外湾して、腹部で下方へ屈曲する。腹部は内縁する面をもつ。円形の透かしをもつ。杯底内面は、同心円状の当て具痕。	1/6	
315	2区 包含層	須恵器 高杯	— — 10.4	内：N7/灰白 外：N6/灰 線赤・白色砂を少量含む 焼成堅軟	脚部は外反し、脚端部は、つまんで下方に突出させている。脚部内面はナデで、取り痕が残る。	7/8	
316	1区 包含層	須恵器 高杯	— — 9.2	N6/灰 長糸を含む 焼成堅軟	脚部は外反し、脚端部は、やや丸く、内側に段を有している。円形の透かしをもつ。杯部外面は回転ヘラケズリ。	1/5	
317	1区 包含層	須恵器 高杯	(18.2) — —	内：N6/灰 外：N5/灰 線赤・白色線を多量に含む 焼成堅軟	杯体部から屈曲して、上外方へ口縁が立ち上がる。口縁端部は丸い。杯部外面は回転ヘラケズリ。底部内面は、不定方向のナデ。	1/8	
318	2区 包含層	須恵器 蓋	(12.0) — —	N4/灰 線赤・白色砂を少量含む 焼成堅軟	天井部はやや丸い。口縁端部は、外方に鋭くつまみ出し、外縁する面をもつ。	1/4	
319	1区 包含層	須恵器 蓋	— — —	N5/灰 線赤・白色線を多量に含む 焼成堅軟	体部外面に、2条の沈線が走り、その間に点線文が施されている。中央部に凹形の穿孔が施されている。蓋部はカキメ。腹部外面は、板状文。	1/3	
320	1区 包含層	須恵器 蓋	— — —	内：5P B 5/1青灰 外：5P B 10/1青灰 線赤・白色線を少量含む 焼成堅軟	体部外面に、2条の沈線が走り、その間に点線文が施されている。底部は、内外面ともナデ。	1/3	
321	1区 遺構 検出中	須恵器 蓋	(18.0) — —	N7/灰白 線赤・白1粒を多く含む 焼成堅軟	口縁部は短く立ち上がり、口縁部で、下方に肥厚させ、底部をやや丸くおさめる。体部外面は、格子タタキ後ナデ。体部内面は、同心円状の当て具痕。口縁部内側に、ヘラ記号がある。	1/4	
322	2区 包含層 下層	須恵器 蓋	(21.9) — —	内：腹部5Y R 4/2灰粉・ 肩部N4/灰 外：腹部N3/暗オリーブ 灰・肩部5Y R 5/1焼灰 線赤・線をわずかに含む 焼成堅軟	口縁部は外反して立ち上がる。口縁端部で、やや下方と上外方に肥厚させ、面をもつ。口部外面は、板状文。体部外面は、平行タタキ。体部内面はナデ。	断片	
323	1区 包含層	土師器 杯	(11.5) 5.2 —	内：10Y R 7/3鈍い黄緑 外：7.5Y R 6/4鈍い橙 線赤 焼成堅軟	口縁部は、内外面ともヨコナデ。口縁端部は、上外方へ外反している。体部外面は、ヘラケズリ後ナデ。体部内面は板ナデ。	断片	
324	4区 遺構 検出中	土師器 杯	(14.0) — —	内：7.5Y R 8/2灰白 外：7.5Y R 8/3濃黄緑 線赤・白色線を多量に含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともヨコナデ。口縁部は、やや内湾し、口縁端部はやや丸い。体部外面は、線赤のため濃黄不明。内面はナデ。	1/4	
325	4区 遺構 検出中	土師器 杯	(15.2) — —	内：10Y R 7/3鈍い黄緑 外：7.5Y R 7/3鈍い黄 線赤 焼成良好	口縁部は、内外面ともヨコナデ。口縁部は、やや内湾し、口縁端部はやや鋭い。体部内外面とも、線赤のため濃黄不明。	1/8	
326	1区 遺構 検出中	土師器 小型壺	(10.0) — —	内：7.5Y R 7/3鈍い黄 外：10Y R 5/2灰黄緑 やや粗い・白色線を含む 焼成良好	口縁部は、内外面ともヨコナデ。口縁端部は、丸くおさめている。体部外面は、タテハケ。内面に線赤のため詳細は不明だがナデ。口縁部と体部の境に、輪積み痕が残る。	1/5	
327	2区 包含層	製土土師 器	— — (4.2)	内：10Y R 7/3鈍い黄緑 外：2.5Y R 6/3鈍い橙 粗い 焼成堅軟	脚部は外反し、脚端部は、やや丸くおさめる。杯部と脚部の接合時に粘土が補充されている。脚部内外面はナデ。杯部外面はナデ。内面は線赤のため不明。	1/4	
328	2区 包含層	埴土土師 肥土	— — —	2.5Y 7/3黄 やや粗い 焼成堅軟	指頭圧及びナデによる成形。上面の先端から2cmのところに直徑0.4cmの凹穴。	断片	
329	1区 包含層	土師器 壺	(19.0) — —	7.5Y R 6/4鈍い橙 線赤 焼成良好	口縁部は、内外面ともヨコナデ。口縁端部はややつまみ上げ、肥厚し丸くおさめる。体部外面はタテハケ。内面はケズリ後ナデ。輪積み痕が残る。	断片	
330	1区 包含層	土師器 壺	(26.0) — —	7.5Y R 7/2鈍い黄緑 白色砂を含む 焼成堅軟	口縁部は、内外面ともヨコナデ。口縁端部はややつまみ上げ、肥厚し丸くおさめる。腹部外面は、ハケの後にはナデ。体部外面はタテハケ。体部内面は、ケズリ後ナデ。輪積み痕が残る。	断片	

表5-1 古代から中世の土器観察表

単位: cm

遺物番号	遺構名	種別 器種	口径 高さ 底径	色調 胎土 構成	形態・手法の特徴	残存率	備考
331	4・5区 田面 下層	土師器 皿	(10.4)	内: 7.5Y R7/6橙 外: 5Y R7/4鈍い橙 胎土 構成良好	口縁部は、短く上外方へ立ち上がり、口縁端部は、つまみ上げるように丸くおさめる。体部内外面とも、オサエナダ。口縁内外面は、ヨコナダ。	1/10	
332	2区 田面 下層	須恵器 杯A	(13.4)	NR/灰白 胎土 構成良好	底部は平拍で、体部は緩やかに上外方に立ち上がる。口縁端部は尖り、底部外面は、ナダ。	1/4	
333	2区 田面 下層	須恵器 杯B	— (10.0)	7.5Y8/1灰白 胎土 構成良好	底部から体部にかけて屈曲して立ち上がる。体部外面は、厚壁のため調整不明。外反する低い高台を起り付ける。	1/8	
334	2区 田面 下層	土師器 皿	(8.2)	内: 2.5Y8/3鉄黄 外: 2.5Y7/2灰黄 胎土 構成良好	底部は扁平である。口縁部は、短く上外方へ立ち上がり、口縁端部は、丸くおさめる。体部外面はヒビオサエ。口縁内外面は、ヨコナダ。	1/4	
335	4区 田面 下層	土師器 皿	(12.8)	内: 10Y R8/3浅黄橙 外: 10Y R7/3鈍い黄橙 胎土 構成良好	底部はほぼ扁平である。口縁部は、短く上外方へ立ち上がり、口縁端部は、丸くおさめる。体部外面はオサエ。口縁内外面は、ヨコナダ。体部内面は、ナダ。	1/5	
336	2区 田面 下層	瓦器 碗	(13.0)	2.5Y8/1灰白 胎土 構成良好	体部は緩やかに上外方に立ち上がる。口縁端部は、内側に屈曲し、丸くおさめる。体部外面はナダだが、成形時のヒビオサエが残る。口縁内外面は、ヨコナダ。体部内面は、やや丁寧なヘラミギキ。口縁外面も粗いヘラミギキ。	破片	横置型
337	2区 田面 下層	瓦器 碗	(13.0)	N3/暗灰 胎土 構成悪態	体部は緩やかに上外方に立ち上がり、端部を丸くおさめる。口縁端部内面に1本の文様が施される。体部外面はナダだが、成形時のヒビオサエが残る。口縁内外面は、ヨコナダ。体部内面は、粗いヘラミギキ。口縁外面も粗いヘラミギキ。	1/8	大和型
338	2区 田面 下層	瓦器 碗	(12.2)	N3/暗灰 胎土 構成良好	体部は緩やかに上外方に立ち上がり、端部を丸くおさめる。体部外面は、ヒビオサエが残る。口縁内外面は、ヨコナダ。体部内面は、粗いヘラミギキ。	1/10	横置型
339	2区 田面 下層	瓦器 碗	(12.2)	内: 2.5Y6/1灰白 外: 2.5Y6/2灰白 胎土 構成良好	体部は緩やかに上外方に立ち上がり、端部を丸くおさめる。体部外面に、巻き上げ線が残る。体部内面は、粗いヘラミギキ。	1/8	横置型
340	2区 田面 下層	瓦器 碗	(12.3)	N3/暗灰 胎土 構成良好	体部は緩やかに上外方に立ち上がり、端部を丸くおさめる。体部外面ともナダだが、成形時のヒビオサエが残る。口縁内外面は、ヨコナダ。体部内面は、粗いヘラミギキ。	1/8	横置型
341	2区 田面 下層	瓦器 碗	(12.4)	N4/灰 胎土 構成良好	体部は緩やかに上外方に立ち上がり、端部を丸くおさめる。体部外面は、ヒビオサエ。口縁内外面は、ヨコナダ。体部内面は、粗いヘラミギキ。	1/5	暗峠1下層
342	2区 田面 下層	白磁 皿	(10.4)	7.5Y7/2灰白 胎土・黒色粒を含む 胎土 構成良好	口縁部は、上外方へ立ち上がり、口縁端部は、やや外反し、丸くおさめる。体部外面はほぼヘラミギキ。胎土中に黒色粒が散在する。胎土中に白土のスリツブが散在する。	破片	
343	2区 田面 下層	青磁 碗	(15.8)	2.5Y6/1オリーブ灰 胎土 構成良好	体部は緩やかに上外方に立ち上がり、端部を丸くおさめる。体部内外面とも厚く輪がかかる。体部内面は、円弧状の模様がみられる。	破片	縦置窯系
344	2区 田面 下層	青磁 皿	— (3.8)	内: 2.5GY7/1暗オリーブ灰、10GY7/1暗緑灰 外: 2.5GY7/1暗オリーブ灰、2.5GY5/1黄灰 胎土 構成良好	底部外面は、回転ヘラズリ。底部内面は、ヘラによる文様とジグザグ状の楕円線文を有する。底部外面を除き、内外面とも施釉。	1/7	同窯系
345	2区 田面 下層	青磁 碗	— 5.2	内: 7.5Y6/2灰オリーブ 外: 7.5Y5/2灰オリーブ、2.5GY6/1灰白 胎土 構成良好	底部は扁平で、削り出し高台である。底部内面に木の葉模様がある。底部外面を除き、内外面とも施釉。	1/4	縦置窯系
346	2区 田面 下層	青磁 皿	— (5.0)	5Y7/1灰白 胎土・砂粒を含む 胎土 構成悪態	底部外面は、回転ヘラズリ。中心部はヘラズリ後ナダ。底部内面は、ヘラによる文様とジグザグ状の楕円線文を有する。底部外面を除き、内外面とも施釉。	1/3	同窯系
347	2区 田面 下層	瓦質土器 六体	—	N3/暗灰 胎土・砂粒を含む 胎土 構成良好	口縁端部は、平足である。体部内外面ともヘラミギキ。2条の突帯の間に楕円状の文様が施される。	破片	田面10下層(皿入の)
348	4区 田面 上層	土師器 皿	(5.8)	2.5Y6/2鉄黄 胎土 構成良好	底部は扁平である。口縁部は、短く上外方へ立ち上がり、口縁端部は、丸くおさめる。底部内外面ともナダだが、成形時のヒビオサエが残る。口縁内外面は、ヨコナダ。	2/5	暗峠7跡水口下層のみ
349	2区 田面 上層	土師器 皿	(6.0)	7.5Y R7/3鈍い橙 胎土・黒色粒を少量含む 胎土 構成良好	口縁部は、短く上外方へ立ち上がり、口縁端部は、丸くおさめる。体部外面はヒビオサエ。口縁内外面は、ヨコナダ。底部にはハダ風跡が残る。	1/8	田面7下層
350	2区 田面 上層	土師器 皿	(6.0)	内: 5Y R7/2明焼灰 外: 7.5Y R7/1明焼灰 やや粗い・砂粒を含む 胎土 構成良好	底部はほぼ扁平である。口縁部は、短く上外方へ立ち上がり、口縁端部は、やや丸くおさめる。底部外面はナダだが、成形時のヒビオサエが残る。口縁内外面は、ヨコナダ。体部内面は、ナダ。	1/5	
351	4区 田面 上層	土師器 皿	(7.4) 1.3	2.5Y3/1黒焼 胎土 構成良好	底部は扁平である。口縁部は、短く上外方へ立ち上がり、口縁端部は、やや丸くおさめる。底部外面は、オサエ。	1/2	暗峠7跡水口下層のみ

表5-2 古代から中世の土器観察表

遺物番号	遺構名	種別 器種	口径 器高 底径	色調 胎土 施彩	形態・手法の特徴	残存率	備考
352	4・5区 田面上層	土師器 蓋	(7.7) 1.5 3.8	内：5Y7/2灰白 外：5Y7/灰白 施彩 地成塗敷	底部は扁平である。口縁部は、上外方へ立ち上がり、口縁部は、やや丸くおさめる。底部外面は、ユビオサエ。口縁内外面は、ヨコナダ。底部内面は、ナダ。	1/4	田面6上層
353	2区 田面上層	土師器 蓋	(7.8) — —	5Y R7/6黄い橙 施彩・白色粒を含む 地成良好	底部は扁平である。口縁部は、短く上外方へ立ち上がり、口縁部は、やや丸くおさめる。底部内外面ともナダだが、成形時のユビオサエが残る。口縁内外面は、ヨコナダ。	—	線片
354	2区 田面上層	土師器 蓋	(7.8) — —	内：10Y R7/2黄い黄橙 外：7.5Y R7/3黄い橙 施彩・黒色粒を含む 地成良好	口縁部は、短く上外方へ立ち上がり、口縁部は、やや丸くおさめる。底部外面はオサエナダ。口縁内外面は、ヨコナダ。底部内面は、ナダ。	1/8	田面8上層
355	2区 田面上層	土師器 蓋	(8.8) — —	内：7.5Y R7/2明灰 外：7.5Y R8/2灰白 施彩・褐色粒を含む 地成良好	底部は扁平である。口縁部は、再びぎみに上外方へ立ち上がり、口縁部は、やや丸くおさめる。底部外面は、ユビオサエ。口縁内外面は、ヨコナダ。底部内面は、ナダ。	1/5	田面8上層
356	2・3区 田面上層	土師器 蓋	(8.8) — —	10Y R7/2黄い橙 施彩・赤黒色粒を含む 地成良好	底部は扁平である。口縁部は、短く上外方へ立ち上がり、口縁部は、丸くおさめる。底部外面は、ユビオサエ。口縁内外面は、ヨコナダ。底部内面は、ナダ。	1/5	—
357	2・3区 田面上層	土師器 蓋	(8.8) — —	5Y6/1灰 施彩 地成良好	口縁部は、短く上外方へ立ち上がり、口縁部は、やや丸くおさめる。底部外面は、ユビオサエ。口縁内外面は、ヨコナダ。	1/6	—
358	2区 田面上層	土師器 蓋	(8.8) — —	内：10Y R6/1地灰 外：10Y R7/6明灰 やや黄い・褐色粒を含む 地成良好	底部は扁平である。口縁部は、短く上外方へ立ち上がり、口縁部は、丸くおさめる。底部外面は、成形時のユビオサエが残る。口縁内外面は、ヨコナダ。底部内面は、ナダ。	1/8	堀畔1下層
359	2区 田面上層	土師器 蓋	(9.1) — —	内：10Y R7/4黄い黄橙 外：7.5Y R8/4黄い黄橙 施彩 地成良好	底部は扁平である。口縁部は、短く上外方へ立ち上がり、口縁部は、やや丸くおさめる。底部外面はユビオサエ。口縁内外面はヨコナダ。底部内面は、ナダ。	1/10	—
360	2区 田面上層	土師器 蓋	(9.2) — —	内：10Y R7/2黄い黄橙 外：10Y R7/6明灰 施彩・赤褐色粒を含む 地成良好	底部は扁平である。口縁部は、短く上外方へ立ち上がり、口縁部は、やや丸くおさめる。底部外面はナダだが、成形時のユビオサエが残る。口縁内外面は、ヨコナダ。底部内面は、ナダ。	1/10	堀畔8
361	2区 田面上層	土師器 蓋	(8.7) — —	7.5Y R7/3黄い橙 施彩 地成良好	口縁部は、短く上外方へ立ち上がり、口縁部は、やや丸くおさめる。底部内外面ともナダだが、成形時のユビオサエが残る。口縁内外面は、ヨコナダ。	1/9	—
362	2区 田面上層	土師器 蓋	(7.2) — —	内：10Y R8/2灰白 外：10Y R8/3黄い黄橙 施彩 地成良好	底部は、上外方へ立ち上がり、口縁部は、やや丸くおさめる。底部外面はナダだが、成形時のユビオサエが残る。口縁内外面は、ヨコナダ。底部内面は、板ナダ。	1/8	堀畔8
363	2区 田面上層	土師器 蓋	(8.8) — —	内：10Y R7/3黄い黄橙 外：7.5Y R7/4黄い黄橙 施彩 地成良好	底部はほぼ扁平である。口縁部は、上外方へ立ち上がり、口縁部は、やや丸くおさめる。底部外面は、ユビオサエ。口縁内外面は、ヨコナダ。底部内面は、ナダ。	1/4	堀畔8
364	2区 田面上層	土師器 蓋	(9.1) — —	2.5Y7/2灰黄 施彩 地成良好	口縁部は、上外方へ立ち上がり、口縁部は、やや丸くおさめる。底部外面はナダだが、成形時のユビオサエが残る。口縁内外面は、ヨコナダ。底部内面は、板ナダ後にナダ。	1/4	堀畔8
365	2区 田面上層	土師器 蓋	(10.6) — —	5Y R8/1灰白 施彩 地成良好	口縁部は、上外方へ立ち上がり、口縁部は、やや丸くおさめる。底部内外面ともナダ。口縁内外面は、ヨコナダ。	1/9	—
366	4・5区 田面上層	土師器 蓋	(11.4) — —	内：2.5Y6/3黄褐 外：2.5Y6/2灰黄 施彩 地成塗敷	口縁部は、屈曲しながら上外方へ立ち上がり、口縁部は、やや丸くおさめる。底部外面は、オサエ。口縁内外面は、ヨコナダ。	1/10	田面6上層
367	4・5区 田面上層	土師器 蓋	(12.2) — —	内：10Y R7/1灰白 外：10Y R6/2灰黄 施彩・長石を含む 地成良好	口縁部は、やや屈曲して上外方へ立ち上がり、口縁部は、やや丸くおさめる。底部内面は、オサエ。底部外面から口縁内面は、ヨコナダ。	1/8	田面6上層
368	1区 田面上層	土師器 蓋	(16.4) — —	10Y R7/2黄い黄橙 施彩 地成良好	口縁部は、上外方へ立ち上がり、口縁部は、やや丸くおさめる。底部外面はナダ。口縁内外面は、ヨコナダ。	—	線片
369	4・5区 田面上層	瓦器 小皿	(8.6) — —	N3/暗灰 施彩 地成良好	平坦な底部から、口縁部が短く上外方へ立ち上がり、縁部は、丸くおさめる。底部外面は、ユビオサエ。口縁内外面は、ヨコナダ。	1/8	—
370	2区 田面上層	瓦器 碗	(10.4) — —	5Y8/1灰白 施彩 地成良好	底部は、上外方へ立ち上がり、口縁部は、やや丸くおさめる。底部外面はオサエナダ。口縁内外面は、ヨコナダ。底部内面は、ナダでヘラミダギの痕跡がわずかに残る。	1/8	田面7上層
371	2区 田面上層	瓦器 碗	(9.4) — —	N4/灰 施彩 地成塗敷	底部は緩やかに上外方へ立ち上がり、縁部を丸くおさめる。底部外面はオサエナダ。口縁内外面は、ヨコナダ。底部内面は、粗いヘラミダギ。	1/8	堀畔8用水溝
372	1区 田面上層	瓦器 碗	(9.2) — —	内：2.5Y7/1灰白 外：3Y3/1オリーブ黒 施彩 地成良好	底部は緩やかに上外方へ立ち上がり、口縁部を丸くおさめる。底部外面は、ユビオサエ。口縁内外面は、ヨコナダ。底部内面は、粗いヘラミダギ。	1/10	—

表5-3 古代から中世の土器観察表

遺物番号	遺構名	種別 器種	口径 器高 底径	色調 胎土 施彩	形態・手法の特徴	残存率	備考
373	1区 田面上層	瓦器 甕	(10.4)	N5/灰 磨密 焼成良好	体部は腰や中に上外方に立ち上がり、口縁部を丸くおさめる。体部外面は、ユビオサエ、口縁内外面は、ヨコナダ。体部内面は、瓶いへつミガキ。	1/10	
374	2区 田面上層	瓦器 甕	(10.8)	N8/灰白 磨密・白色砂粒を含む 焼成良好	体部は腰や中に上外方に立ち上がり、口縁部を丸くおさめる。体部内外面ともナダ。口縁内外面は、ヨコナダ。体部内面は、瓶いへつミガキ。	1/8	田面7上層
375	4・5区 田面上層	瓦器 甕	(12.5)	内：N5/灰 外：N3/焼灰 磨密・砂を少し含む 焼成良好	体部は腰や中に上外方に立ち上がり、口縁部を丸くおさめる。体部外面は、ユビオサエ、口縁内外面は、ヨコナダ。体部内面は、瓶いへつミガキ。	1/8	田面6上層
376	2区 田面上層	瓦器 甕	(12.0)	内：N4/灰白 外：N3/焼灰 磨密・白色砂粒をわずかに含む 焼成良好	体部は腰や中に上外方に立ち上がり、口縁部を丸くおさめる。体部内面はナダだが、成形時のユビオサエが残る。口縁内外面は、ヨコナダ。体部内面は、瓶いへつミガキ。	1/8	田面7上層
377	2区 田面上層	瓦器 甕	(10.6)	内：N5/灰 外：N4/灰 磨密・白色砂粒をわずかに含む 焼成良好	体部は腰や中に上外方に立ち上がり、口縁部を丸くおさめる。体部外面はユビオサエ、口縁内外面は、ヨコナダ。体部内面は、瓶いへつミガキ。	断片	田面8上層
378	2区 田面上層	瓦器 甕	(11.2)	内：N8/灰白 外：N7/灰白 磨密・黒色粒を含む 焼成良好	体部は腰や中に上外方に立ち上がり、口縁部を丸くおさめる。体部外面は、ユビオサエ、口縁内外面は、ヨコナダ。体部内面は、瓶いへつミガキ。	1/8	田面7上層
379	2区 田面上層	瓦器 甕	(12.0)	N3/焼灰 磨密 焼成良好	体部は腰や中に上外方に立ち上がり、口縁部を丸くおさめる。体部外面は、ユビオサエ、口縁内外面は、ヨコナダ。体部内面は、瓶いへつミガキ。	断片	田面8上層
380	2区 田面上層	瓦器 甕	(13.0)	内：5YR7/灰白 外：5YR7/白 磨密 焼成良好	体部は腰や中に上外方に立ち上がり、口縁部を丸くおさめる。体部外面はユビオサエ、口縁内外面は、ヨコナダ。体部内面は、瓶いへつミガキ。	1/10	
381	2区 田面上層	瓦器 甕	(13.8)	N8/灰白 磨密 焼成良好	体部は腰や中に上外方に立ち上がり、口縁部を丸くおさめる。体部外面はオサエナダ。体部内面は、瓶いへつミガキ。	1/10	田面8上層
382	2区 田面上層	瓦器 甕	(13.2)	N4/灰 磨密・白色砂粒を少し含む 焼成良好	体部は腰や中に上外方に立ち上がり、口縁部を丸くおさめる。体部外面はオサエナダ。口縁内外面は、ヨコナダ。体部内面は、瓶いへつミガキ。	断片	田面8上層
383	2区 田面上層	瀬戸 天目茶碗	(12.0) 4.0	7.5YR4/4焼、10YR 1.7/黒 磨密・褐色粒を少量含む 焼成良好	底部は凹輪ヘラケズリで、低い削り出し高台がつく。体部は上外方に腰や中に立ち上がり、口縁部で直線して外反する。肩部は丸くおさめる。底部外面は、薄く輪がかり。体部内外面には、厚く輪がかり。	断片	
394	4・5区 田面上層	天目茶碗	(13.5) (5.7)	内：10YR1.7/黒 外：7.5YR3/4磨密 磨密 焼成良好	体部は上外方に腰や中に立ち上がり、口縁部でやや巻曲して外反する。肩部は鋭い。口縁内外面とも、ヨコナダ。体部内外面は、厚く輪がかり。	1/7	田面6上層
395	4区 田面上層	白磁 高台	(8.2) 1.8 (4.1)	5YR7/灰白 磨密 焼成良好	体部は、上外方に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。体部内面は、重ね造りの高台痕が残る。高台は、削り出し高台で兼用。全体に輪がかり。	1/6	地味7排水口下 残片
396	1区 田面上層	白磁 器鉢	(14.5)	7.5Y7/灰白 磨密 焼成良好	直線的に上外方に立ち上がる体部から、口縁部は外反し丸くおさめる。内外面とも施釉のため調整は不明。	1/10	
397	4・5区 田面上層	青磁 甕	(12.0)	5G Y6/1オリーブ灰 磨密 焼成良好	体部は、上外方に立ち上がり、口縁部は、丸くおさめる。内外面とも施釉のため調整は不明。体部外面は、蓮華文が施される。	断片	田面6上層 龍宮遺構
398	1区 田面上層	青磁 甕	(12.1)	10G Y8/1明緑灰 磨密 焼成良好	体部は、上外方に立ち上がり、口縁部は、丸くおさめる。口縁部外面に比羅が流る。内外面とも施釉のため調整は不明。	1/8	地味2
399	4・5区 田面上層	瓦器 三足小鍋	(7.0)	N2/黒 やや粗い・地きぶくれが 若干みられる 焼成良好	体部は腰や中に上外方に立ち上がる。口縁部は、断面観察に肥厚させ、端部に交差する条痕など、体部外にはナダが、成形時のユビオサエが残る。口縁内外面は、ヨコナダ。体部内面は、ナダ。体部外面に、三足の接合の痕跡が残る。	断片	田面6上層
390	2区 田面上層	陶器 器鉢	—	2.5Y R6/4鈍い橙 磨密・白い微粒子を含む 焼成良好	底部は扁平で、体部は腰や中に上外方に立ち上がる。底部は、未調整。体部外面は、ヨコナダ。内面はナダでおおわれ、	断片	田面10上層
391	2区 田面上層	瓦質土器 煎茶	(17.2)	2.5Y7.2/灰黄 磨密 焼成良好	口縁部は、内外面ともヨコナダ。口縁部は、つまみあげて内傾する面を有している。口縁部と体部の境は、強いヨコナダ。肩部外面はユビオサエで、胸の存在を示唆する。体部内面は、ナダが。	1/8	
392	2区 田面上層	瓦質土器 甕	(22.0)	内：2.5Y7.2/灰黄 外：10YR6/3緑黄 磨密 焼成良好	口縁部は、内外面ともヨコナダ。口縁部は、つまみあげている。体部外面はナダ。体部内面は、板ナダにナダ。取の突起痕が残る。	1/9	
393	1区 田面上層	瓦質土器 煎茶	(18.5)	内：10YR7.2鈍い黄橙 外：N2/黒 — 粗い・白色砂粒と黒色砂 粒を含む 焼成良好	口縁部は、上外方に立ち上がる。口縁部は丸い。体部外面から口縁部内面にかけて、ヨコナダ。体部内面は、ヨコナダ。断面に貼り付け筋がみられる。	断片	地味2

表6 移動式電観察表

単位: cm

遺物番号	遺構名	種別 器種	口径 高さ 底径	重量 (g)	色調 粘土 焼成	形態・手法の特徴	残存率	備考
D1	1095土坑	移動式甕	—	—	内面: 7.5Y R/4焼 外面: 7.5Y R/7/4焼 継ぎ目・白色線を多く含む 焼成良好	底は前上方に緩やかに立ち上がる。底上部外面は、細かいたテハケ後ナゲで、底部はヨコナゲで、底部接合のための精光粘土を敷す。底下部外面は粗いたテハケ後ナゲ。内面はナゲで、被熱のためにくすむ。輪縁のみが残る。	細片	付け底系
D2	3区 包含層	移動式甕	—	—	内面: 10Y R/6/3焼 外面: 7.5Y R/7/3焼 やや粗い・継ぎ目を多く含む 焼成良好	前下方にやや内湾きみに突き出た底部細片。肩部はややゆるまり面をもつ。外面はヨコナゲ後にナゲ。受け口の定端部はテアハケ後にナゲ。内面はナゲで被熱のためくすむ。特に肩部周辺は火を強く受けている。断面に輪縁のみが残る。	細片	曲げ底系
D3	537土坑	移動式甕	—	—	内面: 7.5Y R/4/2焼 外面: 7.5Y R/7/3焼 粗い・継ぎ目を多く含む 焼成良好	底先端部は前上方に緩やかに底げ、肩部は下方に直線しよくおさめる。底外縁はナゲで織状の圧痕あり。内面はヨコナゲ後ナゲで、被熱のためにくすむ。底部接合のための精光粘土が残り、本体との接合面にテアハケの痕跡が写る。	細片	付け底系
D4	1区 包含層	移動式甕	—	—	内: 7.5Y R/5/2焼 外面: 7.5Y R/6/4焼 継ぎ目・白色線を多く含む 焼成良好	頸口側面は底から短く、肩部は平坦面をなす。側面底は中や前方に緩やかに折曲して延び、端部は丸くおさめる。底の外縁はナゲ付けで、体部外面はテアハケを丁寧にナゲ後ナゲ。内面はタテナゲで、被熱のためにくすむ。	細片	付け底系
D5	3区 包含層	移動式甕	—	—	内面: 7.5Y R/7/4焼 外面: 2.5Y R/7/3焼 やや粗い・継ぎ目を多く含む 焼成良好	頸口側面は底から短く、肩部は平坦面をなす。側面底は短く、端部は丸くおさめる。底の外縁はナゲ付けで、体部外面はテアハケを丁寧にナゲ後ナゲ。内面は底面裏面がややゆるみ、丁寧なナゲで仕上げられる。	細片	付け底系
D6	1095土坑	移動式甕	—	—	内面: 7.5Y R/7/4焼 外面: 7.5Y R/6/4焼 継ぎ目・白色線を多く含む 焼成良好	接底部は、やや内湾しながら丸くおさめる。側面底は、やや前方へ傾斜しにくく突出する。頸口側面は平坦面をなす。外面はヨコナゲで、底部接合の精光粘土を敷し、ナゲ付ける。内面は底面裏面がややゆるみ、丁寧なナゲで仕上げられる。	細片	付け底系
D7	538溝	移動式甕	—	—	内面: 7.5Y R/7/3焼 外面: 10Y R/7/3焼 継ぎ目・白色線を多く含む 焼成良好	接底部はやや内湾し、端部を内側につまみ出すことにより、内縁する面をもつ。側面底は、やや前方へ傾斜しにくく突出する。外面はテアハケで、底部接合の精光粘土を敷し、ナゲ付ける。内面はヨコナゲで、下部にはヨコナゲを敷す。内面全体が被熱のためにくすむ。	細片	付け底系
D8	1095土坑	移動式甕	—	—	内面: 5Y R/6/8焼 外面: 10Y R/6/9焼 継ぎ目・白色線を多く含む 焼成良好	接底部はやや内湾し、端部を外側につまみ出して平坦面をつくる。外面は粗いたテハケ後にナゲ。内面はナゲで、被熱のためにくすむ。	細片	

表7 中世瓦観察表

単位: cm

遺物番号	遺構名	種別 器種	長さ 幅・厚 厚み	重量 (g)	色調 粘土 焼成	形態・手法の特徴	残存率	備考
K1	1区 田面上層	丸瓦	30.6 14.5 2.5	N7/灰白 継ぎ目・砂粒をやや含む 焼成良好	凸面はタテ向き後にタテナゲ。五縁部はヨコナゲ。凹面は細かいたテハケ後ナゲで、先端に上向き約細線が残る。凹面取りは瓦縁部から瓦縁部は約2cm。凸面は約2.5cmと大きい。また、細かいたテハケ取りも丁寧に施す。	完形		
K2	1区 田面上層	平瓦	29.1 21.9 2.0	内: N7/灰白 外: N3/灰緑 継ぎ目・砂粒をやや含む 焼成良好・横し焼き	凹面は丁寧なナゲで、狭端部に最大幅約2cmの面取りを施す。凸面は粗いたテハケで、端れ砂が付着する。側面底は平坦にケズリ後ナゲ。	完形	畦畔2用水溝	
K3	1区 田面上層	平瓦	31.2 23.9 2.5	内: 凹面: N7/灰白 凸面: N4/灰 継ぎ目・砂粒をやや含む 焼成良好・横し焼き	凹面は丁寧なナゲで、赤切り痕跡がすかすかに残る。狭端部には最大幅約1.5cmの面取りを施す。凸面は粗いたテハケで、赤切り痕跡が明確に残り、端れ砂が付着する。側面底は平坦にケズリ後ナゲ。	ほぼ完形	畦畔2用水溝	
K4	1区 田面上層	平瓦	31.0 23.1 2.2	内: N6/灰 外: N4/灰 継ぎ目・砂粒をやや含む 焼成良好・横し焼き	凹面は丁寧なナゲで、赤切り痕跡が広範囲に残る。狭端部には最大幅約1.2cmの面取りを施す。凸面は粗いたテハケで、赤切り痕跡が明確に残り、端れ砂が付着する。側面底は平坦にケズリ後ナゲ。	完形	畦畔2用水溝	

表8 石器観察表

単位: cm

遺物番号	遺構名	種別 器種	長さ 最大幅 厚み	重量 (g)	石材	形態・手法の特徴	残存率	備考
S10	1区 遺構検出中	石鏃	2.2 1.72 0.59	2.0	サヌカイト	背面側に素材面を残す。 背面の左側面と腹面の左側面を最終調整する。基部は交互調	切先欠損	平基底
S11	43溝	石鏃	2.8 1.4 0.25	0.8	サヌカイト	背腹両面に素材面を残さない。 基部は背面側。側切の一部を除いて腹面側を最終調整する。 非定形に丁寧な削正により、体部中央に緩をもつ。	完形	凹基底
S12	491溝	刮片	5.2 2.1 0.8	8.4	サヌカイト	打面は縁打面。 背骨構成は目+目。 末端は羽毛状鈍端。	完形	風化が著しい
S13	1087土坑	扁平片刃石斧	7.6 3.3 1.9	95.7	輝緑岩	刃部角は55度。 刃部先端は使用によると考えられる潰れが確認できる。	完形	表面の一部に調整痕、使用痕が残る。
S14	1区 田面上層	磨製石斧	10.3 6.3 3.0	317.4	蛇紋岩	基部の形状から、乳頭状石斧と考えられる。 被熱により調整等は不明。	刃部欠損	被熱
S15	535溝	磨製石斧	8.4 5.5 2.6	192.2	砂岩	欠損部が多いため、全体の形状は不明だが、大型扁平片刃石斧。 被熱のため調整等は不明。	裏面・刃部欠損	被熱か?くぼみに転用

付章 自然科学分析

第1節 上私部遺跡の古環境解析

パリオ・サーヴェイ株式会社

辻 康男・辻本裕也・大嶋秀明・高橋 敦・斎藤紀行・伊藤良永・馬場健司

はじめに

今回、分析を実施した上私部遺跡は、生駒山地西麓の低位段丘面端部から沖積扇状地にかけて立地する。本報告では、調査区およびその周辺の古環境変遷や遺跡形成過程を明らかにする目的のために、上私部遺跡05-1調査に伴い実施した珪藻・花粉・植物珪酸体分析、出土木材の樹種同定、粒度分析、不攪乱試料の軟X線写真による層相観察の自然科学分析結果について検討を行なう。

なお、今回の報文では、紙面の都合上、実施した分析結果について一部を抜粋して掲載している。抜粋した分析結果（記載と図表類）については、財団法人大阪府文化財センターに保管されているので参照されたい。

1 試料

分析試料の採取は、当社技師が現地にて層相観察記載と合わせて実施した。堆積層の層相を記載した地点の平面位置を図1に示す。また、調査区内に累重する堆積層の地層区分と層序対比および試料採取位置を記載した柱状図を図2に示す。珪藻・花粉・植物珪酸体分析は、1・2・3・4・5・6・8地点の合計41点について実施した（層準については図2参照）。樹種同定は、6世紀の建物跡・欄跡の柱穴およびピット穴内から出土した柱材について実施した。粒度分析は、2地点・4地点の26点である。堆積物の軟X線写真による堆積物の層相観察は、古代から中世に形成された礫質泥質砂層が比較的厚く累重する05-1調査区西半部の4地点とテラス状遺構が確認されている8地点の不攪乱柱状試料8点について実施した。

2 分析方法

上記の各分析のうち、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析・材同定および堆積物の軟X線写真撮影の方法については、「東倉治遺跡Ⅱ」や「私部南遺跡Ⅰ」報告に掲載している方法と同じ方法で実施した（パリオ・サーヴェイ、2006・2007）。詳細は各報告書の分析方法の項を参照されたい。今回実施した粒度分析方法を以下に記載する。

粒度分析は、公文・立石編（1998）の方法を参考に礫・砂粒子画分はふるい分け法、シルト・粘土粒子画分はピベット法で行なった。また、粒径区分はWentworth（1922）に従った。以下に分析操作工程を示す。

試料を風乾して2mmφ篩でふるい分ける。2mmφ篩上粒子は水洗して重量を測定する。一方、2mmφ篩下粒子は40.00gをビーカーに秤量し、蒸留水と30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機物分解を行なう。分解終了後、蒸留水と分散剤（4%カルボン）を加え、攪拌しながら30分間音波処理を行なう。沈底瓶にこの懸濁液を移し、往復振とう機で1時間振とうする。振とう終了後、水で全量を1000mlにする。この沈底瓶を1分間手で激しく振り、直ちに静置する。ピベット法に準じて所定時間に所定深度から粘土・シルト画分（0.063mm>）、粘土画分（0.0039mm>）を10ml採取し、105℃で24時間乾燥させた後、

重量を測定し加積通過率（質量％）を求める。ピベット法終了後、懸濁液を $63\mu\text{m}$ 篩で水洗いする。 $63\mu\text{m}$ 篩残留物を 105°C で5時間乾燥後、 1.0 、 0.5 、 0.25 、 0.125mm 篩でふるい分け、各篩毎に篩上残留物の質量を測定し、加積通過率（質量％）を求める。ピベット法およびふるい分けで求められる加積通過率（質量％）から粒径加積曲線を描き、Wentworth (1922) の粒径区分毎の質量を算出する。

3 結果および考察

3-1 05-1 調査区の層序と立地環境

(1) 05-1 調査区の層序

ここでは、試料採取時に現地調査によって記載した層相（図2）と粒度分析結果（図3・4）に基づき、05-1 調査区内に累重する堆積層の層序と堆積および立地環境について述べる。05-1 調査区に累重する堆積層については、層界面および検出遺構と出土遺物の相対年代から、1層（現在の盛土）、2層（近・現代）、3層（近世）、4層（中世～近世）、5層（14～15世紀）、6層（13世紀）、7層（古代～中世）、8層（古墳時代）、9層（遺跡の基盤層：低位段丘構成層）に区分される。粒度分析結果からは、2層および4～9層の大部分が、非常に悪い淘汰の礫質泥質砂層、近世の洪水砂層の3層が泥質砂質～礫質砂で構成される。以下の分析結果の検討では、上記した層序区分に基づき記載を行なう。

上私部遺跡の基盤をなし、05-1 調査区の最下部に存在する9層は、東から西へ緩やかに傾斜して分布する。この9層は、上私部遺跡の東側に隣接する有池遺跡の遺構基盤層も構成する。有池遺跡では、9層に対比される層準において、A T火山灰の挟在が認められている（辻ほか，2007）。このことから、上私部遺跡や有池遺跡で遺跡の基盤層をなす9層に相当する堆積層は、最終氷期末期頃に形成された低位段丘構成層と考えられる。

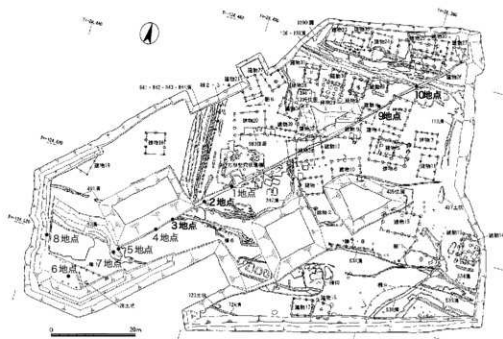


図1 分析試料採取地点位置図

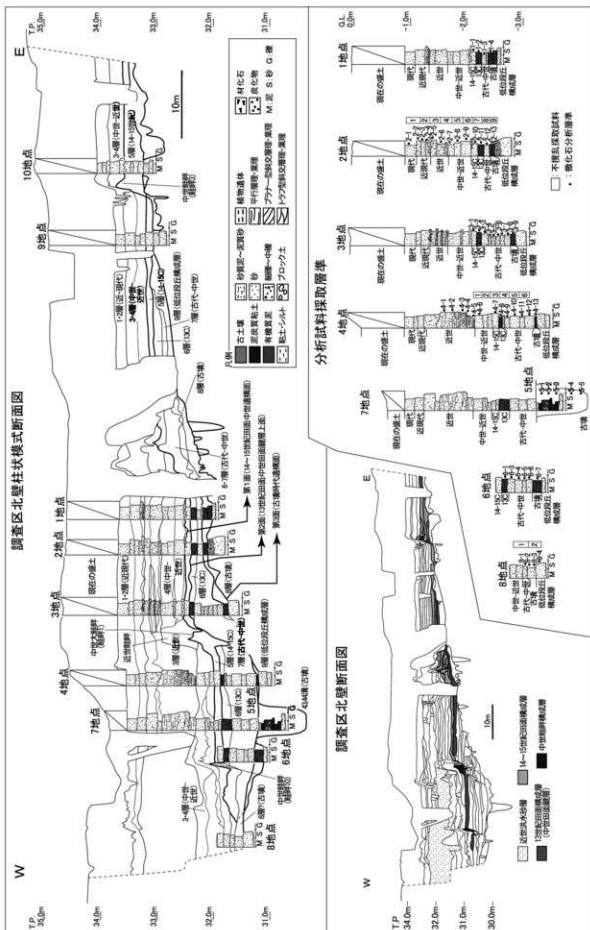


図2 調査区における堆積層の累重状況と分析試料の採取標準

9層を覆う上位の堆積層は、9層上面の傾斜に沿った累重様式を示し、層厚に関して基本的に西側で厚く、東側に向かうに連れ薄くなる。このような堆積層の累重様式から、9層を被覆する堆積層の層厚が薄い東半部では、西側に分布していた堆積層が収斂する傾向にあり、単層区分に関して西側ほど細かく分離できない状況にある。

9層の上部には、古墳時代の遺構検出面および包含層をなす腐植質に富む古土壌の8層が存在する。8層を覆う7層については、出土遺物の相対年代から、古代から中世にかけて形成されたと考えられる。7層は、上記した9層の傾斜に対応して相対的に低所となる調査区西半部に厚く累重する。7層上部には、腐植質に富む層相をなす6層が形成されている。6層では、13世紀代の遺構・遺物が確認されている。腐植に富む層相を示すことから、6層は相対的に安定した地表面となるような土壌環境下で形成されたと考えられる。

13世紀代に形成された6層の上位には、14～15世紀から近世にかけて形成された5～3層が累重する。これらの堆積層では、粒度分析結果から、上方粗粒化する傾向が確かめられている。さらに近世に入ると、非常に粗粒で厚い洪水堆積物の3層が、05-1調査区内に流入するようになり、西半部を中心に累重する。近世の3層の上部には、近・現代から現代の耕作土である1～2層が水平に累重するとともに、現代の盛土が厚く累重している。

(2) 05-1調査区の堆積環境変遷と立地環境

上述したように、分析を実施した05-1調査区において、古墳時代の古土壌である8層の基盤層をなす9層は、最終水期後半に形成された低位段丘面に対比される層準と考えられる。上私部遺跡が立地する場所付近には、生駒山地西麓部に形成された扇状地面が広がることが地形分類図などから読みとれる(図6・7・18)。このような地形分類図と9層中に挟するAT火山灰から、遺跡の基盤層をなす9層は、最終水期後半に形成された扇状地面を構成しているものと判断される。9層からなる最終水期後半の扇状地斜面は、調査区において東から西に向かって緩傾斜が形成されている。調査区の西端部では、傾斜が大きく変化し、遷急線が認められる。この遷急線は、地形分類図から、低位段丘構成層に対比される更新統最上部と完新統を区切る地形境界と思われる。このような地形的特徴から、05-1調査区は、最終水期後半の扇状地面の末端部、沖積低地との移行帯に立地すると認識される。

05-1調査区では、上記のような更新統の遺跡基盤層の地形勾配に沿って完新統が累重する。05-1調査区の完新統は、古墳時代の古土壌である8層を覆っていることから、おもに古墳時代以降に形成されたものと判断される。なお、西側に隣接する私部南遺跡では、縄文時代晩期ないしそれ以前からの堆積物の累重が確認されている。私部南遺跡での調査結果をふまえると、上私部遺跡で古墳時代以降に堆積物累重が認められるようになるのは、遺跡の西側に広がる沖積扇状地の氾濫原面の埋積が古墳時代頃までに進み、この時期以降、本遺跡にも堆積物が供給されるようになったことが要因と考えられる。

古墳時代以降に累重した堆積層の最下部に位置する古代～中世の7層では、粒度分析結果から、砂礫が50～60%前後占める堆積物によって構成されることが確認された。このような粒度組成および扇状地末端部から沖積低地に位置する本遺跡の立地環境から、7層に含まれる砂礫は、すべて河川からの掃流により運搬されてきた堆積物と判断される。ただし7層では、シルトと粘土からなる泥分も30～45%前後と比較的多く含まれる。これらの泥分については、河川からの浮遊土砂を起源とするものと考えられる。上記のような7層の特徴から、本層準では、河川氾濫時に、流路からオーバーフローした洪水流による砂礫の供給を受ける堆積場や、泥が浮遊沈降する滞水域の堆積場からなる氾濫原の環境が形成され

T.P.(m)

34.0

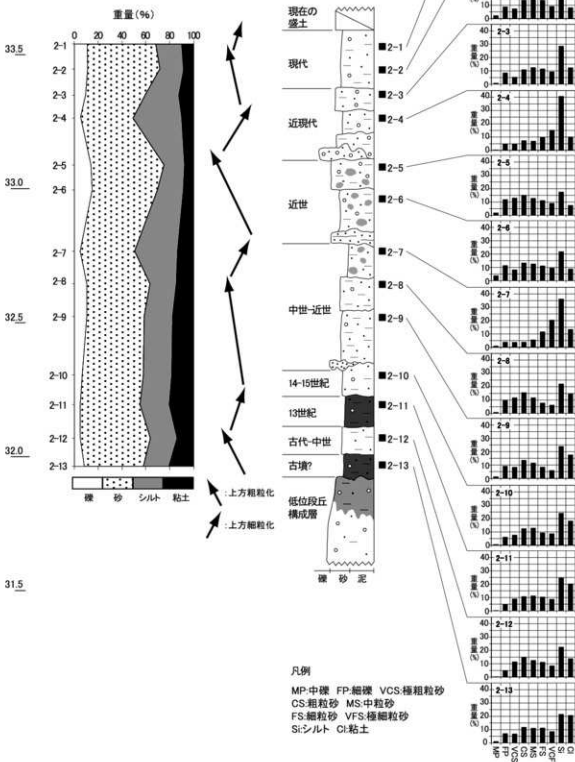


図3 2地点の粒度分析結果

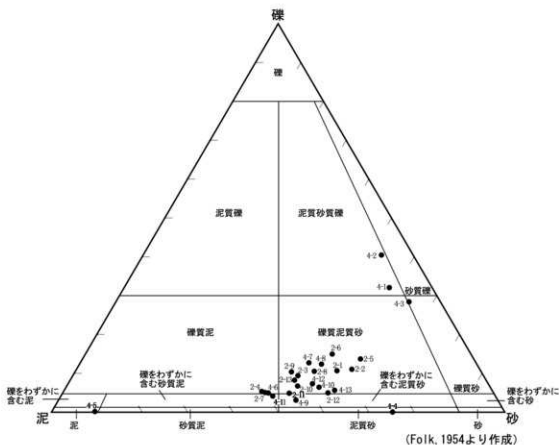


図5 粒度分析結果三角ダイヤグラム

ていたと推定される。なお、後述する珪藻分析結果からは、7層において相対的水位が低く、平常時には好気的な土壌環境が形成されていたことが推定された。このような分析結果から、古代～中世にかけて調査区では、洪水流の流入があるものの、平常時に地表面が乾燥し、好気的な土壌環境となるような氾濫原の堆積環境が形成されていたことが示唆される。また、調査区内の堆積層の累重から推定される地形勾配から、上記のような環境は、2地点より東側において、より高燥の土壌環境であったと考えられる。

中世(13世紀代や14～15世紀代および中世～近世の層準を含む)から近世に相当する6層～3層では、7層と異なった粒度組成を示す。6層～3層では、全体的な傾向として、7層よりも礫が多く含まれるようになるとともに、砂の割合の漸増とこれに対応した泥分の減少が認められる。このような粒度組成の変化は、中世以降にそれ以前の時期に比べ、より河川氾濫の影響を強く受けるようになったことを示している。粒度分析結果から確認される調査区およびその周辺での堆積環境の不安定化を示唆する堆積層の粗粒化傾向は、腐植を比較的多く含む13世紀代を下限とする遺物を含む6層より上位で観察される。このことから、本調査区では、13世紀以降に河川氾濫の影響をより強く受けるようになったものと考えられる。

近世に入ると調査区では、4地点より西側に分布する3層において認められるように泥質砂質礫ないし礫質砂からなる砂礫層が厚く累重するようになる。初生の層相を残す3層では、水平ないしトラフ型斜交葉理をなす堆積構造が観察され、明瞭な逆級化を示す。この逆級化層では、最下部でシルト、その直上で極細粒砂～細粒砂をモードとなす細粒部から極粗粒砂～細礫を主体となす粗粒部への変化が確認

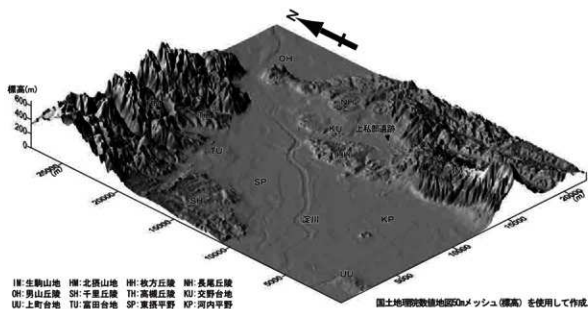


図6 上私部遺跡の位置

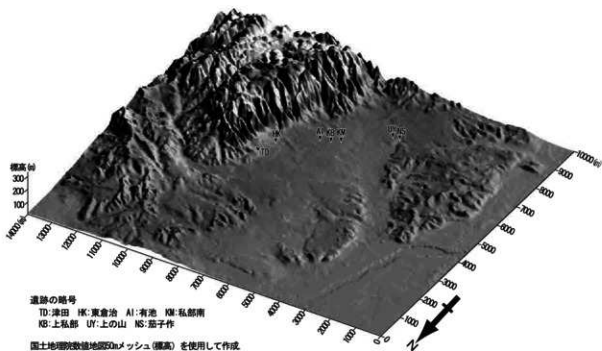


図7 上私部遺跡周辺の地形

される。4地点以西の3層で観察された厚い砂礫からなる逆級化層は、洪水堆積物の示相堆積構造（増田・伊勢屋，1985）である。また、4地点付近で認められる明瞭な水平葉理は、高流領域に生じる平滑なベットフォームと判断され、堆積時に強い流況であったことが推定される。

上記のような近世の3層の特徴から、本時期には、それ以前の時期よりも、粗粒な洪水堆積物が調査区内へ流入するような極めて不安定な堆積環境であったことが確認される。ただし、この3層では、上記したような堆積構造を破壊する人為的な擾乱構造を受け、塊状の層相をなす層準も多く存在している。特に、低位段丘構成層斜面の上部に相当する3地点以東では、初生的な堆積構造を残す洪水砂につ

いてはほとんど残存していない。人為的な擾乱が認められる層準の層相から、これらについては、耕作土として形成されたものと考えられる。このような耕作土と認識される人為的な擾乱層の存在から、近世に調査区では、洪水後に新たに流入した堆積物を母材として、耕作地の再造成が度々行なわれていたことがうかがえる。これらの領域に分布する耕作土と考えられる堆積層では、自然堆積層が累重する4地点と人為層が卓越する2地点との比較から明瞭であるように、洪水堆積物にほとんど含まれていなかった泥が多く含まれていることが着目される。このような泥は、耕作土として非常に不適な砂礫層が一面に広がるような状況下において、再び耕作地を造成する時に、下層ないし周辺に分布する低位段丘構成層や古墳時代頃から中世頃の泥を多く含む層準を砂礫層と混層した結果であると推測される。

3-2 05-1 調査区の古墳時代から中世の土地利用

(1) 分析目的

05-1 調査区では、古墳時代の居住域などの遺構が検出された古土壌を覆って、特に西半部において古代から中世にかけて形成された礫質泥質砂からなる7層が累重する。この7層からは、遺構がほとんど検出されず、さらに遺物の出土量も少なかった。しかしながら、7層の上部では再び遺構密度が増し、13世紀代および14～15世紀代の棚田状の耕作地やそれに伴う水路が検出され、調査区において当該期に水田が形成されていたことが発掘結果から示唆される。

このような発掘状況から、分析を実施した05-1 調査区においては、遺構・遺物が比較的多く確認された古墳時代と13世紀と14～15世紀代に挟まれた古代から13世紀以前の中世段階の土地利用状況について、何らかの人間活動があったのか、それともほとんど放置された空間であったのかについて検討することが難しい状況にあった。

なお考古遺跡では、水田跡などの確認について、植物珪酸体分析でのイネ属珪酸体含量の層位的や空間的な産状を指標とされることが多い。しかしながら、水田以外の土地利用については、植物珪酸体分析やその他の古植物学的分析において有効な指標となるような化石群が現状で見いだされていない。また、水田跡の検証として認識されているイネ属珪酸体含量についても、耕作活動に伴う作土などの人為的な擾乱層準を直接示唆できるものではなく、その分析値の評価に関して、他の微化石同様に堆積物に化石が取り込まれ、その後の風化などによって変質していく過程（タフォノミー）に大きく影響されることが指摘されている（辻，2000）。後述するように植物珪酸体分析では、古墳時代から中世～近世の層準でイネ属珪酸体が検出されているが、機動細胞珪酸体含量に関して、2000～3000個/gであった13世紀代の層準を除き、数百個～1000個/g前後の分析値であった。このようなイネ属機動細胞珪酸体含量については、分析層準の肉眼観察による層相をふまえても、現状において、その評価や解釈を位置づけることが難しい状況にあった。

以上のことから、7層を中心とする堆積層については、遺跡発掘結果や植物珪酸体分析値から当時の土地利用を推定することが非常に困難であった。そのため、微化石分析および粒度分析を実施した層準の堆積物の不擾乱サンプルについて、軟X線写真撮影を実施し、堆積相および土壌相の把握を行い、これまでに実施した分析結果を併せ、05-1 調査区での土地利用状況を検討することを試みた。

(2) 軟X線写真観察結果

軟X線写真観察により、採取試料で見られる堆積・土壌相については、層相A～Eの5つの層相に区分された（図8）。観察を行った試料では、幅2～10mm前後の管状をなすと思われる連続性が非常に良い、直線状の孔隙が非常に多く形成されている。

層相Aは、土壌発達度が弱く、堆積過程で形成された水平葉理が明瞭に観察される。層相Bは、下に凸状や火炎状、羽毛状、渦状などの非常に乱れた流線を示す葉理が顕著に観察される。層相Cは、土壌発達が進行し、初生の堆積構造がほとんど認められない。土壌相としては、壁状の構造を示す。粒団状構造の発達度は低い。下部では、上部に比べ塊状の層相をなす。層相Dは、土壌発達が進行し、初生の堆積構造がほとんど認められない。5～10mm前後の粒団ないしブロック土と推定される亜円～亜角塊状の構造が発達する。孔隙量は多い。全体的な特徴としては、明色をなす亜円～亜角塊状の領域と孔隙を示す暗色の領域がまだらに入り交じったような層相を示す。層相Eは、土壌発達が進行し、初生の堆積構造がほとんど認められない。3～5mm前後の粒団と推定される亜円～亜角塊状の構造が発達する。孔隙量は少ない。

(3) 古代～中世の堆積層（7層）の形成過程

・堆積相・土壌相の特徴

ここでは、土地利用状況が不明確であった古代から中世に形成されたと推定される7層の土地利用について検討する。立地環境の項で述べたように、05-1調査区西半部の4地点に累重する7層とそれより上位の層準は、河川からの掃流性氾濫によって形成されたと判断される。掃流性の河川氾濫原の堆積層では、通常、水平葉理などの堆積過程に生じた初生の堆積構造が認められる。7層については、現地での肉眼観察でも葉理などの存在が認められず、非常に塊状の層相であることが把握された。今回の軟X線写真の層相観察でも、7層では葉理がまったく観察されず、土壌発達が進行した層相Dを主体となし、層相Eが挟在することが確かめられた。7層は腐植の蓄積が認められず、このような土壌相から長期間にわたる非常に安定した土壌発達を受けた可能性が低いと認識される。7層では、そのほとんどの層準が、亜円～亜角塊状の構造が発達する層相Dによって構成される。この層相Dでは、自然状態で形成される土壌層位A層からC層に至る漸移的な垂直方向の構造変化が観察されず、単層内において全体的に均質な土壌相が分布する。なお、05-1調査区内における7層の分布については、凹地などを埋積するような局所的な分布に止まらず、側方へある程度連続することが、現地での堆積層の観察から確認される。また7層では、埋め立て目的の客土に見られるような粗大なブロック土（偽礫）の混入がほとんど認められないことも特徴である。さらに7層の粒度分析結果では、淘汰が非常に悪く、礫から泥まで均質な混合状況を示した。

以上のような分析および観察結果から、特に7層を構成する層相Dについては、自然営力による堆積およびその後の土壌化の影響だけでなく、人為的な擾乱の影響を強く受けた堆積層であると判断される。この層相Dでは、初生の堆積構造がまったく見られないことから、非常によく攪拌されながら土壌化が進行したことがうかがえる。上記のように推定される人為的擾乱営力と調査区内での分布形態から、層相Dについては、耕作土として形成された可能性が示唆される。7層では、耕作土の可能性のある層相Dが連続することから、当該層準の形成時期と考えられる古代から13世紀代以前の中世にかけて05-1調査区では、土地利用が放棄された状態になく、かなり継続的に耕作地として利用がなされていたことが示唆される。

・層相C・D・Eについて

軟X線写真の観察によれば、土壌化の影響を強く受けていると解釈される層相としては、初生の堆積構造がほとんど認められず、非常に塊状の層相を示す層相C・D・Eが該当するものと考えられる。このうち、層相Dについては、上記した検討から耕作土として形成された可能性が高いことが認識された。

現成の耕作土では、軟X線写真（造影剤撮影）や土壌薄片の観察に基づく、微細構造の研究が行なわれている。これらの研究では、水田作土について、湛水しろかき後の還元環境下で形成される凝集状態により団粒が崩壊し、それに伴う泥化の進行により、細粒質からなる壁状構造と、しろかきによる粗粒子のすみやかな沈降により形成された砂の局部的集積からなる単粒状構造が普遍的にみられるとされる（齋藤，1971）。これに対し、畑地作土では水田作土に比べ、土壌間隙量（土壌固相以外の部分）が多く（森ほか，1992）、団粒化の程度が大きい（寺沢，1971・1983）ことが確認されている。また、考古遺跡での古畑地土壌でも、粒団構造が発達することが指摘されている（松田・別所，1997；松田，2001・2004）。

このような既往の研究成果を参照すると、人間の耕作活動で形成されたと考えられる層相Dについては、孔隙量が多く、粒団の構造の発達が良いことから、畑地の土壌環境下で生成した層相と捉えることができる。これに対し、層相Cについては、層相Dに比べ相対的に孔隙量が少なく、粒団の発達程度の弱く壁状に近い構造をなすことから、水田の土壌環境下で生成した層相である可能性が指摘される。層相Eについては、孔隙量が少なく層相Cに近い層相を示すが、細かな粒団状構造が発達する点で異なる。層相Eに関しては、層相Dに比べ攪乱の程度が低い状態で形成された土壌と認識される。

上記の層相C・D・Eの解釈に基づけば、層相Dが連続する7層では、積層的に畑地が形成されたものと推定される。このような積層的な耕作土の要因については、05-1調査区の立地をふまえると、扇状地の末端斜面上に流入する河川氾濫堆積物を母材として形成されたことに起因すると考えられる。7層で



図8 4地点の軟X線写真と堆積・土壌構造

は、層相Dの間に層相Eが挟在する。この層相Eは、層相Dより攪乱の程度が低い土壌の可能性あることをふまえると、耕作地が放棄されたなどの要因で、ある期間に放置された時期に形成された層相であることが推測される。このような7層では、イネ属機動細胞珪酸体が検出されたものの、その含量が非常に少なかったことが先に実施した分析によって確かめられている。この要因については、7層が畑地を主体とする土地利用であったことも関係するものと考えられる。

(4) 中世～近世の堆積層（4～6層）の形成過程

13世紀代の6層では、棚田状の耕作地やそれに伴う水路が検出され、発掘調査により、05-1調査区において水田が形成されていたことが確かめられている。6層では層相Cが存在しており、土壌相の点からも水田の存在が認識される。14～15世紀代の5層では、非常に乱れた流線パターンからなる層相Bが存在する。この層相Bは、これまでの考古遺跡での研究（Matsuda, 2000）から地震動による変形構造を示していると判断される。地震発生層準については、上位に人為的擾乱層の中世～近世の4層に相当する層相Dが載ることから、明確な位置について確認することが難しい。この4層では、近世の洪水堆積物に覆われる最上部で層相C、その下部で層相Dが存在し、水田や畑地としての土地利用がなされていたものと推定される。

なお、後述する微化石分析結果では、4～6層の植物珪酸体分析で、6層において比較的多くのイネ属珪酸体が検出されている以外、全体的に含量が少ない。珪藻分析結果では、6層から上位の層準で化石が一定量検出されるとともに、止水生種が多産することから、6層から上位で調査区が湿潤な水文環境へと変化したことがうかがえる。ただし、植物珪酸体含量は、6層と7層においてあまり大差がなく、微化石の保存環境に大きな違いがなかったとも考えられる。このことは、6層と7層の花粉化石産出状況からもうかがえる。

したがって、6層において7層よりもイネ属珪酸体が多産した要因については、堆積後の微化石の風化などに影響を与える統成作用の差異よりも、6層段階でより多くのイネ属が土壌中に取り込まれるような状況が存在したことに起因すると考えられる。6層では腐植に富む層相をなし、当該期に氾濫の影響の少ない安定した地表面が形成されていたことが示唆される。また、6層において耕作地に伴う遺構が認定されていることをふまえると、当該層準では、7層に比べより耕作地が整備され、かつ安定的な水田圃場が形成されたことを示唆するものと捉えられる。6層より上位の4・5層では、植物珪酸体含量が急減する。本層準は、上方粗粒化することが粒度分析結果から示されている。このような粒度組成の変化および現地層相観察からは、6層段階に比べ4・5層では、氾濫堆積物の流入頻度が高まり、堆積・土壌環境および耕作地環境が不安定化したと考えられる。従って、4・5層におけるイネ属珪酸体含量の減少については、上記のような堆積・土壌環境と耕作地環境が変化に伴うものと考えられる。また、地震動の変形による堆積物の強い攪拌も影響している可能性も指摘される。

3-3 調査区およびその周辺の水文環境変遷

ここでは、珪藻化石群集の変遷から、調査区およびその周辺の水文環境の変化について述べていく。今回、分析を実施した調査区から得られた珪藻分析結果では、化石の保存状態の層位的産状において非常に特徴的な傾向を示したことが注目された。以下、その詳細についてみていくと、13世紀代の6層より下位の層準では、珪藻化石の保存状態が著しく不良で、統計的に扱えるだけの数の化石を検出することができなかった。これに対し、6層～4層では比較的多くの珪藻化石が産出した。

上記のような珪藻化石の層位的な産状変化は、6層を境にしてその上・下位で、調査区内において化

石の保存状態が大きく変化するような環境変遷があったことを示唆している。珪藻化石の分解消失に関する既往の研究事例では、千木良（1995）が珪藻化石を構成するシリカは、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいことを実験により示した。また、珪藻殻と類似した化学組成を持つ植物珪酸体では、土壌の風化によって溶解する可能性が指摘されているほか（近藤，1988）、pH値が高い場所や乾湿を繰り返すような場所で、風化が進みやすいと考えられている（江口，1994，1996）。その他、湿原の乾燥化によって珪藻殻数が急減し保存が悪くなる現象もみられる（小杉，1987）。考古遺跡においても、安定した地表面となり土壌発達が認められる遺構検出面で、珪藻化石の産出が極めて不良となることが指摘されている（井上，2003）。

このような研究・分析事例から、珪藻化石は乾湿を繰り返すような場所や、離水し好気的な土壌環境が長期間維持されるような場所において、その保存状態が不良となることがうかがえる。本調査区では、6層より上位において珪藻化石の保存状態が良好となることから、分解消失が起こりやすい土壌環境と逆方向、すなわち相対的水位が上昇し、地表面付近でより還元的な環境が形成された可能性が高いことが示唆される。

このような6層より上位で検出された珪藻化石では、止水性種が多産する。確認された止水性種では、富栄養の池沿岸部などに多産する偶発性浮遊性種の *Staurosira construens* var. *venter*、湖沼沼沢湿地指標種群の *Aulacoseira ambigua* が優占する傾向が認められる。よって、これらの珪藻が多産した6層～4層では、閉鎖的で湿潤な水文環境が形成されていたことが、その化石群集から推定される。

以上のことから、本調査区では、13世紀代に調査区およびその周辺の水文環境が変化し、相対的水位の上昇に伴って湿地化や滞水するような環境が形成されたと考えられる。粒度分析結果でも、6層～4層において泥が多く含まれていることが確かめられている。これらの堆積層は耕作土であり、人為による混層も考慮する必要もあるが、ここで含まれる泥の一部は調査区内の湿地化や滞水域化に伴って堆積したものも含まれることが珪藻分析結果からうかがえる。

珪藻化石の保存状態が不良であった13世紀代の6層より下位の層準は、上述してきた堆積環境変遷をふまえると、6層よりも相対的水位が低く、より乾燥した好気的な土壌環境が形成されていたと推測される。本調査区では、古墳時代の居住域に関する遺構が高密度に検出されている。遺構確認面である低位段丘構成層である9層の直上には、古墳時代の遺物を含む古土壌が形成されていることから、古墳時代前後の時期には調査区全体が安定した好気的な土壌環境が形成されていたと考えられる。このような環境下において局所的な凹地となる溝内（43溝）に腐植質の黒褐色泥層が累重する5地点では、沼沢湿地付着生種群が多産したことから浅い滞水域の環境が形成されていたことが推定される。珪藻の完形殻の出現率が著しく低いことから、これらの珪藻は、異地性である可能性も示唆される。しかしながら、珪藻化石群集から推定される環境は、層相と調和的であることから、化石の分解消失は5点の溝内で生じたなんらかの現象によるものとも考えられる。

3-4 上私部遺跡と調査区古植生変遷

調査区および周辺の古植生の検討は、調査区の地形勾配に応じた花粉化石群集および植物珪酸体含量の層位変化を捉えるために5カ所の地点について実施した。そのうち、代表的な地点の結果を図12～17に示す。以下に時代別に古植生について検討する。

(1) 8層形成期（古墳時代）

古墳時代の8層の花粉化石群集と植物珪酸体群集は、いずれの地点も同様な種類構成からなる。ただ

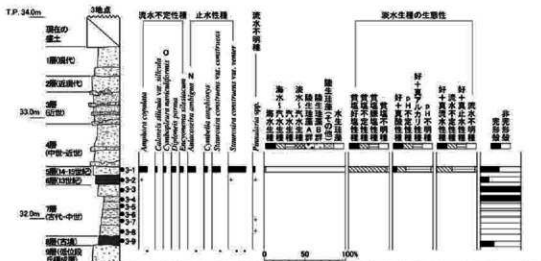


図9 3地点主要珪藻化石群集の層位分布

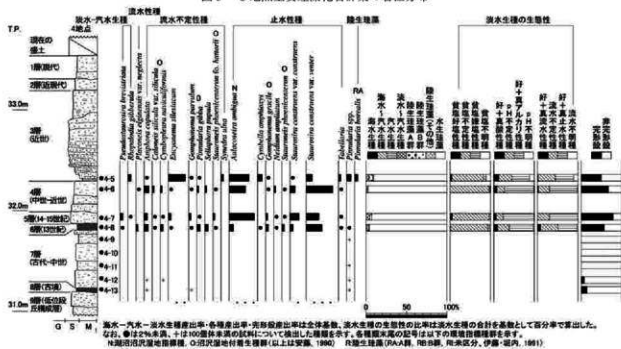


図10 4地点主要珪藻化石群集の層位分布

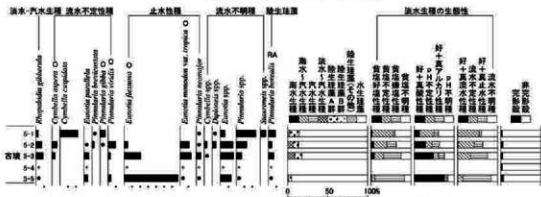


図11 5地点主要珪藻化石群集の層位分布

し、産出する種類の出現率や含量密度は、調査区西側の43溝（5地点）とそれ以外の地点で大きく異なっていた。花粉化石群集は、43溝埋土以外の地点では総花粉・胞子に占める草本花粉の割合が高く、木本花粉において常緑広葉樹のアカガシ亜属・スギ属・アカガシ亜属などが10～20%程度の産出を示し、スギ属・モミ属・ツガ属といった温帯性針葉樹の種類が多産した。これに対して、43溝埋土では下部で木本花粉が卓越し、落葉広葉樹のコナラ亜属が多産した。一方、植物珪酸体群集は、いずれの地点もネザサ節を含むタケ亜科が卓越したが、その含量密度は43溝埋土地点とそれ以外の地点で大きく異なっていた。このような地点間の産状の差異については、43溝埋土とそれ以外の地点における堆積環境の違いに起因する、化石群集のタフオノミー（形成過程と保存状態など）の違いに起因する可能性がある。しかしながら、花粉化石群集ではその差異が大きく、局所的な植生の違いを反映している可能性も充分考えられる。

以上の花粉・植物珪酸体の産状から、古墳時代の調査区周辺は草本植生が卓越する開けた領域であったことが推定される。植物珪酸体で多産したネザサ節にはネザサ・ケネザサが含まれるが、これらは、いずれも明るい二次林の林床や林縁などに分布し、放置していると3m以上の高さまで成長する種である。本遺跡の立地をふまえると、ネザサ節は、台地から調査区周辺の沖積扇状地上の氾濫原などに分布していたと考えられる。このように植物珪酸体では、明るく開け高燥な土地条件を好むネザサ節が多産し、湿潤な場所を好むヨシ属の産出が、全体的に少ないことが分析結果から読みとれる。調査区やその周囲において、湿潤な場所が広がりを見せず、高燥地が多く存在していたことがうかがえる。なお、43溝埋土から産出したガマ属・サジオモダカ属・オモダカ属・スプタ属・ミズアオイ属・アヤメ科・ゴキヅル属といった水湿地生の植物については溝内およびその集水域に分布していたと考えられる。

一方、調査区周辺の林分については、遺跡後背地にあたる生駒山地西麓の山地斜面や台地から沖積扇状地にかけて、アカガシ亜属・シノキ属などの常緑広葉樹、コナラ亜属・クマシデ属・アサダ属・ニレ属・ケヤキ属などの落葉広葉樹、モミ属・ツガ属・コウヤマキ属・スギ属・イチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科などの温帯性針葉樹が地形条件に応じて分布していたことが考えられる。このうち、落葉広葉樹のニレ属・ケヤキ属・エノキ属・ムクノキ属は河畔林の構成要素でもあり（大野, 1979; 阪本, 1987）、コナラ亜属の仲間にも河畔林の構成要素が含まれている。これらの落葉広葉樹に由来する花粉化石が43溝埋土において比較的多産したことを合わせ考えると、コナラ亜属などの落葉広葉樹の種類については調査区周囲の氾濫原上に分布していたことが推定される。

ところで、本遺跡の西側に隣接する私部南遺跡では、縄文時代晩期以降、現代にかけての古植生に関する検討が行なわれている（バリノ・サーヴェイ, 2007）。その結果をみると、縄文時代晩期から弥生時代前期には、相対的な水位上昇といった水文条件の変化や氾濫堆積物の累重などの自然擾乱の影響を受けていたものの、調査区内の氾濫原に林分が成立する時期が存在したが、弥生時代中期以降には調査区の氾濫原において林分の成立をみることはなく、草本植生が卓越するようになる。一方、台地から山地斜面の林分は、弥生時代後期から古墳時代頃に照葉樹林を主体とした林分から、人為的擾乱や自然擾乱の影響により、ナラ類を多く混じえる二次林的性格の強い林分に変化し、調査区周辺でコナラ亜属や温帯性針葉樹の種類が分布を広げたことが推定されている。

以上の私部南遺跡で捉えられた縄文時代晩期以降の古墳時代にかけての植生変化と、今回の結果を踏まえると、私部南遺跡や上私部遺跡周辺では、弥生時代後期～古墳時代に周辺植生が大きく変化し、温帯性針葉樹や落葉広葉樹の種類が分布を広げたことが推定される。弥生時代後期～古墳時代前期の私部

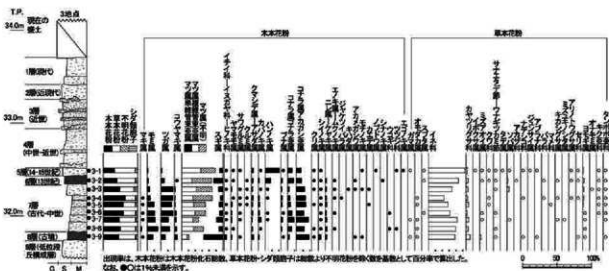


図2 3地点主要花粉化石群集の層位分布

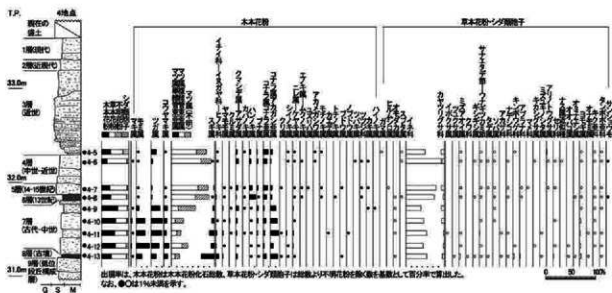


図3 4地点主要花粉化石群集の層位分布

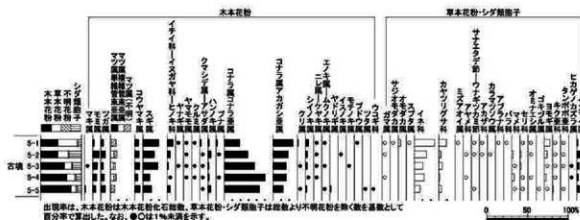


図4 5地点主要花粉化石群集の層位分布

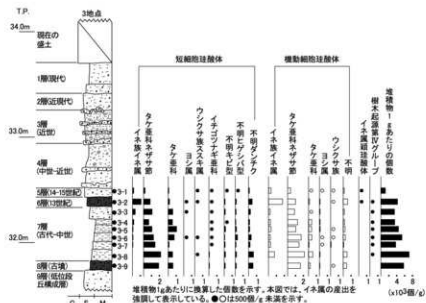


図15 3地点植物珪酸体含量の層的变化

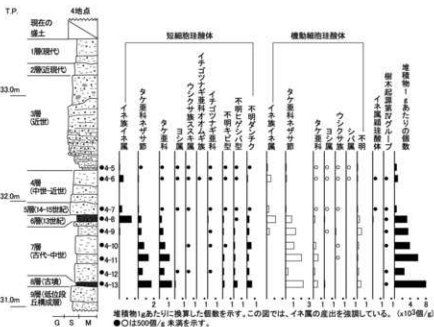


図16 4地点植物珪酸体含量の層的变化

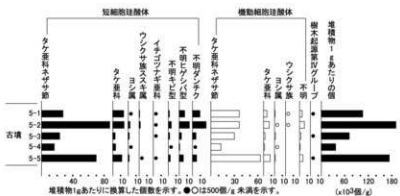


図17 5地点植物珪酸体含量の層的变化

南遺跡の発掘調査区では、砂礫質氾濫堆積物が厚く累重している（後川，2007）。この砂礫質堆積物の累重は、集水域における地形条件の変化を示唆し、増加するスギ属やモミ属などの温帯性針葉樹の森林更新が風倒など地表攪乱と関係している（中静，2004）ことを複合的に捉えると、弥生時代後期～古墳時代前期の植生変化が地表攪乱や河川攪乱といった自然攪乱が大きく関係して起こった変化であることが推定される。ただし、弥生時代前期以降の植生変化は、後述する古代以降の植生変化ほど著しくないが、栽培植物の産状などを踏まえると、私部南遺跡において指摘したように人為的攪乱の影響も関係していたものと思われる。すなわち、古墳時代の植生は自然攪乱と人為的攪乱の双方の影響によって形成されたことが推定される。

（2）7層形成期（古代～中世）

7層の花粉化石群集および植物珪酸体群集は、地点間で多少の差異が認められるものの概ね類似した産状を示した。花粉化石群集は、古墳時代の8層と同様に草本花粉が多産するが、木本花粉群集において二次林要素とみられるマツ属が増加し、温帯性針葉樹のスギ属とイチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科が減少する。一方、植物珪酸体群集は、依然としてネザサ節を含むタケ亜科が多産するが、7層上部にかけて減少傾向を示した。

以上の7層で確認された植物化石の層位変化は、古墳時代後期に起こった植生の変化を反映しており、後背地の山地斜面や台地の植生に対する人間による干渉が及んだ結果を示していると同解釈される。後述するように古墳時代後期の建物跡などにはヒノキ・カヤといった温帯性針葉樹材が多用されている。この傾向は、木本花粉の変化と同調的であることから、古墳時代後期の植生に対する人為的攪乱により温帯性針葉樹が減少し、その攪乱領域などにおいてマツ属などが分布を上げたことが推定される。この時期の植生変化において注目すべき点は、アカガシ亜属などの広葉樹に大きな変化が確認されないことが挙げられる。この点は古墳時代における木材利用等の人為的攪乱が針葉樹を主体に選択的に及んだこと、13世紀代まで森林植生に対して過度の人為的攪乱が及ぶことがなかったことを示唆する結果として注目される。ただし、古代～中世の時期には林床や林縁などに分布していたとみられるネザサ節が人為的攪乱などにより減少していったことが推定される。

一方、7層形成期の調査区は洪水流の流入があるものの、平常時に地表面が乾燥し、好気的な土壌環境となるような氾濫原の堆積環境であり、耕作地として利用されていたことが推定される。草本花粉が多産することから、調査区一帯は8層の時期と同様に草地在りであったことが推定される。また、7層からは栽培植物のソバ属花粉が複数の地点で確認される。ソバ属は花粉生産量が少なく、虫媒性であるため、分析結果では実際の生育量より過小に評価される種類であり、7層形成期の調査区近辺でのソバ栽培などの畑作の存在が示唆される。この点は層相から推定される土地利用状況と同調的である。また、7層から検出された草本花粉にも、ガマ属・オモダカ属・ミズアオイ属・キサシグサ属・ミズユノシタ属といった水湿地生植物が認められるが、これらの植物は、いずれも水田雑草として水田内や付帯施設（用水路や溜め池など）に普通にみられる種類でもあることから、氾濫堆積物とともに運搬堆積した可能性のほかに、当時の耕作地などに雑草として分布していた可能性も考慮しておく必要がある。

（3）6層・5層形成期（13世紀～14・15世紀）

13世紀の6層では花粉化石群集・植物珪酸体群集が大きく変化する。花粉化石群集は、いずれの地点も総花粉・胞子に占める草本花粉の割合が増加する。木本花粉ではマツ属が急増し、これとは逆に温帯性針葉樹のツガ属・モミ属、常緑広葉樹のアカガシ亜属など多くの種類が減少する。増加するマツ属花

粉の産出率は地点間でバラツキが大きく、マツ二次林などに普通なツツジ科花粉が虫媒性で飛散距離の小さい種類でもあるにも関わらず普通に産出することを踏まえると、調査区に比較的近い場所で起こった植生変化を反映していることが推定される。また、草本の種類構成において人里植物の種類が増加する傾向が確認される。これらの傾向は14～15世紀の5層で顕著となる。一方、植物珪酸体組成では栽培植物のイネ属の含量密度が高くなる。

以上の植物微化石の産状から、13世紀代には、調査区およびその近辺の植生が急激に変化したことが推定される。調査区近辺では、古代～中世の時期に比較して、草地の卓越する領域が広がったことが推定される。草本植物の種類構成は古墳時代以降、最も多様となる。ヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科に加え、アカザ科、ナデシコ科、サナエダ節-ウネギツカミ節、タデ属、アブラナ科、セリ科、ヨモギ属などは、調査区周辺で耕作地の広がりとともに存在した、明るく開けた場所を中心に分布していたと考えられる。また、ガマ属・オモダカ属・ミズアオイ属などの水湿地生植物は、調査区やその周辺に存在していた水田に伴って生育していたと考えられる。

一方、森林植生は山地斜面などの林分域に分布していたカシ類などの常緑広葉樹や、氾濫原などに分布していたであろうナラ類などの落葉広葉樹は認められなくなり、マツ属からなる単調な林分に変化したことが推定される。この林域の急激な変化は、人為による森林資源の過剰利用による急速な退行遷移の進行を示唆する。

以上の13世紀代における植物微化石の急激な変化は、今回の調査区だけでなく、近隣の私部南遺跡・有池遺跡のほか、上ノ山遺跡、茄子作遺跡、小倉東遺跡でも確認されており、交野地域における普遍的な傾向として認識できる(辻・辻本, 2007)。また、上私部遺跡の北東約2 kmに位置する津田遺跡における、生駒山西麓の開析谷内の花粉分析結果からは、人為的な植生攪乱に伴うマツ属の急増が上私部遺跡の後背地の生駒山地斜面での植生変化であることが強く示唆される(未公表)。以上の考古遺跡の分析結果から、交野地域では13世紀代になると、森林と呼べる林域が著しく減少ないし衰退し、マツ属などの陽樹からなる疎林へ変化したことが推定される。この急激な変化は、堆積環境の変化を踏まえると、河川攪乱や地表攪乱などの自然の植生攪乱によって生じた変化とは考えにくく、人為的攪乱に起因する変化と判断される。14～15世紀の5層形成期には、この傾向はさらに顕著となり、ハゲ山化する領域が拡大した可能性が高い。

この他に注目される点として、13世紀代の6層においてハンノキ属が多産するようになることが挙げられる。同様の変化は隣接する私部南遺跡でも確認されており、当該期には、水文環境が変化し、相対的水位上昇に伴って調査区やその周辺で湿地や滞水域が広がったことが珪藻分析結果から窺える。このような珪藻分析結果を踏まえると、13世紀代の6層で多産したハンノキ属は、この時期の湿地や滞水域の広がりに応じたハンノキ属林の分布拡大に求められると判断される。

(4) 4・3層(中世～近世)

中世～近世の4・3層では、花粉化石群集では草本花粉の割合が高くなり、木本・草本ともに種類構成が単調となる傾向が確認される。植物珪酸体は含量密度が低くなるが、シバ属や栽培種を含むオオムギ族が産出するようになる。

以上のことから、4・3層形成期も林域に対する人為的攪乱は継続して作用しており、草地の領域はさらに拡大したことが推定される。また、この時期の耕作地においてイネ属以外に栽培されていた植物(または栽培植物を含む分類群)では、ソバ属、ナス属近似種が確認される。ソバ属については、その

タフノミーから調査区ないしその近辺で栽培されていた可能性が高いと判断される。また、栽培種かどうかの判別が難しいが、オオムギ族の珪酸体も確認されており、オオムギ栽培の可能性も示唆される。

3-5 調査区におけるイネ科植物の消長

軟X線写真による層相観察から、調査区では、古代から13世紀以前の時期に畑地、13世紀代や14～15世紀代に水田が形成されていた可能性が高いことが指摘された。畑地が積層する7層では、栽培種であるイネ属が多くの地点で連続的に確認されるものの、その機動細胞含量が、700～1,000個/gであった。安定した水田稲作が行われた層準では、経験値からイネ属機動細胞珪酸体5,000個/g程度が検出されることが通例とされる(杉山, 2000)。この経験値をふまえると、7層でのイネ属機動細胞含量については、非常に少ない値であることが確認される。このような含量については、軟X線写真による層相観察から確認されるように、調査区やその近辺において、7層の形成期に水田よりも畑地が相対的に多く形成されていた可能性と関係するものと思われる。

棚田状の水田と水路が検出された13世紀代の層準の6層では、イネ属珪酸体含量が2,000～4,000個/gであった。なお、前述したように6層と7層では、珪酸化石の保存状態に差があるものの、植物珪酸体含量が花粉化石において、大差が認められない。そのため、6層と7層では、植物珪酸体について、その保存環境に非常に大きな差が生じていないことが指摘される。このことから、7層に比べ6層で多くのイネ属珪酸体が検出された要因については、6層段階でより多くのイネ属が土壤中に取り込まれるような状況が存在したことに起因すると考えられる。この6層は腐植に富む層相をなし、発掘調査において棚田状の耕作地圃場と水路が整備されている。従って、7層に比べ6層でイネ属の多産した理由については、水田開発に伴うものと認識され、13世紀代に調査区内において耕作地の造成および維持・管理を伴う人間活動に何らかの画期が存在したことをうかがわせる。

14～15世紀の5層および中世～近世の4層では、6層よりもイネ属含量が減少する分析地点が多くなる。これらの堆積層では、相対的な水位が上昇傾向にあったことが珪酸分析結果から確かめられている。なお、6層と5・4層では、粒度組成に差異があることが粒度分析結果から確かめられている。5・4層では、6層に比べ砂礫を多く含み、かつ肉眼での判断で腐植の含量も著しく低下することが観察される。外山(2002)は、弥生時代の水田面において、砂礫が多く含まれる試料において、より細粒な試料よりもイネ属珪酸体含量が減少する傾向が存在することを指摘している。植物珪酸体はシルトサイズの碎屑物と挙動を共にすることと、外山(2002)の分析事例、さらに調査区の堆積環境変遷をふまえると、5層と4層でのイネ属珪酸体の減少は、これらの層準の粒径と堆積速度に起因するものと判断される。人為的な擾乱を示す層相の5層と4層でもほぼ連続してイネ属珪酸体が検出され、かつ畦畔などの遺構が確認されていることから、本層準においても、6層段階に続き調査区およびその近辺において稲作地が広がっていたことが示唆される。

なお、古墳時代の遺物を含む古土壌では、イネ属珪酸体が確認される地点が若干存在するものの、局地的な堆積域である5地点の溝埋土においてイネ属がまったく検出されなかった。このことから、古墳時代には調査区内において稲作地が存在していなかったと考えられる。当該期には居住域が確認されているが、このような場所には、多量の稲が持ち込まれるような状況でなかったことも併せて示唆される。

3-6 6世紀の建築部材の利用状況

今回の発掘調査で検出された6世紀前半および後半の建物跡および欄列の柱材と礎板、ピット群の出土材の樹種同定結果を表1に示す。同定された種類(分類群)は、針葉樹のカヤ・ヒノキ・ツガ属・ヒ

表1 樹種同定結果

時代	遺構名	器種	樹種	時代	遺構名	器種	樹種
6世紀前半	136・138溝	473ピット	柱ヤ	6世紀前半	建物22	991柱穴	柱 クラ
	溝内ピット群	474ピット	柱ヤ		建物24	1149柱穴	柱 コナラ属アカガシ亜属
	欄1	503柱穴	柱 スダジイ		1175柱穴	柱 ヒノキ	
		508柱穴	柱 カヤ		1181柱穴	柱 ヒノキ科	
	欄2	882柱穴	柱 カヤ		1186柱穴	柱 ヒノキ	
		870柱穴	柱 カヤ		1190柱穴	柱 ヒノキ科	
	欄3	858柱穴	柱 カヤ		欄11	642柱穴	柱 マキ属
		862柱穴	柱 カヤ		建物3	1256柱穴	柱 カヤ
		878柱穴	柱 カヤ		270柱穴	柱 ツガ属	
	欄4	847柱穴	柱 カヤ		6世紀後半	178柱穴	柱 ヒノキ
		850柱穴	柱 カヤ	179柱穴		柱 ヒノキ科	
	欄6	71柱穴	柱 カヤ	180柱穴		柱 ヒノキ	
		72柱穴	柱 カヤ	182柱穴		柱 ヒノキ	
		73柱穴	柱 カヤ	183柱穴		柱 ヒノキ	
	建物1	71柱穴	柱 カヤ	184柱穴		柱 ヒノキ	
		373柱穴	柱 ツガ属	186柱穴		柱 ヒノキ科	
		374柱穴	柱 ツガ属	187柱穴		柱 ヒノキ	
		375柱穴	柱 ツガ属	188柱穴		柱 ヒノキ	
	建物10	377柱穴	柱 ツガ属	189柱穴		柱 ヒノキ科	
		330柱穴	柱 ヒノキ	206柱穴	柱 スダジイ		
		332柱穴	柱 ヒノキ	273柱穴	柱 ツガ属		
333柱穴		柱 ヒノキ科	703柱穴	柱 ツガ属			
建物12	334柱穴	柱 ヒノキ	建物17	704柱穴	柱 コナラ属アカガシ亜属		
	335柱穴	柱 ヒノキ		706柱穴	柱 コナラ属アカガシ亜属		
	336柱穴	柱 ヒノキ		707柱穴	柱 コナラ属アカガシ亜属		
	337柱穴	柱 ヒノキ		713柱穴	柱 ツガ属		
建物15	1014柱穴	柱 ツガ属	建物18	818柱穴	礎板 ツガ属		
	353柱穴	柱 カヤ	494柱穴	柱 カヤ			
	433柱穴	柱 ヒノキ	建物19	496柱穴	柱 カヤ		
建物21	650柱穴	柱 ヒノキ	建物20	894柱穴	柱 カヤ		
	651柱穴	柱 ヒノキ	建物21	903柱穴	柱 ヒノキ科		
	656柱穴	柱 ヒノキ科	建物30	1360柱穴	柱 ヒノキ		
	756柱穴	柱 ヒノキ	建物34	1030柱穴	柱 コナラ属コナラ亜属コナラ節		
	758柱穴	柱 ヒノキ		1402柱穴	柱 クラ		

ノキ科・マキ属、広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ・スダジイの合計9種類である。樹種同定を行った69試料中60試料が針葉樹からなり、当時の建物跡などには建築材として針葉樹材が多用されていたことが特徴として捉えられる。特にヒノキとカヤが多用されている傾向にある。

6世紀前半と6世紀後半の建築材の樹種構成を比較すると、6世紀前半の41点の建築材は針葉樹39点、広葉樹2点と針葉樹材が優占するのに対して、6世紀後半の28点の建築材は針葉樹22点と広葉樹6点からなり、広葉樹材の割合がやや多い傾向がうかがえる。また、6世紀前半の遺構では単一の樹種で構成される遺構がほとんどであるのに対して、6世紀後半の遺構では複数の樹種からなる遺構の割合がやや多い傾向にある。これらのことから、6世紀前半と6世紀後半とは、建築材に関する木材の利用状況が多少異なっていた可能性がある。

遺構別の種類構成をみると、ピット群や欄列にはカヤが多用されているのに対して、建物跡の柱材には建物17以外ではヒノキが多用されている傾向があり、用途に応じた木材利用が行なわれていた可能性がある。建物17については、針葉樹のツガ属と広葉樹のアカガシ亜属からなり、明らかに他の建物跡と木材利用状況が異なっている。建物17は、発掘調査の結果、他の建物跡とは異なる棟持柱建物の構造を有していることが確認されており、構造の違いと用材選択の違いとが関係している可能性がある。

以上、今回の上私部遺跡の調査区で検出された古墳時代後期の建物跡や欄列などには、カヤ・ヒノキといった温帯性針葉樹の木材が多用されていることが確認された。上述したように調査区周辺では古墳時代から古代～中世にかけて温帯性針葉樹のうち、スギ属やイチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科が急激に減少したことが確認されている。この変化は、古墳時代後期における温帯性針葉樹材の多用と同調的な

変化として認識される。すなわち、建築材は、いずれも遺跡周辺の林分から入手が可能であったと考えられ、古代～中世にヒノキやカヤが選択的に伐採・利用されたことが示唆される。なお、今回の調査区ではスギ材の利用が確認されていないものの、ヒノキ等と同様の利用が行われていた可能性があり、今後の周辺遺跡での情報蓄積を待って再評価する必要がある。

このように古墳時代後期には少なくとも建築材には針葉樹材を主体する木材利用が行われていたことが推定される。当時の遺跡周辺に分布していたとみられるカシ類やナラ類などの広葉樹が建築材として多用されていないことは古墳時代における木材利用を考える上で興味深い結果といえる。兵庫県における木材利用状況を整理した中村（2002）によると、建築部材に針葉樹材が多用されるようになるのは古代以降と推定されており、木材利用のあり方が、時代や地域・遺跡によって異なっていた可能性がある。河内平野およびその周辺地域における古墳時代の建築材の利用状況については、生駒山西麓の部屋北遺跡において、今回の結果と同様な温帯性針葉樹材の多用傾向が確認されているが、他の考古遺跡における樹種同定結果自体が少なく、地域的・遺跡間での比較検討ができない状況にある。この点については、今後の系統だったデータ蓄積を踏まえて再評価していきたい課題である。

3-7 調査区の堆積環境変遷と遺跡形成過程

ここでは、これまでに上記してきた現地調査成果と分析結果をふまえ、上私部遺跡における遺跡形成過程を検討する。

上私部遺跡は、最終氷期後半に形成された低位段丘面に対比される扇状地末端部（旧期扇状地Ⅳ面）に位置する。旧期扇状地Ⅳ面は、西方に存在する中位段丘面に対比される地形面を覆うようにして形成されている（図19・20）。なお、中位段丘面に対比される地形面（宮地ほか，2001）は、開析が進行しており、深い谷によって下刻されている。中位段丘面は、その西縁部で沖積低地と接しており、明瞭な段丘崖が確認される。

旧期扇状地Ⅳ面上には、上私部遺跡と有池遺跡の間において、開析谷が形成されている。空中写真判読および地形図の等高線から、有池遺跡では、大溝や流路が検出された03-1調査区がこの開析谷の部分に相当していることが読みとれる（図18・19）。03-1調査区では、谷壁斜面をなす北東肩部においてA T火山灰の挟在が認められている（辻ほか，2007）。これに対し、開析谷内では、溝基盤層から検出された木材から1760±40、1820±40 yrs BPの年代値が得られており（辻ほか，2007）、この領域が完新統で埋積されていることを示唆する（図20）。また、有池遺跡の北東端部では、現免除川沿いへ約1 m前後急激に落ち込む谷地形が形成されている（図20）。この南西谷肩部から谷部にかけて位置する有池遺跡03-2-4調査区では、谷部への落ち込み部分の基盤層下部確認トレンチ（断面12）で観察された黒色粘土層の腐植から、8420±35 yrs BP（46層）、7600±35 yrs BP（55層）の年代値が得られた（山形，2007）。地形および年代値から、現免除川沿いの谷地形内には、完新統が累重するものと判断される。

上私部遺跡周辺に広く分布する完新統については、更新統からなる旧期扇状地Ⅳ面と中位段丘面に対比される地形面が開析された谷状の地形内を中心に広がっている（図18・20）。この完新統は、空中写真判読と現地で確認される地層累重などから、扇状的な堆積環境下で形成されたものと推定され、図18の新时期扇状地Ⅰ面に対比される。新时期扇状地Ⅰ面は、上私部遺跡西端部から私部南遺跡に広がり分布している。今回分析を実施した05-1調査区では、旧期扇状地Ⅳ面最上部に相当する古墳時代面において、調査区西端部で地形面の急激な落ち込みが認められた。新时期扇状地Ⅰ面構成層は、この落ち込み内を中心に分布している。05-1調査区では、古墳時代以降に新时期扇状地Ⅰ面構成層が累重したことが発

掘調査結果から確認される。このような地形と堆積層の累重状況から、05-1調査区の西端部において古墳時代面で確認された急激な落ち込みは、低位段丘面に対比される旧期扇状地Ⅳ面と沖積層の境界部に相当すると判断される。

このような地形および堆積層の累重が認められる05-1調査区は、現在、天井川となっている私部北川の右岸に近隣して立地する。私部北川の流路沿いの人工堤防周囲には、舌状をなす微高地（新期扇状地Ⅱ面）が発達する。本調査区については、新期扇状地Ⅱ面に位置していることが地形分類図から読みとれる（図18）。今回の分析および現地調査から、新期扇状地Ⅱ面は、13世紀以降に増大し、近世に顕著となった洪水堆積物の累重によって形成されていることが明らかとなった。珪藻分析では、13世紀代の層準よりも上位において化石の保存状態が良好となり、相対的な水位上昇が示唆された。また、13世紀から近世では、富栄養の池沼～沼沢湿地のような湿潤な環境を示す珪藻化石群集が優占することから、水位上昇に伴い、調査区内では粗粒な洪水堆積物が頻繁に流入するような状況下において、湿地化や滞水域が広がるようになったことも推測される。このような堆積環境は、調査区およびその周辺での排水不良化する領域が拡大したことを予測させる。調査区内の相対的な低所に位置する4地点の粒度分析結果では、13世紀代の6層から中世～近世の4層で上位に向かって泥分の含量が増加する傾向が確認され、上述の環境を示唆するものとして捉えられる。13世紀代に認められたハンノキ属花粉の多産についても、上私部遺跡周辺の相対的な水位および排水不良化に伴う水文環境の変化に連動したものである可能性が極めて高いと思われる。

以上の検討から、私部北川の人工堤防に隣接する上私部遺跡の領域では、13世紀以降から近世にかけて、顕著な洪水堆積物の累重や調査区やその周辺での相対的な水位の上昇に伴う湿地化や滞水域の増加や排水不良化が進行したものと考えられる。このような05-1調査区で認められた13世紀代以降の地形・堆積環境の変化については、地形判読および調査区の堆積層累重と分析結果から、私部北川の河床上昇

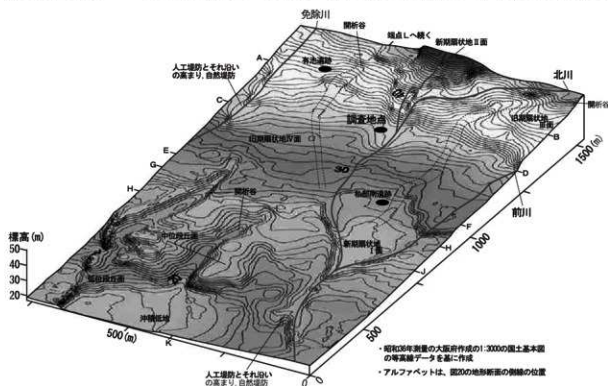


図19 調査区周辺の地形

とそれに伴う人為的な築堤による天井川化が要因であると判断される。そして、上記の堆積・水環境の変化については、後背地に存在する山地斜面の植生変化が要因であることが、今回およびこれまでに本地域で実施された花粉分析結果から推定される。上私部遺跡とそれに隣接する考古遺跡で実施された花粉分析結果では、13世紀代以降よりマツ属花粉の優占するようになり、花粉化石群集の解釈から、後背地の生駒山地西麓の山地斜面でハゲ山化が急速に進行したことが示唆される。近世の史料類からも、近世にハゲ山の状態であったと考えられている（交野市教育委員会社会教育課編，1992）。

このような古植生に関するデータから、本遺跡で認められた13世紀以降における洪水堆積物の流入量の増大と天井川化は、後背山地斜面のハゲ山化による土砂流出量の変化によるものと解釈される。今回の調査区でみられた堆積物累重状況とその解釈により、私部北川が現在みられるような天井川となったのは、13世紀代以降と捉えられる。歴史時代における河川の天井川化は、流路への土砂供給量の増大や人為的な河道固定の影響であるとされる（千葉，1991）。今回調査区で認められた中世以降の堆積環境変化と、層相と遺構・遺物から読みとれる遺跡形成過程は、千葉（1991）が指摘した天井川化の局地的プロセスを反映していると思われる。

堆積環境が大きく変化する13世紀代には、調査区内において水田開闢が整備され、安定した稲作地がある一定期間広がるようになった可能性が、植物珪酸体分析と軟X線写真による層相観察から示唆された。このような耕作地の変化は、それまで畑地が多く広がっていた扇状地斜面上での、灌漑水利体系の再整備を伴う耕作地の再開発であったことも上記してきた調査・分析結果から十分に考えられ、13世紀代に遺跡周辺において、農業的土地利用の画期が存在することも想定される。また、隣接する有池遺跡でも、13世紀代に集落および農業システムの画期が存在することが指摘されている（若林，2007）。このような時期に相当する13世紀代に、後背山地斜面で、人間による植生干渉力が強まることは、農地拡大に伴うバイオマス資源獲得領域増大とその利用頻度の過度化との関連が示唆されて非常に興味深い。この点については、今後、さらに地域的な遺跡の動態をふまえ、さらに詳細に検討していくことが課題と認識される。

なお、13世紀代以前から古代頃には、土地利用が放棄された状態に近く、かなり継続的に畑地を中心とした耕作地として利用がなされていたことが、軟X線写真による堆積・土壌相の観察と、微化石・粒度分析結果から示唆された。この時期には、洪水堆積が流入するもの、通常乾燥した地表面の土壌環境であったと推定される。古代以前の古墳時代には、洪水堆積物の流入がまったく認められない。当該期の遺構・遺物は、最終氷期の扇状地堆積物最上部に形成された古土壌が検出されている。このような古土壌と遺構・遺物の検出状況から、居住域が形成された古墳時代の調査区は、最終氷期の扇状地扇端部の非常に安定し、かつ高燥な土地条件となっていたと判断される。発掘および古植生データから、古墳時代から中世に調査区やその近辺では、明るく開けた草地在り卓越するような場所であったと推定される。

13世紀以降に加速度的に累重した洪水堆積物については、近世に入りそのピークを迎える。14～15世紀代の遺構検出面である第1面は、13世紀代の第2面の上に土盛りしている領域が多いことが発掘調査で確認されている。このような土盛りは、流入する洪水堆積物に対応する耕作地の維持管理に伴う工学的対応と認識される。近世に入ると、調査区では、非常に厚く粗粒な洪水堆積物の流入が幾度も確認されるようになる。近世には、調査区内へしばしば洪水性の砂礫が流入するような状況であったと判断される。このような堆積環境が推定される現私部北川の天井川沿いの微高地沿いに位置する近世の調査区では、洪水後に耕作地の再造成を行っていたことが、堆積層の断面観察から確認される。近世以降に

なると、調査区では、累重する堆積層の細粒化と堆積速度の減少が認められる。よって、近世以降には、調査区やその周辺において、洪水堆積物の流入量が減少したと考えられる。このような堆積環境変化については、後背山地斜面での植生の回復や治山事業などの影響が考えられるが、この点については、今後、地域史の詳細をふまえて検討していきたいと思う。

4 小結

(1) 水文環境

- ・13世紀代の6層を境にその上下で、調査区の水文環境が大きく変化したことが、珪藻分析から確認された。
- ・13世紀には、調査区内において湿潤な水文環境が形成された。このような環境変化は、私部北川の河床上昇とそれに伴う人為的な築堤による天井川化によって引き起こされたものと考えられた。
- ・古墳時代に調査区内では、土壌生成が継続して地表面へ腐植が蓄積していくような安定した環境であった。調査区全体の土壌環境は、乾燥していたと考えられる。ただし、局所的な凹地では、浅い滞水域や湿地の堆積環境が形成されていた。
- ・古墳時代以降から古代には、13世紀代よりも乾燥しがちで、より好気的な環境が維持されるような土壌環境であった。

(2) 古植生

- ・古墳時代には、遺跡後背地にあたる生駒山地西麓の山地斜面や離水した古期扇状地には、アカガシ亜属・シノキ属などの常緑広葉樹、コナラ亜属・クマシデ属-アサダ属などの落葉広葉樹、モミ属・ツガ属・コウヤマキ属・スギ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などの温帯性針葉樹が分布していた。このうち落葉広葉樹の種類は、調査区周辺の氾濫原に分布していた可能性が示唆された。
- ・古墳時代の層準では、水湿地生植物のガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、スブタ属、ミズアオイ属、アヤメ科、ゴキズル属、ヨシ属の産出が確認された。これらの植物は、調査区内の溝内などに分布していたものと考えられた。
- ・古墳時代には、調査区内において稲作地が存在していなかったことがイネ属珪酸体の産状から判断された。なお、当該期に調査区内において居住地が確認されているが、このような場所には、多量のイネが持ち込まれるような状況でなかったことも併せて示唆された。
- ・古墳時代から近世を通して本遺跡では、基本的に湿潤な場所が広がりを見せず、周囲に高燥地が多く分布していたことが植物珪酸体分析結果からうかがえた。
- ・古代-中世には、人間による植生干渉の影響と推測されるマツ属の増加と、スギ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科の減少が認められた。
- ・13世紀代には、マツ属花粉の急増が確認された。この変化は、調査区周囲に存在する林分において、人為による森林資源の過剰利用による急速な退行遷移が進行した結果であると考えられた。
- ・人為的な植生攪乱に伴うマツ属の急増は、上私部遺跡の後背地の生駒山地斜面での植生変化であることが強く示唆された。
- ・マツ属が優占する花粉組成は、13世紀以降から近・現代まで連続することから、この時期を通じて調査区周囲の森林資源の過剰利用による植生干渉の影響が強かったことが示唆された。
- ・13世紀代の花粉分析結果では、ハンノキ属の多産も注目された。これは、珪藻分析結果などで確認された当該期の調査区およびその周辺の土壌・水文環境の湿潤化に対応した植生変化として捉えられた。

・調査区内やその周囲で水田などの稲作地が示唆された中世から近世の層準で確認されたガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、スブタ属、ミズアオイ属、ギシギシ属、ジュンサイ属、アヤメ科、ゴキズル属といった水湿地生植物は、水田耕作地の雑草としての分布が想定された。

・古墳時代から近世には、草地や耕作地を主体となす明るく開けた植生景観が展開していたと考えられた。このような場所には、ヨモギ属、ネザザ節を中心としたイネ科、カヤツリグサ科に加え、アカザ科、ナデシコ科、サナエダゲ節-ウネギツカミ節、タデ属、セリ科、ヨモギ属が分布していたと推定された。

・古代から中世には、イネ属以外に栽培されていた植物（または栽培植物を含む分類群）として、ソバ属、ナス属近似種が確認された。また、栽培種かどうかの判別が難しいが、オオムギ族の珪酸体も確認されており、オオムギ栽培の可能性も示唆された。

(3) 軟X線写真観察から推定される土地利用

・調査区西半部に累重し、古代～中世に形成されたと推定される礫質泥質砂層は、人為的擾乱の影響を極めて強く受けた地層である。

・古代～中世に形成されたと推定される7層の礫質泥質砂層は、軟X線写真の層相から、畑地を主体とする耕作土である可能性が高いと解釈された。

・調査区では、古代から13世紀代以前の中世にかけて、土地利用が放棄された状態になく、かなり継続的に耕作地として利用がなされていたことが、軟X線写真による土壌相の検討から示唆された。

・古代から13世紀代以前の中世には、調査区が立地する扇状地の末端斜面上において、流入する河川氾濫堆積物を母材として畑地耕作土が積層的に形成されたことが推定された。なお、発掘調査では古墳時代の遺構面において上層から掘り込まれた畦畔に伴うと推測される溝跡も検出されている。このことから、古墳時代以降に調査区では、畑地だけではなく、水田も形成された時期があったものと推定される。

・植物珪酸体分析結果と軟X線および現地での層相観察から、13世紀に調査区では、それ以前の時期に比べより耕作地が整備され、かつ安定的な水田圃場が形成されたことが推定された。

・14世紀頃から近世までの時期に調査区では、氾濫堆積物の流入頻度が高まり、堆積・土壌環境および耕作地環境が不安定化したものと解釈された。

・なお、今回の05-1調査区で実施した軟X線写真による堆積・土壌相観察の意義と今後の課題については、以下のように要約される。

沖積層に埋没する遺跡の発掘調査では、通常、複数の遺構検出面が認定され、それらの系時的層相から人間の地表面占有状況や自然環境変化などの歴史的な言説がなされることが多いものと思われる。今回実施した軟X線写真撮影による遺跡構成層の堆積相・土壌相の分析では、遺構検出面間の存在した人間活動と自然環境の一端について可能性を示唆できた点において意義あるものと認識される。

考古遺跡では、このような遺構検出面間に累重する堆積層が、自然営力のみならず、人為的な営力も含めた複合営力によって形作られていることが多い。そのため、このような状況について記載することは、より詳細な遺跡形成過程の把握や地域的な遺跡動態の理解する上において、ある程度有効ではないかと考えられる。上記のような記載方法の一つとしては、今回実施したような軟X線写真の他、土壌薄片などを用いた堆積・土壌構造の連続的な検討方法があげられる。また、この分析方法では、考古遺跡で広く適用されてきた微化石分析におけるタフォノミーの検証にも利用でき、この点についても、今回の分析で一定の成果が得られたものと判断される。しかしながら、人為的擾乱層の土壌構造については、現状で未だ類例が乏しい状況にあり、この点について、今後さらなる研究開発を行なっていくこと

が課題である。

(4) 遺跡形成過程

今回の粒度分析と現地での堆積層観察およびこれまでの上私部遺跡周辺の考古遺跡での調査・分析結果から以下のような知見が得られた。今回実施した粒度分析では、これまで肉眼観察で捉えられていた本地域における中世以降の堆積環境変化を、客観的データから検討できた点が重要であった。

- ・上私部遺跡は、最終氷期後半に形成された低位段丘面に対比される扇状地末端部に位置する。
- ・上私部遺跡において遺跡基盤層をなす低位段丘構成層は、本遺跡の東側へは隣接する有池遺跡へ連続し、西側へは今回の調査区以西で地下へ急激に埋没する。
- ・上私部遺跡周辺に分布する完新統は、更新統の最終氷期後半の扇状地面と中位段丘面に対比される地形面が開析された谷状の地形内を中心に分布する。
- ・05-1 調査区は、現在、天井川となっている私部北川の右岸に隣接して立地する。私部北川の流路沿いの人工堤防周囲には、舌状をなす微高地が発達しており、本調査区はその微高地内に位置している。
- ・05-1 調査区を構成する堆積層の多くは非常に悪い淘汰の礫質泥質砂層で構成される。近世の洪水層は、泥質砂質～礫質砂からなる。
- ・05-1 調査区において上方への完新統の付加が認められるようになるのは、古墳時代以降である。
- ・古墳時代およびそれ以前には、調査区やその周囲で安定した堆積環境が形成されていた。
- ・古代から中世に調査区では、洪水流が流入するような氾濫原が形成されていた。この氾濫原の地表面は、平常時に乾燥して好気的な土壌環境であったと考えられた。特に、2地点より以西では、より高燥の土壌環境であったと判断された。
- ・05-1 調査区では、13世紀代に調査区内において水田圃場が整備され、安定した稲作地がある一定期間広がるようになった可能性が示唆された。このような耕作地の変化は、それまで畑地が多く広がっていた扇状地斜面上での、灌漑水利体系の再整備を伴う耕作地の再開発とも認識され、13世紀代に遺跡周辺において、農業的土地利用の画期が存在することが指摘された。
- ・中世(13世紀代や14～15世紀代および中世～近世の層準を含む)から近世には、全体的な傾向として、それ以前の層準よりも礫が多く含まれるようになるともに、砂の割合の漸増とこれに対応した泥分の減少が認められた。
- ・13世紀以降には、河川氾濫の影響を強く受け、調査区に流入する洪水堆積物の供給量が増大した。
- ・14～15世紀代の遺構検出面である第1面は、13世紀代の第2面の上に土盛りしている領域が多いことが発掘調査で確認された。このような土盛りは、流入する洪水堆積物に対応する耕作地の維持管理に伴う工学的対応と認識された。
- ・調査区では、13世紀頃以降に、本遺跡を隣接して流下する私部北川の河床上昇とそれに伴う湿地化や滞水域、排水不良化する領域の広がりを示唆する相対的水位上昇が認められた。
- ・近世には、それ以前の時期よりも、さらに粗粒な砂礫質の洪水堆積物が調査区内へ流入するような極めて不安定な堆積環境が形成された。
- ・近世に調査区では、洪水後に新たに流入した堆積物を母材として、耕作地の再造成が度々行われていたことがうかがわれた。
- ・13世紀以降に河床上昇を引き起こした土砂流出量の増大は、後背山地斜面のハゲ山化がおもな要因であると考えられた。

・上記のような13世紀以降における植生変化と堆積環境変化については、大阪湾～瀬戸内沿岸での山地・丘陵斜面の景観史的研究（千葉，1991；小椋，1992；久武，2001；水本，2003）、河内平野や六甲山地南麓、木津川流域での考古遺跡での調査・分析（松田・バリノ・サーヴェイ，1996；井上，2002，2005；中塚，2002；辻ほか，2004）において、今回の検討結果と概ね調和するような傾向が得られている。

・近世以降の層では、累重する堆積層の細粒化と堆積速度の減少が認められた。

（5）木材利用

・建物跡の柱材にはヒノキ、欄跡・ピット群にはカヤが多用されており、針葉樹を主体とする選択的な木材利用の可能性が確認された。これら針葉樹はいずれも周辺より入手可能であった。

引用文献

- 千葉徳嗣 1991 『はげ山の研究』 株式会社そしえて 349p.
- 千木良雅弘 1995 『風化と崩壊』 近未来社 204p.
- Fork,R.L. 『The distinction between grain size and mineral composition in sedimentary-rock nomenclature』 J.Geol.62 344-359.
- Fork,R.L. and Ward,W. 1957 『Brazaos river bara study in the significance of grain size parameters』 J.Sed.Petro.27 3-26.
- 江口誠一 1994 『沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小櫃川河口域を例にして』 植生誌研究2 19-27.
- 江口誠一 1996 『沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値』 ペトロジスト40 81-84.
- 外山秀一 2002 『池島・福万寺遺跡の立地と環境』池島・福万寺遺跡2（福万寺1期地区）一級河川思知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書—分析・考察編— 財団法人大阪文化財センター 411-429.
- 久武哲也 2001 『絵図に見る景観』『姫路市史 第1巻上 本編自然』 姫路市 459-594.
- 井上智博 2003 『目的と概要』『尺度遺跡Ⅱ—国道165号（南阪奈道路）の建設に伴う発掘調査報告書—』 財団法人大阪文化財センター 153.
- 井上智博 2002 『古代～近世における耕作地景観の動態』池島・福万寺遺跡2（福万寺1期地区）一級河川思知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書—分析・考察編— 財団法人大阪文化財センター 545-550.
- 井上智博 2005 『池島・福万寺遺跡周辺の流路変遷に関する展望—堆積物のX線回折試験・化学分析結果をふまえた再検討—』池島・福万寺遺跡 発掘調査概要X X X -99-2 調査区（1999年度）の発掘概要—』 財団法人大阪文化財センター 145-156.
- 水野正好ほか 1992 『交野市史 考古編』 交野市 434p.
- 近藤隼三 1988 『植物珪酸体（Opal Phytolith）からみた土壌と年代』 ペトロジスト32 189-202.
- 小杉正人 1987 『北江古田遺跡の珪藻化石群集と古環境』『北江古田遺跡発掘調査報告書（2）』 中野区北江古田遺跡調査会 419-433.
- 公文富士夫・立石雅昭編 1998 『砕屑物の研究法』 地学団体研究会 399p.
- Matsuda,J.- I 2000 『Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain,Osaka,japan』 Sedimentary Geology135 99-116.
- 松田順一郎 2001 『大阪府布市遺跡の中世畑地耕作土にみられた微細堆積相』『日本文化財科学会第18回大会研究発表要旨』 日本文化財科学会 56-57.
- 松田順一郎 2004 『古墳時代と江戸時代の畑地堆積物堆積構造の比較—大阪府久宝寺遺跡、京都府山崎遺跡の事例』『日本文化財科学会第21回大会研究発表要旨』 日本文化財科学会 62-63.
- 松田順一郎・バリノ・サーヴェイ 1996 『北島遺跡の耕作地と古環境』『寝屋川南部流域植付ポンプ場土工事に伴う北島遺

- 跡第1次発掘調査報告書」財団法人東大阪市文化財協会 157p.
- 松田順一郎・別所秀高 1997 「大阪府北島遺跡における加地形成と地形発達」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨』日本文化財科学会 70-71.
- 増田富士夫・伊勢屋ふじ子 1985 「“逆グレーディング構造”：自然堤防帯における氾濫洪水堆積物の示相堆積構造」『堆積物研究会誌』22・23 108-116.
- 水本邦彦 2003 「草山の語る近世」『日本史リブレット52』山川出版社 99p.
- 宮地良典・田山庄良樹・栗川 旭 2001 「大阪東北部地域の地質」『地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）』地質調査所 130p.
- 森 也寸志 2000 「軟X線による非破壊土壌中の排水機構の解明」『土壌の物理性』No83 59-65.
- 森 也寸志・滋賀摂子・岩間憲治・渡辺紹裕・丸山利輔 1992 「土地利用による土壌間隙構造の差異—軟X線による観察を中心として」『土壌の物理性』No66 19-27.
- 中村 弘 2001 「兵庫県における樹種同定資料について」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要 創刊号』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 103-121.
- 中静 透 2004 『日本の森林／多様性の生物学シリーズ① 森のスケッチ』東海大学出版会 236p.
- 中塚 良 2002 『大地の生い立ちと環境変遷』『城陽市史 第1巻』城陽市 42-56.
- 小椋純一 1992 『絵図から読み解く人と景観の歴史』雄山閣出版 238p.
- 大野啓一 1979 「西日本における沖積低地の河畔林に関する群落的考察」『横浜植生学会報告』16 227-236.
- 阪本圭二 1987 「滋賀県愛知川河辺におけるニレ科樹林の構造」『緑化研究』9 50-68.
- 齋藤万之助 1971 「水田土壌の凝集性」『土土試験所報告』56 1-49.
- 杉山真二 1986 「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として」『考古学と自然科学』19 69-84.
- 杉山真二 2000 「植物珪酸体（プラント・オパール）」辻誠一郎編著『考古学と自然科学3 考古学と植物学』同成社 189-213.
- 辻 誠一郎 2000 「植物と植物遺体」辻 誠一郎編著『考古学と自然科学3 考古学と植物学』同成社 23-41.
- 辻 康男・辻本裕也・田中義文・馬場健司・松元美由紀 2004 「付草前田遺跡の自然科学分析」『前田遺跡（第20地点）発掘調査概要報告書—弥生前期水田跡の構造と水利動態』芦屋市教育委員会 1-36.
- 辻 康男・田中義文・矢作健二・辻本裕也・伊藤良永・馬場健司 2007 「有池遺跡の自然科学分析」『有池遺跡Ⅰ 第2分冊』財団法人大阪府文化財センター 637-666.
- 辻 康男・辻本裕也 2007 「私部南遺跡の古環境変遷」『私部南遺跡Ⅰ』財団法人大阪府文化財センター 158-180.
- 寺沢四郎 1971 「水田土壌群の物理性特性に関する研究」『農業技術研究所報告』22 86-207.
- 寺沢四郎 1983 「各種インパクトを受けた土壌の物理性」『農業技術研究所報告』36 233-267.
- 若林幸子 2007 「有池遺跡における集落景観の変化」『有池遺跡Ⅰ 第2分冊』財団法人大阪府文化財センター 667-672.
- 渡辺仁治 2005 「淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数DAIpoH耐性値」内田老輔編 666p.
- Wentworth, C.K. 1922 「A scale of grade and class terms for clastic sediments」. J. Geol. 30 377-392.
- 山形秀樹 2007 「放射性炭素年代測定」『有池遺跡Ⅰ 第2分冊』財団法人大阪府文化財センター 568-569.
- 前田義明・合田幸美ほか 2006 『東倉治遺跡Ⅱ』財団法人大阪府文化財センター 86p.
- 後川恵太郎ほか 2007 『私部南遺跡Ⅰ』財団法人大阪府文化財センター 227p.

第2節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
小林結一・丹生越子・伊藤 茂・山形秀樹・
Zaur Lomtadize・Ineza Jorjoliani

はじめに

上私部遺跡の492土坑埋土上層の第3層（図44参照）より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行なった。

1 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表2のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

2 結果

表3に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に校正した年代範囲、暦年校正に用いた年代値を、図21に暦年校正結果をそれぞれ示す。暦年校正に用いた年代値は、今後暦年校正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年校正を行なうために記載した。

14C年代はA.D.1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

暦年校正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年）を校正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

今回の¹⁴C年代の暦年校正には、OxCal 3.10（校正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲

表2 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-5736	位置：1区西端部調査区 遺構：古墳時代492土坑 層位：第3層	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム 0.1N, 塩酸1N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH

表3 放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に校正した年代範囲		暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)
			1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	
PLD-5736	-28.05 \pm 0.18	1560 \pm 20	430AD(50.8%) 490AD 500AD(17.4%) 550AD	420AD(95.4%) 550AD	1559 \pm 20

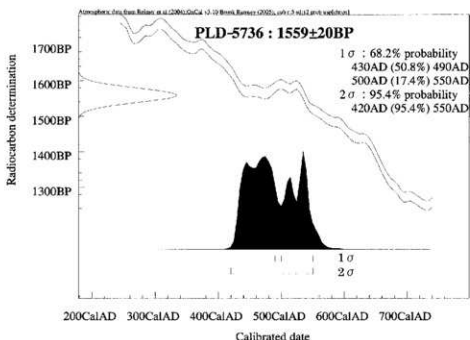


図21 暦年校正結果

図であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

3 考察

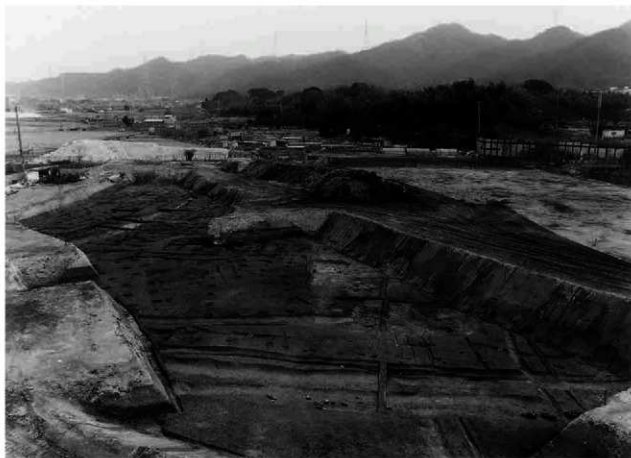
試料について、同位体分別効果の補正及び暦年校正を行なった。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

測定の結果、 1σ 暦年代範囲においてCal AD 430–490年 (50.8%)、 2σ 暦年代範囲においてCal AD 420–550年 (95.4%)であったことから、 2σ 暦年代範囲において5世紀初めから6世紀中頃の年代範囲を示す。測定試料は、炭化材であるが、木材は複数年輪からなるが、最外年輪部を測定した場合には少なくとも伐採年代を示す。よって、これ以外の年輪部を測定した場合にはこの伐採年代よりも古い年代となる。ただ、測定した炭化材は、最外年輪部を測定していないため、測定された年代は予想より古い年代が測定されている可能性がある。

参考文献

- Bronk Ramsey C. 1995 「Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy The OxCal Program」[Radiocarbon]37(2) 425–430.
- Bronk Ramsey C. 2001 「Development of the Radiocarbon Program OxCal」[Radiocarbon] 43 (2 A) 355–363.
- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」[日本先史時代の ^{14}C 年代] 3–20.
- Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. 2004 「Radiocarbon」46 1029–1058.

写 真 图 版



1 1区古墳時代遺構面全景（西から）



2 1区古墳時代遺構面全景（北東から）



1 1区西端部古墳時代遺構面全景（北から）



2 2区西半部古墳時代遺構面全景（北東から）



1 2区東半部・3区古墳時代遺構面全景（西から 正面建物は建物1）



2 2区南西突出部古墳時代遺構面全景（北東から）



3 2区南東突出部古墳時代遺構面全景（北から）



1 2区東半部・3区古墳時代遺構面全景（北東から）



2 4区・5区古墳時代遺構面全景（西から）



1 4区・5区古墳時代遺構面全景（北東から）



2 6区全景（南から）



3 7区全景（北から）



1 435竪穴住居（北から）



2 435竪穴住居電線検出状況（南から）



1 983竪穴住居（南から）



2 983竪穴住居電検出状況（南から）



1 983竪穴住居、982方形竪穴状遺構（北から）



2 1094竪穴住居、950・999溝（北から）



3 1094竪穴住居（北東から）



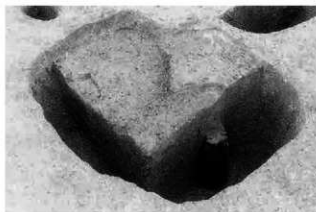
4 982方形竪穴状遺構（南東から）



1 建物4～6 (東から)



2 建物5 (189柱穴) 断ち割り (東から)



3 建物4 (213柱穴)・建物5 (180柱穴)
断ち割り (北東から)



4 建物11 (北から)



1 建物3～6
(北から)



2 建物10 (北から)



1 建物7 (東から)



2 建物1 (北から 手前は建物12南柱列)



3 建物7 (155柱穴) 断ち割り (西から)



4 建物12 (353柱穴) 断ち割り (南から)



1 建物13・14、溝群全景（北から）



2 建物15（西から）



3 建物15（756柱穴）断ち割り（北から）



4 建物15（656柱穴）断ち割り（東から）



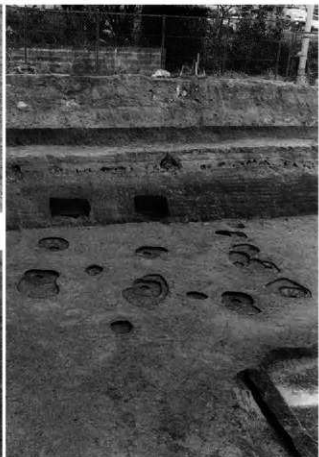
1 建物17 (西から 後方は建物16)



2 建物17 (703柱穴) 断ち割り (北から)



3 建物17 (706・713柱穴) 断ち割り (南西から)



4 建物16 (北から)



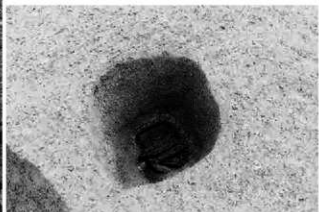
1 建物20・39 (東から)



2 建物18 (北から)



3 建物20 (896柱穴) 断ち割り (南から)



4 建物18 (818柱穴) 根石 (北から)

1 建物20 (北から)



2 建物21 (南東から)



3 建物22 (南東から)





1 136・138清南建物群
(西から
手前は建物31・36)



2 建物28・37
(南から)



1 建物29 (南から)



2 建物29 (1334柱穴) 断ち割り (南東から)



3 建物28・37 (1288・1290柱穴) 断ち割り (南西から)



4 建物32 (西から)



1 136・138溝北建物群
(東から 中央大型
建物は建物25
手前は建物27)



2 建物24 (北から)



1 136・138溝および南北建物群と1090・1092～1094溝、1087・1088土坑（北から）



2 建物23・24・33（西から）



3 建物25（1175柱穴）断ち割り（北から）



4 建物25（1191柱穴）断ち割り（西から）



1 43溝 (東から)



2 55・81溝 (西から)



3 55溝、柵6 (東から)

1 841～844溝
(北西から)

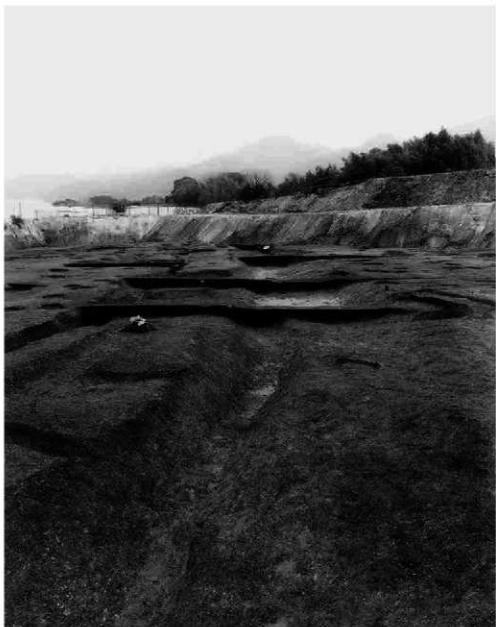


2 841～844溝、
柵2～4 (北から)



3 841～844溝
土器出土状況
(南東から)





1 136・138溝
(西から)



2 136・138溝
および137溝
(北西から)



1 534~536・538・539溝（南西から）



2 535溝土器出土状況（西から）



3 750溝（北西から）

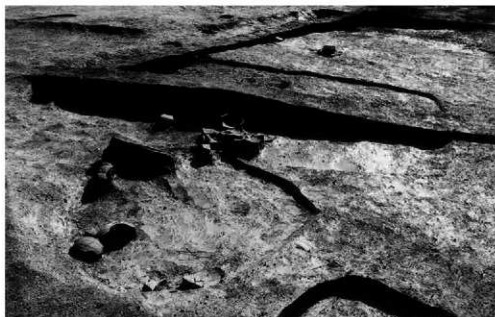


1 235~237土坑 (北東から)



2 677~679・753・754土坑、681溝 (東から)

1 679土坑
土器出土状況
(北西から)



2 671・791土坑
(北東から)



3 1396土坑 (南から)





1 1区中世遺構面
全景（西から）



2 畦畔2用水溝
（西から）



3 畦畔4排水口
（北西から）



1 2区中世遺構面 畦畔8 (北西から)



2 畦畔8堆積状況 (北西から)



3 畦畔1 (北西から)



1 4区・5区中世遺構面全景（西から）



2 畦畔7（北西から）



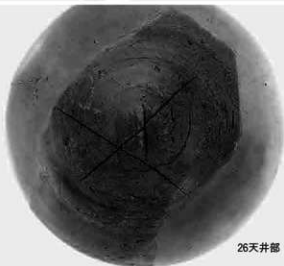
3 1区西端部中世遺構面 畦畔9・10（東から）



435·983竖穴住居、982方形竖穴状遺構、建物3・25・29・30・33柱穴出土土器



24



26天井部



26



27



28



31



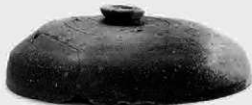
33



35



41



55



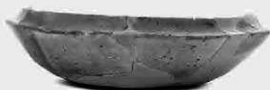
44



56



45



54



48



60



51



52



67



68



69



70



76



71



79



73



77



80



81



82



84



85



87



86



91



92



98



137



99



141



100



126



110



121



111



125



112



153



156



168



157



171



160



164



165



173



180



185



181



185底部



188



192



193



196



197



199



200



202



205



206



207



218



222



219



223



220



212



224



214



224底内面



234



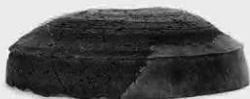
248



237



249



238



251



242



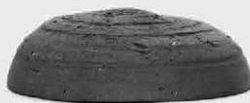
252



245



255



247



257





271



272



273



274



281



282



285



287



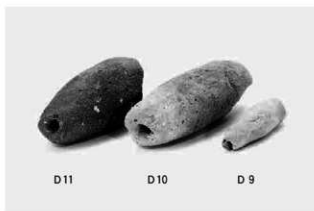
288



古墳時代包含層・遺構検出中出土土器



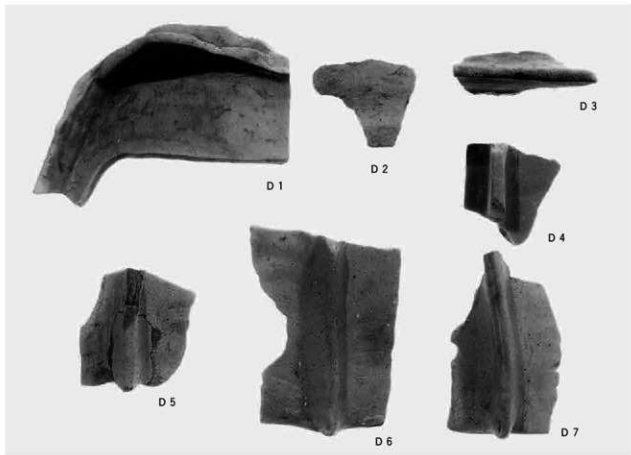
1 須恵器杯蓋朱記号



2 土鏝



3 火付け棒



4 移動式竈



M 3



M 4



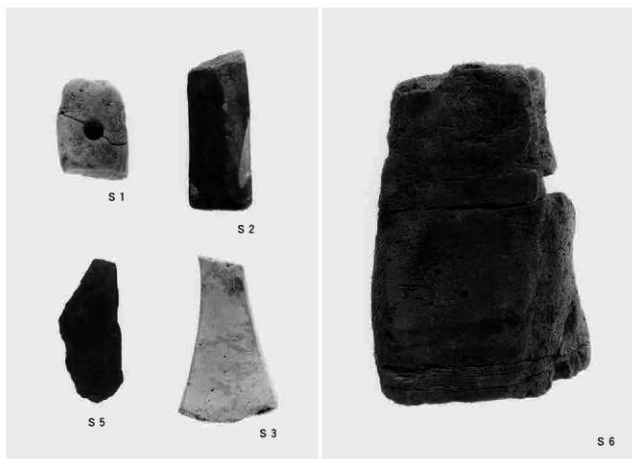
M 5



M 7

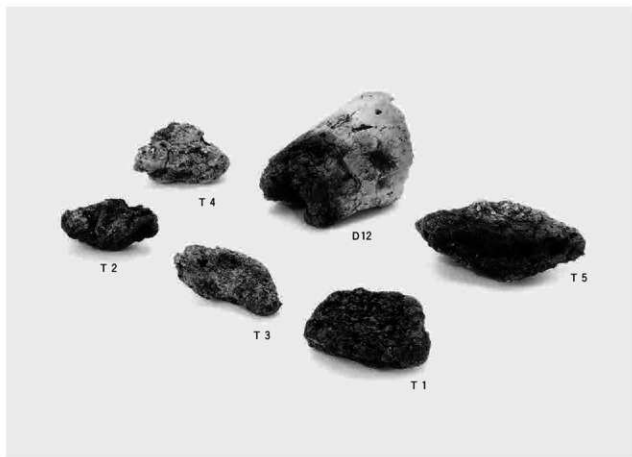


M 8

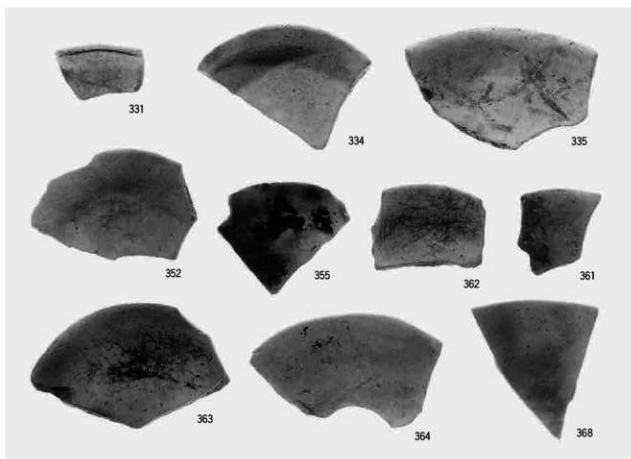


1 砥石（提砥）

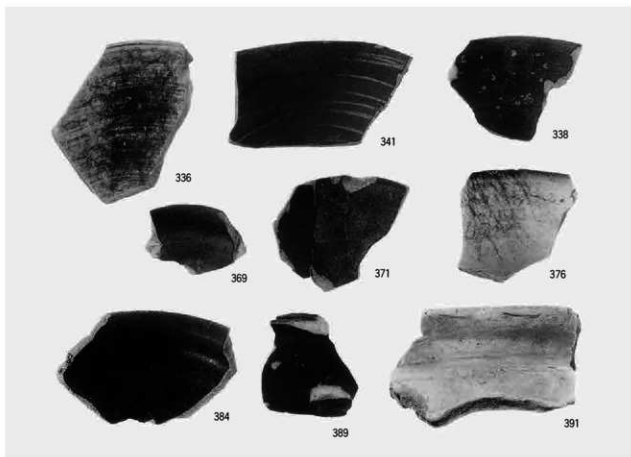
2 砥石（置砥）



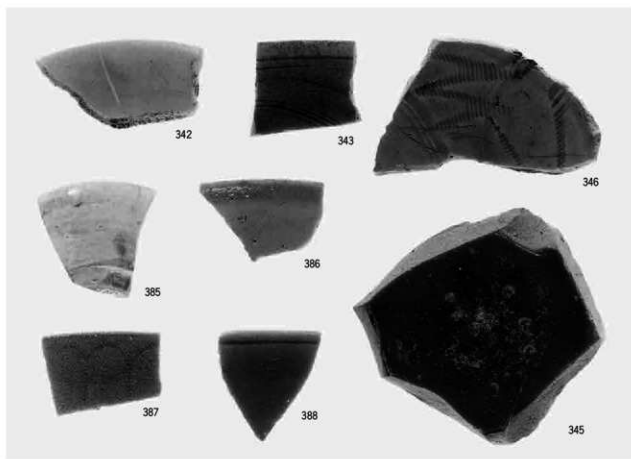
3 鑄造関係遺物



1 中世田面出土土師器



2 中世田面出土瓦器・陶器



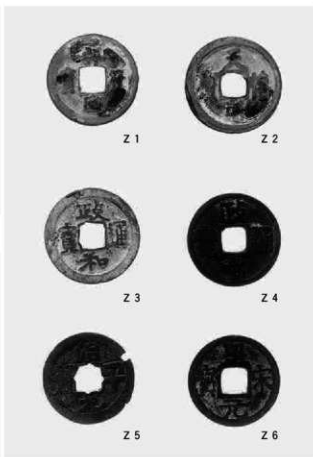
1 中世田面出土輸入磁器



2 中世木製品



3 古代平瓦



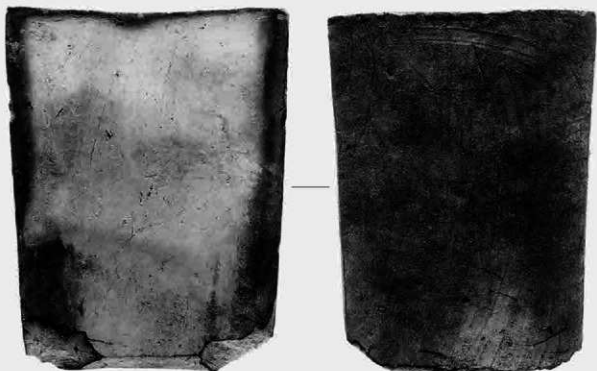
4 宋銭



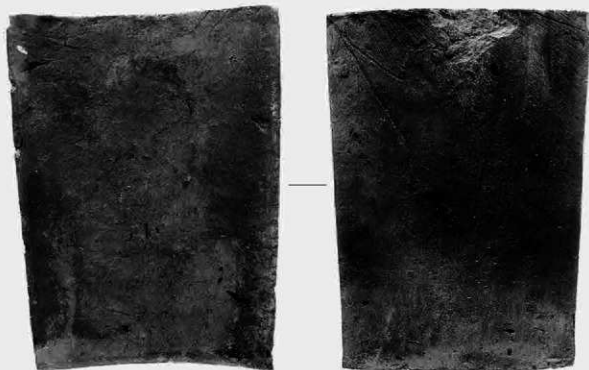
K 1



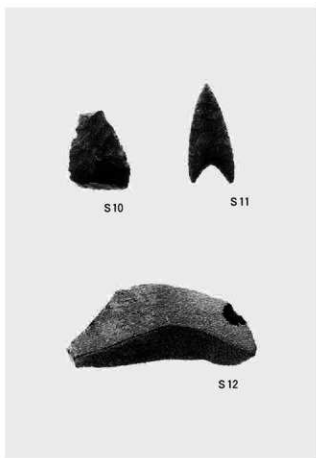
K 2



K 3



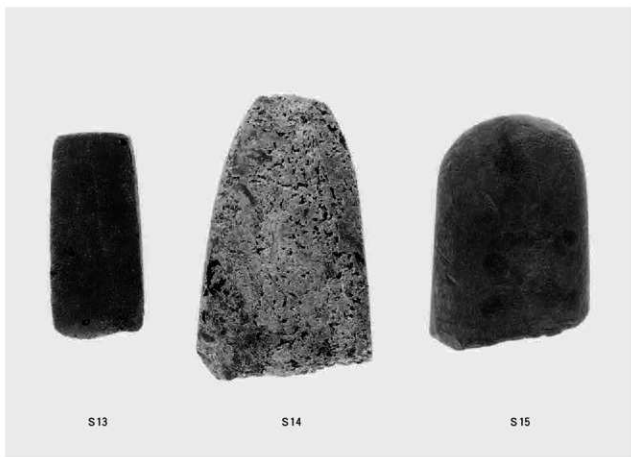
K 4



1 石鏃・剥片



2 水晶



3 石斧

報告書抄録

ふりがな	かみきさべいせき							
書名	上私部遺跡Ⅱ							
副書名	一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第165集							
編著者名	網 伸也 他							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号 TEL072-299-8791							
発行年月日	2007年9月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみきさべいせき 上私部遺跡	かたのしあやま 交野市青山	27230	64	34°47'3"	135°41'32"	2005年 7月8日 ～ 2006年 2月28日	4,285 ㎡	一般国道 1号バイ パス（大 阪北道路） ・第二京 阪道路建 設
所収遺跡名	遺跡種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上私部遺跡	集落	古墳時代後期	竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑	土師器・須恵器・砥石・土鎌・移動式竈・柱材		掘立柱建物39棟と集落を区画する溝群を検出。溝から新羅土器を検出した。		
		中世	水田・畦畔・溝	土師器・瓦器・陶磁器・櫛・漆器・砥石・宋銭・瓦				
要約	古墳時代では、溝によって形成された方形区画と、区画内外で少なくとも3時期以上の変遷が確認できる多くの掘立柱建物を検出した。掘立柱建物群の時期は6世紀で、溝で区画されるだけでなく規則的に建物が配置されていた。区画溝の中からは、新羅土器の長頸壺が出土しており、当遺跡の特殊性を示す遺物となっている。中世遺構面では水田面と畦畔、条里の坪界を示す大畦畔を検出した。そして、この地域に若干認められる条里地割は、平安時代後期から鎌倉時代まで遡ることが推測された。							

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第165集

上 私 部 遺 跡 Ⅱ

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2007年9月28日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本 / 三星商事印刷株式会社
京都市中京区新町通竹屋町下ル